

伊達市
牛舎川右岸遺跡
稀府川遺跡
谷藤川右岸遺跡

——北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書——

平成2年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

伊達市

牛舎川右岸遺跡

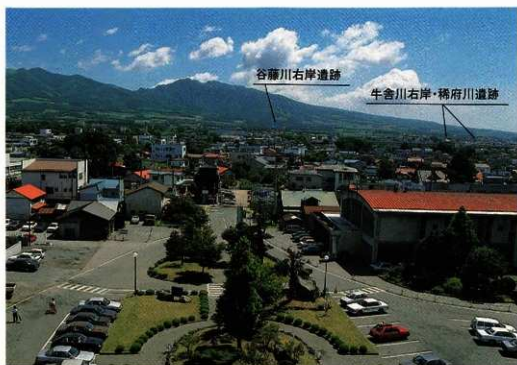
稀府川遺跡

谷藤川右岸遺跡

——北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書——

平成2年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡遠景（伊達市役所屋上から遠望）



例 言

- 1 本書は、北海道縦貫自動車道建設工事に伴い、(財)北海道埋蔵文化財センターが平成2年度に実施した、伊達市牛舎川右岸遺跡、稀府川遺跡、及び谷藤川右岸遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 文責者は、それぞれ文末に記した。遺物の写真撮影は森岡健治が担当した。
遺物の実測・トレースは、藤内まゆみ、高橋明子が行った。
- 3 実測図の縮尺は、原則として次のとおりである。
遺構 1:40、縄文土器 1:4、擦文土器 1:3、拓本 1:3、剥片石器 1:2
礫石器 1:3
- 4 遺構等の表記については、次に示す記号を用いた。
竪穴住居跡-H、土墳-P、焼土-F
- 5 蛍光X線による黒曜石遺物の原材産地分析は、京都大学原子炉実験所薬科哲男氏に依頼した。
- 6 残存脂肪酸分析は、株式会社ズコーシャに依頼中である。
- 7 出土資料は、一括して伊達市教育委員会が保管する。
- 8 調査にあたっては、下記の機関及び人々の指導、助言をいただいた。(順不同、敬称略)
伊達市教育委員会、上ノ国町教育委員会、松前町教育委員会、函館市博物館
仁木行彦、畑 宏明、田中哲郎、森 秀之、高橋和樹、久末進一、阿部千春、福田茂夫、
松崎水穂、斉藤邦典、久保 泰、石本省三、千代 肇、根本直樹、柴田信一、宮 宏明、
石川 朗、北沢 実、後藤秀彦、古原敏弘、乾 芳宏、谷岡康孝、兵藤千秋、野村 崇、
古屋敷則雄、寺崎康二、矢吹俊男、街道重昭、藤島一己、藪中剛司、金田真一、上坂 勉
三浦孝一、鈴木耕榮、工藤衛二、岩倉 繁、菅原政満

目 次

口 絵	
例 言	
I 調査の概要	1
1 調査要領	1
2 調査体制	1
3 調査の経緯と経過	2
4 調査結果の要旨	3
II 遺跡の位置と環境	5
III 調査の方法	7
1 調査の方法	7
(1) 牛舎川右岸遺跡	7
(2) 稀府川遺跡	7
(3) 谷藤川右岸遺跡	9
2 基本順序	10
3 遺物の分類	12
(1) 土器	12
(2) 石器等	13
(3) 自然遺物	13
IV 牛舎川右岸遺跡	14
1 概要	14
2 遺構	22
(1) 土壌	22
(2) 焼土	22
3 包含層出土の遺物	27
(1) 土器	27
(2) 石器	45
(3) 土製品	51
(4) 自然遺物	51
4 まとめ	55
(1) 土器	55
(2) 石器の出土状態	67
(3) 石器	71

結語	72
写真図版	
V 稀府川遺跡	93
1 概要	93
2 遺構	105
(1) 焼土	105
(2) 土壌	112
3 包含層出土の遺物	113
(1) 遺物出土状況	113
1) K-67-d区遺物集中	113
2) M-78区, K-78区を中心とした遺物集中	115
(2) 土器	121
(3) 石器・石製品	143
4 まとめ	152
(1) 土器	152
(2) 石器	158
(3) 稀府川遺跡の流路の変遷	160
結語	168
写真図版	
VI 谷藤川右岸遺跡	193
1 概要	193
2 遺構	197
(1) 焼土	197
(2) F・C(剥片・破片)集中地点	197
3 包含層出土の遺物	198
(1) 土器	200
(2) 石器等	200
4 まとめ	202
写真図版	
VII 自然科学的分析	209
1 伊達市稀府川遺跡出土の黒曜石遺物の原産地分析	209
2 牛舎川右岸遺跡周辺の火山灰	215
引用・参考文献	219

挿図目次

図Ⅰ-1	遺跡位置図	4
図Ⅲ-1	グリッド設定図と調査地区	8
図Ⅲ-2	グリッド設定図と調査地区	9
図Ⅲ-3	土層模式柱状図	10
図Ⅳ-1	遺跡と周辺の地形	15
図Ⅳ-2	土層図	17
図Ⅳ-3	土層図	19
図Ⅳ-4	遺構位置図	21
図Ⅳ-5	P-1	22
図Ⅳ-6	焼土分布図	23
図Ⅳ-7	遺物を伴う焼土	24
図Ⅳ-8	遺物を伴う焼土・断面図・ 遺物出土状況図・出土土器	25
図Ⅳ-9	遺物出土状況図	29
図Ⅳ-10	遺物出土状況図	30
図Ⅳ-11	I群a類土器	31
図Ⅳ-12	I群a類土器	32
図Ⅳ-13	I群a・b類、Ⅲ群b類土器	33
図Ⅳ-14	Ⅳ群c類土器	35
図Ⅳ-15	V群c類土器、Ⅵ群b類土器	38
図Ⅳ-16	V群c類土器	39
図Ⅳ-17	V群c類土器	40
図Ⅳ-18	V群c類土器	41
図Ⅳ-19	V群c類土器	42
図Ⅳ-20	Ⅳ群b・c類土器	43
図Ⅳ-21	土器分布図	44
図Ⅳ-22	出土土器(1)	47
図Ⅳ-23	出土土器(2)	48
図Ⅳ-24	出土土器(3)	49
図Ⅳ-25	出土土器(4)	50
図Ⅳ-26	出土土器・土製品(5)	51
図Ⅳ-27	自然遺物出土地点	51
図Ⅳ-28	I群土器の分布(1)	56

図Ⅳ-29	I群土器の分布(2)	57
図Ⅳ-30	I群土器の分布(3)	58
図Ⅳ-31	Ⅳ群c類・Ⅵ群b類土器の分布	60
図Ⅳ-32	V群c類土器と焼土の分布	61
図Ⅳ-33	V群c類土器の分布(1)	63
図Ⅳ-34	V群c類土器の分布(2)	64
図Ⅳ-35	V群c類土器の分布(3)	65
図Ⅳ-36	V群c類土器の分布(4)	66
図Ⅳ-37	石器の分布(1)	68
図Ⅳ-38	石器の分布(2)	69
図Ⅳ-39	石器の分布(3)	70
図Ⅴ-1	牛舎川、稀府川合流点 付近の地形	93
図Ⅴ-2	遺跡と周辺の地形	96
図Ⅴ-3	第Ⅰ～Ⅳ層除去後の地形図	97
図Ⅴ-4	第Ⅴ層上面の地形図	99
図Ⅴ-5	土層図 旧河川(a-b)	101
図Ⅴ-6	土層図 Nライン(c-d)	103
図Ⅴ-7	遺構位置図	106
図Ⅴ-8	焼土(1)	107
図Ⅴ-9	焼土(2)	108
図Ⅴ-10	焼土出土の遺物	109
図Ⅴ-11	焼土分布図	111
図Ⅴ-12	P-9	112
図Ⅴ-13	K-67-d区遺物集中平面図	114
図Ⅴ-14	K-67-d区ふるい検出の遺物 分布図	114
図Ⅴ-15	K-67-d区ふるい検出の石材別 分布図	114
図Ⅴ-16	集中区1周辺遺物出土状況 (1)	117
図Ⅴ-17	集中区1周辺遺物出土状況 (2)	118

図V-18 集中区2周辺遺物出土状況 (1).....119	図V-48 縄文時代早期161
図V-19 集中区2周辺遺物出土状況 (2)120	図V-49 縄文時代前期-中期162
図V-20 I群a・b類、II群a類土器 (1)122	図V-50 縄文時代後期163
図V-21 II群a類土器(2)123	図V-51 縄文時代晩期164
図V-22 III群b類土器(1)125	図V-52 続縄文時代165
図V-24 III群b類土器個体別分布図126	図V-53 接文時代166
図V-25 III群b類土器(3)127	図V-54 石器167
図V-26 IV群b類土器(1)129	図VI-1 調査地区と周辺の地形193
図V-27 IV群b類土器(2)131	図VI-2 第Ⅴ層上面(U _s -b層下面) の地形194
図V-28 IV群a・b類土器(3)132	図VI-3 第Ⅴ層上面の地形195
図V-29 IV群b類(4)・c類(1)土器133	図VI-4 土層断面図196
図V-30 IV群c類土器(2)135	図VI-5 遺構実測図197
図V-31 IV群b類個体別分布図135	図VI-6 遺構・遺物の位置図199
図V-32 V群b類土器(1)137	図VI-7 包含層出土の遺物201
図V-33 V群b類土器個体別分布図137	図Ⅶ-1 黒曜石遺物のクラスター分析214
図V-34 V群b類土器(2)138	図Ⅶ-2 土層図217
図V-35 V群b類(3)、VI群b類(1)土器139	
図V-36 VI群b類(2)・c類、Ⅶ群b類土器141	
図V-37 Ⅶ群b類土器(2)142	
図V-38 VI群b類、Ⅶ群b類土器個体別 分布図142	
図V-39 包含層出土の石器(1)144	
図V-40 包含層出土の石器(2)145	
図V-41 包含層出土の石器、石製品(3)146	
図V-42 石器分布図147	
図V-43 土器分布図155	
図V-44 土器分類別分布図(1)156	
図V-45 土器分類別分布図(2)157	
図V-46 K-67-d区出土石器の最大 長別グラフ158	
図V-47 河川と地区160	

I 調査の概要

1 調査要項

事業名 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

事業委託者 日本道路公団札幌建設局

事業受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

調査期間 平成2年4月1日～平成3年3月31日

遺跡名（道教委登録番号）	所在地	調査面積	現地発掘期間
牛舎川右岸（J-04-66）	伊達市南稀府町313番地1ほか	6,280㎡	平成2年5月7日～8月31日
稀府川（J-04-67）	伊達市北黄金町106番地2ほか	7,477㎡	〃
谷藤川右岸（J-04-76）	伊達市萩原町214番地ほか	350㎡	平成2年9月1日～9月30日

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター 理事長 澤 宣彦（平成2年5月31日まで）
 “ 寺山敏保（平成2年6月1日から）

専務理事 永田春男

常務理事 竹田輝雄

業務部長 伊藤庄吉

調査部長 中村福彦

牛舎川右岸遺跡 調査第1課 主 任 佐藤和雄（発掘担当者）

“ “ 葛西智義

調査第3課 主 任 三浦正人（発掘担当者）

“ “ 花岡正光

稀府川遺跡 調査第1課 課 長 鬼柳 彰（発掘担当者）

“ 主 任 遠藤香澄（ “ ）

“ 文化財保護主事 谷島由貴

“ “ 森岡健治

“ 嘱 託 山原敏朗

調査第3課 嘱 託 越田雅司

谷藤川右岸遺跡 調査第1課 主 任 佐藤和雄（発掘担当者）

“ “ 葛西智義（ “ ）

“ 文化財保護主事 森岡健治

3 調査の経緯と経過

北海道縦貫自動車道のうち室蘭～釧田間の建設工事が現在進められている。これに関わる埋蔵文化財包蔵地所在確認調査は、昭和56年度、北海道教育委員会によって実施され、伊達市では、紋別川西、谷藤川右岸、牛舎川右岸、牛舎川左岸（平成元年度 稀府川遺跡と改称）の4遺跡が、工事予定範囲にかかることが判明した。当センターは日本道路公団札幌建設局の委託により、昭和62年度から平成元年度にかけて、紋別川西遺跡を除く3遺跡について、包蔵地の内容を把握するための事前発掘調査（試掘調査）を数次に分けて実施、これと並行して平成元年度から牛舎川右岸、稀府川、谷藤川右岸の各遺跡の本格的調査に入った。紋別川西遺跡は平成元年度の北海道教育委員会による範囲確認調査で、工事範囲が遺跡の主体から大きくはずれることが判明したため、縦貫自動車道にかかる部分の発掘調査は実施しないこととなった。

牛舎川右岸遺跡——昨年度は工事区域のうち、牛舎川の右岸から市道古平通り線までの全域と、高砂川と古平通り線の間及び高砂川以北の西半部、合わせて21,523㎡の発掘を実施した。

今年度の調査区は昨年度調査区北端よりさらに北方で、これより約35m離れている。

稀府川遺跡——昨年度は調査予定区域のうち、稀府川左岸の全域と、右岸側の2地点、計8,977㎡を調査した。今年度の調査区は稀府川右岸の残る部分で、調査予定面積は当初7,740㎡であったが、一部に変更が生じたため、前記の面積となった。

谷藤川右岸遺跡——本遺跡は昨年度、縦貫自動車道用地のうち、当面施行が予定されている二車線分の範囲について1,813㎡の調査を実施した。今年度の調査区は谷藤川の右岸沿いに走る市道のうち縦貫自動車道と交差する部分である。昨年度までの工事計画では、市道について現状変更を行わない予定だったが、その後掘削工事の必要が生じたことから、調査を実施することとなった。

昨年度の調査結果については、3遺跡ともすでに報告書を刊行している。各遺跡とも、遺構遺物の分布範囲は縦貫自動車道の工事区域の外側に広がっているが、牛舎川右岸、稀府川の両遺跡は今回をもって、この工事に関わる発掘調査を終了、谷藤川右岸遺跡は将来、拡張の計画が具体化した際に、残る二車線分の発掘調査を行うこととなる。（鬼柳 彰）

4 調査結果の要旨

＜牛舎川右岸遺跡＞

本年度の調査区は牛舎川の岸から約400m離れた水田部分である。発掘の結果、調査区を貫流する沢跡が検出された。遺構は沢跡の近くで確認された土壌1基と、全域にわたって分布する焼土、計244カ所である。土壌から遺物は出土しなかったが、層位から縄文時代後期末頃のものとみられ、規模・形態から墓の可能性はある。

出土土器は縄文時代早期から続縄文時代のものに及んでいる。早期の貝殻文尖底土器、後期の三ツ谷式 晩期の大洞A式土器が大部分を占め、ほかに、早期の東銅路IV式、中期のトコロ6類、続縄文時代の恵山式・後北式土器がある。石器は石鏃・石槍・ナイフ・スクレイパー・石斧があるが、器種別にみると石鏃が多い。剥片類も数千点出土している。これらは黒曜石・頁岩・安山岩・メノウなどで、頁岩が多くを占めている。

焼土のうち、10カ所からは縄文時代晩期末葉の土器片が多数出土しており、廃棄場と推定される。昨年度の調査では、牛舎川の川岸近くに縄文時代中期の遺構・遺物が発掘されたが、本年度調査区との間は、希薄であった。このことから、本遺跡は牛舎川寄りと本年度調査区付近の2つの遺跡としてとらえることができる。

＜稀府川遺跡＞

本年度は稀府川の左岸から北方の水田部分までを調査した。検出した遺構は開拓期に炭焼きに使用したとみられる土壌1基と、焼土14カ所である。北部には調査区を横断する河道跡が発見された。

出土土器は縄文時代早期の貝殻文・前期の春日町式に相当する尖底土器・中期の柏木川式・大安在B式系統のもの、後期の手稲式・堂林式・三ツ谷式・晩期の大洞C₁～C₂・A式に相当するもの、続縄文時代の恵山式・弥文時代の深鉢・坏など各時期のものがある。土器の出土分布には時期による傾向がみられる。とくに、手稲式土器は調査区南部から数個体分がそれぞれまとまって発見された。石器は石鏃、石槍、つまみ付きナイフ・ドリル・スクレイパー・石斧・すり石・垂飾がある。河川跡の近くでは、数千点の剥片がまとまって検出された。

本遺跡の主体は昨年度の調査で住居跡6軒を発掘した稀府川左岸にあると考えられるが、今回の調査区も耕作により深く攪乱されており、ここに遺構が存在したことも否定できない。

＜谷藤川右岸遺跡＞

今回の調査区は谷藤川に沿う市道部分である。焼土3カ所と剥片・破片集中地点が1カ所検出された。出土遺物は縄文時代早期・中期の土器片あわせて49点と石鏃2点のほか、上記の集地点から検出された、3,000点あまりの黒曜石剥片・破片である。

昨年度の調査結果と併せると、本遺跡はキャンプサイトとしてとらえられる。

(鬼柳 彰)



図1-1 遺跡位置図 この図は、国土院発行の5万分の1地形図「伊達」を複製したものである。

II 遺跡の位置と環境

伊達市は北海道中央部と渡島半島を画する内浦湾（噴火湾）の北東沿岸に位置している。市域のうち北部を流れる長流川の南東は、室蘭市と登別との境にある鷺別岳（911m）から北西へ続く山地の西斜面に当たる。今回、発掘調査を実施した3カ所の遺跡は、それぞれこの斜面を流れて内浦湾に注ぐ川の扇状地に立地している。

鷺別岳から続くこの山地には、稀府岳（702m）、紋別岳（714m）など標高700m級の峰がちなっている。開折が進んでいるため、火口地形は残されていないが、第四紀更新世初期に激しく活動した火山群と推定されており、周辺には有珠山、昭和祈山やクッタラ火山などの大小の火山が今も活動を続けている。山麓の東方にあたる杜智町・登別市・室蘭市側は、概して急峻な斜面になっているが、西方の伊達市側は緩やかな傾斜が続いている。室蘭市との境界に近い、南黄金付近では、鷺別岳から延びている丘陵が海岸にまでせまっているが、調査した遺跡が所在する北黄金から、稀府・萩原の一体は、丘陵裾から海岸にかけて、なだらかな傾斜の台地になっている。有珠山は市域のうち長流川の北西にあって、洞爺湖や内浦湾岸まで裾野を広げている。

市内を流れる最大の河川、長流川は白老町と大滝村の境界にある白老岳（944m）に源を発し、杜智町を経て、伊達市長和町で内浦湾に注いでいる。下流には扇状地、三角洲が形成されており、肥沃な平野が広がっている。これに対して、市城南東部の山地に源をもつ、チマイベツ川、牛舎川・谷藤川・気門別川などは流路10km以下で、流域面積も狭い。これらの河川にも丘陵の裾から海岸へ向かって扇状地が発達している。

室蘭市との境界を流れるチマイベツ川から長流川河口にかけての弧状の海岸線には、海浜が発達しており、黄金から稀府付近には砂丘がみられるが、長流川以北のエントモ岬、アルトリ岬から有珠湾にかけては、岩礁が多く複雑に入り組んでいる。

古くから続く火山活動によって、伊達市とその周辺地域は、諸火山の噴出物や火山灰によって厚く覆われている。火山灰のうち、比較的新しいものは発掘調査による出土遺物の編年や放射性炭素による年代測定によって、降下年代が推定されている。近世以降の火山灰で、降下年代の記録が残されているものもある。

伊達市の市街地や集落は、川の河口付近の平地や海岸沿いに発達しており、国道37号、JR室蘭本線も内浦湾に沿って走っている。丘陵裾と海岸の間の緩斜面は主に畑作に利用されており、酪農も盛んである。稲作は主として、長流川河口の平野で行われている。

発掘調査を行った3カ所の遺跡は、いずれも市城南東部の山地を深く開折して流れる河川が形成した扇状地の扇頂部に立地している。牛舎川は鷺別岳の北西側中腹に源を発し、鷺別岳と稀府岳の間を刻んで西流、JR稀府駅のすぐ南で内浦湾に注いでいる。牛舎川右岸遺跡は河口より約2.5km上流に位置している。牛舎川の支流稀府川は、牛舎川の南に張り出す尾根のさら

に南側を流れ、河口より約2km上流で牛舎川に入っている。稀府川遺跡は合流点より、約1km上流にある。牛舎川右岸遺跡の南約800mの位置にあたる。谷藤川右岸遺跡は稀府岳と紋別岳の間を深く刻んで西流、牛舎川の河口より約2km北方で内浦湾に注ぐ。谷藤川右岸遺跡は、河口より約3km上流に位置している。

伊達市では現在まで、76カ所の遺跡が発見されている。これらの多くは、市南部の北黄金から南黄金の海岸地帯と有珠湾周辺に集中している。両地域には、貝塚を伴う大規模な遺跡が多い。内浦湾沿岸は日本有数の貝塚分布地帯として知られ、伊達市でも76カ所のうち29カ所の遺跡が貝塚を伴っている。貝塚の時期は縄文時代早期から、アイヌ文化期に及ぶものがある。北黄金貝塚や若生遺跡は大規模な貝塚群で、今までに数回の調査が行われている。昭和63年には、有珠10遺跡で南方産の貝輪を装着した人骨が出土、縄文時代晩期の西日本と北海道に何らかのルートがあったことが指摘された。

このように市の北部と南部の海岸地帯には、数多くの遺跡が分布するのに対し、市域の大部分を占める長流川から牛舎川付近の間では、20カ所ほどを数えるにすぎない。しかも、これらの遺跡は、河口付近が海岸に分布するものと、調査した3カ所の遺跡が立地する丘陵裾に分布するものに分かれており、その間の緩斜面やさらに標高の高い山地にはみつかっていない。

前述したように、この地域一体は火山灰に厚く覆われて、遺跡の発見を困難にしており、今後さらに遺跡が発見される可能性も大きい。山裾の扇状地がこれらの遺跡の形成にあたって重要な意味を有していたものと推定される。

(鬼柳 彰)

Ⅲ 調査の方法

1 調査の方法

(1) 牛舎川右岸遺跡

今年度の調査区は、層状地を横断する工事区域のうち、北端の丘陵裾のすぐ南側で、昨年度の調査区北端と約35m離れている。グリッドは昨年度調査区の発掘区をそのまま延長した。基準線は、北海道縦貫自動車建設用地のセンター杭、STA178とSTA180を結ぶ線、及びSTA180でこれと直交する線である。各グリッドは10×10m。遺物のとり上げ等にあたっては、これをさらに5×5mグリッドに4分割し、北東から反時計回りにa・b・c・dの記号を付した。(5mグリッドの呼称例、A-10-b)

発掘作業は工事と並行するため、調査区を三区域に分け、西部・東部・中央部の順に行った。I層(耕作土)からIV層(Us-b火山灰)上半部までは、バックホーによって除去。これ以下を人力によって掘り下げた。

遺物包含層(V層・VI層上部)は層毎に順次調査した。調査区のうち南側の畑地については、対象面積の約40%をVI層まで掘り下げたが、遺構・遺物の分布が片寄っているため、VI層まで掘削しなかった部分もある。また調査区を貫流する沢についても、トレンチ調査をもって発掘を終了した。

I層～IV層出土の遺物は5mグリッド単位で、V層・VI層の遺物は原則として一点ずつ、位置・層位・レベルを記録してとり上げた。

遺物包含層のサンプル及びフレイク集中区と焼土の一部について、植物種子・獣魚骨片・炭化物等を検出するため、土壌水洗及びフローテーションを実施した。

最終発掘面(原則としてVI層下面)については、2.5m間隔の単点測量を行い等高線図を作成した。

(2) 稲府川遺跡

グリッドは、昨年度調査と同様に、北海道縦貫自動車建設用地のセンター杭STA185とSTA187を通る線とSTA187でこれと直交する線を基準として、10×10mグリッドを調査区全域に設定した。5×5mグリッドの設定及びグリッドの呼称方法は牛舎川右岸遺跡の調査区と同様である。

発掘作業は工事側との調整の上、おおむね、調査区北部・南部・中央部の順に行った。耕作土及び住宅地跡、農道など土層が攪乱されている部分については、バックホーにより除去し、Us-b火山灰層以下を人力によって掘り下げた。また、調査区北部に検出された河道跡内部を埋める礫層についても、トレンチ調査によって遺物を含まないことを確認した上で、バックホーにより除去した。

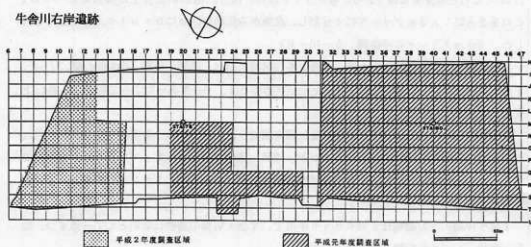
遺物のうちI層(耕作土)からIV層に出土したものは、5mグリッド単位で、遺物包含層(V層・VI層)出土のものは、原則として、位置・層位・レベルを記録してとり上げた。

地形図はV層上面及び、最終発掘面（原則としてIV層下面）を1m間隔で単点測量を行い、等高線図を作成した。

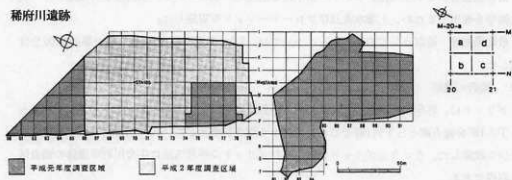
両遺跡とも包含層中には大小の礫が多く、調査区外にこれらを搬出することができなかったこと、工事用地内に排土場所が少ないことから、それぞれ三つに区分した調査区内をさらに細分して、発掘を終了したグリッドに排土する方法をとったため、調査区全域の同一調査面を写真撮影することは出来なかった。

(鬼柳 彰)

牛舎川右岸遺跡



稀府川遺跡



図III-1 グリッド設定図と調査地区

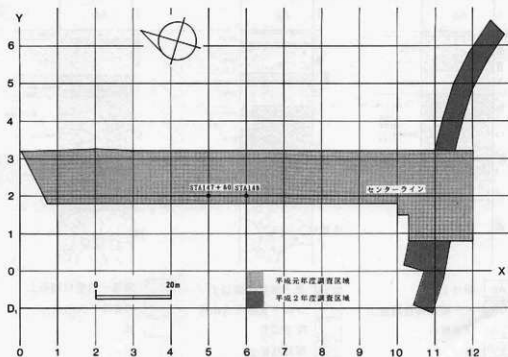
(3) 谷藤川右岸遺跡

発掘区の設定にあたっては、昨年度の方法を踏襲し、道路予定センターのSTA148杭とSTA147+80杭を結ぶ線を南北の基準(Y=2ライン)、その線に直交してSTA148杭を通る線を東西の基準(X=6ライン)とする10m×10mの大グリッドで覆った。(図Ⅲ-2)。各グリッドの呼称は、4か所の交点のうち北西側のX、Y座標によって表示される。小グリッドについては、調査区が細長いため、調査する上で不都合が生じる恐れがあること、出土遺物はすべて地点を計測するという方針などから、設定していない。ただし、遺構・遺物の位置を正確に記録するため、図上で1mメッシュの分割設定を行った。また、今年度の調査区の一部はY軸の負の方向にも延びているため、0以下はD₁、D₂と表示した。

なお、X軸の方位はN-15°20'-Wである。

調査地区は、昨年度終了した区域を挟んで2か所に分かれ、なおかつ市道が1-3区内を通っているため、その切り替えを含めた工事計画及び工事進行状況とのかねあいでは3か所の地区に分割された。そのため調査は、東側の地区→西側の地区→市道部分という順序で進み、市道部分の調査を行う際は東側の地区を埋め戻し、道路を切り替えてから行った。調査方法は、第I層から第V層(U₅-b火山灰)の上部を重機によって除去し、それ以降を人力で掘開した後、第VI層上面を精査することから始めた。遺物はすべて出土地点、レベルを記録して取り上げた。

(森岡健治)



図Ⅲ-2 グリッド設定図と調査地区

2 基本層序

図Ⅲ-3に模式柱状図を示す。堆積物と土壌の概要は以下の通りである。文末に付した()内のローマ数字は、事前発掘調査(北海道埋蔵文化財センター 1988)時の土層名であり、今回の報告でも遺物取り上げ土層名や遺構確認面の土層名としてこれを使用している。火山灰についてはⅤ章でやや詳しく報告する。

1層: 耕作土。火山岩片・軽石混じりの極暗褐色シルト質腐植土。層界平坦画然。層厚20cm土。(I層)

2層: 黒色シルト質-粘土質腐植土。層界平坦画然。層厚4cm土。

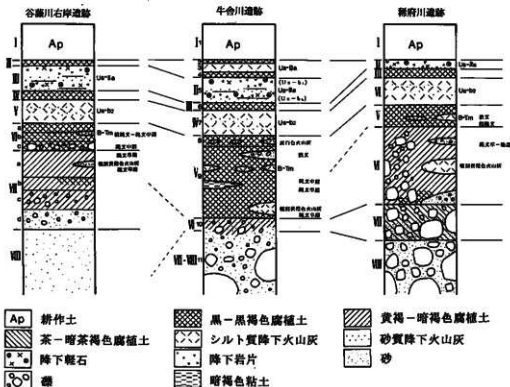
3層: 緑灰色降下火山灰。二枚のフォールユニットから成り、上部はシルト質、下部は軽石質砂質火山灰。層界平坦画然。全層厚3cm土。有珠山Ⅲa火山灰(Us-Ⅲa, A.D. 1853。以下、有珠山起源の火山灰名・年代は横山ほか(1973)による。)に対比した。

4層: 黒褐色粘土質腐植土。層界平坦画然。層厚3cm土。

5層: 緑灰色降下火山灰と降下火山岩片・降下軽石との互層。少なくとも四枚のフォールユニットから成る。層界平坦画然。全層厚5-10cm。有珠山Ⅳa火山灰(Us-Ⅳa, A.D. 1822。)に対比した。(Ⅱ層)

6層: 黒色粘土質腐植土。層界平坦明瞭。層厚5cm土。(Ⅲ層)

7層: にぶい褐色降下火山灰。シルト質であるが、砂質火山灰を不規則に挟むことがある。



図Ⅲ-3 土層模式柱状図

層界平坦面。層厚10-20cm。有珠山 b_1 火山灰(U_s-b_1 , A.D. 1663)に対比した。本層上部に灰緑色の U_s-b_1 、基底部に U_s-b_2 がみとめられることがある。(IV層)

8層: 黒色粘土質腐植土。層界平坦面。層厚5cm±。シルト質の灰白色降下火山が斑状に産出することがある。(V層)

9層: 黒色粘土質腐植土。遺物包含層の主体。層界波状判然-漸変。層厚10-30cm。上部にシルト質の黄褐色降下火山灰、下部にシルト質の黄褐色降下火山灰がレンズ状に産出することがある。上部の火山灰は白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm。町田ほか、1981・町田ほか、1984)に対比される。下部の火山灰は二次堆積相を示すことも多い。この火山灰は、現在噴出源を明らかにし得ていないが、登別市幌別周辺で認められた縄文時代早期の住居跡を覆う火山灰(北海道埋蔵文化財センター、1983・1985・1987)に対比される。以下、この火山灰を「幌別黄褐色火山灰」と仮称する(北海道埋蔵文化財センター 1990)。

腐植土中には水成の砂層・砂礫層や暗褐色粘土層をレンズ状に挟むことがある。腐植土層の発達が悪く、 U_s-b_1 の直下が10層であることも多い。腐植土自身が二次堆積を示すこともある。これらは、河川の氾濫や表面流水による河床・表層物質の移動・集積の結果と考えられる。本層は層相の変化が大きく、発掘区全域にわたって対比し得る層の細区分は困難であるので、8層と10層との間の層を一括して9層とする。

B-Tmの直上から縄文時代の土器が出土し、幌別黄褐色火山灰の直上から縄文時代早期の中茶路式・東銅路IV式土器、直下から縄文時代早期の貝殻文尖底土器が出土している。(V層)

10層: 褐-暗褐色の礫混じり砂質腐植土。11層の土壌化層である。ほとんど発達しないこともある。層界波状漸変。層厚20cm±。(VI・VII層)

11層: 層状地堆積物。roundedな安山岩の岩塊一礫と砂から成る分級の悪い堆積物である。岩塊の最大径は150cmに達する。直上から縄文時代早期前葉の土器が出土している。(VIII層)

以上の堆積物と土壌の他に、焼土が産出することがある。産出層準は、 U_s-b_1 直上、 U_s-b_2 の下位からB-Tmの直上(B-Tmの上部が焼土化しているともある)、B-Tmの下位(幌別黄褐色火山灰との関係は不明)、及び10層上部である。6層以上は耕作により削剥されていることが多い。

図IV-2・3、図V-4・5、図VI-4にセクション図の数例を示す。(花岡正光・佐藤和雄)

引用文献

- 北海道埋蔵文化財センター(1983):川上B遺跡。303pp。
 北海道埋蔵文化財センター(1985):登別市川上B遺跡。109pp。
 北海道埋蔵文化財センター(1987):登別市亀田公園遺跡。67pp。
 北海道埋蔵文化財センター(1988):北海道縦貫自動車道埋蔵文化財事前発掘調査報告書 伊達市牛舎川右岸遺跡・牛舎川左岸遺跡。88pp。
 北海道埋蔵文化財センター(1990):北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 伊達市牛舎川右岸遺跡・穂府川遺跡。21,22pp。
 町田 洋・新井房夫・森脇 広(1981):日本海を渡ってきたテフラ。科学。Vol. 51, pp. 562-569。
 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984):テフラと日本考古学-考古学研究と関係するテフラのカatalogue-。古文化財調査委員会編「古文化財の自然科学的研究」984pp。同朋舎。pp.865-928。
 横山 泉・勝井義雄・大場と志男・江原幸雄(1973):有珠山-火山地質・噴火史・活動の現況および防災対策-254pp。254pp。

3 遺物の分類

(1) 土器

土器の分類は、各遺跡の担当者がそれぞれの遺跡での出土状態と土器の特徴によって行った。報告にあたって、大きな時期的区分は昨年度の報告を踏襲した下記の記号で統一し、細部の時間差や特徴などは遺跡ごとに述べていくこととした。記号は、主に記載の簡便化を要する一覧表や図版に使用した。型式名の明かな資料は、本文中に記すこととし、従来知られている型式と内容に差があるものの、時期的に対比できると思われるものには、〇〇式相当などの表現を使った。

以下の記号説明では、該当、ないしは相当する土器を出土した遺跡を次のように略している。

稀府川遺跡～〔稀府川〕、牛舎川右岸遺跡～〔牛舎川〕、谷藤川右岸遺跡～〔谷藤川〕

I 群 縄文時代早期の土器

a 類；上板式やアルトリ式以前に位置付けられる土器。褐色黄橙色火山灰の残存するところでは、その下位から出土する。

函館市中野遺跡Ⅲ群土器〔稀府川〕

ノダップⅠ式・有珠川Ⅱ遺跡ⅢB層出土資料・鳴川式・晩式〔牛舎川〕

b 類；東銅路Ⅱ～Ⅳ式に位置付けられる土器。

縄文や沈線、刺突のみられる未命名と思われる型式の土器。褐色黄橙色火山灰の下位から出土し、上位から出土する中茶路式（牛舎川右岸遺跡 1990・77ページ）とa類との間に位置付けられる〔谷藤川〕

中茶路式〔谷藤川〕

東銅路Ⅳ式〔稀府川・牛舎川〕

Ⅱ群 縄文時代前期の土器

a 類；前期前葉に位置付けられる土器。

春日町式・トドホッケ式〔稀府川〕

Ⅲ群 縄文時代中期の土器

b 類；中期後半の土器。

天神山式〔稀府川・牛舎川・谷藤川〕

柏木川式・ノダップⅡ式〔稀府川〕

トコロ6類〔牛舎川〕

これらとともに、大木系土器も出土している。〔牛舎川〕

Ⅳ群 縄文時代後期の土器

a 類；後期前葉に位置付けられる土器。

トリサキ式〔稀府川〕

b類；後期中葉に位置付けられる土器。

手稲式〔稀府川〕

c類；後期後葉に位置付けられる土器。

堂林式〔稀府川〕

三ツ谷式〔稀府川・牛舎川〕

V群 縄文時代晩期の土器

b類；大洞C₁・C₂式に相当する土器。

浜中大曲式・桃内式〔稀府川〕

c類；大洞A式以降の土器

聖山Ⅱ式・タンネットウシ式〔牛舎川〕

VI群 統縄文時代の土器。

b類；恵山式土器。

アヨロ3類〔稀府川・牛舎川〕

c類；編年的にはb類と一部並行関係にあるが、後北式を本類とした。

後北A式〔稀府川〕

後北C2式〔牛舎川〕

VII群 弥文時代の土器

〔稀府川〕

(2) 石器等

石器は器種別の大分類にとどめ、一器種内における記号での細分は行っていない。剥片石器には石鏃、石槍、石錐、ナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、楔形石器があり、礫石器には石斧、すり石がある。このうち、石槍としたものは形態的に尖頭器としてとらえられるものである。また、ナイフとしたものは従来からへら形石器、くつ形石器など、特別の名称がつけられているもので、加工により一定の形態をもつスクレイパーとしてとらえ分類している。この他に加工痕ある剥片、使用痕ある剥片、石核、剥片、原石（石器の素材として用いられる石）がある。

このほか、孔のある耳栓が牛舎川右岸遺跡で、石製垂飾品が稀府川遺跡で出土している。

(3) 自然遺物

主に、土壌の浮選選別作業によって、炭化物、種子などが出土している。

IV 牛舎川右岸遺跡

1 概要

本遺跡は、牛舎川河口から約2.5km入った、標高76～81mの地点に位置する。ここは、牛舎川によって形成された扇状地の扇頂部分にある。(図I-1)。

調査区は牛舎川の右岸から北方約400mの水田部分までである。(図IV-1)。このうち牛舎川の岸から、19ラインまでは昨年度、調査を終了した。今年度は調査区北端にあたる6ラインから15ライン迄を発掘した。

今年度の調査区は稀府岳から西へ延びる尾根の南側裾部にあたる。調査区のうち東側と南側は畑地になっているが、大部分は水田で、周囲より一段低い。水田は4枚に分かれ、東から西へ低くなっている。調査区中央東寄りと南端外側を道路が走っている。

昨年度の調査では牛舎川の川べりに堅穴1基と土壇2基が発掘された。出土遺物も川寄りに多く、縄文時代早期から、弥生時代に及んでいるが、主体となる時期は縄文時代中期のものであった。また調査区内には牛舎川に並行する河道跡が3条みつかっている。

平成元年度の発掘に並行して実施した事前発掘調査(試掘調査)によって、今年度調査区のほぼ中央に木片を含む粘土層が確認されている。この粘土層は今回の調査の結果、調査区を東西に貫流する沢であることが判明した。遺物包含層は調査区の大半が水田であることから、その造成によって大部分が削平されているものと推定された。しかし、表土・客土を除去したところ、丘陵斜面にかかる部分は削平されてうすいが、これ以外の部分では厚く、良好に残っていた。調査区は東から西へ傾斜しているため、表土・客土の厚さも東側がうすく、西側が厚くなっている。

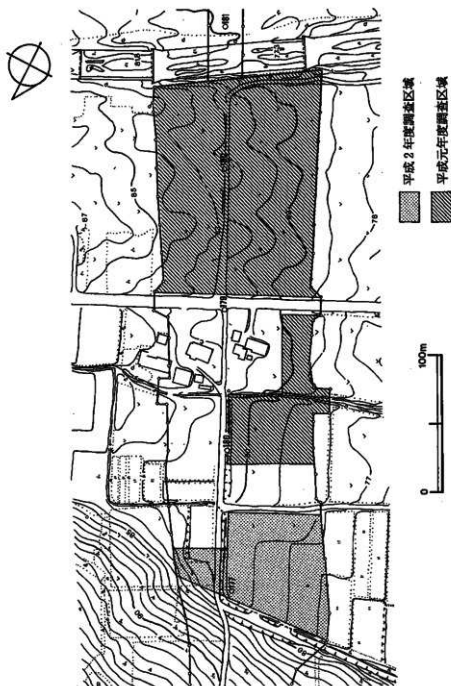
今年度調査区は事前発掘調査の結果から、縄文時代晩期を主体とする遺跡であると考えられていたが、今回の調査では、その他に縄文時代早期の良好な資料が得られている。

遺構は土壇が1基、焼土が244ヶ所検出された。焼土のうち、調査区東端の10ヶ所は縄文時代晩期末の遺物を伴っていた(表IV-2)。

基本層序のうち遺物包含層はV・IV層で、V層からは縄文時代早期・中期・後期・晩期・続縄文時代の遺物が、IV層からは縄文時代早期の遺物が出土している。V層中の下部にある「硯別黄褐色火山灰」の直上から縄文時代早期の東銅路IV式、直下から貝殻文尖底土器が出土している。(佐藤和雄)

土層のメインセクション図として、11とQのライン沿いの断面を記録した(図IV-2・図IV-3)。

発掘範囲の大部分は扇状地にあり、一部は稀府岳火山麓丘陵斜面の低部にあたる。火山麓丘陵斜面は、発掘範囲の北縁に標高76～81mで狭長に分布する(図IV-4)。扇状地の堆積物は、安山岩の亜円・円礫を充填する砂から成る。堆積物中には長径が100cm以上の岩塊がしばしば認められる。扇状地堆積物は分級が悪く、層相の変化が著しい。扇状地と火山麓丘陵斜面との



図IV-1 遺跡と周辺の地形

境には、扇状地堆積物を切って東西方向に浅い谷が形成され、谷は木片混じりの泥炭質粘土によって埋積されている(図IV-4・図IV-3のQ-8~Q-9)。Q-8は付近の断面では、扇状地堆積物とは層相を異にする安山岩の亜角-亜円礫層が認められ、木片混じりの粘土層と指交するようにみえる。この亜角-亜円礫は、発掘範囲の北東と北西部に認められ、火山麓丘陵斜面を薄く覆う斜面堆積物と考えられる。遺物分布の主要範囲は扇状地上であるが、斜面堆積物上にも分布している。前者には主に縄文時代早期・同晩期の遺物が、後者には主に縄文時代中期・後期・統縄文時代の遺物が分布する(IV-21)。

N-11~P-11とQ-11には、腐植土中に暗褐色の粘土層が挟在する。この粘土は緻密で可塑性が強く、安山岩の細礫を含んでいる。浅い凹地状の静水的環境下で堆積した、扇状地堆積物の二次堆積物と推定される。平面的には、11ライン北側の沢すじに厚く認められる。東側のM区沢へりでは、茶色味を帯びた腐植土となる。これはV茶層として、区別した。また、粘土層上下に腐植土があるところでは、下位のそれをVb層とした。

扇状地と火山麓丘陵斜面を覆って完新世の降下火山灰が認められる。下位から上位へ、「個別黄褐色火山灰(仮称)Ⅰ」、「白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)Ⅰ」、「灰白色火山灰(仮称)Ⅰ」、「有珠山b2火山灰(Us-b₂)Ⅰ」、「有珠山Ⅳa火山灰(Us-Ⅳa)Ⅰ」、及び「有珠山Ⅲa火山灰(Us-Ⅲa)Ⅰ」が、それぞれ腐植土を介して堆積している。これらの火山灰については、平成元年度に調査を行った高砂川左岸地区の土層断面とともに、Ⅶでやや詳しく報告する。

(花岡正光・葛西智義)

表IV-1 遺物一覧

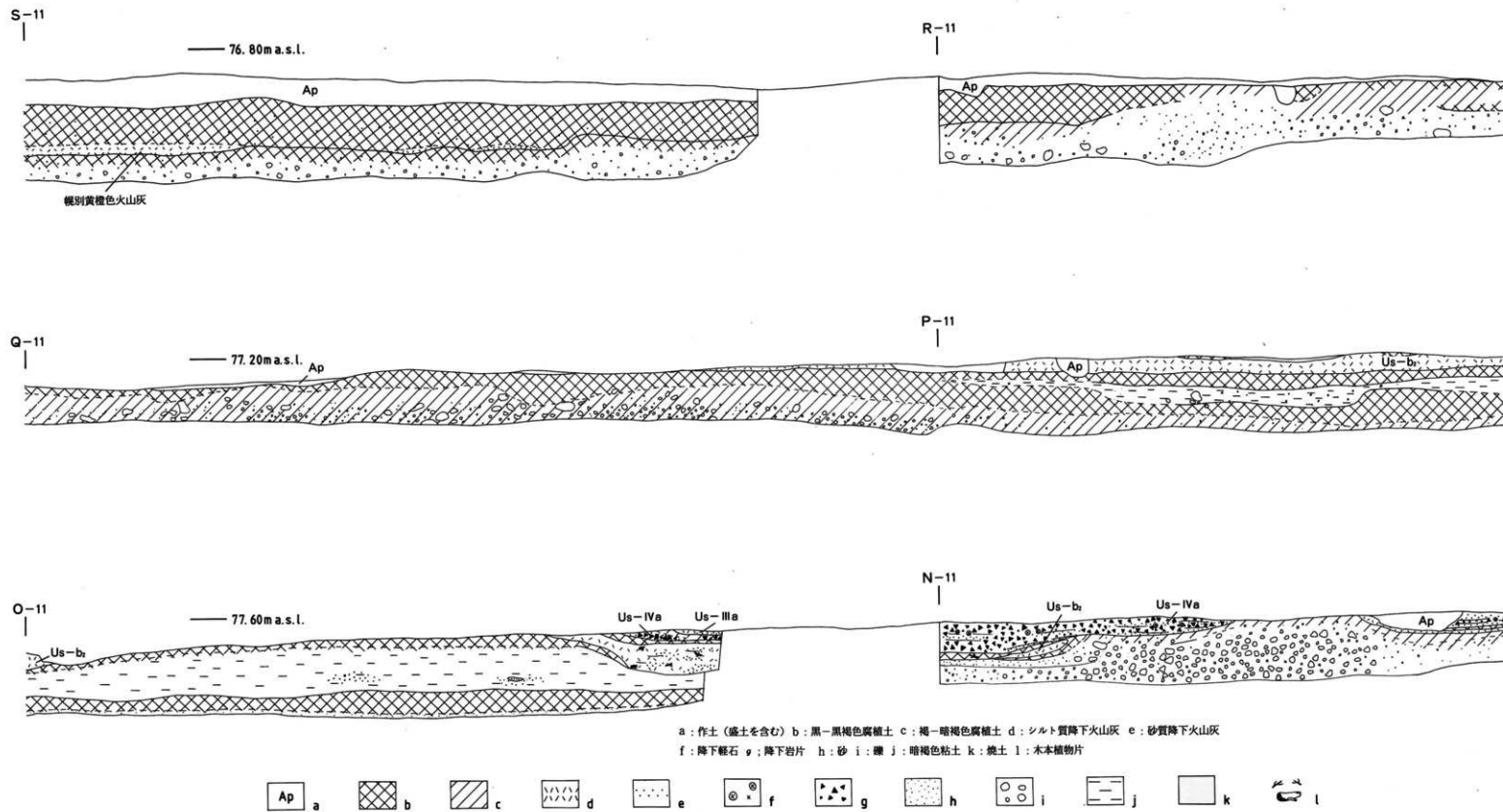
名 称	数 量	名 称	数 量
土 壤	1	焼 土	244

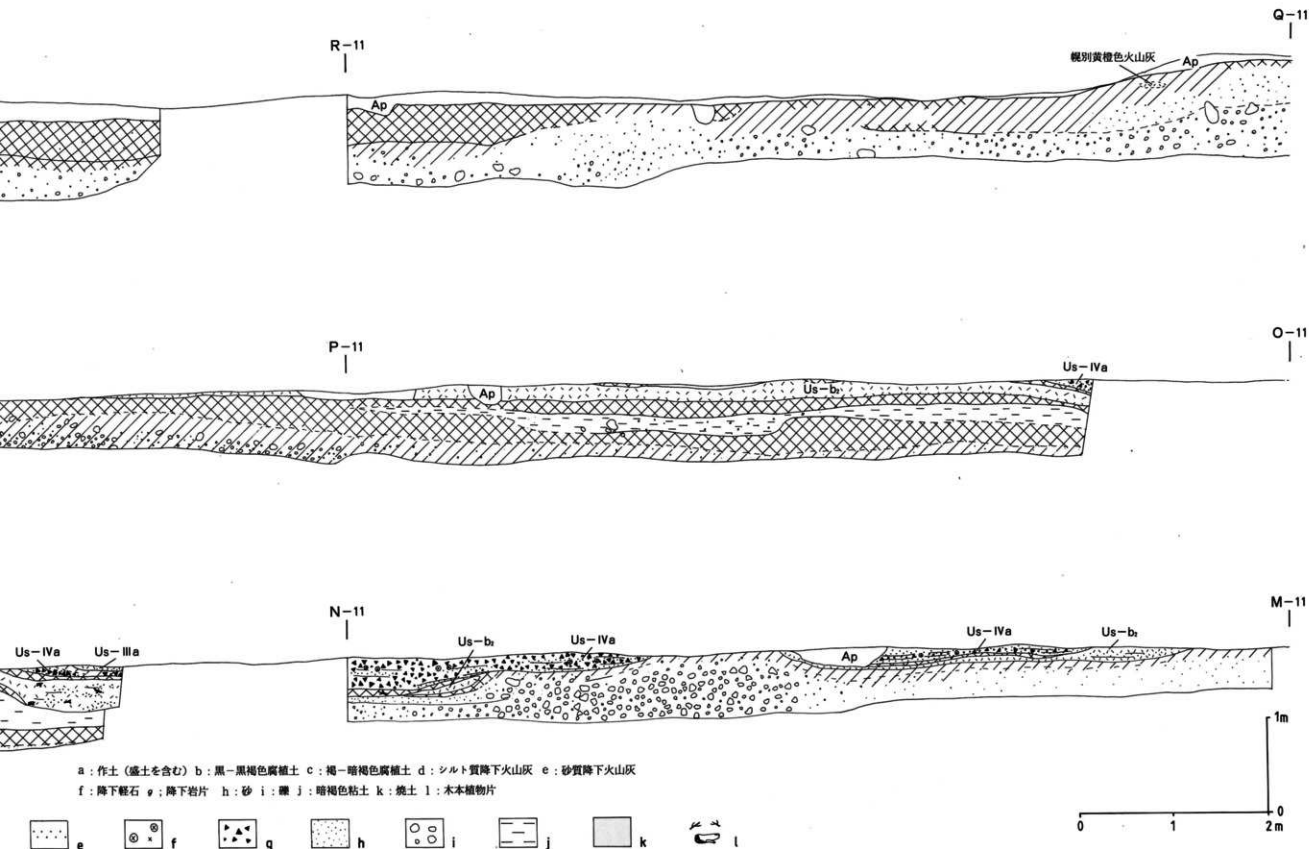
表IV-2 出土遺物一覧

名 称	数 量	名 称	数 量
土器(縄文早期)	1,202	つまみ付ナイフ	1
(縄文中期)	21	スクレイパー	22
(縄文後期)	1,280	石 斧	7
(縄文晩期)	2,739	石 核	2
(統縄文)	196	U・フレイク	13
土 器 計	5,438	R・フレイク	21
石 鏃	61	フレイク	3,361
石 槍	4	石 器 等 計	3,500
ナイフ	5	土製品(耳飾り)	2
石 鏃	3	總 計	8,940

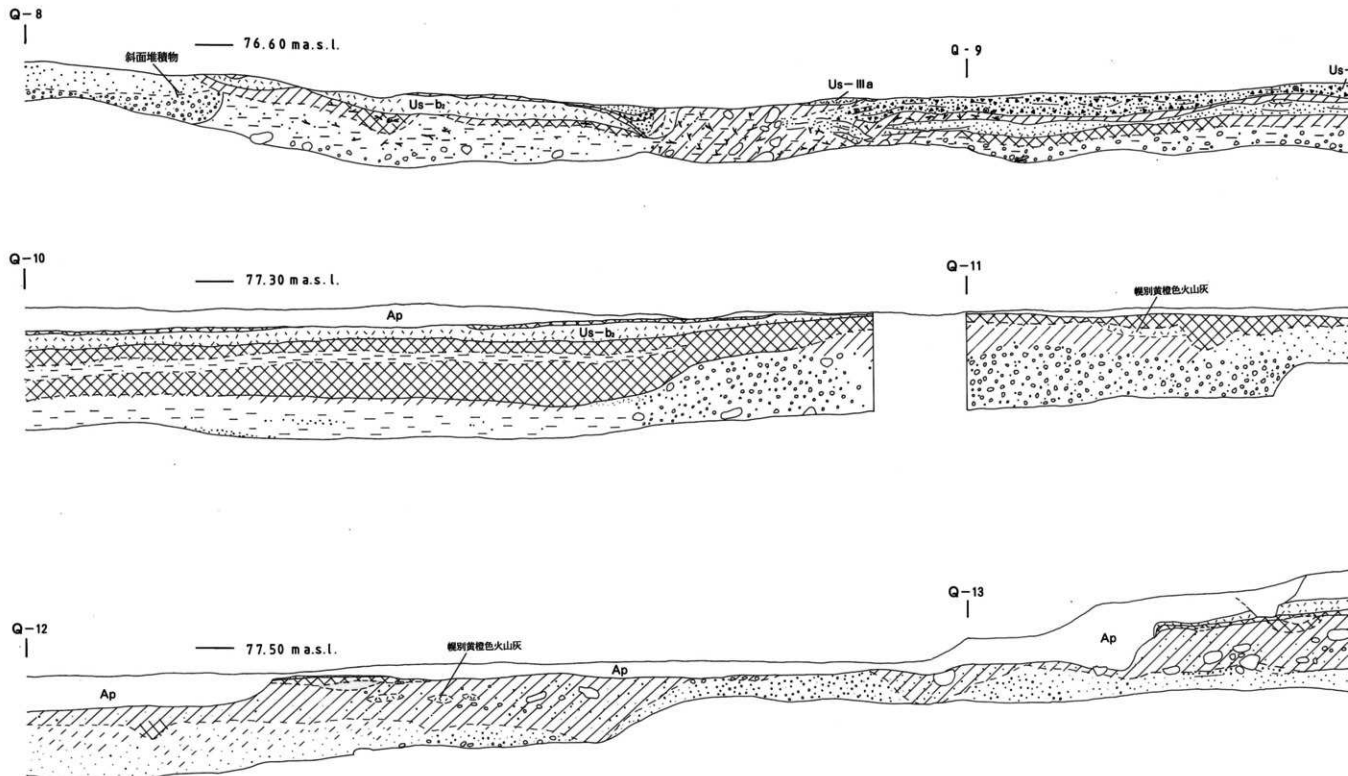
表IV-3 焼土出土遺物一覧

名 称	数 量	名 称	数 量
土器(縄文早期)	3	フレイク	6
(縄文晩期末)	125	總 計	134

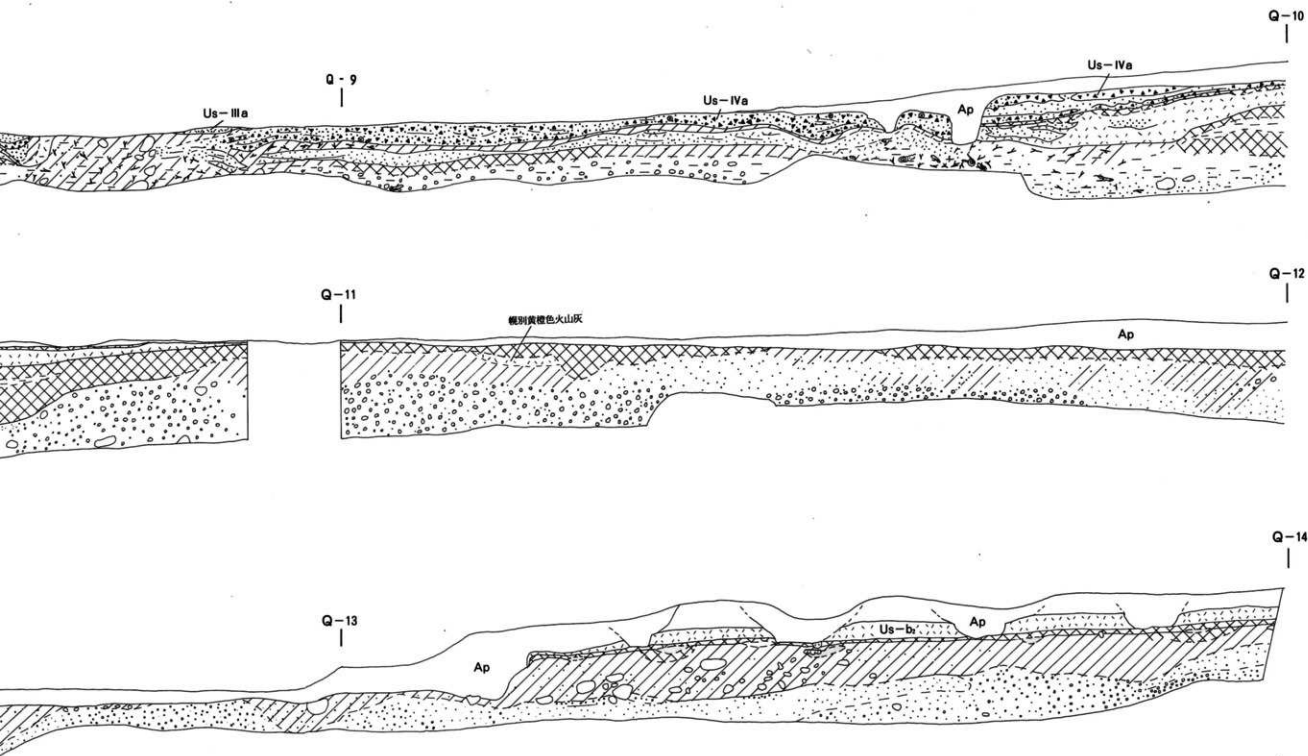




図IV-2 土層図 11ラインセクション図



図IV-3 土層図 Qラインセクション図 (凡例は図IV-2に同じ)



図IV-3 土層図 Qラインセクション図 (凡例は図IV-2に同じ)

2 遺構

(1) 土坑

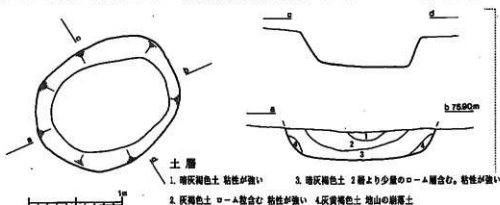
P-1 (図IV-5)

位置 Q-10-a・b 規模 1.68×1.28×0.30m

2本の沢にはさまれた平坦面に位置する。

平面形は、東西方向に長軸をもつ楕円形である。坑底は固く締まっており、南北方向に傾斜している。壁は、坑底との境が明瞭で、立ち上がりは急である。覆土は、V層とVI層が混入したもので、埋め戻されたものと思われる。

遺物は、出土していない。時期について詳細は不明である。掘り込み面(V層中位)周囲から出土した遺物からみて縄文時代後期最終末のものと思われる。また、土坑の規模・覆土の状態からみて墓坑の可能性があるため残存脂肪酸分析を依頼中である。(佐藤和雄)

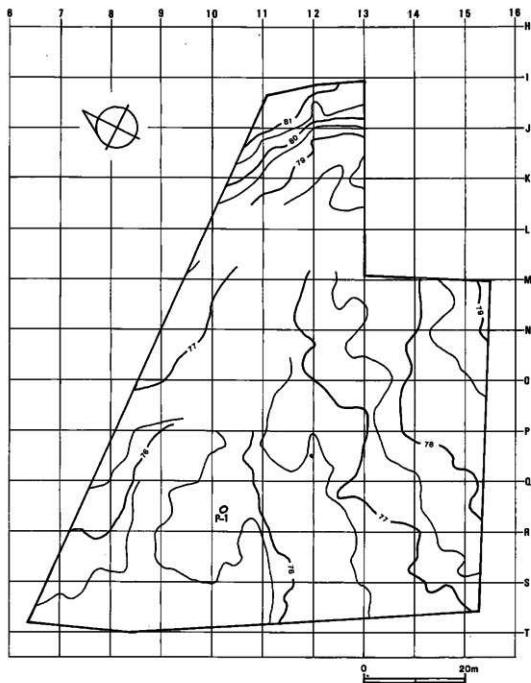


図IV-5 P-1

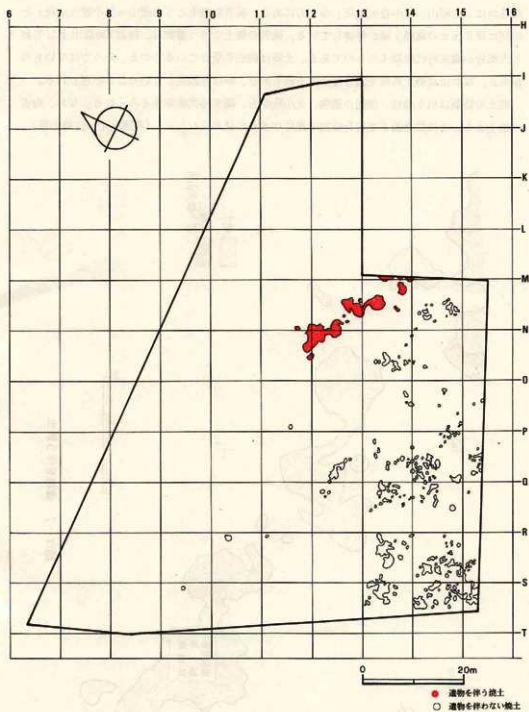
(2) 焼土

図IV-6に焼土の分布を示す。焼土は産状と断面形態から二種類に大別される。一つは、扇状地堆積物の高まり部分に分布し、遺物を伴わないものである。他の一つは、狭長の凹地部に分布し遺物を伴う。このことは、図IV-4の等高線図と比較すれば明瞭である。前者は厚さ5cm±、最大10cmで赤褐色・暗赤褐色の全層一様な色調を呈する。直下の土層とは漸移的であり、その場で形成されたと考えられる。レンズ状・層状の産状を示す。後者は厚さ10-20cm、明赤褐色・赤褐色の色調を呈し、層状に産出する。断面形態は前者と異なり、焼土層中に径5mm±のやや硬い角塊状の焼土粒が層状に産出する(図IV-8)。この焼土粒は表面が腐植で汚染されている。焼土層と直下の土層との境界は画然ないしやや漸移的である。この焼土層の側方では焼土粒が腐植土中に散在している。このような焼土の産状は、本焼土の大部分が二次的に移動・集積したと考えられる。このことは、狭長な凹地部に産出することからも支持されるであろう。

これらの焼土は、V層中に介在する火山灰との関係からいくつかの層準に細分され得るが、前者の焼土については、火山灰自体の保存が悪いために各焼土を対比することは困難である。



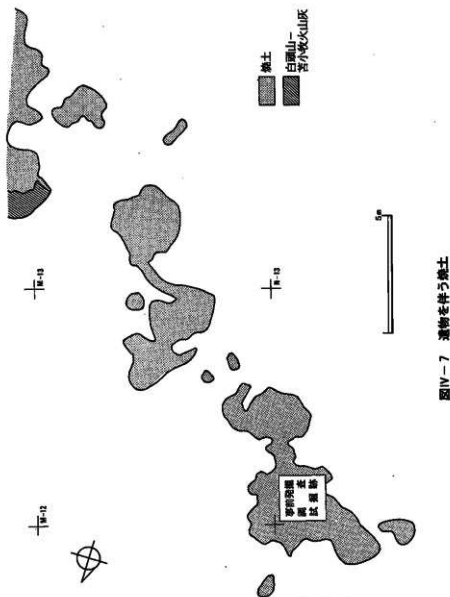
図IV-4 遺構位置図（等高線は調査最終面）



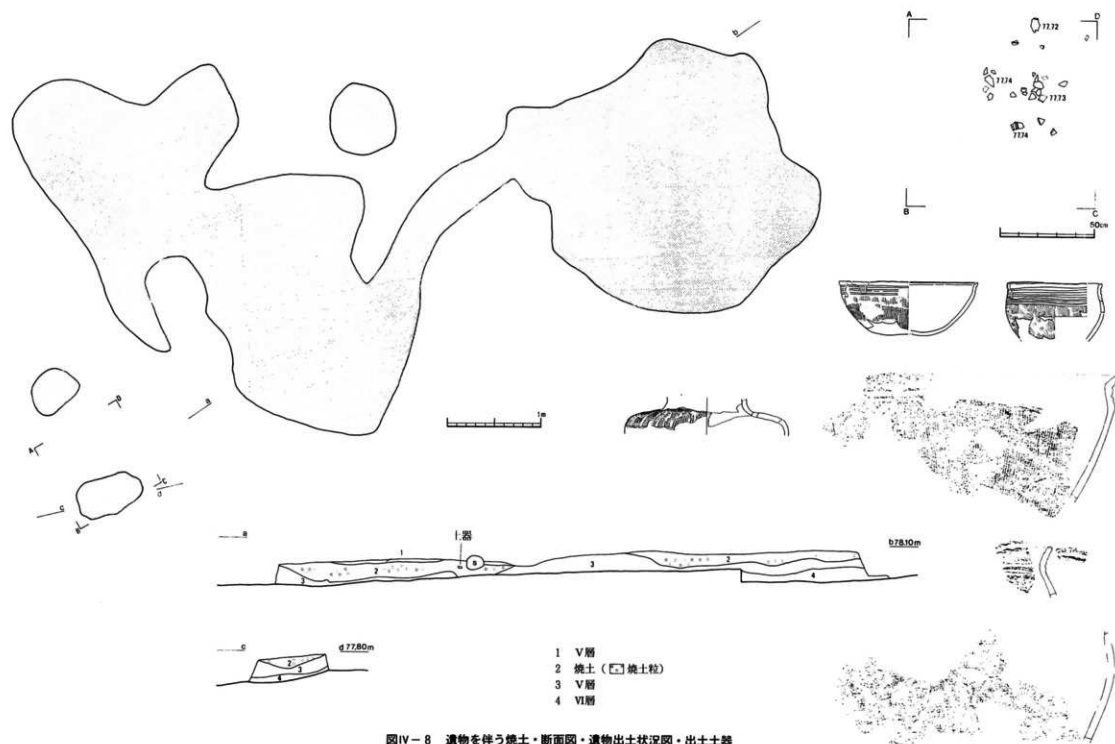
図IV-6 焼土分布図

多くの焼土は、「白頭山-苦小牧火山灰」のほぼ直下のようなものである。後者の焼土の層準は、明らかに「白頭山-苦小牧火山灰」の下方にある。後者の焼土と「白頭山-苦小牧火山灰」との間には5 cm土の腐植土層が発達している。後者の焼土に伴う遺物は、総計134点出土しており大部分が縄文時代晩期末のものである。土器は焼成を受けているものと、そうではないものがある。なかには焼土外の土器と接合する例もあり、かなり散乱していることが窺われる。

焼土の時期は出土遺物、周囲の遺物、火山灰から、縄文時代晩期末とみられる。なお、両者の焼土とも、実体顕微鏡下で炭化植物の微片がまれに認められた。（花岡正光・佐藤和雄）



図N-7 焼土を伴う遺物



図IV-8 遺物を伴う焼土・断面図・遺物出土状況図・出土土器

3 包含層出土の遺物

(1) 土器

8940点の土器が出土している。内訳は、縄文時代早期(1202点)、中期(21点)、後期(1280点)、晩期(2739点)、続縄文時代(198点)で、グリッドごとの出土点数は図IV-21に示した。沢を境にして、南側では縄文時代早期と晩期の土器が、北側では縄文時代中期、後期、続縄文時代の土器が多く出土した。出土状態では(図IV-9・10)、時期による廃棄、あるいは遺棄のありかたに差異が窺われた。縄文時代早期では完形土器がつぶれた状態のものがみられ、後期では何個体かの土器片が渾然として散らばっている状態であった。縄文時代晩期の土器では、完形にはならないものの、上半部や底部のみ、または大きな破片となるものがまとめて出土する例があった。こうしたそれぞれの出土状態や分布の詳細は、改めて「まとめ」で述べることにする。

土器の整理時には、個体の把握に努めた。ただし、注記できないような小破片は、個体識別の対象から外している。以下の時期別記載の中で行っている文様の多い、少ないなどの表現は、個体数でのそれである。なお、土器の図化にあたって、次の表現を用いた。剥落痕から突瘤や貼瘤があったと推定されるものは、断面図に点線でその部位を示した。穴のある土器で、それが突瘤の剥落したものや貫通孔の場合は実線で、補修孔の場合は点線で示した。

縄文時代早期の土器(I群)

a類(図IV-11-13-1~24・図版IV-4~6・8・9)

ノグップI式(6)、有珠川2遺跡Ⅲ層相当としたもの(2~5・10~17・21・22・24)、道東の晩式や鳴川式に対比されるもの(1・7~9・23)などがある。出土状態から明確な前後関係を捉えられなかったことから、まとめてその内容を記す。多数を占めているのは、有珠川2遺跡Ⅲ層相当の土器である。

出土点数は1102点で、接合作業終了時では489点となった。個体は28個体を確認した。ただし、帰属の不明確な胴部破片があり、それらを別個体をする、最大では40個体程度となる。

復元土器、および底部破片では尖底が8点、平底が2点ある。器体の立ち上がりは直線的で、破片資料でも明確な屈曲部の認められるものはなかった。口縁では、水平のものや突起を持つもの、緩やかな波状を呈すると思われるものがある。口唇断面は平坦なものが多く、いくぶん丸みを帯びたものや尖る形状のものが3点ある。

文様には、貝殻条痕文のみのもの(10個体)と無文のもの(15個体)とが多い。貝殻押し引き文は8個体にあり、その半数は下地に条痕が認められる。他に、爪形文のあるもの、沈線と刺突のあるもの、沈線と刺線と押し引き文のあるもの、沈線文のあるものが1個体ずつ、出土している。また、口縁内面に縄圧痕のある土器や底面にホタテの背圧痕のある土器もある。

条痕が土器表裏に施されるものでは、内面に施されるほうが、より明確なことが多い。無文としたものの中には、条痕を施してから撫で付けた可能性が考えられるもの(20)や調整痕と思われるすじを残すもの(17・18)がある。押し引き文の多くは、施文幅が1cm前後で、中に3~

4本の条がある。条痕でも、斜位や鋸歯状の文様を描くものには同様の例が多い。

1～5は復元実測されたものである。1には上下を小波状の沈線で括った口縁部文様帯がある。そこに沈線で鋸歯状の文様を描き、先端の尖った棒状工具による刺突を加えている。胴下半部は無文である。2・3は条痕地に貝殻押し引きによる文様を描いたものである。2の底部周辺には、細いすじ状の線刻がめぐっている。使用痕とも、文様ともいいがたい。3には三山の突起がある。図正面のものが低く、左右のものはいくぶん高い。後者の内面には、指で摘みあげた際の圧痕と思われる凹みがある。上半部の文様は、水平の押し引き文の後から垂下する押し引き文を描き、台形と三角のモチーフを作出している。三角は、図右側の辺を引いてから左側の辺を引いている。なお、この土器は胴部と底部とが接合していないが、曲率と土器内外面の特徴から図のように復元された。4と5は条痕文のみの認められるものである。4は乳房状尖底である。補修孔が3個ある。5上部には交差する斜位の条痕がみられるが、摩滅しており、配列を示すものかどうかはわからない。

6は爪形文のみられる薄手の土器である。

7～9はQ-10-C区からまとまって出土した土器である。7の口縁内側には縄の圧痕がある(図版IV-15-2)。圧痕の上に粘土が張りだしているところや、圧痕のつぶれているところがある。7bに縦の浅い条痕、あるいは調整痕がみられる。8は器面に顕著な凹凸が感じられ、縦の条痕がある。9はホクテの背圧痕のある底面である。胎土や内面の状態は7cに似ている。

10～13は貝殻押し引き文の認められるものである。10では菱形の、13では波形と水平の文様が描かれている。10の口縁部の沈線は段差をもって器体をめぐっている。比較的幅のあるヘラ状工具を押しつけていったものと考えられる。この沈線と口縁の間には斜めの刻線がある。施文順位は沈線の後から刻線を付している。13の内面には荒い条痕と細かな条痕とが認められる。底部近くの破片に細かな条痕が多く、狭まる底部付近では殻頂部を用いた内面調整を行なったようである。

14～20は無文のものである。14・16・17・20には横方向の、18には縦方向の調整痕がある。

21・22は条痕のみの認められるものである。21は薄手の土器で、条痕も細かい。22の下部では、条痕が消されている。特に規則性が窺われないことから器面調整と考えている。

23は沈線文のある口縁部で、波状口縁と思われる。口縁に沿った沈線は小波状をなす。口唇は尖り気味で、外側に刻みらしきものがあるが、細かなひびの多い破片で、不明瞭である。

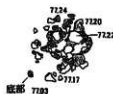
24は平底の底部である。出土状態や胎土の類似から、16と同一個体の可能性がある。

b類(図IV-13-25、図版IV-9)

東銅路IV式が1個体のみ出土した。出土点数は100点、接合終了時は78点である。底部と思われる破片は出土していない。

口縁と胴部に羽状をなす2列1組の緒条体圧痕文がある。口縁の緒条体圧痕の下位には2本の縄線文がめぐっている。地文は、撚糸文と思われる。口唇には、縄の圧痕がある。

P-12-d

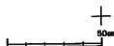
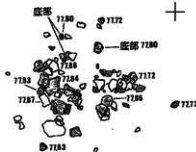


P-12-d 区出土の土器

縄文時代早期の一括土器である。口縁部はないが、ほとんどの破片は、動いていない。偶別黄橙色火山灰の堆積直前につぶれたようで、この火山灰に頭を出す破片もみられる。土器のある面は、きわめてゆるく北西に傾斜している。最も北西にある尖底部破片が、下層の漸移層に、突き刺さるように出土している。これらのことからこの土器は、当遺跡の他の縄文時代早期の一括土器と、同様、やや下傾斜する面に、底部を下方に向けて置かれていたものらしい。

(三浦正人)

M-13-a

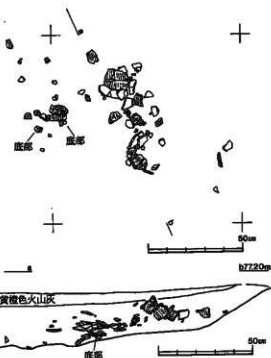


M-13-a 区出土の土器

縄文時代早期の一括土器である。晩期の包含層である黒色土（V層）の最下部から、下層の茶褐色土にかけて出土する。全体的に北側で高い出土レベル値を示し、南側の破片には、深く茶褐色土にもぐりこむものもある。底部は、東側のほんのわずかに傾斜した茶褐色土中に、尖底部を下にして、出土している。やはり、当遺跡の他の縄文時代早期の一括土器と同様、下方に底部を向け、傾斜に沿って置かれていたものだろう。

(三浦正人)

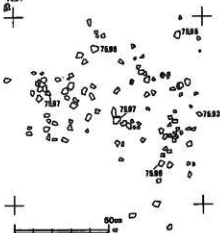
図IV-9 遺物出土状況図 (上図IV-11-4)
(下図IV-11-5)



N-11-d・N-12-a区出土の土器

この遺跡で最も典型的な、縄文時代早期の一括土器の出土状態を示している。出土層は、粘性のなかったくしまった水分の多い砂質層で、沢水の影響を多くうけた土壌である。この上層に焼別黄褐色火山灰が堆積している。北側にある底部は、まとまっており、そこに土器が置かれていたものと考えられる。口縁部も、西と東の二カ所にまとまって出土しており、土器全体が、沢に向かう浅い“くぼみ”に入っているのがわかる。この“くぼみ”は、沢沿いに下がるもので、土壌のようなものではない。沢水を利用するために、尖底部を沢に向けて置かれていた土器といえよう。

(三浦正人)

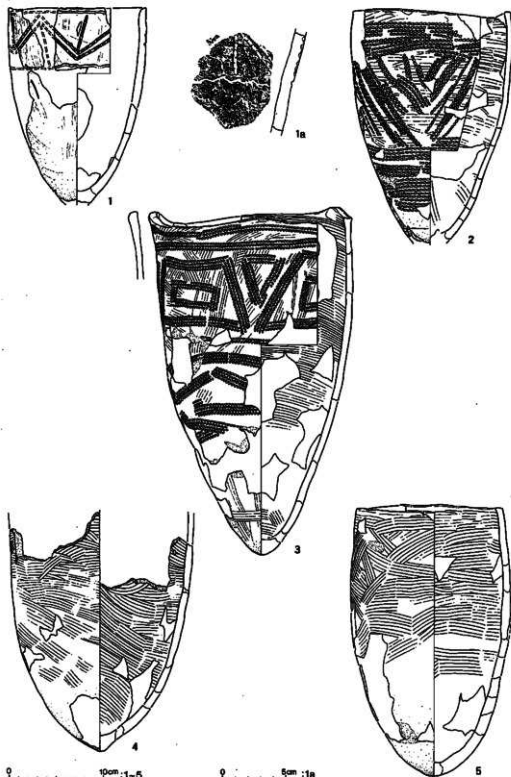


R-7-b区出土の土器

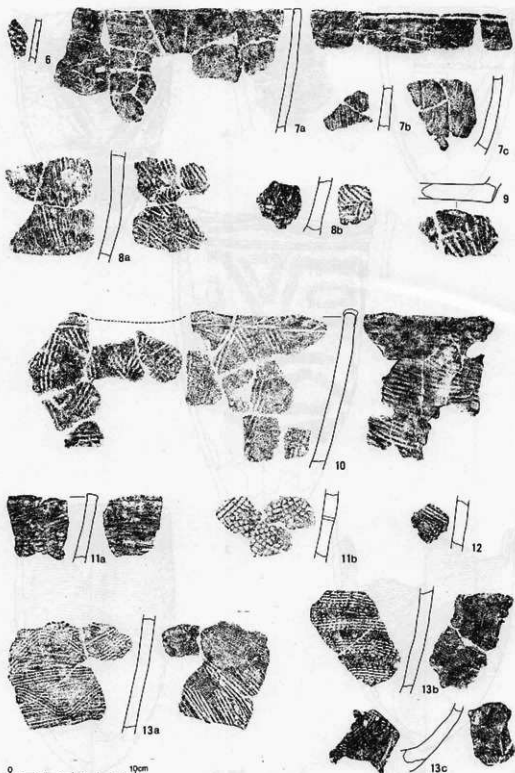
縄文時代後期最終末の土器である。黒色土(V層)の上部から、破片が出土している。8個体以上の土器が見られ、このうちの特徴的な3個体を図示した。破片のほとんどが摩滅している。

(佐藤和雄)

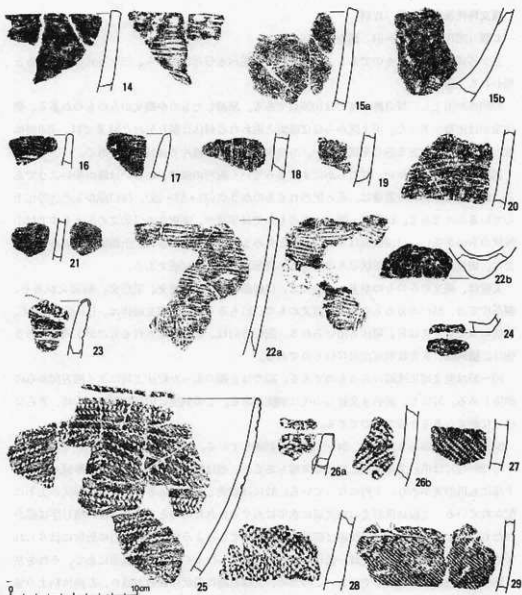
図IV-10 遺物出土状況図 (上図IV-11-3
下図IV-14-36・37・40・39)



図IV-11 I群a類土器



圖IV-12 I 群 a 類土器



図IV-13 I群a・b類、III群b類土器

縄文時代中期の土器 (III群)

b類 (図IV-13-26~29、図版IV-9-2)

器厚と内面状態から本類とした縄文のみのもの(27)、天神山式、あるいは萩ヶ岡3式に相当するもの(28)、大木系土器と思われるもの(29)、トコロ6類(26)がある。出土点数は19点と少なく、個体数は上述した4種の他に、縄文のみの破片を加えた5個体である。

26の地文は羽状縄文で、綾絡文も認められる。28の縄文は、条の左傾する複節縄文である。29には横走る沈線切る、弧状の沈線がある。破片左上部には横の沈線に接する斜の沈線もある。地の縄文は節の細かい、RL原体によるものである。

縄文時代後期の土器 (IV群)

c類 (図IV-14-30~64、図版IV-10)

三ツ谷式に相当するものである。“まとめ”で述べる分布状況から、三ツ谷式に後続すると思われる土器もある。

1280点が出土し、接合終了時では1095点である。摩滅したものと縄文のみのものも多く、個体識別は困難であった。出土区からほぼ確実と思われる個体に振り分けた結果では、150個体強となるが、多すぎる感じを拭えない。ちなみに、口縁部破片では17個体である。

器形は、底部にむかい、なだらかにすばまっていく碗形の深鉢、あるいは鉢が多いようである。鉢以外と思われる器種は、壺と思われるものが3点(32・57・59)、注口部が1点(60)出土しているのみである。口縁は、縄文のみのものでは平縁が、突瘤文や爪形文のあるものでは小波状のものが多く、口唇断面は平坦なものと丸みをもつものが多い。土器に厚みのあるものでは、切りだし形や尖る形状のものもある。底部は全例、上げ底である。

文様は、縄文のみのものが多い。他には、口縁部破片では突瘤文、爪形文、刺突文があり、胴部片では、貼付のあるもの(59)や無文のもの(58)もみられた。縄文原体は、LR原体が多く、羽状になるものにはRL原体も用いられる。回転方向は、縦と判断されるものが1例(61)ある他は、横回転、または判定出来ないものである。

30~33は無文地に沈線のあるものである。30では先端の尖った棒状工具による横方向からの刺突もある。31にも、渦巻き文様の中央に刺突がある。この刺突は円形の刺突の中に、さらに小さな刺突のある2段のものである。

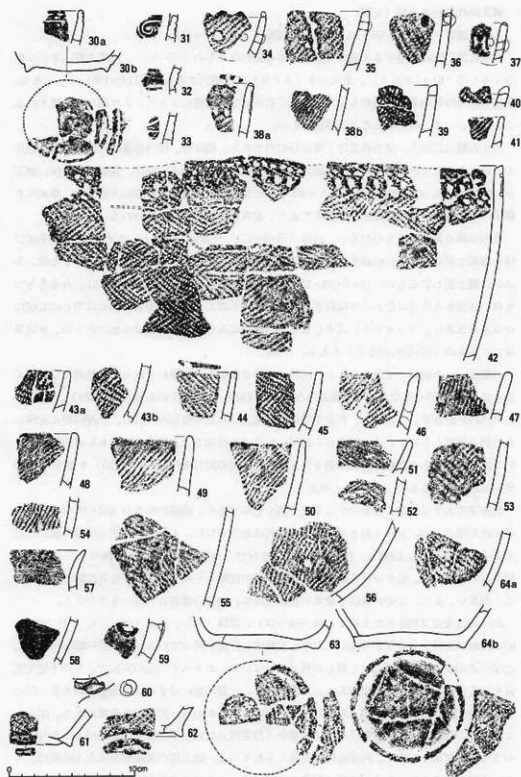
34~36は突瘤のあるもので、34と35の瘤は剥落している。36は瘤を指で摘みあげている。

37・38・42には爪形文がある。37には突瘤もあるが、瘤は剥落している。38では摩滅した破片上部にも爪形文があり、2列になっている。42には刺突と沈線もある。刺突は爪形文の上下に配されている。沈線は爪形文の施文前に水平にめぐらされたものと文様帯下部に横U字に描かれたものとがある。横U字の沈線は部分的に描かれているようで、図の左右の破片にはみられなくなる。この土器の爪形文は、弧状の器具の内湾するほうを右にして器面にあて、それを左に回転して施文されたものである。このため、文様右端に弧状の刺痕が残り、左側に粘土の盛りあがりが出てきている。地文は異原体による羽状縄文である。

39~41・43~56には縄文のみが認められる。39・40・51は右傾の、43~45は羽状の、他は左傾の縄文である。39は口唇部に棒状工具を深く押しつけた刻みがあり、弁状を呈する突起部の可能性がある。44にも浅い刻みがある。56は胴部としたが、丸底を呈する底部かもしれない。

57はくびれのある口縁部である。摩滅していて、文様を確認できない。他の土器に比べて、胎土に砂粒が多く、VI群土器の可能性もある。58は無文の胴部である。59には円形と思われる貼付があり、中央に刺突が加えられている。厚手である。

60は注口部の破片、61~64は底部である。63の底面には縄文がある。



圖IV-14 IV群c類土器

縄文時代後期の土器（V群）

C類（図IV-15～19・65～70、72～146、図版IV-7・11～14）

大洞A式以降に相当する土器である。古手と思われるもの（72～80）、道南の聖山Ⅱ式に相当するもの（81～106など）、道央のタンネトウⅠ式に相当するもの（127～135）などがある。多出したのは聖山Ⅱ式相当のものである。これらは分布状態によって、より確かに分離されることから、“まとめ”のところで詳述したい。

出土点数は2739点、接合作業終了時は1843点である。個体は、接合作業時に類似した土器片を一纏としたものが78個体ある。1破片のみの資料では口縁部が52個体、底部が23個体、胴部が230個体ある。この結果では、およそ380個体となるが、縄文時代後期の土器同様、摩滅片や縄文のみの胴部片も1個体として数えており、最大に近い個体数と思われる。

器形は鉢と思われるものが多い。浅鉢（73・98・121）や深鉢（72など）もあるが、大半は口径と器高が同じぐらいの鉢と思われる。鉢以外の器種と判断されるものは、図示した壺、あるいは壺と思われるもの（70・95・100・101・116～118）のみである。口唇断面には、丸みをもつものと外面から内面にむかって傾斜する尖り気味のものとがある。後者の中には切りだし状になるものがあり、タンネトウⅠ式としたものに顕著にみられる。底部は平底であるが、丸底気味になるもの（67・69・146など）もある。

口縁部のある個体で文様をみると、沈線文が約9割のものに認められる。少数例には、縄文のみのもの（122・135など）、条痕文のみのもの（119）、縄線文のあるもの（132）、無文のもの（79）がある。このほか、刺突や貫通孔の加えられるものがみられる。口縁内面に沈線のある例は半数くらいである。胴部から底部にかけての個体では、縄文のみのものが約半数、ついで沈線のあるものが多い。稀な例では、微隆起線様の貼付を持つもの（120）や縄文地に刺突のみのみられるもの（131）などがある。

沈線文の大半は横走するものや工字文を描くものである。曲線的なもの（93・102など）や三叉文風の陰刻（98）もみられるが、全体の配列はわからない。1個体、波状の沈線の描かれたもの（108）がある。貼瘤は、沈線施文前に貼り付けられるものが多く、1個のものと2個1組のものがある。貼り付けられる部位は最上位の沈線とその3～4本下位の沈線部分にすることが多い。また、この口縁直下数本の沈線部分に、地文の確認されないものがある。

65～70は復元実測された土器で、鉢（65～67）、深鉢（68）、浅鉢（69）、壺（70）がある。65の沈線は器具を止めながら描いており、沈線内に圧痕が残っている。66の図左端のところは、沈線が途切れている。突起は1個しか残っていないが、おそらく二山の突起で、その下位で沈線を切る部分、ないしは貼瘤があったと思われる。土器内面にはすじ状の調整痕がある。67には矢印のところに焼成後の傷と思われる楕円形のくぼみがある。対称的な位置にあり、図示しておいた。68は突起の位置関係や出土状態から想定復元したものである。突起が6つあり、そのうちの1対はやや高く、内面に貼瘤が加えられている。最上位の沈線部分にある貼瘤は、大きな突起の下や小振りの突起の間に配置されている。4本目の沈線部分にある貼瘤は、図化さ

れた間隔で、器体をめぐると思われる。なお、67と68は同一個体の可能性もある。69には、土器内面というより、内傾する口唇に沈線が引かれている。この土器には、補修孔がある。

72～80はC類の中では古手と思われるものである。72と79は口縁部と底部から器形を推定した。72には、沈線中に施文具を止めた圧痕が残っている（図版IV-15-4）。73～75は無文地である。77ではくびれから上が無文地となっている。79は口唇の刻みの他は、無文である。

81～114は縄文地に沈線のあるもので、81～108は工字文や貼瘤の認められるものである。81・82は胎土のしまった土器で、搬入品の可能性が考えられる。81の口縁の縄文は、異原体を用いた羽状となっている。83は口縁に浮線状の貼付があり、沈線が引かれている。84aには把手状の貼付けがあったと思われる剥落部がある。86には突起下に貼瘤の剥落痕がある。89の突起下には貫通孔が穿たれている。90では最上位の沈線が突起部であがっている。95の破片右端には貼瘤があり、中央にも2個1組と思われる貼瘤の剥落痕がある。99では最上位の沈線の途切れるところにaでは貼瘤が、bでは浮線状の盛り上がりがある。100の最上位の沈線には、貼瘤を潰して引いたような段差が付いている。口縁の縄文の他は、無文地である。102・103は同一個体の可能性のあるもので、陰刻風の弧状の沈線文が描かれている。104～106は道路を越えた東側の発掘区から出土したもので、摩滅や褐鉄の付着が顕著にみられる。104cには三叉文風の陰刻がある。105c・106の破片下半は無文で、同一個体の可能性がある。108には2個の貫通孔がある。図左端は補修孔である。貫通孔の上の口唇には剥落痕があり、突起を持っていたようである。地文は圧痕の浅い縦走縄文である。

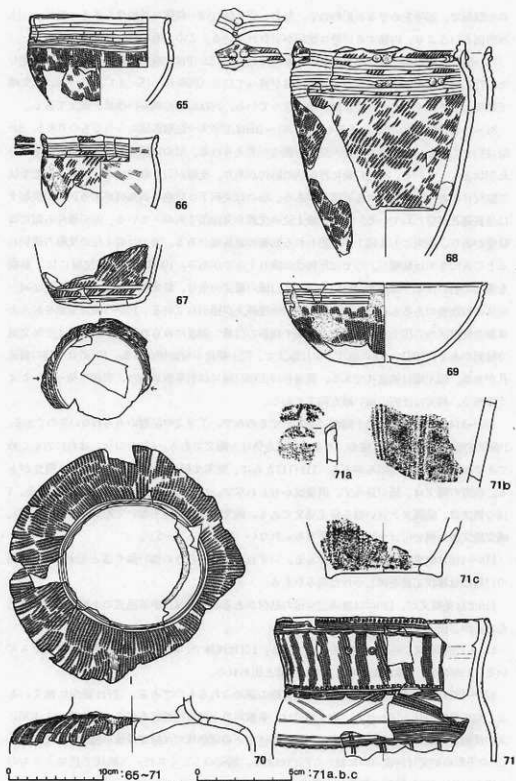
109～114は、沈線が口縁や頸部に数本めぐるので、工字文や貼瘤のみられないものである。109が左傾する縄文の他は縦走、あるいは縦走気味の縄文である。111の口唇には右に力をこめてえぐりこんだような刻みがある。111・112ともに、頸部沈線の上位は無文、下位に縄文がある。前者の縄文は、節が見えず、調整痕かもしれない。113bは摩滅のためか、無文である。114の縄文は、縞縄文と言い得る縦走縄文である。縄文原体を間隔をおいて転がしたものであり、縄文施文後に撫で付けを行った様子はみられない（図版IV-15-5）。

115～118は無文地に沈線のものである。いずれも胴の膨らみの強い鉢や壺と思われる。116の口唇には棒状工具を押しつけた刻みがある。

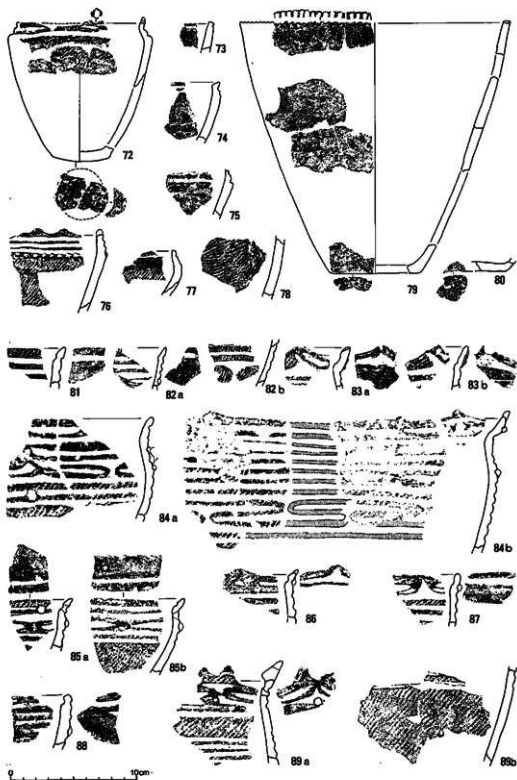
119には条痕文が、120には微隆起線様の貼付がある。後者は、中茶路式の土製円盤の可能性もあるが、出土状態から本類とした。

121～126は縄文のみのみられるものである。121は浅鉢で、内面に浅い沈線が2本めぐっている。125は破片下端が底部のようで、浅鉢と思われる。

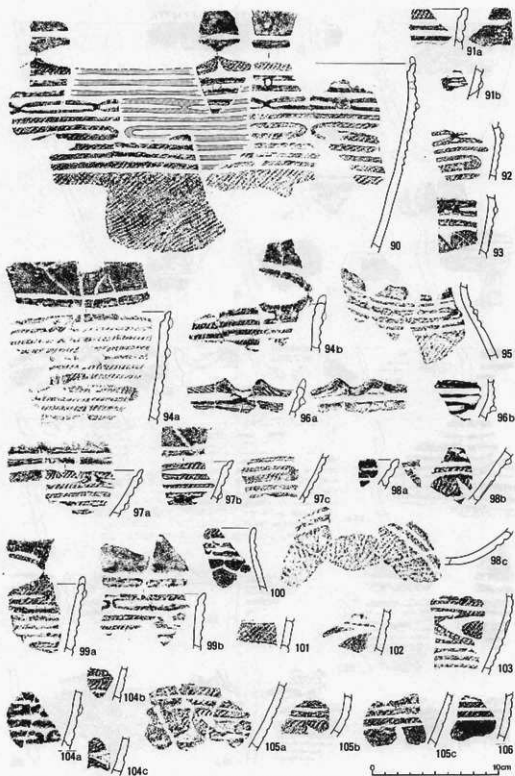
127～135はタンネットウL式に特徴的な文様の認められるものである。127は底面に縄文のある、丸底気味の鉢と思われる。施文順位は、条痕地の上に蛇行沈線を描き、その後、上半部に太い沈線とそれに沿う刺突を加えている。器体上下の歯鋸状の沈線は最後に施文されている。128の円形の刺突は刺痕の中に細かな凹凸がある。端部のふしくれた棒状工具によるものと思われる。129は貼付の剥落部に縄文が認められる（図版IV-15-3）。貼付上には縄の圧



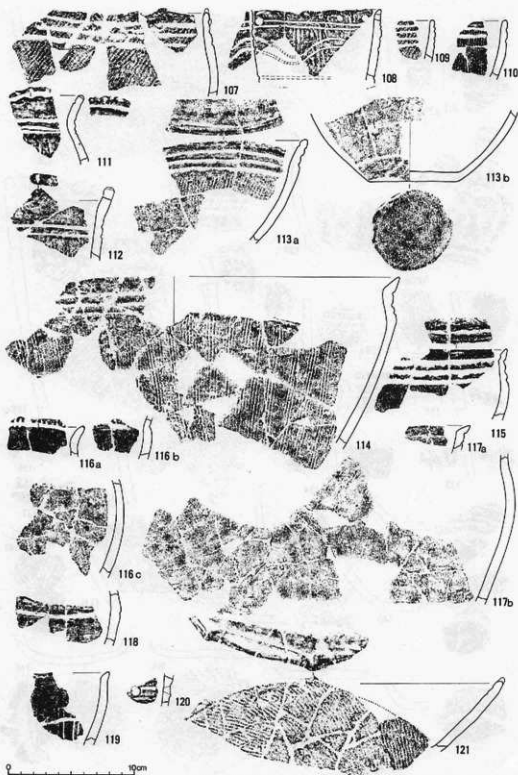
圖IV-15 V群c類, VI群b類土器



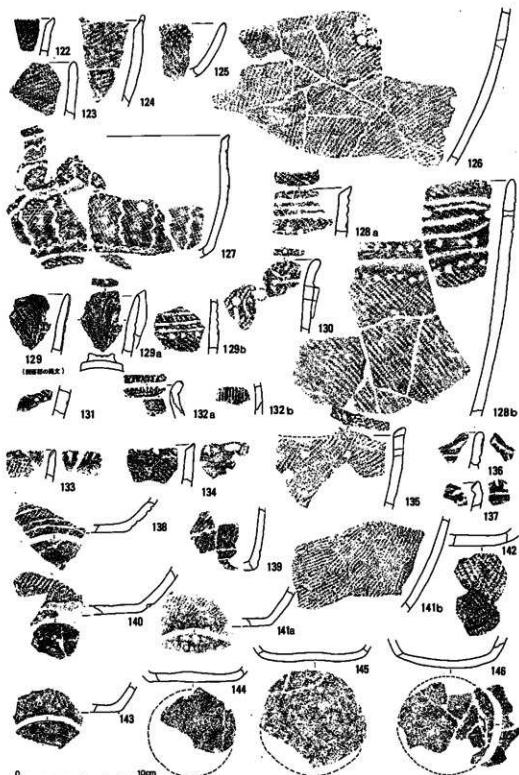
図IV-16 V群C類土器



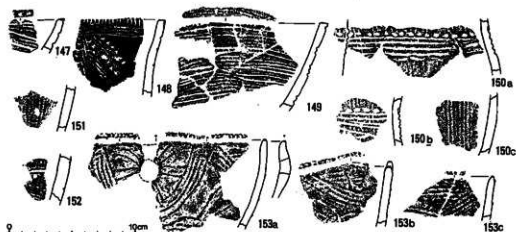
圖IV-17 V群C類土器



図IV-18 V群C類土器



图IV-19 V期C类土器



図IV-20 VI群 b・c 類土器

痕がある。130は、出土区から当初は縄文時代後期のものと考えていた。沈線と貫通孔から本類とした。右の破片には小突起があり、頂部に刺突がある。左側の破片には中央に補修孔、右端に貫通孔らしき跡があり、貫通孔の周囲は隆起している。右の破片にも貫通孔があり、その位置関係から両破片を並べたが、不確実な状態である。131には、縄文地と無文地との境に刺突がある。132には口縁くびれ部と破片下端とに縄線が認められる。133～135は縄文のみのもので、口唇に133では縄の圧痕、134には指圧によると思われるくぼみ、135には縄文がある。135の突起頂部には縄圧痕がある。

136・137は突起部の破片で、前者には突起に沿う斜めの沈線、後者には突起頂部に刻みがある。138～146は底部、及び底面である。138は底部まで、139は底部近くに、沈線がめぐっている。142は縄文のある底面、146は丸底である。

統縄文時代の土器 (VI群)

b 類 (図IV-15-71, IV-20-147～151、図版IV-15-1)

恵山式土器後葉のものである。出土点数186点、接合終了時は90点で、9個体が確認された。

器形には甕 (71・148・150) と浅鉢 (147・149) とがある。口唇断面は平坦で、148を除き、刺突か縄文がある。1例出土した底部は、上げ底である。縄文原体は全例、RLである。

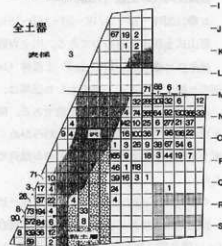
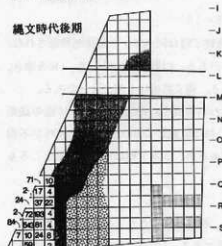
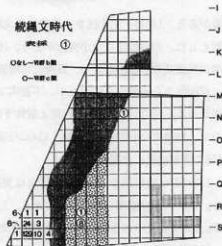
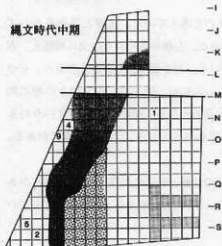
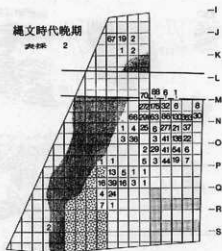
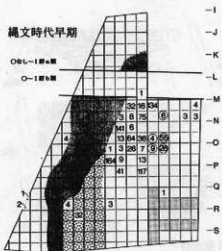
75は口縁の内湾する壺形土器である。同一個体と思われる破片に突起部(a)と上げ底の底部(c)がある。148では口縁に縦の刻みがめぐっている。149は摩滅しており、沈線の流れが不明確である。胴部に2本1組のものが数列めぐるのであるが、3本1組になっているところもある。

c 類 (図IV-20-152・153、図版IV-15-1)

後北式土器である。出土点数10点、接合終了時7点、個体は図示した2個体である。

152は縄文間に刺突のあるもので、土器の天地は不確実である。153は後北C2式の注口土器である。

(葛西智義)



図IV-21 土器分布図

(2) 石器

本年度の調査では総計3,500点出土した。石材は、黒曜石1583点、頁岩1861点、玄武岩19点、緑色泥岩4点、蛇紋岩2点、その他である。剥片・破片を除いた石器の合計は139点であり、このうち加工痕・使用痕ある剥片および形態不明のものを除く90点を図示した。

石鏃 (図IV-22-1~46)

石鏃は61点出土している。石材は黒曜石が42点、頁岩が19点である。

1~5は完形品ではないが細身薄手の形態のものと思われる。1・2は基部が浅く内湾する凹基鏃、3~5は平基鏃で、1は基部に突起を作り出しているのが特徴的である。全面を加工した面をみると、いずれも一定方向に漸次加撃点をずらし、一側面毎に加工していくという共通の手法が認められる。このため剥離痕は並列した細長い形態のものが多く。

6は周辺加工のもので、基部が欠損しているものの残部の形状から明瞭な茎はなかったものと思われる。柳葉形を呈するものであろうか。

7・8は長身のもの。7は平基鏃で加工が粗く厚みがある。8は表面-裏面-基部の順序で加工しており、挟りが深い。表面は1~5と同様の特徴をもつ。

9~22は三角形のものである。9~11は平基鏃で1~5と同じ手法で薄く加工されている。11の上部は再加工を試みている。12は下端に折れ面が認められ、欠損品を再加工したものと思われる。13~22はやや厚みのある平基鏃や凹基鏃である。規則的な加工順序は認められないが、13~16および18~20には基部の中央部を大きく剥離した後、左右を細かく加工する特徴がみられる。

23~46は有茎鏃である。23~25は側縁が外湾し身に対して基部が長いものである。最大幅が中央付近にあり、厚みがある。26は両面に素材面を残している。27は加撃点の間隔が広いので側縁が鋸歯状になっている。28も同様のものである。29~37は細身で基部が先細りする有茎鏃である。38・39も同様な特徴を有するが前記のものより幅広である。40~43は明瞭なかえしをもつもので、基部は棒状になっている。44~46は基部の側縁が直線的なもので、44・45は規格が35~37とほぼ同じである。

石槍 (図IV-22-47~50)

4点出土している。石材はすべて黒曜石である。47は左右非対象で剥離の輪郭線には傷が認められる。48は基部が欠損しているものの木葉形を呈するものと思われる。49は細部加工が片側のみ施されている。50は加工が粗く製作途中で破損したものと思われる。

石鏃 (図IV-22-51・52)

3点出土している。石材は頁岩である。51は先端部にのみ加工が施されており、52は使用により先端部が摩滅している。

ナイフ (図IV-23-53~57)

5点出土している。石材はすべて頁岩である。53は下端部-右側縁-左側縁の順序で加工さ

れている。54は右側縁-左側縁の順序で加工され、右側縁の剥離は下部の曲刃部が上部より新しく角度も急である。裏面の大きな剥離はバルブ除去のためと思われる。55は左側縁-右側縁の加工順序である。53-55は被熱している。56は左側縁を加工した後、右側縁を加工する際に被損したものと思われ、再加工も試みている。57は篋状石器の刃部と思われる。加工順序は裏面のバルブ除去-左側縁-右側縁-下端部である。

つまみ付きナイフ (図IV-23-58)

一点のみ出土している。横長剥片を素材とし、つまみ部には打点を残している。石材は頁岩である。

スクレイパー (図IV-23-59-25-79)

22点出土している。59は加工が規則的で左側縁は上から下に、右側縁は下から上に漸移加撃点をずらして剥離している。加工順序はおおよそ右側縁-左側縁である。上端は打面を残している。60-62は黒曜石の縦長剥片を素材とした両刃のものである。3点とも大きな剥離面には傷が認められることから、剥片のまま持ち込まれ本遺跡で加工されたものと思われる。61・62は同一母岩と思われるが接合はしなかった。63-67は頁岩の縦長剥片を素材としたもので、刃部の剥離は細かい。68-73は幅広い縦長剥片を素材としている。74・75は横長剥片を素材としている。74の左側縁の剥離は主要剥離面を剥離する以前のものである。68-75の石材はすべて頁岩である。76は2点の黒曜石のスクレイパーが接合したものである。大形の剥片をいくつか折り取った後に、持ち込まれたと思われ、大きな剥離面の輪郭には傷が認められる。77は黒曜石の小形の抉入削器で素材は不明である。78・79は玄武岩のもので細かな加工が施されている。バルブは発達しておらず主要剥離面は平坦である。なお矢印は微細な使用痕が認められる部分である。

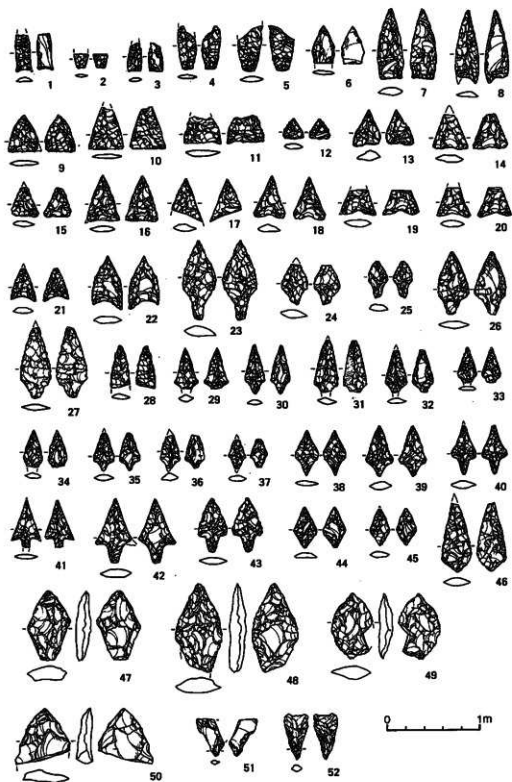
石核 (図IV-25-80・81)

2点出土しており、いずれも頁岩である。80は表面を上下から剥離した後、交互剥離で左右から行っている。81は主として上下方向から剥離しており、左側面は折れ面である。

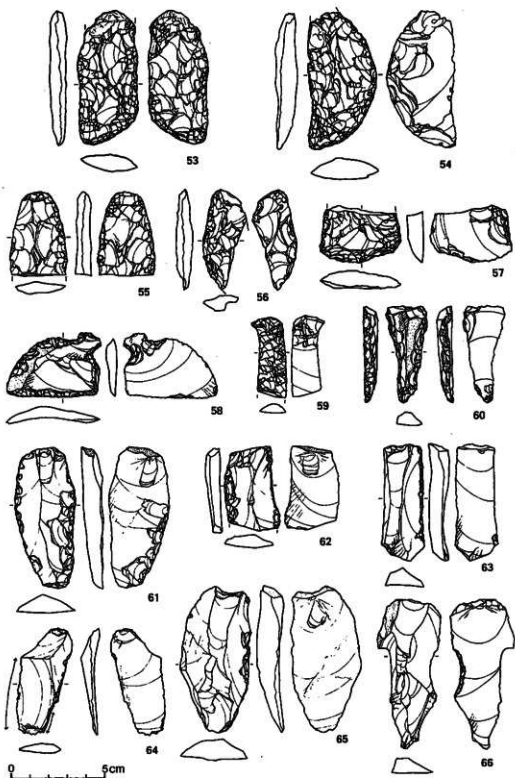
石斧 (図IV-25-82-26-87)

5点出土している。82は蛇紋岩を石材とし、擦り切りによって製作されている。基部には2箇所両側から穿孔されている。穿孔は研磨以前に行われている。83・84は緑色泥岩の両刃石斧である。83は自然面が基部や側面に部分的に残っている。85は泥岩(?)の基部で敲打痕が認められる。86・87はのみ形石斧である。86は蛇紋岩を石材とし、擦り切りによって製作されているが、側面の仕上げは粗い。刃部には微細な剥離痕が認められる。87も擦り切りによって製作されている。刃部は裏面から研磨されている。

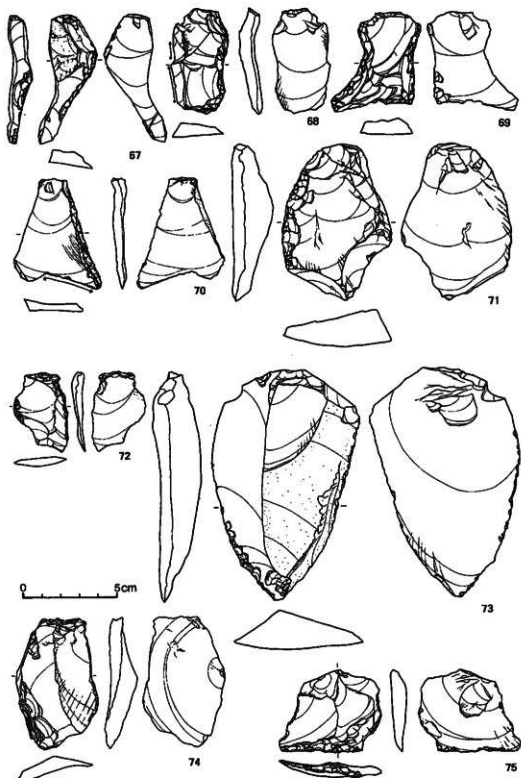
(山原敏朗)



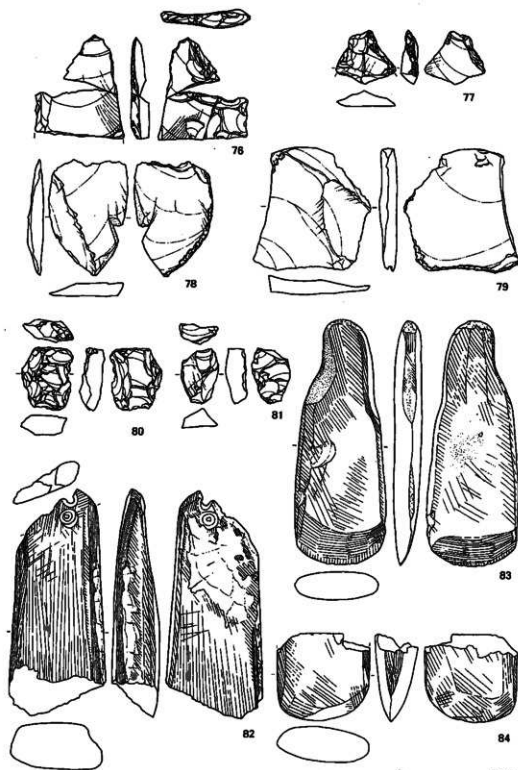
圖IV-22 出土石器(1)



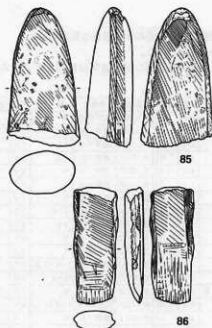
圖IV-23 出土石器(2)



圖IV-24 出土石器(3)



圖IV-25 出土石器(4)



(3) 土製品 (図IV-26-88)

中央孔の大きな耳栓である。刻線による文様が描かれ、側面は内外面ともに無文である。出土状態からは縄文時代後期のものの可能性が高い。稀府川遺跡 (北埋文 1990) では孔の小さな耳栓が出土しており、時期や側面幅に共通点がある。



図IV-26 出土石器・土製品(5)

(4) 自然遺物 (図IV-27)

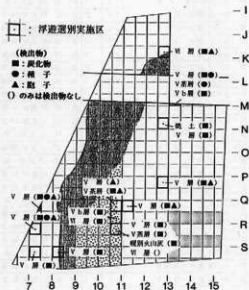
土壌の浮遊選別作業により炭化物や種子などが検出された。サンプルの土量は300cc~1000ccである。

炭化物は、1g以下の微量な土壌が多い。Q-11-a区、S-8-a区で板状の細片が多く検出されたが、他の遺物と絡まない。

種子は1mm以下の小さなものばかりで、球形、零形、3稜形のものがある。

他に谷藤川右岸遺跡 (北埋文 1990) の孢子に類似するものが、数個づつ検出されている。

(葛西智義)



図IV-27 自然遺物出土地点

表IV-4 掲載土器一覧

- 1) ドット図によって出土地点の示されている土器は、発掘区のところとその図番号を記入した。
 2) 層位のところのVK層は、崩落土の可能性が考えられる土層である。
 3) 点数は接合作業終了時の、同一個体の破片数である。－は同定困難な副部破片が周辺に多くみられたものである。

図番号	発掘区	層位	分類	点数	図番号	発掘区	層位	分類	点数	図番号	発掘区	層位	分類	点数
IV-11-1	IV-30	Vb~V	1 a	7	IV-14-55	IV-31	V	4 c	4	IV-17-100	IV-34-35	V	5 c	1
IV-11-2	IV-30	Vb~V	1 a	80	IV-14-56	IV-31	V	4 c	—	IV-17-104	IV-34	VK	5 c	41
IV-11-3	IV-30	Vb~V	1 a	80	IV-14-57	IV-31	V	4 c	1	IV-17-106	IV-34	VK	5 c	7
IV-11-4	IV-30	V	1 a	36	IV-14-58	IV-31	V	4 c	28	IV-17-108	IV-34	VK	5 c	1
IV-11-5	IV-30	Vb~V	1 a	81	IV-14-59	IV-31	V	4 c	4	IV-18-107	IV-36	V	5 c	49
IV-12-6	IV-30	V	1 a	1	IV-14-60	IV-31	V	4 c	3	IV-18-108	IV-33	V	5 c	1
IV-12-7	IV-30	V	1 a	36	IV-14-61	IV-31	V	4 c	1	IV-18-109	IV-36	V	5 c	1
IV-12-8	IV-30	V	1 a	9	IV-14-62	IV-31	V	4 c	3	IV-18-110	IV-34-35	I・V	5 c	4
IV-12-9	IV-30	V	1 a	1	IV-14-63	IV-31	V	4 c	1	IV-18-111	IV-34-35	Vb	5 c	2
IV-12-10	IV-30	V~V	1 a	19	IV-14-64	IV-31	V	4 c	4	IV-18-112	IV-34-35	V	5 c	2
IV-12-11	IV-30-29	I・V・V基	1 a	103	IV-14-65	IV-31	VK	4 c	43	IV-18-113	IV-34-35	V	5 c	19
IV-12-12	IV-30	V	1 a	1	IV-14-66	IV-31	V	4 c	5	IV-18-114	IV-36	I・V・V基	5 c	16
IV-12-13	IV-30	V~V	1 a	26	IV-14-67	IV-31	V	4 c	3	IV-18-115	IV-36	I・V	5 c	16
IV-12-14	IV-30	V	1 a	1	IV-15-68	IV-36	I・V・V基	5 c	1	IV-18-116	IV-34-35	V	5 c	130
IV-12-15	IV-30	V	1 a	20	IV-15-69	IV-36	V	5 c	3	IV-18-117	IV-34-35	I・V・Vb	5 c	23
IV-12-16	IV-30	V	1 a	1	IV-15-70	IV-36	V	5 c	6	IV-18-118	IV-36	V	5 c	8
IV-12-17	IV-30	V	1 a	1	IV-15-71	IV-36	V	5 c	11	IV-18-119	IV-36	V	5 c	8
IV-12-18	IV-30	V	1 a	1	IV-15-72	IV-36	V~Vb	5 c	54	IV-18-120	IV-34-35	V	5 c	1
IV-12-19	IV-30	V	1 a	3	IV-15-73	IV-36	I・V	5 c	16	IV-18-121	IV-36	V	5 c	3
IV-12-20	IV-30	V	1 a	5	IV-15-74	IV-31	V	5 c	61	IV-18-122	IV-34-35	V	5 c	1
IV-12-21	IV-30	VK~V	1 a	13	IV-16-75	IV-32	I・V	5 c	9	IV-18-123	IV-34-35	V	5 c	10
IV-12-22	IV-30	I・V	1 a	16	IV-16-76	IV-32	V	5 c	1	IV-18-124	IV-34-35	I・V	5 c	2
IV-12-23	IV-30	I	1 a	1	IV-16-77	IV-32	V	5 c	1	IV-18-125	IV-34-35	V	5 c	9
IV-12-24	IV-30	V	1 a	1	IV-16-78	IV-32	V	5 c	1	IV-18-126	IV-34-35	V	5 c	1
IV-12-25	IV-30	V~V	1 a	78	IV-16-79	IV-32	V	5 c	3	IV-18-127	IV-36	V	5 c	6
IV-12-26	IV-31	V	3 b	7	IV-16-80	IV-32	V	5 c	1	IV-18-128	IV-34-35	I・V	5 c	17
IV-12-27	IV-12-b	V	3 b	1	IV-16-81	IV-32	I	5 c	2	IV-18-129	IV-34-35	V	5 c	2
IV-12-28	IV-8-c	V	3 b	8	IV-16-82	IV-32	V	5 c	27	IV-18-130	IV-31	V	5 c	2
IV-12-29	IV-9-a	V	3 b	1	IV-16-83	IV-32	V	5 c	1	IV-18-131	IV-34-35	V	5 c	2
IV-14-30	IV-31	VK	4 c	27	IV-16-84	IV-32	V	5 c	2	IV-18-132	IV-34-35	V	5 c	17
IV-14-31	IV-31	V	4 c	1	IV-16-85	IV-34-35	V	5 c	3	IV-18-133	IV-36	I	5 c	1
IV-14-32	IV-31	V	4 c	1	IV-16-86	IV-34-35	V	5 c	4	IV-18-134	IV-33	Vb	5 c	1
IV-14-33	IV-31	V	4 c	1	IV-16-87	IV-34-35	V	5 c	8	IV-18-135	IV-33-36	I・V	5 c	6
IV-14-34	IV-31	V	4 c	10	IV-16-88	IV-34-35	V	5 c	5	IV-18-136	IV-34-35	V	5 c	1
IV-14-35	IV-31	V	4 c	5	IV-16-89	IV-34-35	V	5 c	1	IV-18-137	IV-34-35	V	5 c	1
IV-14-36	IV-31	V	4 c	7	IV-16-90	IV-34-35	V	5 c	1	IV-18-138	IV-34-35	V	5 c	1
IV-14-37	IV-31	V	4 c	2	IV-16-91	IV-34-35	V	5 c	1	IV-18-139	IV-36	V	5 c	1
IV-14-38	IV-31	V	4 c	8	IV-16-92	IV-34-35	V	5 c	4	IV-18-140	IV-33	V	5 c	11
IV-14-39	IV-31	V	4 c	—	IV-17-93	IV-36	V	5 c	13	IV-18-141	IV-34-35	V	5 c	5
IV-14-40	IV-31	V	4 c	5	IV-17-94	IV-34-35	I・V	5 c	7	IV-18-142	IV-36	V	5 c	9
IV-14-41	IV-31	V	4 c	1	IV-17-95	IV-36	V	5 c	1	IV-18-143	IV-34-35	V	5 c	1
IV-14-42	IV-31	V	4 c	344	IV-17-96	IV-34-35	V	5 c	1	IV-18-144	IV-34-35	V	5 c	1
IV-14-43	IV-31	VK	4 c	14	IV-17-97	IV-34-35	V	5 c	15	IV-18-145	IV-36	V	5 c	1
IV-14-44	IV-31	V	4 c	1	IV-17-98	IV-36	V	5 c	63	IV-18-146	IV-36	V・V基	5 c	26
IV-14-45	IV-31	V	4 c	33	IV-17-99	IV-34-35	V	5 c	15	IV-20-147	IV-31	V	6 b	1
IV-14-46	IV-31	V	4 c	23	IV-17-100	IV-34-35	V	5 c	15	IV-20-148	IV-31	V	6 b	1
IV-14-47	IV-31	VK	4 c	4	IV-17-101	IV-34-35	V	5 c	13	IV-20-149	IV-31	V	6 b	1
IV-14-48	IV-31	V	4 c	3	IV-17-102	IV-34-35	V	5 c	4	IV-20-150	IV-31	V	6 b	6
IV-14-49	IV-31	V	4 c	1	IV-17-103	IV-34-35	V	5 c	1	IV-20-151	IV-31	V	6 b	2
IV-14-50	IV-31	V	4 c	3	IV-17-104	IV-34-35	V	5 c	1	IV-20-152	IV-11-c	V	6 c	1
IV-14-51	IV-31	V	4 c	14	IV-17-105	IV-34-35	V	5 c	1	IV-20-153	IV-9-a+d	V	6 c	6

表IV-5 掲載石器・土製品一覧

() は、現存値

発掘番号	発掘区	遺物番号	器種	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石材	形位	備考
IV-22-1	P-6-a	2	石鏃	(1.9) × 0.9 × 0.25	(0.4)	黒曜石	VK	
IV-22-2	R-7-b	228	"	(7.5 × 7.5 × 0.15)	(0.2)	"	V	
IV-22-3	M-14-c	79	"	(1.5) × 0.8 × 0.23	(0.3)	"	"	
IV-22-4	N-13-a	8	"	(2.25) × 1.0 × 0.25	(0.5)	"	"	
IV-22-5	R-6-c	133	"	(2.4 × 1.4 × 0.2)	(0.6)	"	VK	
IV-22-6	O-13-a	23	"	(2.0) × 1.2 × 0.2	(0.5)	頁岩	V	
IV-22-7	M-11-d	1	"	3.8 × 1.4 × 0.6	2.2	黒曜石	VI	
IV-22-8	M-14-d	1	"	3.9 × 1.3 × 0.3	1.4	頁岩	V	
IV-22-9	R-6-c	101	"	2.0 × (1.6) × 0.3	(0.8)	黒曜石	"	
IV-22-10	R-9-c	7	"	2.2 × 1.9 × 0.2	0.8	"	Vb	
IV-22-11	Q-11-d	1	"	(1.4) × 2.0 × 0.4	(0.9)	"	V	
IV-22-12	K-10-c	3	"	1.1 × 1.1 × 0.3	0.3	"	VK	
IV-22-13	R-7-a	41	"	1.9 × 1.5 × 0.6	0.9	"	V	
IV-22-14	R-6-d	38	"	(1.9) × 1.8 × 0.4	(1.1)	頁岩	"	
IV-22-15	S-7-a	48	"	(1.6 × 1.5) × 0.4	(0.4)	"	"	
IV-22-16	R-7-b	8	"	2.4 × (1.7) × 0.4	(1.0)	"	"	接合
IV-22-17	R-7-b	90	"	(2.3 × 1.7 × 0.3)	(0.6)	"	"	
IV-22-18	S-7-b	15	"	2.2 × 1.7 × 0.4	0.8	黒曜石	"	
IV-22-19	R-6-d	4	"	(1.3 × 1.9) × 0.4	(0.6)	頁岩	"	
IV-22-20	R-6-d	7	"	(1.6) × 1.8 × 0.3	(0.6)	"	"	
IV-22-21	R-7-c	41	"	(1.8) × 1.4 × 0.4	(0.5)	黒曜石	"	
IV-22-22	M-14-c	71	"	2.9 × 1.6 × 0.4	1.4	頁岩	"	
IV-22-23	S-6-d	5	"	4.2 × 1.8 × 0.6	2.9	黒曜石	"	
IV-22-24	K-10-c	1	"	(2.1) × 1.4 × 0.6	(1.0)	"	VK	
IV-22-25	I-12-d	1	"	2.0 × 1.0 × 0.4	0.6	"	V	
IV-22-26	S-10-a	1	"	3.4 × 1.6 × 0.4	1.8	"	"	
IV-22-27	Q-10-c	4	"	(3.25) × 1.6 × 0.35	(1.9)	"	Vb	
IV-22-28	R-6-c	40	"	(2.25 × 1.0 × 0.3)	(0.4)	"	V	
IV-22-29	S-7-b	52	"	(2.2) × 1.3 × 0.45	(0.8)	頁岩	"	
IV-22-30	J-12-b	1	"	2.6 × 1.0 × 0.4	0.6	黒曜石	VK	
IV-22-31	S-7-b	4	"	(2.75) × 1.25 × 0.4	(1.2)	頁岩	V	
IV-22-32	J-11-b	1	"	(2.3) × 1.1 × 0.3	(0.6)	黒曜石	VK	
IV-22-33	Q-8-b	8	"	(1.9) × 1.0 × 0.3	(0.4)	"	V	
IV-22-34	M-13-b	20	"	(2.0) × 1.0 × 0.4	(0.5)	"	"	
IV-22-35	M-14-c	36	"	(2.0) × 1.0 × 0.3	(0.6)	"	"	
IV-22-36	P-8-b	1	"	(1.7) × 1.0 × 0.4	(0.6)	"	VK	
IV-22-37	S-7-c	2	"	(1.5) × 0.9 × 0.3	(0.3)	"	V	
IV-22-38	R-9-a	3	"	2.4 × 1.2 × 0.3	0.5	"	"	
IV-22-39	I-12-b	2	"	2.7 × 1.5 × 0.5	1.3	頁岩	VK	
IV-22-40	M-12-d	60	"	(2.6) × 1.3 × 0.4	(0.8)	黒曜石	V系	
IV-22-41	R-7-c	34	"	(2.5) × 1.5 × 0.3	(0.6)	"	V	
IV-22-42	R-8-b	5	"	3.4 × (2.0) × 0.5	(1.9)	頁岩	"	
IV-22-43	K-11-a	1	"	2.8 × 1.5 × 0.4	1.2	黒曜石	VK	
IV-22-44	S-8-a	-	"	2.1 × 1.2 × 0.4	0.7	"		C調査

標記番号	発掘区	遺物番号	器種	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石材	部位	備考
IV-22-45	R-7-c	46	石鏃	(1.9) × 1.1 × 0.4	(0.5)	黒曜石	V	
IV-22-46	Q-10-d	2	"	(3.6) × 1.6 × 0.5	(2.0)	"	"	
IV-22-47	S-6-d	14	石槍	3.7 × 2.3 × 0.9	5.1	"	"	
IV-22-48	S-6-D	1	"	(4.8) × 2.5 × 0.7	(8.0)	"	I	
IV-22-49	R-7-a	48	"	3.5 × (2.2) × 0.7	(4.4)	"	V	
IV-22-50	S-6-D	7	"	(2.95 × 2.95 × 0.85)	(4.6)	"	"	
IV-22-51	R-7-a	53	石鏃	2.0 × (1.5) × 0.5	(0.8)	頁岩	"	
IV-22-52	M-13-b	24	"	2.5 × 1.3 × 0.4	0.9	"	"	
IV-23-53	R-7-a	33	ナイフ	(7.1) × 3.2 × 0.95	(23.9)	"	"	被熱
IV-23-54	K-10-c	2	"	(7.3) × 3.6 × 1.2	(28.8)	"	VK	"
IV-23-55	R-7-a	44	"	(45.5 × 30.5 × 0.85)	(11.4)	"	V	"
IV-23-56	R-6-c	110	"	(5.3 × 2.3 × 0.9)	(7.7)	"	"	
IV-23-57	R-6-d	88	"	(3.3 × 3.0 × 0.9)	(13.4)	"	"	
IV-23-58	Q-7-c	1	つまみ付 ナイフ	3.4 × 4.9 × 1.0	10.4	"	"	
IV-23-59	R-7-b	187	スクレイパー	(4.3) × 1.8 × 0.7	(4.9)	"	"	
IV-23-60	R-7-b	47	"	5.1 × 2.2 × 0.7	7.9	黒曜石	"	
IV-23-61	Q-9-c	1	"	7.5 × 3.3 × 1.2	24.3	"	"	
IV-23-62	R-9-a	1	"	(4.5 × 2.9) × 0.7	(11.2)	"	"	
IV-23-63	M-13-c	14	"	6.2 × 2.3 × 0.9	15.3	頁岩	"	
IV-23-64	O-13-a	26	"	5.8 × 2.9 × 1.0	7.7	"	"	
IV-23-65	L-12-c	22	"	7.8 × 3.8 × 1.5	36.6	"	VK	
IV-23-66	N-14-b	23	"	8.0 × 3.4 × 1.6	23.6	"	V	
IV-24-67	Q-7-a	7	"	5.8 × 3.2 × 1.6	16.1	"	"	
IV-24-68	N-14-b	9	"	5.5 × 3.0 × 1.2	13.5	"	"	
IV-24-69	O-14-a	31	"	5.3 × 4.8 × 1.0	15.7	"	"	焼土中
IV-24-70	Q-7-c	25	"	5.9 × 4.8 × 0.8	12.0	"	"	
IV-24-71	M-13-d	9	"	8.2 × 5.8 × 2.0	77.9	"	"	
IV-24-72	M-12-a	20	"	4.3 × 2.9 × 0.6	4.8	"	VI	
IV-24-73	N-14-b	72	"	12.3 × 7.9 × 2.6	165.1	"	V	
IV-24-74	M-13-a	48	"	7.0 × 4.3 × 1.3	21.6	"	V茶	
IV-24-75	S-7-d	13	"	4.4 × 5.4 × 1.0	15.6	"	"	
IV-25-76	N-14-b	77	"	5.8 × 3.1 × 0.8 4.7 × 2.6 × 0.7	4.0 11.6	黒曜石	"	接合
IV-25-77	O-13-d	12	"	(2.8 × 3.2 × 0.9)	(5.2)	"	"	
IV-25-78	M-13-d	12	"	6.1 × 4.3 × 0.8	20.3	玄武岩	"	
IV-25-79	N-14-c	12	"	6.5 × 6.2 × 1.0	36.2	"	"	
IV-25-80	N-6-d	19	石槍	3.3 × 3.1 × 1.2	12.7	頁岩	"	
IV-25-81	R-6-d	1	"	2.9 × 2.0 × 1.1	5.0	"	"	
IV-25-82	N-12-d	10	石斧	(13.1 × 5.1 × 2.6)	(191.4)	蛇紋岩	VI	
IV-25-83	M-12-a	22	"	13.0 × 4.9 × 1.5	147.9	緑色泥岩	"	
IV-25-84	Q-10-b	1	"	(4.7 × 4.9 × 2.4)	(74.0)	"	V茶	
IV-26-85	M-12-b	40	"	(7.3 × 4.0 × 2.5)	(97.3)	泥岩?	V	
IV-26-86	P-11-d	7	"	(6.2 × 2.4 × 1.0)	(26.3)	蛇紋岩	"	
IV-26-87	R-7-a	46	"	14.5 × 2.9 × 1.7	135.5	緑色泥岩	"	接合
IV-26-88	R-7-b	109	土製品	(2.6 × 0.95) × 1.8	(5.0)	"	V	

4 まとめ

(1) 土器

本遺跡では、I層出土のものや小破片を除き、遺物の出土位置を単点で記録した。これに基づき、土器のドットマップを作成したところ、いくつか興味深い分布状況が見出された。ここでは、この分布に関する知見と土器の編年的位置付けについて、述べることにする。

はじめに図の説明をしておく。縮尺すると点が重なって区別されそうにもない遺物はひとつにまとめており、ドットマップの点は出土数まで示すものではない。線で括ったり、つないでいるものは同一個体である。ただし、括られた中に他の土器片が含まれていることもある。ドットマップとともに、3章で図示した主な土器を再掲載しているが、アルファベットをふった、それ以外の土器も加えている。これらは文様を重視したため、底部を除き、断面図は省いた。スケールは新たに掲載した土器のもので、再掲載の土器は任意に縮小している。

縄文時代早期（図IV-28～30）

a類とb類とがある。前者は沢の南側から多く出土し、北側にも分布している。b類は沢南側にのみ分布するが、a類の分布と重ならない。概別黄褐色火山灰の残存していたO-13区では、その上位から出土した。

a類は大きく沢南側のM～P-11～15区に分布するものと、Qライン以西に点在するものとに分けられる。前者は押し引き文のある土器から苫小牧市有珠川2遺跡ⅢB層出土の土器に相当するとしたものである。このグループの分布（図IV-28・29）をみると、押し引き文、条痕文、無文の順に沢から離れる傾向がある。分布の重なる土器では、数cmではあるが、10より13が、22より14が上位から出土した。Aと21にレベル差はみられなかった。

押し引き文のある土器は道南部から日高沿岸までの広い範囲に見つかっているが、地文的なものや描かれた図象の不明確なものが多い。この点から、図象の描かれている本遺跡の資料を有珠川2遺跡の土器と対比したが、本遺跡の押し引き文は鳴川式にみられる波状や山形の沈線に、有珠川2遺跡のそれはノグッパI式にみられる斜の筋違いの沈線に類似する。また、有珠川2遺跡で出土している突起のある無文土器や口縁部に貫通孔のある土器は、本遺跡にはみられない。11に貫通孔があるが、胴部であり、例外的なものと思われる。こうしてみると、本遺跡の土器と有珠川2遺跡ⅢB層出土の土器とでは、施文法の共通性はあるものの、時間差があると考えられる。条痕文や無文の土器は時間差を想定できる出土状態であるが、型式を違えての時間差であるかどうかかわからない。これについては後述する。

Qライン以西に点在するものには鳴川式(1)、曉式(7～9)、ノグッパI式(6)に相当するものがあり、それぞれ単独で出土している状態である（図IV-29・30）。

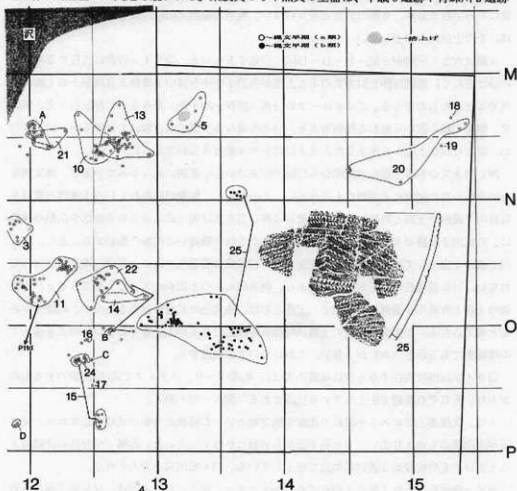
1は、文様帯上下にある小波状の沈線や無文地といった特徴から鳴川式に対比される。文様帯が道南部のものより広い。Vb層下面からVI層にかけて出土した。近隣で小波状の沈線のある土器は白老町虎杖浜3遺跡C地点で出土している。23も鳴川式と考えられる。

曉式の特徴をもった土器は3個体のものがまとまって出土した。1同様、Vb層下面からVI

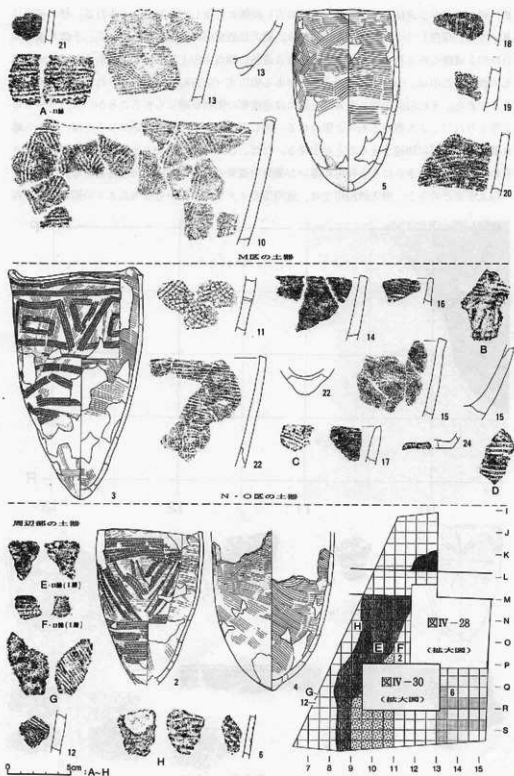
層にかけて出土した。7にみられる口縁内面の縄圧痕は帯広市八千代A遺跡第1地点・住居2出土の土器にもみられる。八千代A遺跡の土器には絡条体圧痕があり、晩式の中では、新しい段階のものと考えられている(北沢 1990)。底面にホタテの背圧痕のある土器は、道南部では函館市中野A遺跡に報告例がある。

ノダップI式は沢から離れたQ-13-d区から出土した。周囲に他の遺物はなく、これといった知見もない。爪形文のみをとれば、近隣では、登別市千歳6遺跡に数例がある。

a類は以上の4つに分けられる。周辺の遺跡も参考として、これらの関係を考えてみたい。本遺跡のノダップI式は1点のみの出土で、土器の特徴や分布からも他の3者との関連を窺えない。押し引き文土器には1にみられる沈線を押引きに置き換えたような文様がある。この点から、1の鳴川式に対比した土器と2・3のような押し引き文土器には共存関係が感じられる。離れてはいるが、最も沢へりに分布する点は共通している。また、鳴川式は中野遺跡Ⅲ群土器に近い位置が考えられている(久保 1984)。3にみられる三角や台形のモチーフには中野遺跡Ⅲ群土器との関連も窺われる。条痕文のみや無文の土器は、千歳6遺跡や有珠川2遺跡



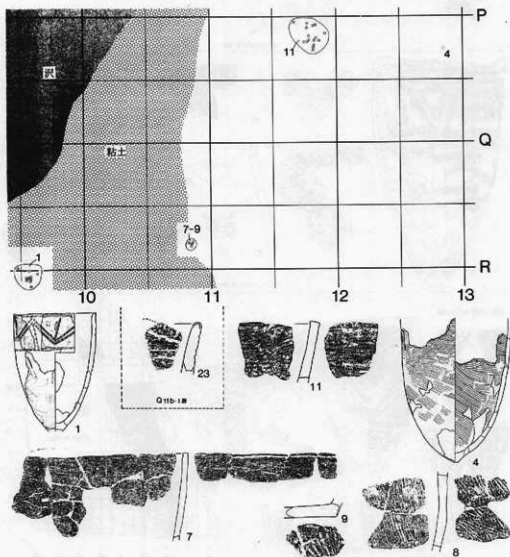
図IV-28 I群土器の分布(1)



図IV-29 I 群土器の分布(2)

ⅢB層、虎杖浜3遺跡A地点など、a類の古い段階にも新しい段階にもみられる。量の多少はあっても、存在しつづけていたと思われる。晩式は道東部に分布の中心がある。千歳6遺跡や有珠川2遺跡にみられず、本遺跡や虎杖浜3遺跡C地点で出土していることから、噴火湾沿岸部に波及したのは、小波状の沈線の土器がある鳴川式（住吉町式）に対比される頃と考えられそうである。それ以前の押し引き文土器には道南部の影響が感じられることから、1～3の土器よりはいくぶん遅れるものと思われる。押し引き文と1の分布関係にならえば、沢から離れる無文の土器に関連させることが出来る。ただ、O-12区の無文の土器は中、小型の土器と思われ、土器の大きさによる利用の違いが廃棄や遺棄の違いとなった可能性もある。

以上をまとめると、噴火湾沿岸では、道南部のノダップI式から鳴川式までの間、沈線を押



図Ⅳ-30 I群土器の分布(3)

し引きに置き換えた土器があり、これに条痕文や無文のものが混じる。その後、道東部の影響（晩式）が強まり、上坂式やアルトリ式となっていく。本遺跡のA類土器は6を除き、鳴川式に一部平行し、上坂式・アルトリ式までの間に位置付けられる。道東の晩式の新しい段階のものと、ほぼ並行関係にある。

追加した土器の補足説明をしておく。Aは摩滅した押し引き文の土器で、口唇断面は平坦である。Bは条痕がかすかに残る底部付近の破片。C・D・Fは押し引き文、E・G・Hは無文のものである。E・Fともに口唇断面は平坦である。

縄文時代中期の土器

出土点数が少なく、ドットマップは作成しなかった。27を除いて、沢の北側から出土している。27は晩期の土器に混じる状態であった。複節縄文から天神山式としたもの(28)と大木系土器(29)は沢北側の東寄り出土した。

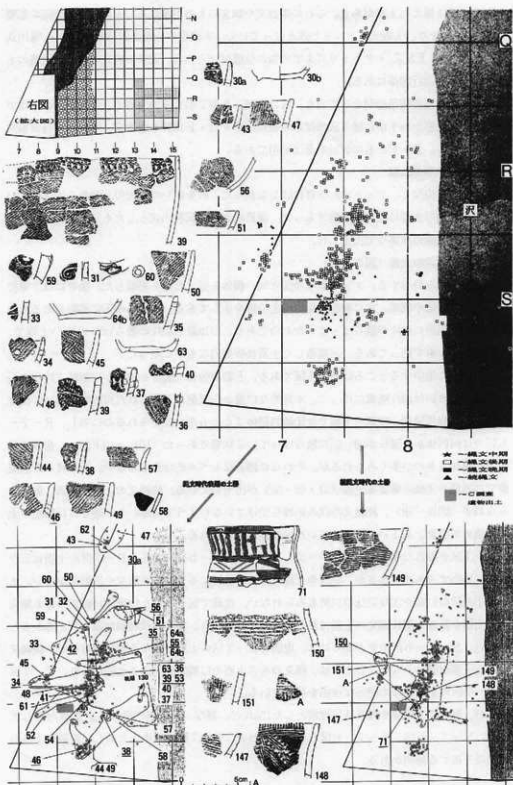
縄文時代後期の土器 (図IV-31)

沢北側のみ分布する。ドットのみ図と同一個体を括った図を掲載した。後者には3章で図示した口縁部や底部、主な胴部破片の出土位置を示してある。土器№の下に傍線のあるものは括られた範囲に破片が散らばっていたものである。42は最も破片の散らばりの広い土器で、ハネを付けた線で括ってある。再掲載した土器は特徴的なものに限った。

分布の特に集中するところはR-7区である。石器の分布(図IV-38)から統縄文時代の石器製作、あるいは剥片廃棄に伴って、本来的な位置から沢側に寄せられた可能性が高い。出土状態も縄文時代早期、晩期の土器では比較的個体ごとの分布が捉えられるのに対し、R-7-b区では何個体かの破片が同一面に散らばっている状態であった(図IV-10下図)。個体の分布でも重なるものが多くみられるが、それらに顕著なレベル差はみられない。ただR-7区東側では器種や文様の異なる土器(31・59・60)が出土している。統縄文の土器や石器、剥片はみられず(図IV-38)、統縄文時代の影響を受けていないようである。この辺りには特定の土器を集めて廃棄、あるいは遺棄していた可能性が考えられる。

R-7区と離れたまとまりが、P-7-b区やS-7-b区にある。R-7区の土器は三ツ谷式に相当するものであるが、P区の土器には三ツ谷式にみられる突瘤文や爪形文がない。また、小波状の口縁や尖り気味の口唇もみられない。沈線で区画された口縁部に刺突のある無文地の土器や乱雑な羽状縄文の土器は新しいものと考えられ、縄文時代晩期初頭と言えるかもしれない。S-7-b区のものには、東側でR-7区の土器と重なる個体があるが、統縄文時代の土器が混じらない。ここでは、縄文のみの土器や口唇断面の尖る土器があり、R-7区とP-7区のものとの中間的な様相を呈している。

なお、沢へりでは56や縄文時代晩期とした130など、異なった様相の寝える土器が出土している。P-7-b区、S-7-b区のものとおわせ、R-7区の集中より新しい段階の土器が沢際に分布する傾向がある。



図IV-31 IV群C類, VI群b類土器の分布

縄文時代晩期の土器 (図IV-32~36)

沢の南側に分布している。大きくPライン西側の集中と東側の集中とに分け (図IV-21)、ドットマップを2枚、作成した。

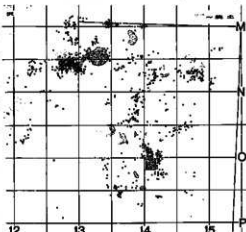
図IV-33はPライン以西のドットマップである。P-11-b区に集中している土器には、V群c類の中では、節の細かな縄文が多いこと、口縁部に沈線に限られること、口縁部と胴部との境に比較的明瞭な屈曲があること、などの特徴がみられる。この南縁に分布する土器は様相が異なり、貫通孔のあるものや無文の土器などがある。134はVb層上面から出土したもので、粘土層の堆積がこの土器以降であったことを示している。

新たに掲載した土器はA・C~Hが縄文のみ、B・Iが無文の土器である。Aには底部の破片もある。

図IV-34はPライン東側のドットマップである。個体の散らばりを加筆すると、きわめて煩雑な図となるため、点の集中するところをブロックI~Xとして、任意に括った。ブロックの呼称と位置、個体の散らばりは図IV-34下図に示した。それぞれのブロックに含まれる主な土器は図IV-35・36に掲載した。土器の出土地点は図IV-34上図に示したが、ブロック内に破片が散らばっていたものは図IV-35・36で扱った。図IV-32はV層で確認された焼土とドットマップとを重ねた図である。分布状態をみると、沢へりのブロックI~IVと沢から離れるブロックV~Xに分けられる。両者にまたがる個体もあるが、N~O-13ラインに分布の空白部がみられ、そこには焼土もない。なお、ブロック間や分布の重なる土器に、明らかなレベル差はみられなかった。

ブロックI~IV、および沢すじの土器には、沈線が口縁や頸部に限られ、工字文のみられないものが多い。これはPライン西側の土器に通ずる特徴である。口唇に刻みのある土器がみられることや無文、あるいは、無文地沈線の土器が多いことなどの共通点もある。異なる点としては、続状縄文や条痕文、縄縄文がみられること、鉢以外の器種のあることが挙げられる。

ブロックV~Xでは、ブロックVIIとブロックXとに異なった様相が窺える。両者は83を除いて、他のブロックと同一個体を共有せず、破片の広がりも少ない。ここからは蛇行沈線のある土器が出土している。本遺跡のタンネットウシ式に相当する土器は、沢から離れて分布するものが多い。ブロックXは括られた範囲外に個体が散らばっているものの、他のブロックとの共有関係はない。ここには底部破片が多い。これ以外のブロックでは個体の共有関係が強く、土器にも顕著な違いはみられない。



図IV-32 V群c類土器と焼土の分布

新たに掲載した土器はA～Rである。Jの上端には貼瘤がある。Mの外側、左側の白い部分は幅のある沈線で、その右側は墨がのっているが、剥落部である。貼瘤があったかどうかはわからない。内面にも幅のある沈線がある。Pは接合しない同一個体の口縁と胴部である。Qも同一個体の胴部と底部である。

本遺跡出土の縄文時代晩期の土器を、分布状態と土器の特徴からPライン東側のものとPライン以西のブロックⅠ～Ⅳ、およびブロックⅤ～Ⅹの3つに分けてみてきた。次に、これらの関係を考える。

P-11-b区の土器の特徴はすでに述べた。このうち、明瞭な屈曲のある鉢は、Ⅴ群b類土器が出土した白老町社台1遺跡や虻田町高砂遺跡、稀府川遺跡にみられ、古い様相の窺える器形である。ブロックⅠ～ⅣにはP-11-b区との関連が窺われる一方、異なる様相もみられた。ブロックⅠ～Ⅳには口縁直下が短く外反する土器が多い。P-11-b区の72もそうであるが、これが口縁から胴部にかけて丸みを帯びる土器(65)となる。ブロックⅤ～Ⅹでは、沢側のブロックⅤやⅥに器形が65に類似する土器がみられ(66・107)、貼瘤が加えられている。貼瘤は工字文のある土器に特徴的な文様でもある。ブロックⅥ・Ⅶ・Ⅹでは、工字文の土器が多くなり、器形では口縁が直立するものと外反の強まるものとがある。こうした器形や文様の推移から、P-11-b区の集中→ブロックⅠ～Ⅳ→ブロックⅤ・Ⅵ→ブロックⅥ・Ⅶ・Ⅹの順での変遷が考えらる。分布でみると、沢筋の西から東に移り、沢から離れる南側への、段階的な移動が読みとれる。季節的に、あるいは年次をあけて本遺跡を訪れるごとに、何個体かの土器を残していったものと思われる。

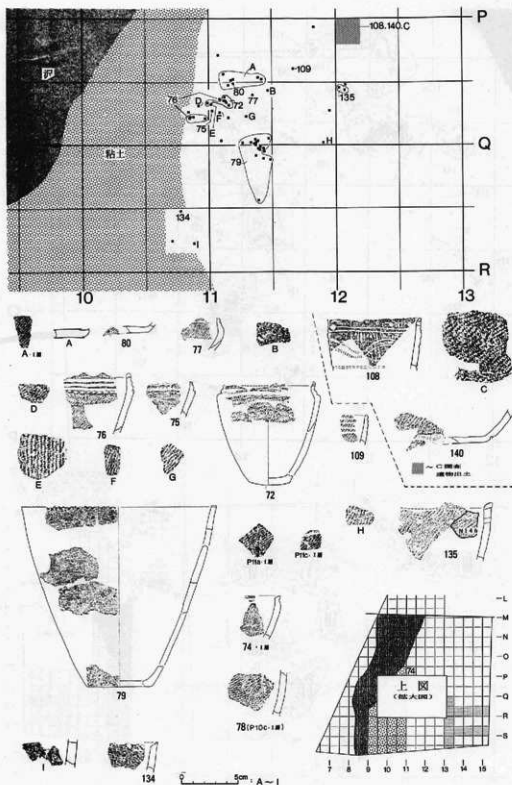
道南部との対比では、ブロックⅤ～Ⅹの土器が横位連続工字文から聖山Ⅱ式に、ブロックⅠ～Ⅳの土器が工字文と口縁縄文地に数条の沈線のある碗形土器(110)の存在から聖山Ⅰ式～Ⅱ式に相当する段階と思われる。連繫入組文はみられないものの、P-11-b区の土器はブロックⅠ～Ⅳより古手であることから聖山Ⅰ式に対比されるのであろう。道央部との対比では、ブロックⅦの127がある。器形や交差する細かな条痕では、千歳市ママチ遺跡2類(北埋文 1987)に近いものがある。127ではママチ遺跡の土器にみられる円弧文が蛇行沈線になっており、2類から3類にかけてのものであろうか。ママチ遺跡2類は聖山Ⅱ式に対比されており、先述したブロックの時期とも矛盾しない。

縄文時代の土器(図Ⅳ-31)

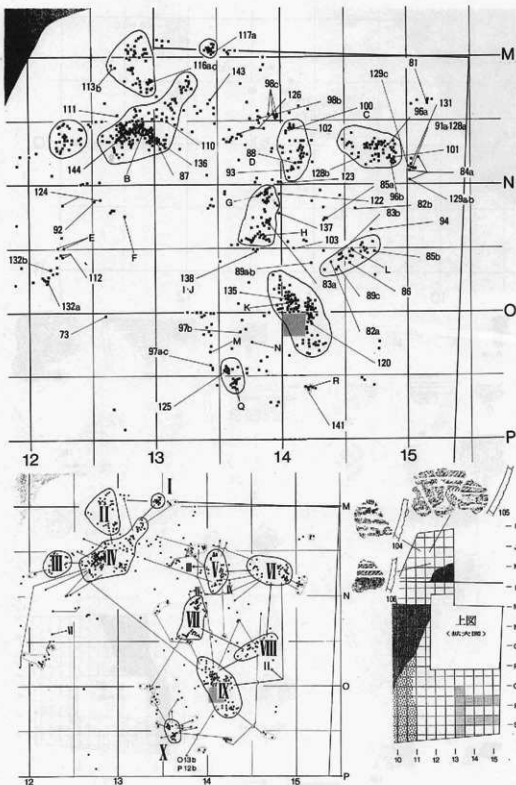
b類とc類とがある。b類は沢の南側で出土し、縄文時代後期の土器と混じる状態であった。71は、幅広の口縁部への縦走縄文と文様帯下部の連弧文からアヨロ3類a式である。他の土器も分布や土器の特徴から同じ時期のものと思われる。アヨロ遺跡の3類aに浅鉢はみられないが、瀬棚町南川遺跡5号墓(南川Ⅲ群期)から浅鉢とされる土器が出土している。

c類は出土点数が少なく、ドット図を作成しなかった。図Ⅳ-37のR-9-c区にある土器が153、図Ⅳ-21にあるM-11-c区の1点が152である。153は粘土層上位のⅤ層から出土している。

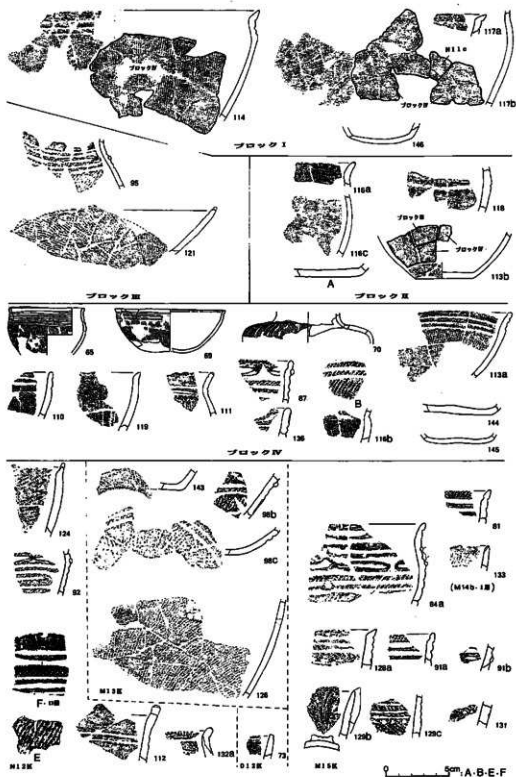
(葛西智義)



図IV-33 V群C類土器の分布(1)



図IV-34 V群C類土器の分布(2)



図IV-35 V群C類土器の分布(3)



図IV-36 V群C類土器の分布(4)

(2) 石器の出土状態

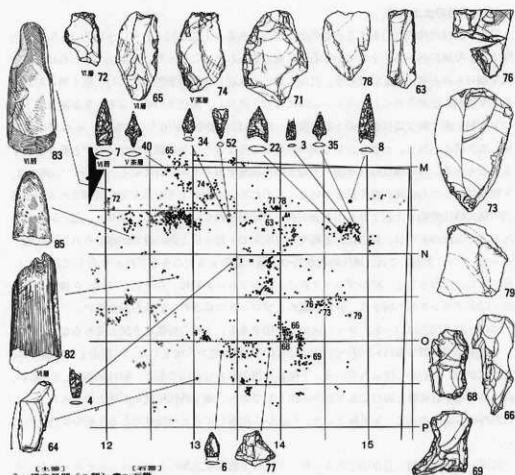
図IV-37は沢南側に分布する石器の出土地点である。上図はM～P-12～15区のものである。図では、V層以外から出土している石器に層名を入れた。このうち、VI層出土の石器は縄文時代早期のものと考えてよいだろう。沢から13ライン辺りまでの黒色土中には、粘土層に対比されるV茶層が認められる。13ライン以南になると消失し、黒色土のみとなる。V茶層は、下部のVb層上面で縄文時代晩期の土器(図IV-18-117の破片)が出土しており、それ以降に堆積したと考えられる。ただし、Vb層の薄いところではここから縄文時代早期の土器が出土することもある。74は縄文時代早期の土器と同日同層で取り上げられている。13ライン以南では、V層面にいくつもの礫が顔を見せていた。このため、遺物の上下が不安定な状態であるが、周囲の縄文時代晩期の土器よりも出土面が低いと記録されているものに、3や6、22、64、77がある。この他のものは、周辺にある縄文時代晩期の土器と出土面の違いが感じられない状態であった。“(1)土器”では、縄文時代晩期の土器の集中するところをブロックとして囲っている。それと合わせると、85がブロックIVに、35がブロックVIに、73・76がブロックVIIに、66・68・69がブロックIXに属する。沢から離れたブロックに残されている石器が多い。

図IV-37下図左はQ～S-9～11区の分布図である。土層の時期は上図と変わらない。10はVb層下位でI群a類(1)と同一面、26・27はVb層中位から出土した。V層出土の石器では、61と62が同一母岩から作られている。下図右は周辺部の分布図である。86はV層出土であるが、近くにあるI群a類土器(11)もV層から出土しており、縄文時代早期の石斧と考えられる。これ以外のものはすべて、VK層とした、斜面から崩落してきた可能性のある土層中に含まれていた。

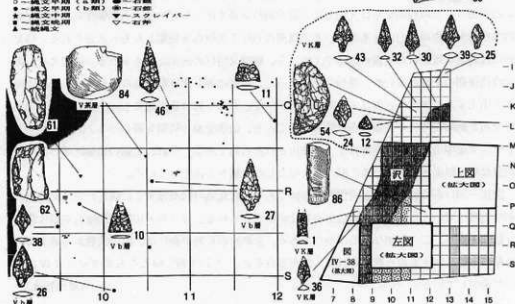
図IV-38は沢北側の分布図である。R-7区の土器集中北側に土器のほとんどみられないところがあり、その周囲からは欠損した石器や剥片が多く出土している。石器製作のための足場的な空間が遺物の空白部にあたり、その周囲に剥片や失敗作を廃棄したものと思われる。時期的には周囲に残された石器の形態や土器から、続縄文時代の所産と考えられる。周辺には、縄文時代後期の土器が多いが、整地などによって、沢側に押し出されたものであろう。この周囲から出土する特徴的な石器は三角形鎌やナイフで、これらには頁岩製のものが多い。頁岩の剥片分布と続縄文時代の土器分布が類似することも、遺物廃棄の時期を窺わせる。51は、フレイクチップ集中の土壌水洗作業によって検出された石錐である。なお、北側の発掘区域外は比較的急な登り斜面となっている。67はVK層とした土層から出土している。

図IV-39は石質別の剥片と石器の分布図である。沢北側の状況はすでに触れたが、沢南側の剥片と較べて、ここには2cm以上の剥片が多くみられる。R-9・10区の黒曜石の剥片集中は数点を除き、ごく微細なものばかりである。玄武岩の石器や剥片は、出土状態から縄文時代晩期の土器に伴うものと判断される。分布をみると、“(1)土器”のところのブロックIVに剥片が集中している。

(葛西智義)



- 縄文早期 (a期) ●—石鏡
 ●—縄文早期 (b期) ●—石鏡
 ●—縄文中期 ▲—スクレイパー
 ●—縄文晩期 ▼—石斧
 ▲—縄文文



図IV-37 石器の分布(1)

(3) 石 器

本遺跡では石器が少なく、多時期にわたっており、石器組成や石材組成の特徴は説明しがたい。そのため、個別のものについていくつか述べるにとどめておく。

図IV-22-1～5の石鏃はその特徴から縄文時代早期のものと思われる。このうち、1は基部の端をわずかにつまみ出すように仕上げられており、このような形態の基部を持つものは銅路市材木町5遺跡や 桜ヶ丘2遺跡、帯広市八千代A遺跡、苫小牧市有珠川2遺跡、白老町虎杖浜3遺跡、函館市中野B遺跡などの早期前半の土器が出土した遺跡において少数ながら認められ、当該期の可能性が高い。本遺跡においても貝殻文尖底土器や底部に帆立貝匠痕を有する条痕文平底土器が出土しており、これらの土器と時期を同じくするものと思われる。なお、上記の遺跡において、このような基部をもつ石鏃の形態は、本遺跡のような柳葉形の他に三角形のもの、長身で側縁が直線的なものなどがあり一様ではない。ただし、柳葉形のは道央、道南で比較的多く認められるようである。

図IV-22-10の石鏃は貝殻文尖底土器のそばから出土したものである。このように加工が丁寧で厚さの薄い三角形平基鏃は函館市中野A遺跡グループⅡで出土している。

他に早期前半の可能性のある遺物として、2点の蛇紋岩製の石斧がある。いずれも側縁はあまり研磨されておらず擦り切り後の折り取った痕跡を残している。図IV-24-82の大形の石斧には2箇所穿孔が認められる。穿孔のある石斧は、河野本道氏(河野1967)や宇田川洋氏(宇田川はか1978)が集成しているが、この他に最近では銅路市材木町5遺跡や 桜ヶ丘2遺跡、浦幌町吉野台細石器遺跡、豊頃町高木1遺跡で出土している。ただし、穿孔のあるものの多くは比較的小形の偏平の石斧で、溝状に擦り込んだ後穿孔する例も多く、本遺跡のように大形のものに直接穿孔している例は少ない。

図IV-22-13～20の平基ないしは基部の中央が浅く屈曲気味になる三角形凹基鏃はアヨロ3a類相当の土器の分布とほぼ同様に分布している。稀野川遺跡においてもアヨロ3a類相当の土器に伴って同形態のものが出土している。道南から道央部の太平洋岸においてはこの頃有茎鏃が卓越するものの、本遺跡のように無茎鏃を主体としたものが存在することは、本地域にも無茎鏃を主に製作する個人または小集団が存在したことを示していると思われる。

黒曜石のスクレイパーの中で素材面や主要剥離面といった大きな剥離面やその稜線に傷が付いているものが認められる(図IV-23-60～62、図IV-25-76)。刃部は傷が認められない新鮮な剥離面であることから、長期間剥片で保持され続けてきたものが、本遺跡または本遺跡に来る以前の比較的短時間のうちにスクレイパーに加工されたのであろう。これらは不純物のない漆黒の黒曜石である。また、素材は残っている自然面から角礫と推定できることから、道東の原産地のものと思われる。長期間剥片のままであったということは石材入手の際に原礫ではなく剥片で東の集団から得た可能性もあると思われる。

(山原敏朗)

結 語

本遺跡は、平成元年・2年度の両年にわたって調査された。遺跡の特徴は次の3点に要約される。

遺跡は、標高76～81mの扇状地から丘陵斜面低部にかけて立地する。

時期は、縄文時代早期・中期・後期・晩期・続縄文時代・縄文時代の各時期に及び。

遺構は、極めて少ない。

伊達市内の遺構は、立地の違いから、大きく二つに分けられる。河川の下流域から海岸部に位置する遺跡は、大規模な集落や貝塚などで、遺物量も多い。河川の中流域から上流域にかけての内陸部に位置する遺跡は、住居跡などの遺構が少なく、遺物量もわずかである。このような立地の違いから母村的な集落と季節的な狩猟・採集などの活動の場に分かれていたと理解できる。

本遺跡の性格は、立地からみて季節的な狩猟・採集（キャンプ・サイト）の場と考えられる。また、石鏃・スクレイパーなどの狩猟具が多く、砥石・すり石・台石などの加工具が極めて少ないことから追認出来る。

今年度の調査では、調査区を東西に貫流する沢跡が発見された。遺物はこれに沿って出土しているが、周辺に遺構がほとんどみられないことから、沢に依存する生活があったとは考えにくい。ただし、縄文時代早期の土器が、沢の傾斜面に置かれた状態で出土したことからみて、この時期にはある程度生活に結びついていたと考えられる。

両年度を通じて、多くの焼土が確認されているが、今年度の調査ではとくに多くの遺物を伴う焼土が検出された。時期は、火山灰や周囲の遺物からみて縄文時代晩期末と考えられる。調査区東側に集中しており、遺物の個体数も多いことからこの場所に土器その他を捨ててそれらを焼き払った跡とみられよう。

出土遺物は、縄文時代晩期の土器が大半を占め、次いで早期のものが多い。分布は、各時代によって異なる傾向があるが、縄文時代後期の遺物は西側調査区外に広がるものと予想される（図IV-21）。また、昨年度の調査区寄りになると希薄になっている。

昨年度の調査では、調査区南西部の牛舎川沿いから縄文時代中期の竪穴住居1基と土壇2基が発見されている。竪穴は小規模なもので、一定の居住期間はあったものの定住的なものではないとされている（北埋調61）。

遺物は、縄文時代中期（柏木川式、大安在B式並行）のものが主体を占める。これらの分布も、調査区南西部の牛舎川寄りに多く分布している。

これらのことから、両年度の調査区では、遺跡の性格は類似しているが、内容に差があることが指摘できる。

（佐藤和雄）

写真図版

図版IV-1	遺跡風景	75
図版IV-2	調査風景・土層	76
図版IV-3	土墳・焼土	77
図版IV-4	包含層出土の土器(1)	78
図版IV-5	包含層出土の土器(2)	79
図版IV-6	包含層出土の土器(3)	80
図版IV-7	包含層出土の土器(4)	81
図版IV-8	包含層出土の土器片(1)	82
図版IV-9	包含層出土の土器片(2)	83
図版IV-10	包含層出土の土器片(3)	84
図版IV-11	包含層出土の土器片(4)	85
図版IV-12	包含層出土の土器片(5)	86
図版IV-13	包含層出土の土器片(6)	87
図版IV-14	包含層出土の土器片(7)	88
図版IV-15	包含層出土の土器片(8)	89
図版IV-16	包含層出土の土器(1)	90
図版IV-17	包含層出土の土器(2)	91
図版IV-18	包含層出土の土器(3)	92

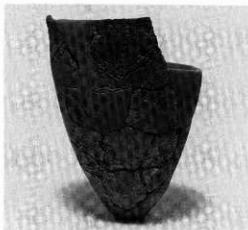
図版IV-1



1 表土除去風景（北から）



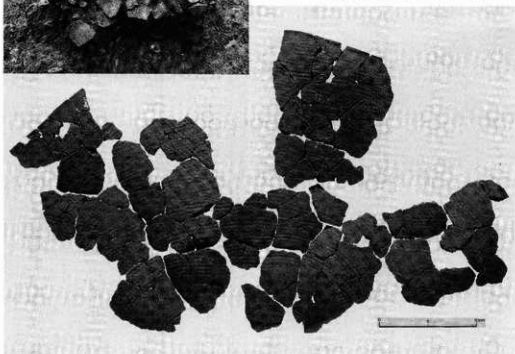
2 遺跡風景（北から）



1 I群a類土器 (図Ⅳ-11-1)



2 I群a類土器 (図Ⅳ-11-2)



3 I群a類土器 (復元前) と出土状況 (北西から)

図版IV-1



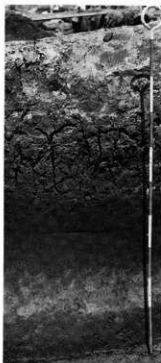
1 表土除去風景（北から）



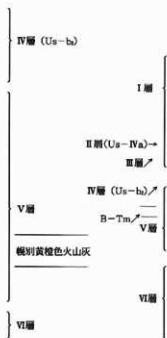
2 遺跡風景（北から）



1 N-12区周辺の調査（東から）



2 S-11-a区の土層（南東から）



3 L-13-b区の土層（北東から）

図版IV-3



1 P-1セクション (南から)



2 脂肪酸分析試料採取風景 (南から)



3 P-1完掘 (西から)



4 焼土の遺物出土状況 (1. 西から)



5 焼土の遺物出土状況 (2. 北から)

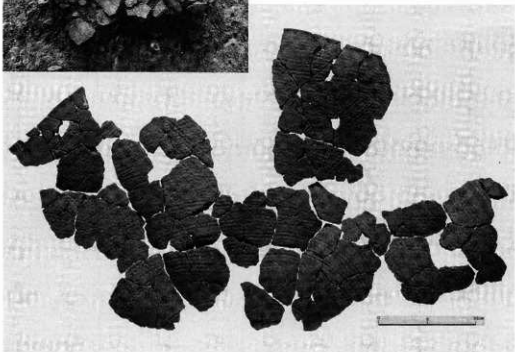
図版Ⅳ-4



1 I 群 a 類土器 (図Ⅳ-11-1)



2 I 群 a 類土器 (図Ⅳ-11-2)



3 I 群 a 類土器 (復元前) と出土状況 (北西から)

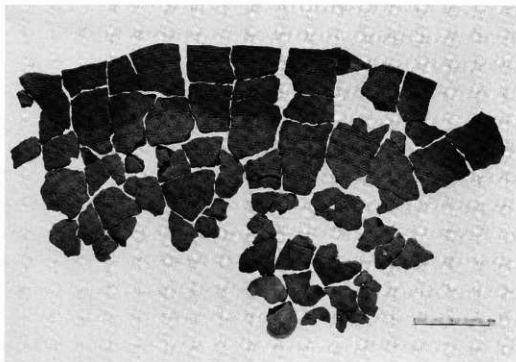
図版IV-5



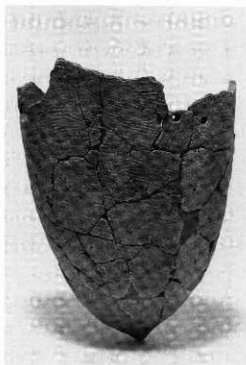
1 I群a類土器 (図IV-11-3)



2 I群a類土器の出土状況 (南から)



3 I群a類土器 (復元前)



1 I 群a類土器(図Ⅳ-11-4)



2 I 群a類土器の出土状況(東から)



3 I 群a類土器(図Ⅳ-11-5)



4 I 群a類土器の出土状況(南西から)

図版IV-7



1 V群c類土器 (図IV-15-66)



2 V群c類土器 (図IV-15-65)



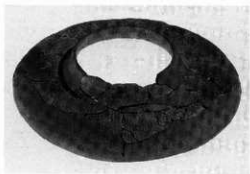
3 V群c類土器 (図IV-15-68)



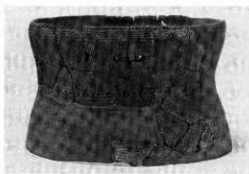
4 V群c類土器 (図IV-15-67)



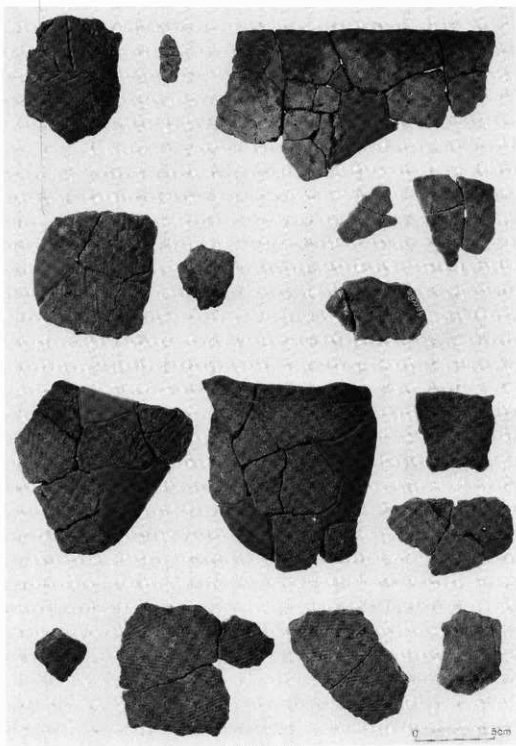
5 V群c類土器 (図IV-15-69)



6 V群c類土器 (図IV-15-70)

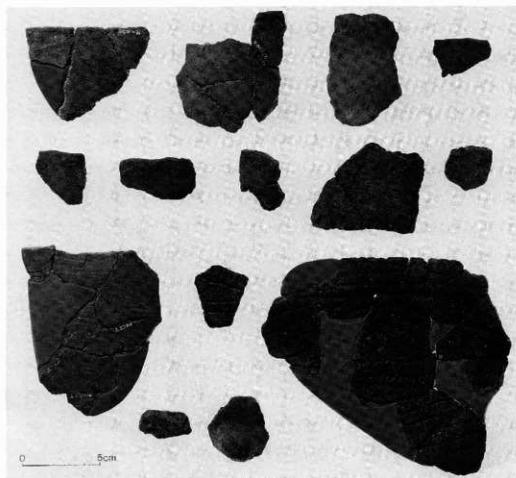


7 VI群b類土器 (図VI-15-71)

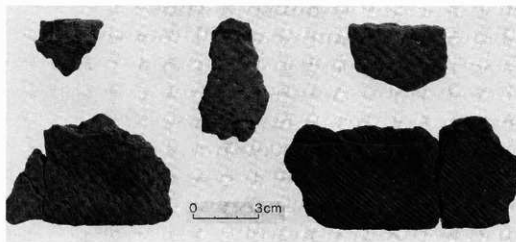


I 群 a 類土器片

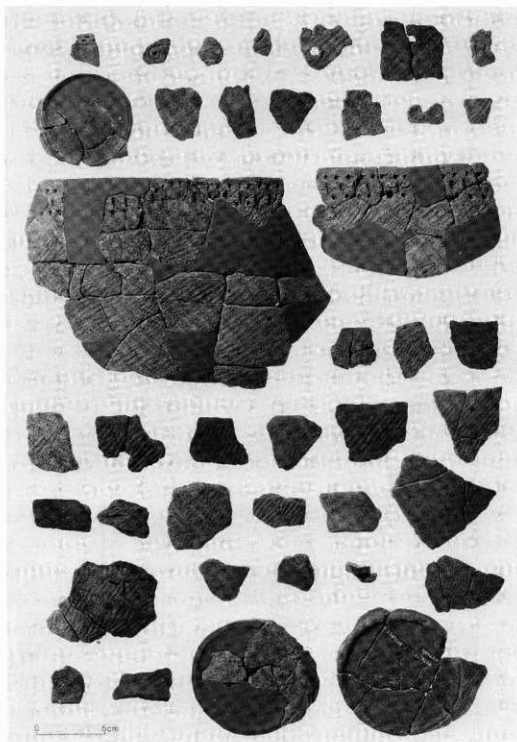
図版IV-9



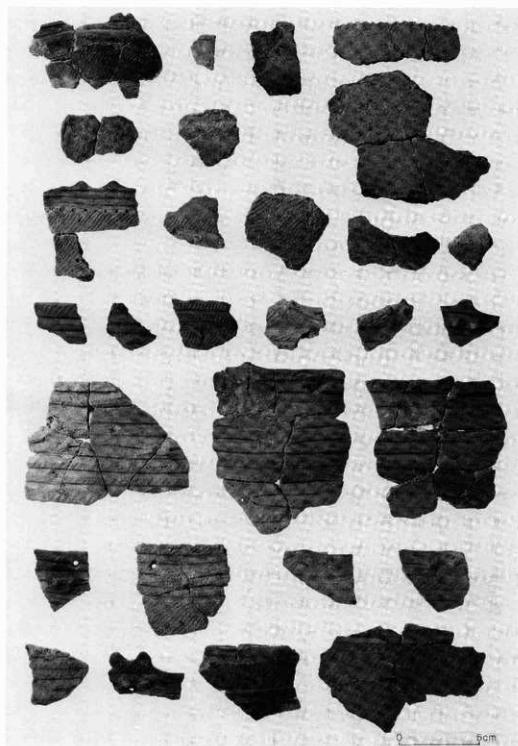
1 I群a類・b類の土器片



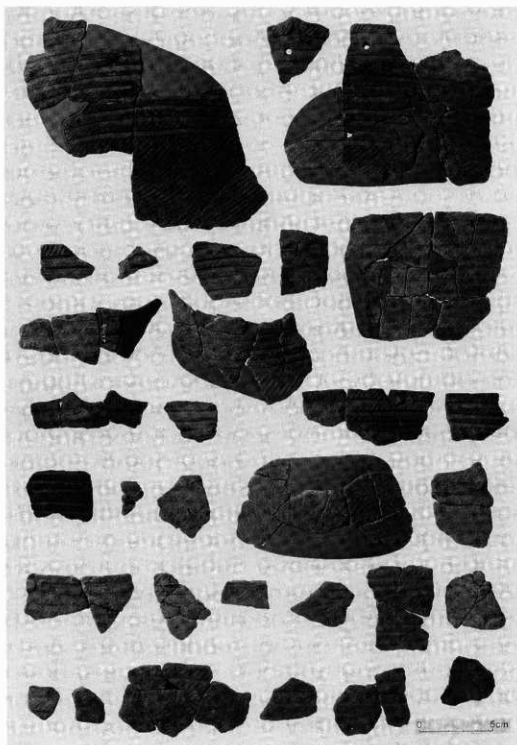
2 III群b類土器片



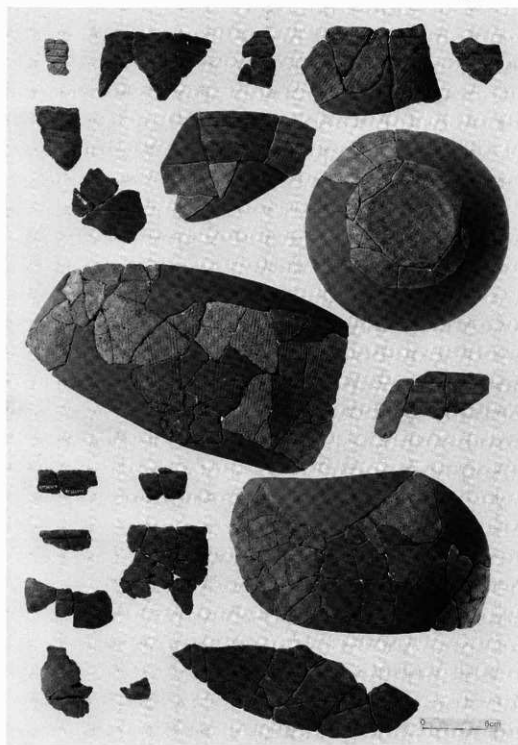
IV群c類の土器片



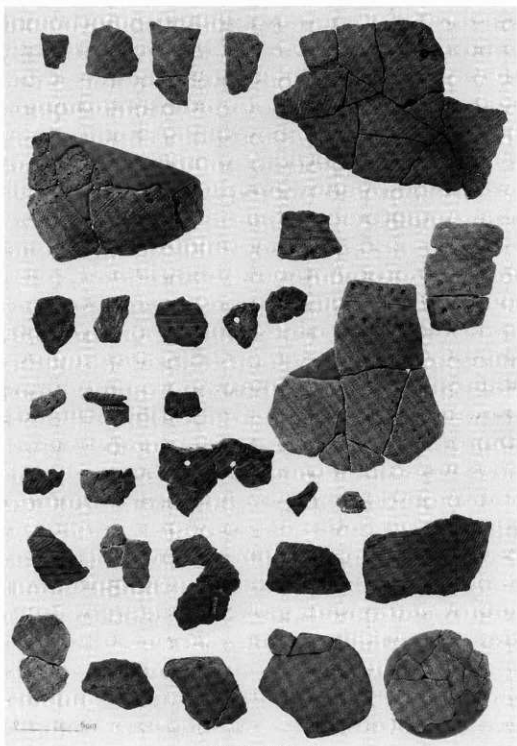
V群の土器片 (1)



V群c類の土器片 (2)

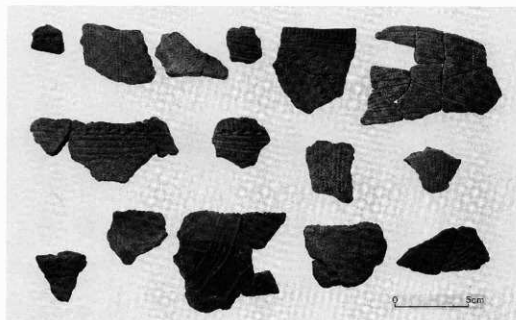


V群C類の土器片 (3)



V群C類の土器片 (4)

図版IV-15



1 VI群b類・c類の土器片



2 内面の縄圧痕 (図IV-12-7)



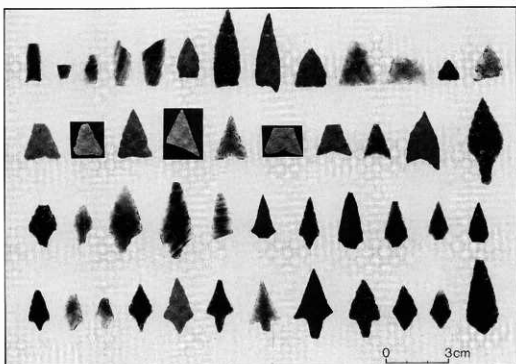
3 剥落部の縄文 (図IV-19-129)



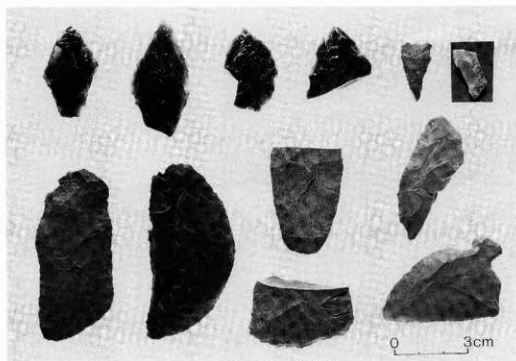
4 沈線内にある圧痕 (図IV-16-72)



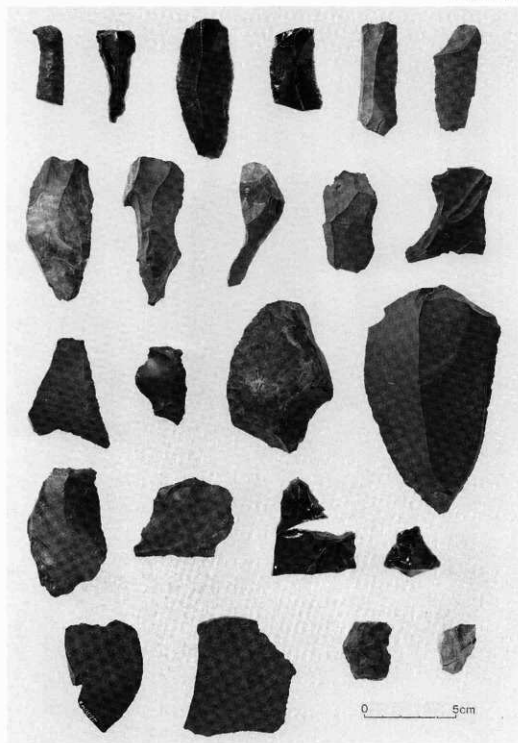
5 縄縄文 (図IV-18-114)



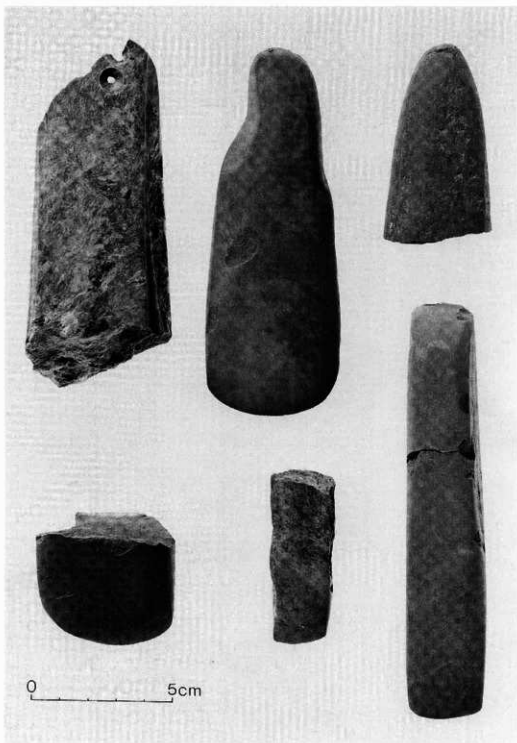
1 石鏃



2 石槍・石鏃・ナイフ類



スクレイパー・石核



石斧

V 稀府川遺跡

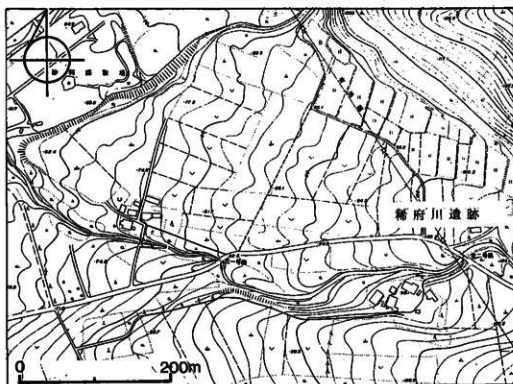
1 概 要

今年度の調査区域は稀府川の右岸から北方の丘陵裾に近い66ラインまで、東西は約150m、南北は工事用地幅の約60～80mである。稀府川左岸の調査区域全域と、右岸のうち66ライン以北及び、Mラインの西側で74～78ラインの範囲は昨年度、調査を終了した。

本遺跡は牛舎川の支流、稀府川がつくる扇状地の扇頂部に立地している。調査区は内浦湾の海岸から約2.5km内陸に入った所で、標高は94～103mある。調査区に立つと、牛舎川、稀府川の扇状地及びこれに続く緩斜面と内浦湾が眼前に広がり、晴天の日には対岸の駒ヶ岳（1,133m）や森町・八雲町の家並が眺望できる。

稀府川は鷺別岳から西へ延びる2つの尾根の間を深い谷を刻んで流れ、本遺跡付近から扇状地を形成して、調査区の約800m北西で、牛舎川に合流している。調査区北側の牛舎川と稀府川に挟まれた尾根は急傾斜だが、南側の尾根は緩やかに西へ延びている。

調査区の地形は東から西へ傾斜しているが、南北方向にもかなりの起伏がある。調査前の土地利用状況をみると北端部が水田、稀府川の右岸べりの東半部が住宅地で、その間は畑地であった。稀府川に沿って市道牛舎川通り線が走っており、工事用地内の北二号橋を渡って、ここからさらに、1kmほど続いている。調査区西側の農道は、一部調査区内を通り、北側の尾根の先



図V-1 牛舎川、稀府川合流点付近の地形

端まで延びている。また調査区内の川岸に沿って住宅地に入る小道がある。

調査区北端の水田は階段状に区画されており、元土地所有者岩倉氏の話によると昭和20年代に造成したものという。調査着手前から休耕になっていたが、今も水分が多い。北側の尾根の裾には小川が流れている。

今年度当初の予定では、66ライン以北、Dライン西側の農道の一部も調査対象範囲になっていたが、調査区北部に検出された旧河川の南側急斜面にあたり、遺構・遺物がないものと判断されたので、除外した。調査区南西端の市道牛倉通り線にかかる部分も、稀府川岸に向かって急に深くなっており、同様の理由で調査対象から除外した。これに対して、調査区南端中央の117㎡については隣接するグリッドから多量の出土遺物があったので、調査対象地区に追加した。このため、調査面積は当初計画7,740㎡であったが、最終的には7,477㎡となった。

昨年度の調査では、稀府川左岸の調査区で現稀府川にほぼ平行する旧河道跡が発見され、この両側に計6軒の竪穴住居跡が検出された。出土遺物から縄文時代後期末葉と晩期末葉の頃につくられた住居跡と考えられるが、石器や礫石が少ないこと、床面に礫が露出する例が多いこと、柱穴の規模、配列などから、いずれも定住を目的としたものではなく、狩猟や採集の拠点を目的としたものと推定された。稀府川右岸の調査区で土壌が7基、発掘されているが、近代の所産とみられる1基以外は、先史時代につくられたことは明らかなものの、その目的や詳細な時期は明らかではない。また、左岸の川べりで検出された集石遺構は、出土遺物から縄文時代晩期後半以降に構築されたものとみなされるものの性格は不明である。

また昨年度調査区の全域にわたって分布する焼土は128ヶ所を数えた。検出層位等から、主に縄文時代後期末葉と晩期末葉の頃に形成されたものと推定された。なかには、土器片、炭化種子や獣骨片を含むものもみられた。しかし、遺物を全く含まないものもなく、全てが人為的なものか否か明らかにすることはできなかった。

今年度調査区は昭和63年度に行われた事前発掘調査（試掘調査）の結果から、遺物は縄文時代早期から縄文時代に至るものがあり、しかも時期による分布傾向がみとめられるが、出土点数は昨年度調査区に比べ少ないものと予想されていた。本調査区の結果、これらのことは、ほぼ予想通りだったが、遺構が近代に入ってからのもものとみられるP-9以外、検出されなかったのは予想外であった。このことは、居住に最も適していると思われる本年度調査区中央部の高まりの部分が、畑地造成や耕作により、攪乱されていることにも関連するものと考えられる。

本年度の調査区で出土した遺物は、縄文時代早期から晩期、続縄文時代・縄文時代のものに及んでいる。遺物のうち半数以上が土器片で、縄文時代中期・後期のものが最も多い。これらの遺物は時期による分布傾向がみられる。

石器は大部分がフレイク・チップで、これらは調査区全域から出土したが、とくに旧河道跡近くでは、1000点を超える集中地点がみつまっている。

遺物の出土層位は、基本的にはV層・VI層であるが、耕作土中から発見されたものも多い。

本遺跡の基本層序は第三章-2に説明したとおりで、牛倉川右岸・谷藤川右岸の両遺跡と共

通している。しかし、昨年度調査区を含め本遺跡は、古くからの度重なる土石流によって遺物包含層が乱されており、基本層序が典型的に残る部分は少ない。

調査区は畑や水田に利用されていたため、ほぼ全域にわたって耕作されている。住宅があった所には、家の基礎や配管などのため深く攪乱されていた。農道部分や住宅へ入る道も10cmほどの厚さで砂利が敷きつめられていた。IV層のUs-b火山灰層上面までをバックホーにより除去したが、前述したように中央部には、この火山灰は一部にしか残っていない。遺物包含層はIV層とV層だが、VI層上半まで耕作が及んでいる所もあった。V層は昨年度調査区に比べるとすい。

調査区北部の河川跡には、板状の礫や角礫が厚く埋まっており、深いところでは1m以上に達した。旧河川の北岸に検出された遺物集中区付近では、VI層下に水流によって混入したものとみられるUs-b火山灰層が観察された。

旧河川内の厚い礫層は土石流によって、短期間に堆積したものと判断されるが、このほかに規模の小さい土石流跡がVI層下にも2条みつかっている。

昨年度の報告書で個別黄褐色火山灰と仮称した縄文時代早期の火山灰も一部で、VI層中下位から検出されている。旧河道跡の斜面には、これらの他、V層中に粘質の強い黒色ないし黒褐色土層が介在している。これは、昨年度調査区のうち、稀府川左岸にもみられた。

(鬼柳 彰)

表V-1 遺構一覧

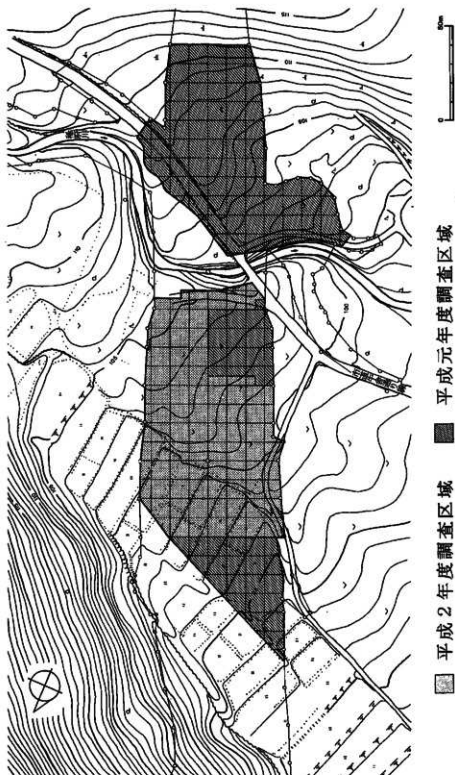
名 称	数 量	名 称	数 量
土 境	1	焼 土	14

表V-2 出土遺物一覧

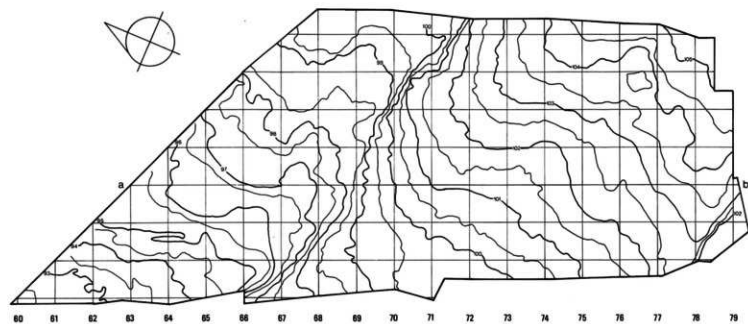
名 称	数 量	名 称	数 量
土 器 (縄文早期)	16	スクレイパー	8
(縄文前期)	380	楔形石器	8
(縄文中期)	1,927	石 斧	3
(縄文後期)	1,667	すり石	1
(縄文晩期)	1,164	石 核	1
(続 縄 文)	307	U・フレイク	5
(続 縄 文)	68	R・フレイク	28
土 器 計	5,529	フレイク	4,035
石 鏃	37	石器等計	4,131
石 槍	1	石 製 品	1
石 鏃	1	総 計	9,660
つまみ付きナイフ	3		

表V-3 焼土出土遺物一覧

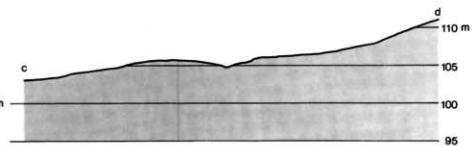
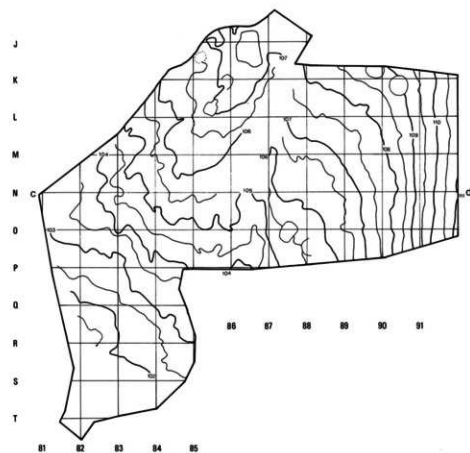
名 称	数 量	名 称	数 量
土 器 (縄文中期)	2	すり石	1
(縄文後期)	6	R・フレイク	1
(縄文晩期)	17	フレイク	3,887
石 鏃	2	総 計	3,917
石 核	1		



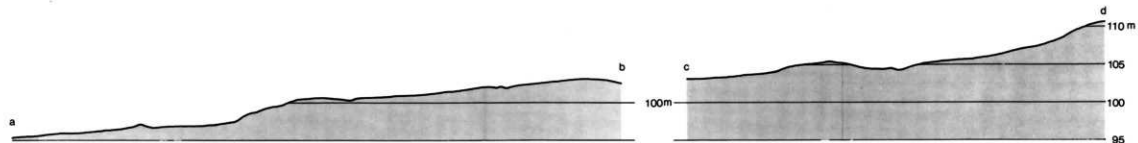
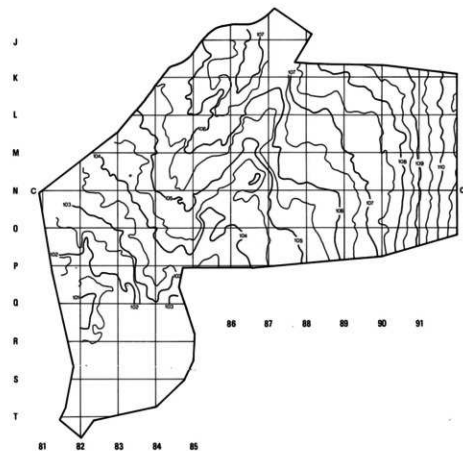
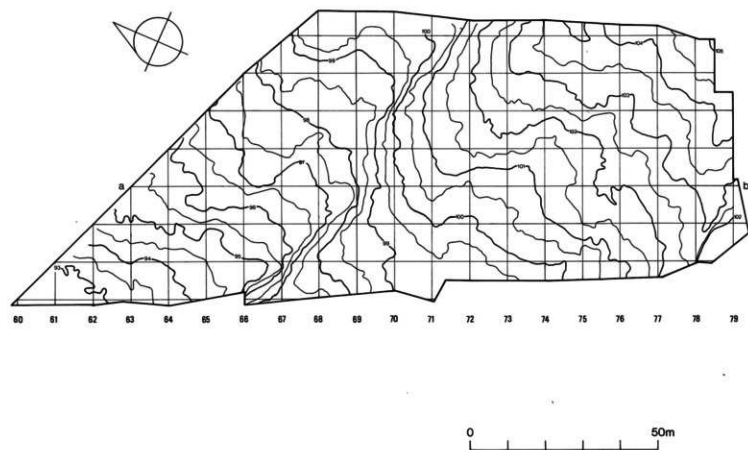
図V-2 遺跡と周辺の地形



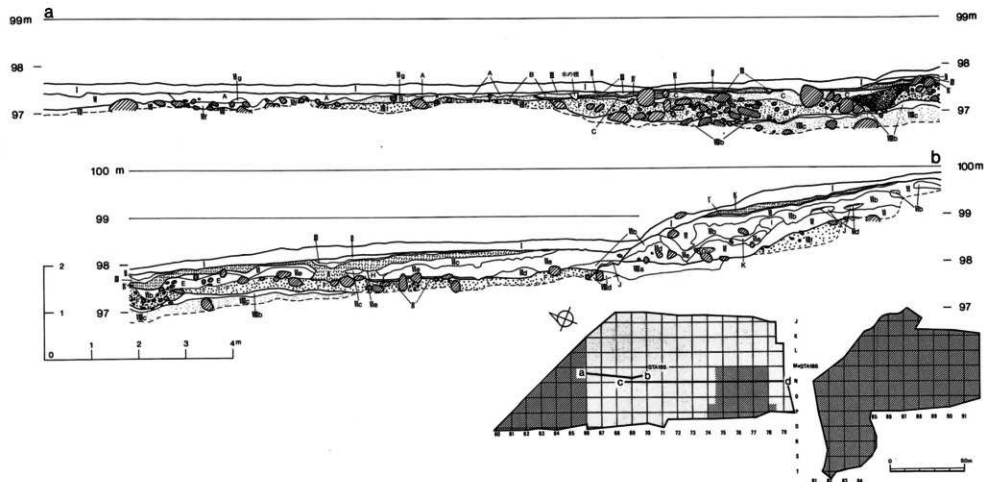
0 50m



図V-3 第I～IV層除去後の地形図



図V-4 第Ⅶ層上面の地形図



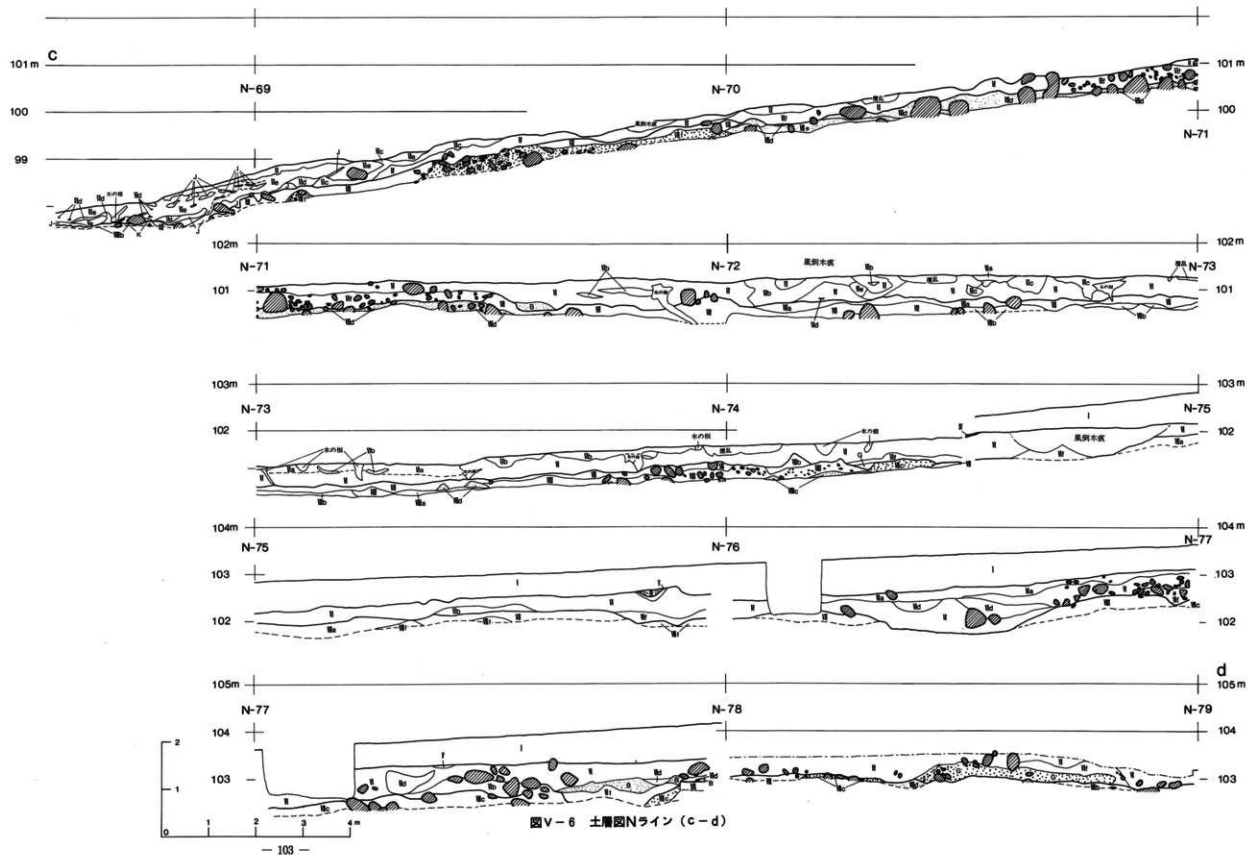
土層

- I 層: 耕作土
 II 層: 有珠山IV a 火山灰 (Us-IV a)。
 III 層: 黒茶褐色土。
 IV 層: 有珠山 b; 火山灰 (Us-b)。
 V 層: 暗茶褐色土。
 VI 層: 褐色シルト質土。
 VI a 層: 黄褐色シルト質土。
 VI b 層: 暗褐色土。
 VI c 層: 暗黄褐色土。
 VI d 層: 黒褐色粘質土。
 VI e 層: 黒褐色粘質土。
 VI f 層: 褐色土 (礫を多く含む)。

- VII 層: 茶褐色粘質土。
 VII a 層: 褐色粘質土。
 VII b 層: 茶褐色砂質土。
 VII c 層: 暗茶褐色砂礫。
 VII d 層: 暗褐色砂。
 VII e 層: 暗茶褐色砂。
 VII f 層: 灰褐色砂礫。
 VIII 層: 暗茶褐瓦礫。
 VIII a 層: 暗茶褐色砂質土。
 VIII b 層: 灰黄色粘質土。
 VIII c 層: 灰褐色砂。
 VIII d 層: 茶褐色礫。

- A 層: 褐色シルト質土 (IV 層) に Us-b; (IV 層) がブロック状に混じる。
 B 層: 灰色砂。
 C 層: 茶色粗砂。
 D 層: 黒灰褐色小礫。
 E 層: 暗褐色礫。
 F 層: 暗褐色砂礫。
 G 層: 褐色小礫。
 H 層: 黒茶色土に Us-b; (IV 層) が混じる。
 I 層: 黒色土に少量の暗褐色土が混合。
 J 層: 黒色土と暗褐色土が混合。
 K 層: 暗褐色土に少量の黒色土が混合。

図 V-5 旧河川跡 (a-b)



2 遺 構

(1) 焼 土

焼土は今年度調査で14ヶ所検出され、平成元年度に検出された128ヶ所と合わせ調査区内で142ヶ所を数える。このうち稀府川右岸地区から検出されたものは昨年度39ヶ所・今年度14ヶ所の計43ヶ所である。今年度の調査では人為的な所産とは考えられないものは出来るだけ除外した。焼土名は(F-)の後に元年度の焼土番号に引き続き、確認順に番号を付けた。個々の規模などは一覧表に明記した(表V-4)。

今年度、調査をおこなった焼土の検出層はVI層である。そのうちVI層の下位にあたるVId層(観別黄褐色火山灰)直上から1ヶ所、中位から9ヶ所、上位から3ヶ所、攪乱から1ヶ所検出された。次に層別別に各々の焼土が残された時期を焼土の遺物や周囲の状況などから推定し、形態などの特徴を述べる。

VId層直上から検出されたF-136は縄文時代中期に残されたものと考えられる。旧河川に面した斜面に位置し、傾斜面に直交して東西方向4ヶ所に広がって分布している。これは南側が高く、崩れ出して4ヶ所に途切れたものと推定される。

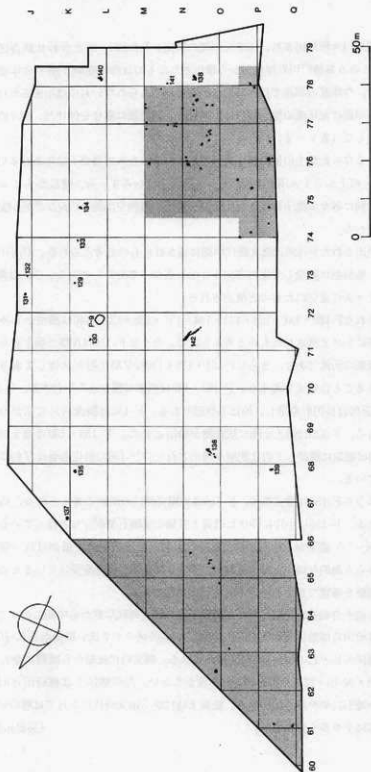
VI層中位で検出されたF-129・131・132・133・134・137・138・139・140は層位からみて縄文時代後期から晩期にかけて残されたものと考えられる。とくにF-138はIV群b類土器が共存しており縄文時代後期の所産であり、さらにF-131・132・139はV群土器が共存しており縄文時代晩期の所産であることは確実であろう。F-137・138は明確な掘り込みを有する。F-129・131・133・139の平面形は長円形を呈し、他は不整形である。F-132は調査区外に広がり全体の平面形は不明である。F-129は焼土上面に炭化物が検出された。F-133・138は焼土の南側に隣接して、F-140は東側に隣接して炭化物層が検出された。F-138の炭化物層は径約2mの範囲に薄く広がっている。

VI層上位の焼土のうちF-130は縄文時代、F-135は統縄文時代の所産と考えられる。両者の平面形は不整形である。F-135は小片に砕けた焼骨と多量の黒曜石製剥片など伴っている。

F-142はIV層(Us-b)直下から検出され、細長く広がった形態や焼土層がほぼ一定の厚みをもつ断面などから人為的な焼土とは考え難い。F-141は全体に攪乱を受けているためVI層中であっても上下関係を確定できず、時期や元の形は不明である。

つぎに調査全体で焼土分布を時期別にみるとVI層下位の縄文時代早期から中期にかけて多く分布する範囲は、稀府川右岸地区北側の旧河川に面したN-65区やや低い緩斜面とN-75・76区周辺および左岸地区のK・L-84区・J-87区にみられる。縄文時代後期から晩期にかけては稀府川右岸地区のM・N-76・77区を中心に分布密度がたかい。左岸地区では稀府川と旧河川に挟まれた中洲状の地形にやや多く分布する。統縄文時代から縄文時代にかけては稀府川左岸地区の中洲状の地形にやや多く分布する。

(谷島由貴)



● 燒土

图 V-7 遺構位置図

F-129



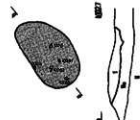
- 1 : 炭化物
2 : 赤褐色土

F-130



- 1 : 赤褐色土

F-131



- 1 : 明褐色土

F-132



- 1 : 赤褐色土
2 : 暗赤褐色土

F-133



- 1 : 暗赤褐色土 (焼土+炭化物)
2 : 赤褐色土
3 : 黒褐色土 (炭化物)

F-134



- 1 : 赤褐色土 2 : 灰褐色土
(VIに炭化物を含む)

F-135



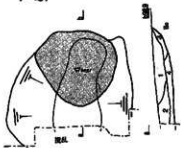
- 1 : 明黄褐色土 (炭化粒をわずかに含む)
2 : 暗黄褐色粘質土 (焼骨を多く含む)
3 : 暗黄褐色粘質土 (焼骨と焼土粒を少量含む)
4 : 暗黄褐色粘質土 (焼土粒を含む)
5 : 褐色粘質土 (焼土粒と炭化粒を少量含む)
6 : 黄褐色土 (炭化粒を少量含む)
7 : 暗褐色粘質土 (炭化粒を少量含む)

F-136



- 1 : 灰赤褐色土
2 : 暗赤褐色土
3 : 黒赤褐色土
4 : 黒褐色土

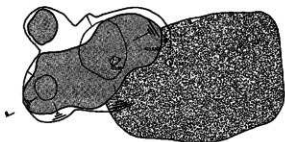
F-137



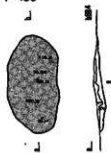
- 1 : 赤褐色土 (炭化物を多く含む)
2 : 赤褐色土 (焼土粒と炭化粒を多く含む)
3 : 褐色土 (焼土粒と少量の炭化粒を含む)
4 : 暗褐色土 (焼土粒と炭化粒を少量含む)

図V-8 焼土(1)

F-138



F-139



F-140



1 : 赤褐色シルト質土
2 : 暗灰褐色土
(焼土粒と炭化物を含む)

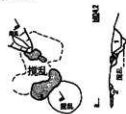


1 : 赤色土 (炭化物を含む)
2 : 暗褐色土 (多量の焼土粒と少量の炭化粒を含む)
3 : 暗褐色土 (少量の焼土粒と多量の炭化粒を含む)
4 : 黄褐色土 (VI d に焼土粒と炭化粒を少量含む)



1 : 橙褐色土
2 : 黄褐色土 (VI と焼土の混合)

F-141



1 : VI + 焼土粒 + 炭化粒
2 : 焼土 + 攪乱の土

F-142

1 : 明褐色土
2 : 暗灰褐色土
(焼土粒と炭化粒を含む)
3 : 橙褐色土
4 : 黒褐色土

VI : 褐色シルト質土
VI b : 暗褐色土
VI d : 明褐色シルト質土 (概別黄褐色火山灰)
VI e : 黒褐色粘質土

焼土

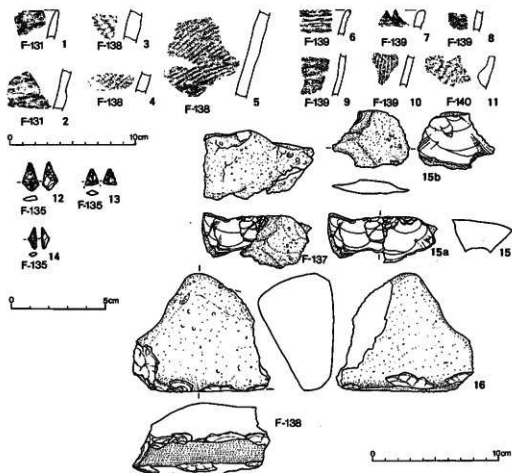
炭化物

0 1m
図V-9 焼土(2)

1、2はF-131から出土したV群b類土器。1は非常によく磨かれて光沢があり焼成がよい。鉢形土器の口縁と思われる。3～5はF-138から出土した。3はⅢ群b類、4、5はⅣ群b類土器である。3は条の太いRL原体による縄文が施されている。4、5はLR原体による斜行縄文が施されている。5は包含層出土の手箱式土器（図V-28-137）と接合した深鉢形土器の底部付近の破片。6～10はF-139から出土したV群b類土器。深鉢あるいは鉢形とおもわれる。6は無文の口縁部に間隔をあけて沈線が施されている。口唇には棒状工具による刻み目がある。7はB字状突起の部分。9～10は縦行縄文のもの。11はF-140から出土した条の太い原体による縄文が施されているⅢ群b類土器。

12はF-135から出土した。12、13は黒曜石の石鏃の破片。14は頁岩の加工痕のあるフレイク。15a、bはF-137から出土した黒曜石の石核およびフレイクで接合資料である。原表皮面が残る。16はF-138から出土した安山岩製のすり石。三角柱状の礫の側縁に狭い使用面がある。

（遠藤香澄）



図V-10 焼土出土の遺物

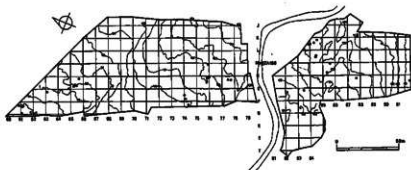
表V-4 焼土一覽表

焼土番号	位置	層位	規模 (cm)			検出物			
			長径 × 短径	最大厚		炭化物	土器	石器・石片	骨
F-129	K-72-d	VI 中	48 × 40	10		焼土直上に炭化物			
F-130	K-71-b	VI 上	73 × 40	4					
F-131	I-72-b・c	VI 中	83 × 48	13			Vc : 7		
F-132	I-72-c	VI 中	— × 34	14			Vc : 3		
F-133	K-73-d	VI 中	46 × 26	6		炭化物層が隣接			
F-134	K-74-d	VI 中	105 × 54	18		焼土中に炭化物			
F-135	K-67-d	VI 上	95 × 90	13		焼土中に炭化粒	Vc ? : 1	石楯:2 R7b-イ:1 7b-イ:5853	焼骨片 多数
F-136	N-68-b	VII d直上	175 × 90	16					
			36 × 22	8					
			35 × 25	11					
			36 × 29	4					
			80 × 40	5					
F-137	J-66-c	VI 中	84 × 80	19		焼土中に炭化物		石楯:1 7b-イ:1	
F-138	N-78-a	VI 中	165 × 68	14		焼土中に炭化物	III:1 IVb:6	すり石:1 7b-イ:1	
			38 × 30	10					
F-139	P-67-d	VI 中	104 × 54	10		焼土中に炭化粒	Vc:6		
F-140	K-78-b	VI 中	140 × 100	8		炭化物層が隣接	III:1		
F-141	N-78-b	VI 腹乱	36 × 20	4		焼土中に炭化粒			
			17 × 10	16					
F-142	N-72-a・d	VI 上	536 × 64	9		焼土中に炭化粒			
			44 × 22	3					

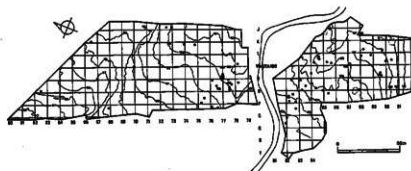
表V-5 焼土出土石器一覽表

押図番号	遺構名	器名	長さ × 幅 × 厚さ(mm)	重量(g)	石質
V-10-12	F-135	石楯	(1.5) (0.9) (0.3)	(0.2)	黒曜石
V-10-13	F-135	石楯	(0.9) (0.7) (0.3)	(0.3)	黒曜石
V-10-14	F-135	加工痕ある剥片	(1.1) (0.5) (0.3)	(0.1)	頁岩
V-10-15a	F-137	石楯	5.8 3.5 2.7	39.7	黒曜石
V-10-15b	F-137	剥片	3.1 4.1 0.8	9.0	黒曜石
V-10-16	F-138	すり石	9.4 10.0 5.7	645.0	安山岩

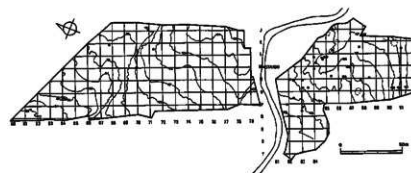
縄文時代早一中



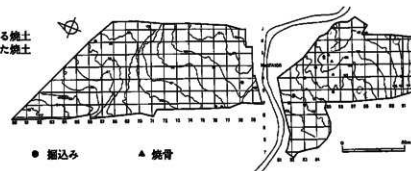
縄文時代後一晩



続縄文時代
弥文時代



炉・掘込みのある焼土
焼骨を検出した焼土



■ 炉 ● 掘込み ▲ 焼骨

図V-11 焼土分布図

(2) 土 墳

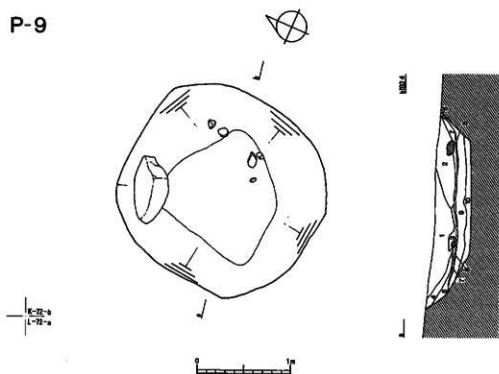
P-9

層位：1.暗黄褐色土（焼土粒、炭化粒、Us-bを含む）2.黒褐色土（多量の炭、ブロック状のUs-b・VI層を含む）3.灰層（上半は灰白色、下半は暗灰色）4.暗褐色土（表土層と類似）5.焼土粒、灰、炭の混層 6.焼土 7.炭層 8.灰層（上半は灰白色、下半は灰黒色） 9.明赤褐色土（VI層を主体としブロック状の灰・焼土を含む）10.灰層（暗灰色、多量の炭を含む）

K-71-cに位置し、表土除去後に検出された。平面形は一辺が約2.1mの隅丸方形で、深さは約40cmである。墳底は平坦で、一部礫が露出している。墳底、壁面ともほぼ全面焼けているが、東側の壁は他の三辺に比べ焼けかたが著しい。また、炭を多量に含む2・7層が東側で厚く堆積していることも合わせて考えると、東側に焚口があったものと推定できる。生焼けの棒状木片が2層から出土しており、昨年度のP-1同様、開拓期以降の炭焼き跡であろう。9層を間層とすれば少なくとも二回は利用されたと考える。

（山原敏朗）

P-9



図V-12 P-9

3 包含層出土の遺物

(1) 遺物出土状況

1) K-67-d区遺物集中(図V-13~15)

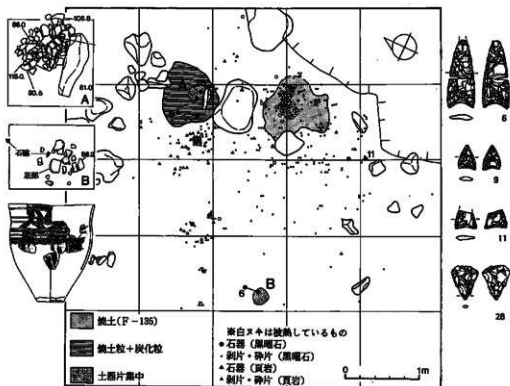
K-67-dから焼土(F-135)や土器とともに石器や多量の剥片・破片が検出された。遺物の包含層は、VI層に対応する黒色土または褐色土である。

本グリッドは調査区北西部の一段低い河川跡に位置する。河川跡は遺物が残された時期以前に形成されたものであるが、当時にはほぼ図V-52(上)の斜線部分にまで流幅が狭まっていたものと思われる。調査前には水田として利用されていたために包含層の大部分は削平されていたが、K-67-dのあたりは本来の地形が低いこともあり、削平を受けずにすんだのであろう。遺物集中区と南側にある沢とは数メートルも離れておらず、また北～西側には多量の人頭大の亜角礫が露出している。北東側は地山まで削平され平坦になってはいるものの本グリッドとの比高差は大きく、本来は斜面であったと思われる。なお、包含層の下には地下水によってもたらされたと思われるUs-bの層が薄く堆積しており(写真図版V-3-5)、河の縁辺では包含層に網目状にはいていた。

土器片は2箇所から集中して出土した。2ヶ所とも約20cmの範囲でまとまっており、それ以外からの土器はほとんど認められなかった。土器片集中Aは土器の上半部が深さ7cmほどの浅いくぼみに口縁を北にして倒れた状態で出土した。土器のそばには高さ9cmの板状の礫がくぼみの上に接するように出土しており、土器の支えとして利用されたような状態にあった。土器の上から石錐と剥片が2点、土器の下からは石礫片が1点出土している。土器集中Aのまわりには焼土粒と炭化粒が散在していたが、焼土自体として捉えられるものではなかった。土器片集中Bからは破片数は少ないが底部および底部に近い胴部片が出土している。伴出したものに長身の無形礫がある。これら2箇所の土器片は同一個体で接合する。出土状況からすれば、本来土器片集中Aにあったものが何らかの理由で底部付近のみ土器片集中Bの場所へ動かされたものと思われる。

石器は先述の石礫と長身の無茎礫のほか、平基ないしは浅い抉りを持つ三角形礫と加工痕のある剥片が出土している。加工痕のある剥片も小さな剥片に細かな加工をしているものが多い。石礫ないしは石錐といった小形の石器の未製品と推定される。

本グリッドでは手掘りで検出できたものは全て遺物のポイントを記録し平面分布を把握することを試みた。図V-13の平面分布からは石器の集中は3ヶ所認識できる。焼土(F-135)に重複する集中部、土器片集中Aの南西に隣接する集中部、およびその数メートル南西にある小さな集中部である。焼土に重複する集中部では焼土の中央やや西よりごく狭い範囲に特に集中している。石材は黒曜石が圧倒的に多い。また、被熱しているものも多く焼土が形成されたと同時に残されたものと思われる。なお、焼土の北西～南西に広がる散漫な分布は水の影響等によって焼土の集中部から動いたものと思われる。土器片集中Aの西に隣接する集中部は焼土粒・炭化粒の分布範囲に一部が重なるように広がっている。頁岩が約半数を占める点は、焼



注) 焼土中の遺物は含まれていない

0	4	177	65	1
4	87	398	208	2
11	78	361	159	16
3	33	28	5	14
1	1	0	0	3

図 V-14 K-67-d 区ふりい検出の
遺物分布図

上: 黒曜石 下: 頁岩

0	3	157	64	1
0	1	20	1	0
3	46	375	189	2
1	41	23	19	0
10	61	346	147	13
1	17	15	12	3
1	23	27	4	13
2	10	1	1	1
0	1	0	0	2
1	0	0	0	1

図 V-15 K-67-d 区ふりい検出の
石材分布図

土に重複する集中部とは異なっている。ここでは被熱を受けている剥片の集中する位置と焼土粒+炭化粒の分布範囲とが重複していないという奇妙な現象を生じている。同様の現象はこの数メートル南西にある小さな集中部においても認められ、この付近では焼土が検出されていない。後二者のように焼土と被熱剥片の集中する分布とが対応しない場合、焼土と重なる集中部のように原位置を保っていると判断することは難しい。

本グリッドではポイントを落とした図V-13の平面分布と比較するため、1m×1mのメッシュを設定してメッシュごとに土壌を採取し、土壌を乾燥させた後ふるいにかけて遺物を可能なかぎり取り上げた。図V-14はふるいで検出した遺物の平面分布である。ポイントを落とした図V-13の平面分布と比較すると、およそ一致するものの、異なる点もいくつか認められる。まず、全体として遺物の広がりとは図V-13より大きくなっているが、これはある程度予想しうることである。平面分布を説明するうえで最も異なってくる点は、図V-13では散在的にしか遺物が認められない焼土の北西と西のメッシュで遺物が多量に出土したことである。図V-13では焼土の集中部付近から北西～南西にかけて散漫に移動したと考えたが、図V-14でみるとむしろ北西～西の方向に遺物が多く、散漫とも言えない状況にある。遺物集中の範囲を焼土を中心としてより広く考えたほうが妥当かもしれない。また、このことはある意味で北西2ヶ所の集中部を打ち消すことにもなるが、設定したメッシュが大きく、図V-13の分布同様途中できれるのか、メッシュの枠全体に分布するのかは図V-14では判断できない。しかしながら、図V-15のふるいで検出した遺物の石材分布をみると、図V-13と同様に頁岩の割合が北西～西側で多くなることから、少なくとも石材構成からは北西2ヶ所の集中部を肯定することができると思われる。

(山原敏朗)

2) K-78区、M-78区を中心とした遺物集中 (図V-16～19)

調査区南端のM-78、N-78区の包含層第VI層中から遺物が比較的多く出土した。当初は、各層位毎、5m×5mのグリッド毎に遺物の取り上げを行ったが調査が進むにつれて遺物が広範囲に、濃密に分布していることが認められたため1m×1mのメッシュを設定し、位置、レベルを記録した。取り上げは1点毎あるいはまとまりのある単位で行った。特に遺物が集中する部分では写真撮影を行ない記録した。また遺物がNラインよりも東側にも広がっていることが予想されたので、東側に5グリッド分拡張した。

その結果、遺物の集中域がKラインから西側、78ラインから南側の現河川(稀府川)の右岸に面した12グリッド、300㎡程の範囲であることがわかった。標高104.70m～103mの西側に緩やかに傾斜する地点にあたる。

また集中域内で遺物の広がりは連続してはいるが分布に2ヶ所のまとまり(集中区1, 2)があることが認められる。

集中区1はK-78-c、L-78-d区を中心に広がっており、南側の現河川側に続いていることが予想できる。集中区2はM-78-b、N-78-a・d区を中心とし、昨年度調査したN-77区の後期の土器の集中区に続くものとみられる。

2ヶ所の集中区とその周辺から、土器は総数の約半数に相当する2,737点（図V-16～19に示した12グリッド）、また本遺跡では出土数が少ないものの石器の4分の1に相当する30点が出土している。

土器は縄文時代早期、前期、中期、後期、晩期、統縄文時代までの各時期のものがある。層位的にとらえることはできなかったが、平面分布や出土のあり方には時期によって違いが認められた。早期、東銅路市IV式の土器片は集中区2のN-78-d区で他の時期の土器に混じって散点的に出土している。

前期の春日町式に相当する一個体分の破片を含め約90%にあたる331点が集中区2から出土している。特にN-78-d区では、ほぼ一個体分が2m四方程の範囲からまとまって得られている。この周辺から5ないし6個体分の破片が出土している。

中期の土器は約50%にあたる951点が出土している。中期の土器は旧河川の南側、遺跡全体で検出されるが、集中区に近接するほど出土数が多い。全体の器形を復元できる資料はない。破片は大部分が細かく割れている。集中区1（L-78-d区）でまとまって出土しているが同一個体ではなく相当量の個体数の破片、特に胴部片が混在している状態である。口縁部の破片のみでは30個体分である。集中区2では散在している。このような中期の土器片のあり方は集中区に限らず、本遺跡全体に共通している。

後期の手稲式土器は両集中区で安定した出土状態を示している。破片が散点的に出土することは稀で、一個体の3分の1以上の破片が1m内外の範囲からまとまって出土している。Ⅲ群土器の散漫な出土状況とは対象的である。総数の約80%以上にあたる1,291点が出土している。特に集中区2からの出土量が多い。昨年度調査したN-77-c区から出土した資料を含めると、本遺跡の手稲式土器の分布が稀府川右岸の両集中区とその周辺にまとまっていることがわかる。集中区1で5個体、集中区2で19個体、昨年度調査区で4個体程が得られている。大形の深鉢形土器が多くみられる。また焼土跡が集中区2で2ヶ所（F-138・141）検出された。F-141は攪乱を受けているので時期は確定できないがF-138は手稲式の時期と考えられ、またF-138に隣接した位置から、深鉢形土器(137)一個体分が押し潰された様な状態で出土した。焼土中からはこの土器に接合する底部付近の破片が検出されている。

手稲式に続く堂林式、三ツ谷式相当の土器は126点のうち111点が集中区から出土している。集中区1ではK-78-b区に一個体分の破片があるほかは散点的である。集中区2ではN-78-d区の南隅から一個体分が得られたほか、集中区1よりもややまとまっており、6・7個体分が得られている。

晩期、統縄文時代の土器は少量である。大洞C式相当の破片が数点、恵山式土器が一個体分、集中区1から出土している。

石器は集中区2にまとまっている。本遺跡は土器に比べてきわめて石器の量が少ないが集中区2からは各種の石器が得られている。黒曜石（19・21・22）・安山岩（17）の石鏃、真岩のつまみ付ナイフ（30・31）、メノウの楔形石器（図V-40・41・41～43）、安山岩のすり石（図

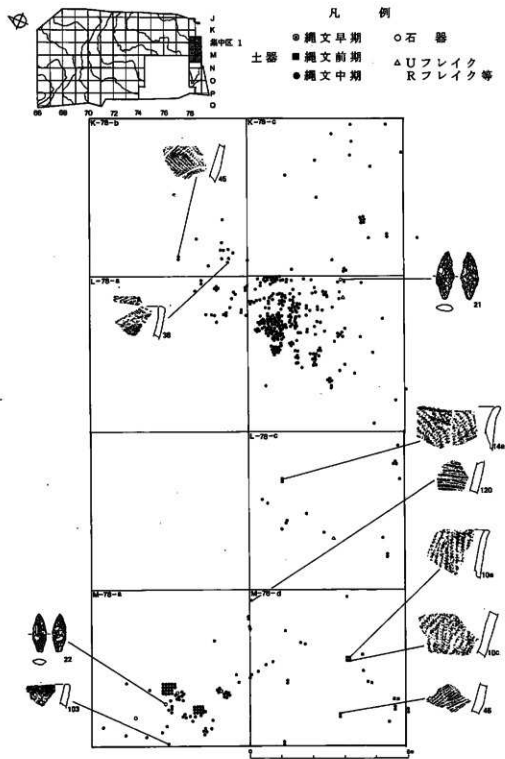
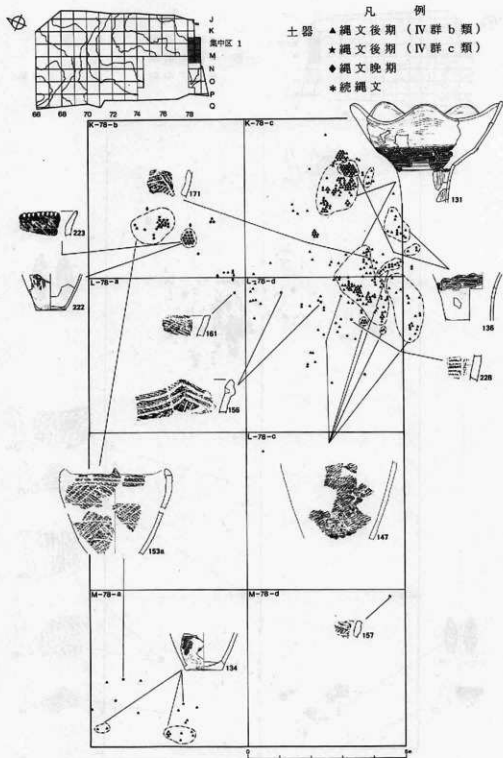
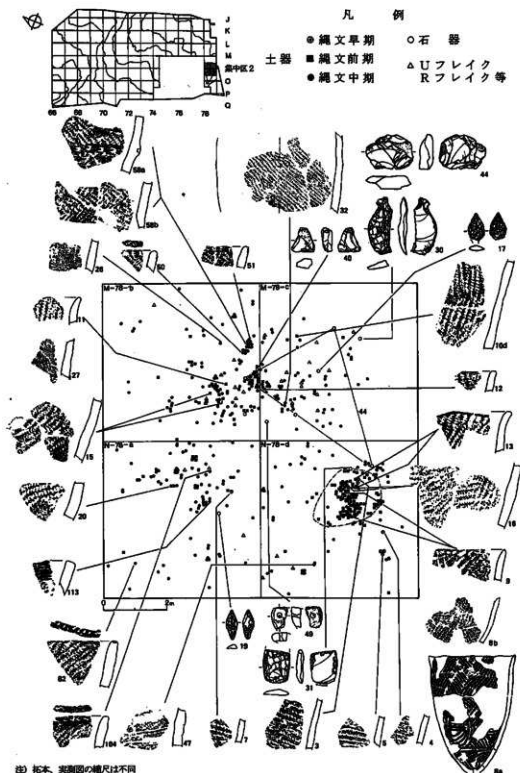


図 V-16 集中区 1 周辺遺物出土状況(1)



(注) 拓本、実測図の縮尺は不同

図 V-17 集中区 1 周辺遺物出土状況(2)



図V-18 集中区2周辺遺物出土状況(1)

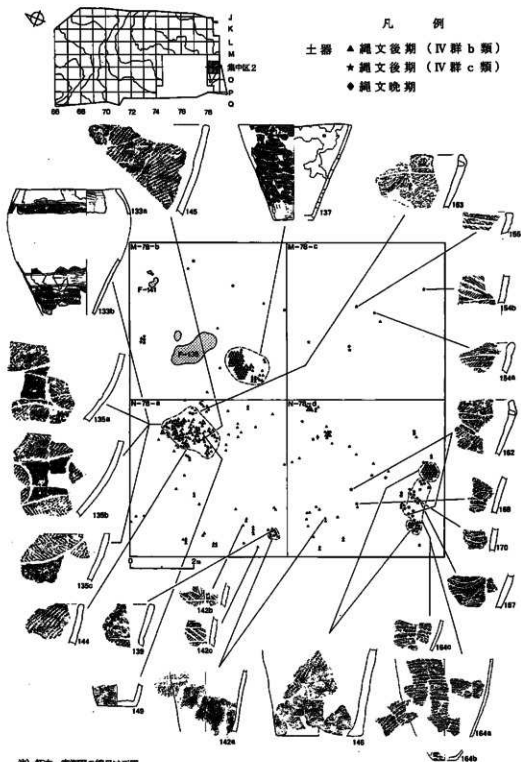


図 V-19 集中区 2 周辺遺物出土状況 (2)

5-41-52)、緑色泥岩の石斧の細片、黒曜石、頁岩、メノウのフレイクが出土している。土器が各時期にわたって混在していることから、石器の所属時期を明確にすることはできないが、形態的にみて、石鏃は縄文時代後期から晩期頃、つまみ付ナイフは早期頃のものともみられる。

この様な集中区の遺物のあり方は、この地区が縄文時代早期から続縄文時代に至るまで切れ目なく利用されていたことを物語っている。集中区1・2は遺物のあり方に微妙な違いがみられるが時間的に差はないものと思われる。特に縄文時代後期、手摺式土器の時期には両集中区を含めた現稀府川の右岸に面した地域が比較的安定して利用されたことがうかがえる。縄文時代後期～晩期とみられる焼土跡が、集中区に隣接する昨年度調査区から多数検出されたことから推定される。

(遠藤香澄)

(2) 土 器 (図V-20～38、図版V-6～19)

縄文時代早期(I群)から晩期(V群)、続縄文時代(VI群)、據文時代(VII群)までの各時期のものがある。出土点数は5,529点で遺物総数の54%を占める。縄文時代中期(1,927点)が最も多く、次いで後期(1,667点)、晩期(1,164点)、前期(380点)、続縄文時代(307点)、據文時代(68点)で、縄文時代早期のものもわずかであるが(16点)出土している。

土器の分類別、グリッド毎の出土数は、平成元年度分とあわせて図V-44・45に示し、また昨年度分も含めた稀府川右岸の土器分布密度は図V-43に示した。

土器の分布、出土状態については、既に一部遺物の集中区に関してV-3-(2)の項で述べてある。詳細はV章まとめの項で述べるが、時期毎に微妙な違いがみられる。

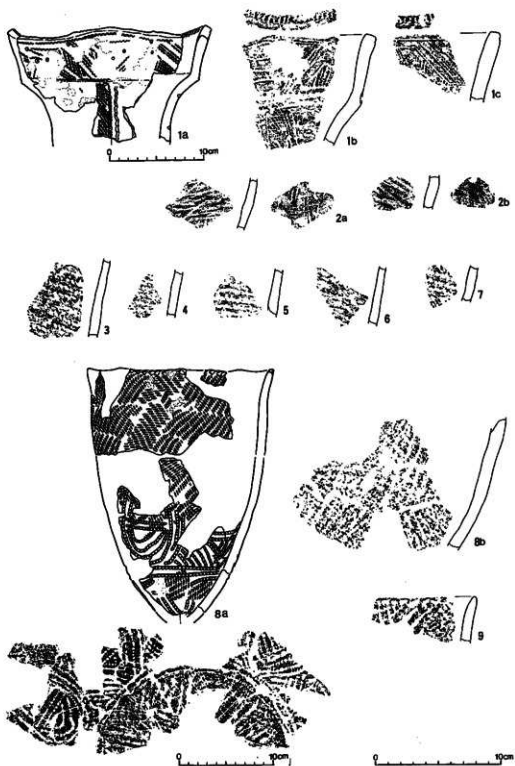
縄文時代前期の土器は遺物集中区2(図V-18)に数個体分の破片がまとまっていた。中期の土器は調査区の旧河川跡より南側に分布する。一個体分がまとまって出土する例は稀で、小さな破片が雑然と散らばっている。後期の土器はこれとは対象的に、一個体分の破片が何ヶ所かにまとまっている。ほとんどが集中区からである。晩期の土器は6ヶ所ほどにまとまっており、それぞれやや時期を異にするものが出土している。特に調査区東端の旧河川の南側に集中している。

縄文時代早期の土器 (図V-20-1a～7, 図版V-11-1)

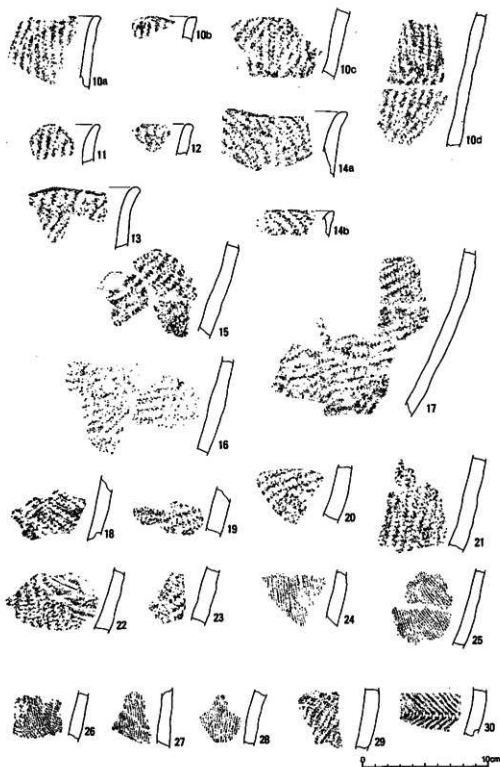
I群a類(1a～2b)

4点出土した。1aは昨年度出土したもの(北埋調報61、P-173、図V-41-1)に接合する資料が出土したため改めて報告するものである。また同一個体の口縁部破片(1b・c)も得られている。物見台式相当のもの。胴部半ばでくびれて、内湾気味に立ち上がる器形のもの。緩やかな波状口縁で、波頂部の左右に小さな突起がある。波頂部の下位とくびれ部に小さく蛇行する沈線を描き、それに沿って貝殻腹縁圧痕文で幾何学的な文様を描いている。刺突文は文様の切れ目やくびれ部分に加えられている。圧痕文は口唇の内側にもつけられている。

2a・bは焼成が良く、硬い土器である。表・裏面に繊維痕がつけられている。



图V-20 I 群 a · b 類, II 群 a 類土器(1)



図V-21 II群a類土器(1)

I 群b類 (3~7)

12点出土している。いずれも東銅路IV式に相当するものである。薄手で器面には自縄自巻Lの原体による縄文、あるいは摺糸文が施されている。

縄文時代前期の土器 (図V-20・21-8a~30, 図版V-6-1, -11-2, -12-1)

II 群a類 (8a~30)

380点出土した。口縁部、胴部などを識別した結果、7個体程が確認できた。春日町式・トドホッケ式に相当するものである。全体の器形が分かるものは1個体であるが文様から1類~3類に分けられる。

a-1類 縄文地に押し引き文が施されるもの(8) 8a・bは同一個体。胴部上半部とは接合しなかったが、器形を想定し図上で復元した。8bは胴部半ばの破片とみられる。尖底で底部からはほぼ直線的に立ち上がり口縁部がやや外反する砲弾形を呈する。緩やかな小波状口縁で口唇は尖り気味で、外側角に器面の押し引き文に用いたと同様の施文具で刻み目がつけられている。口縁部から胴部、底部にまで複節(LRL)の原体を縦方向と横方向に回転施文することで縦方向の羽状縄文が構成されているが、胴下半部と底部付近では部分的に磨り消されている。重複して施文されているところもある。胴下半部と底部には竹管状工具の背面で、器面を横環する2条1単位の押し引き文がめぐっているが、部分的に途切れている。その間に山形の文様を描いている部分と大きく同心円上に楕円形の文様を描いている部分がある。底部付近では放射状に施されている。押し引き文は左から右へ、上から下へ施文具を移動させている。胎土には繊維が混じる。

a-2類 押し引き文のみのもの(9) 口縁部のみで全体の文様はわからない。あるいは縄文が施されているのかもしれない。胎土、焼成、色調は8と非常に良く似ている。8と同様竹管状工具の背面で鋸歯状の文様が描かれている。

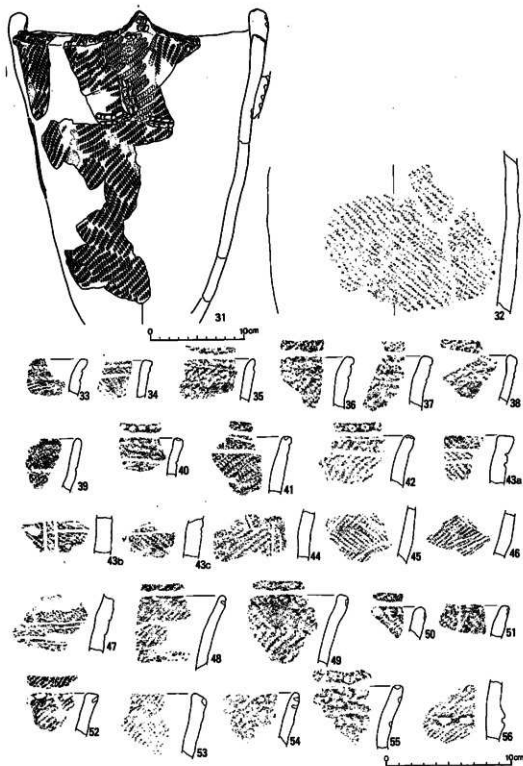
a-3類 縄文、摺糸文、綾格文が施されているもの(10~30) これらの破片はいずれも胎土に繊維が混じり、内面が磨かれている。特に口縁部は、口唇上から表面まで入念に磨かれている。やや外反する口縁で、緩やかな小波状をなすものである。10a~dは同一個体とみられる。10~12は比較的太いLRの原体により縦行する縄文が、13はLR原体、14はRL原体による斜行縄文が施されている。

15~17は同一個体の可能性がある。24~28は細かい摺糸文、29には綾格文、30は無節の縄による結束第2種の羽状縄文が施されている。これらは胎土、焼成、内面調整などから判断し本群に関連する資料とみられる。

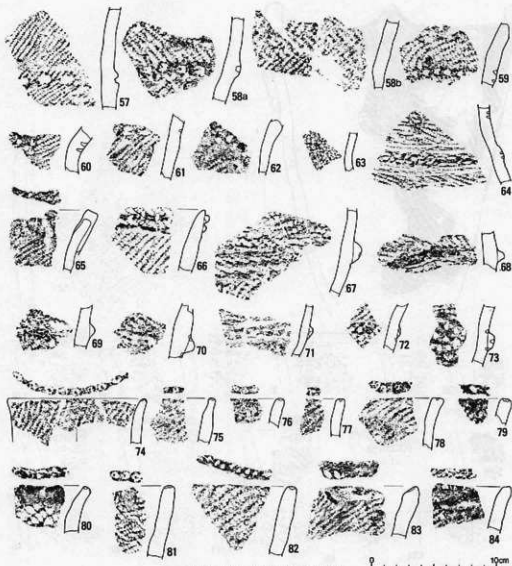
縄文時代中期の土器 (図V-22・23・25-31~130, 図版V-6-2, -12-2, -13, -14, -15-1)

III 群b類 (31~130)

1927点出土している。天神山式、柏木川式に相当するもの、後続するノグッブII式に関連する資料がある。121個体程が得られているが器形が復元できるものは1、2個体である。これらの中には、胎土に小砂利が多く、粗い、繊維が混じるもので、内面調整があまり良くないも

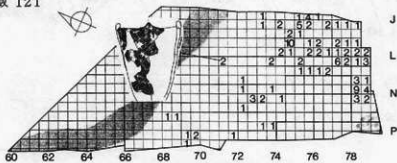


図V-22 III群b類土器(1)

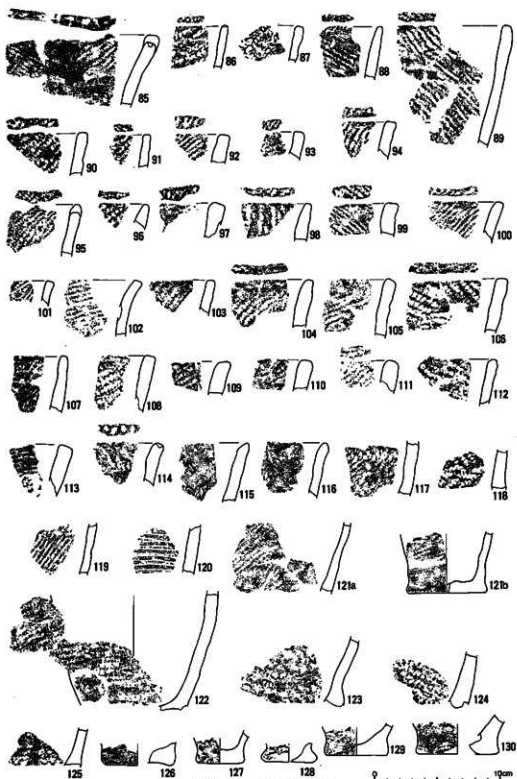


圖V-23 Ⅲ群b類土器(2)

Ⅲ群b類
個体数 121



圖V-24 Ⅲ群b類土器個体別分布圖



圖V-25 III群b類土器(3)

ものと、繊維が混じり、胎土が緻密で内面が磨かれている少数の土器（43～46, 64）がある。後者のものは道南系のものとみられる。文様は縄線文、沈線、刺突文、貼付帯によって付けられ、口唇上にも施文されているものがある。地文の縄文はLR・RLの原体による斜行縄文のものが多く、無節のもの、縦行縄文、撚糸文、オオバコ回転文のものもある。主に口縁部の文様によって1類から6類に分けられる。

b-1類 縄線文が施されるもの(33～39) 口縁にそって1条ないし2条施されている。33・34は薄手で口唇は角形を呈する。33はやや外反する。35は口唇上でなでられている。36～38は口唇上に縄文が施されている。38は山形口縁のもの。39は口唇直下が無文になっている。

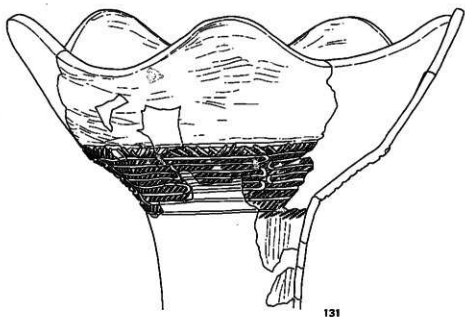
b-2類 沈線文が施されるもの(40～47) 40～42は口唇上に刺突文が施されている。40・42の刺突文は中空の棒状工具、41は半截竹管状工具による。43a～cは同一個体。厚手で口唇は断面が角形。角形の施文具で数条一単位の沈線文が施されている。45・46は菱形の文様が描かれている。45は羽状縄文、46は0段多条の原体による縄文である。

b-3類 刺突文が施されるもの(48～64) 48～53は口唇上に縄文が、55には刺突文が施されている。48は口唇がやや丸味を帯びた角形で、僅かに外反する。49～53は口唇直下、あるいは口唇外側角に刺突文が施されているものである。49はやや外反する器形で、結束第2種の羽状縄文が施されている。50・51は同一個体。52は無節の縄文のもので、口唇上にも施文されている。53は口唇が切り出し形を呈するもので、0段多条の原体による縄文のもの。内面調整が比較的良好。54、55は刺突文が口縁に平行に複数めぐるので、54は縦方向にも刺突文がみとめられる。55は波状口縁になるものとみられる。

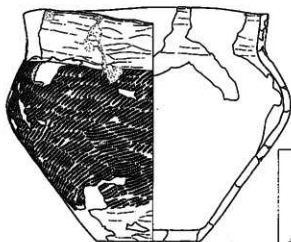
56～64は胴部の破片。56～58は低い貼付帯上に刺突文が施されているもの。56・57は棒状の施文具、58aは半截竹管状工具による。58a・bは同一個体とみられ、結束羽状縄文が施されている。60は細かい棒状工具で斜め下から施文している。63は薄手で器面には、オオバコ回転文が施されている。円形の刺突文はオオバコの茎によるものかもしれない。

64はノグッブⅡ式に相当するもの。RL原体による横走気味の縄文を浅く施した後、低い貼付帯が付けられている。貼付帯上には短刺線に近い刺突文が2条めぐり、貼付帯の上下には沈線がそれぞれ2条ずつ浅く施されている。

b-4類 貼付帯がつけられているもの(1、65～73) 1は天神山式に相当する。K-71-b区、L-71-a区から大きく割れた破片が出土した。全体の4分の1程が残存するが底部は欠損している。4個の山形突起部をもつ円筒形の大形深鉢。内、外面ともに凹凸が著しい。器面には0段多条のLR原体による斜行縄文が施されているが磨り消されている部分もある。突起部をやや肥厚させ、その下位には貼付帯がつけられている。剥落して一部しか残っていないが、痕跡がある。口唇上、突起部、貼付帯と胴部半ばに半截竹管状工具で刺突文が施されている。65は山形突起部に縦方向に低い貼付帯がつけられ、この上と口唇上に縄文が施されている。66は貼付帯上と口唇直下に縄線文が施されている。



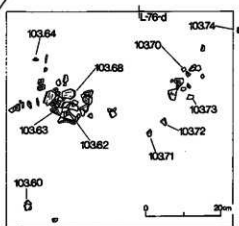
131



132

0 10cm

遺物出土状況



図V-26 IV群b類土器(1)

67~73は胴部破片。67~69には貼付帯の上位や下位に縄線文が施されている。68は無節の縄文のもの。69~73には貼付帯上に半截竹管状工具（69・70）や棒状工具（72・73）で刺突文が施されている。

b-5類 縄文のみのもの、無文のもの（74~116） 74~113は縄文が施されている。LR原体によるものが多い。0段多条のRL原体による斜行縄文のもの（89・99）、無節の原体によるもの（78・83）、縦行気味の縄文のもの（74・98）もある。74~87は口唇上に棒状あるいは中空の施文具による刺突文や刻み目が施されている。74は薄手で、やや外反する器形である。75~77は口唇直下がなでられている。80には「ハ」の字形の刺突文が施されている。81は小さな山形の突起部分。太い原体による綾格文がつけられている。83は切り出し形の口唇の内側角に斜めの刻みがある。83・84は同一個体の可能性があり、口唇上に縄文が施されている。85はLとRの原体を併用し縦方向の羽状縄文が構成されている。81~100は口唇上にも縄文が施されている。95は小さな山形突起部。97は口唇上に縄の圧痕がみられる。101~113は縄文のみのもの。102は口縁が外反する。112・113は山形突起の部分。

114~116は無文のもの。114は口唇上に棒状工具で刺突文が施されている。

b-6類 胴部、底部の破片を本類にまとめた（32・117~130） 117は結束第2種の羽状縄文、118には綾格文が施されている。119は0段Rの縄による撚糸文のもの。120は半截竹管状工具による条線文が横位につけられている。

121~130は底部。張り出しの大きいもの（128）、やや張り出すもの（121・123・127・129・130）、あげ底気味のもの（126）がある。122は横走気味の縄文が粗く施文されている。

縄文時代後期の土器（図V-26~30-131~173、図版V-6-3、7、8-1・2、15-2、16・17）

IV群a類（143） 無文地に2本一組の沈線による弧状の文様が描かれている。トリサキ式に相当すると思われる。

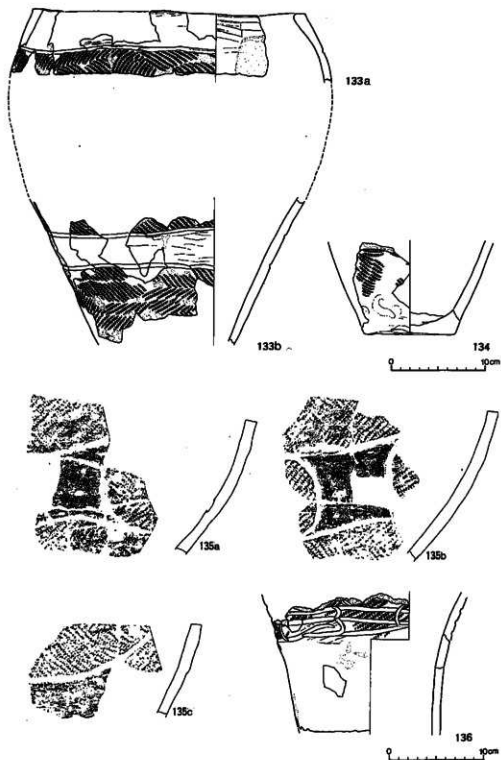
IV群b類（131~152）

1,540点出土した。手稲式に相当するものである。深鉢形、鉢形、壺形がある。

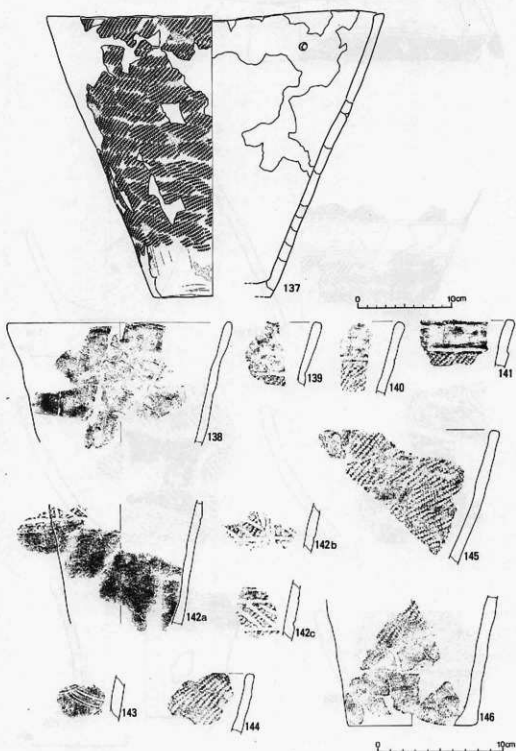
深鉢形・鉢形（131~142、144~148） 平縁のものと波状口縁のものがある。平縁のものは頸部がくびれて胴部が強く張りだす器形のもの（132）、底部から口縁部にむかって直線的に開く器形のもの（137、144~147）、口縁が内傾し胴部が張りだすもの（133a・b）がある。波状口縁のものでは、口縁部が大きく外反し、胴下半から底部が細い筒形になる器形のもの（131・136）等がある。口唇の断面は角形、あるいは丸味を帯びた角形で、やや肥厚させるもの、磨かれるものもみられる。口縁部が無文のものが多く、いずれも磨かれている。地文の縄文はLR原体による斜行縄文あるいは羽状縄文である。

131は集中区1（K-78-c、L-78-d区）からまとまって出土した。同一個体片は85点でいずれも大きく割れていた。全体の3分の2程が残存する。5ヶ所に大きな弁状突起がある。

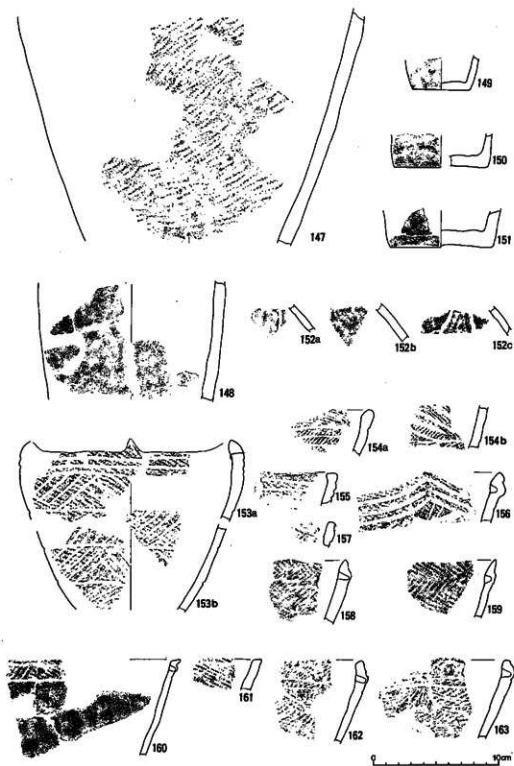
文様は頸部のくびれる部分に縄文を施した後、平行沈線を複数横断させ、その間を鋸歯状や短い弧線でつなぐ文様が施されている。136も類似の器形になるとと思われる。



図V-27 IV群b類土器(2)



圖V-28 IV群a・b類土器(3)



圖V-29 IV群b類(4)・c類(1)土器

132はL-76-a・d区から同一個体片196点がまとまって、10cm程のレベル差で出土した。3分の2程が残存する。口縁はやや波打っている。胴部の張り出す部分には炭化物が付着している。

133a・b、135a～cは集中区2から出土したもの。同一個体と思われる破片が96点あったが、接合できた部分が少なく、133a・bは図上で復元したものである。133aは輪積の位置で割れている。胴部が張りだし、底部ですばまる器形とみられる。器面には0段多条のLR原体を縦位と横位に施文し羽状縄文となっている。胴下半部に沈線で囲まれた無文帯がある。135a～cは胴部で、磨消縄文により大柄な雲形文が半彫刻的に描かれているとみられる。これらの破片はいずれも図の上部の割れ口が研磨されて平滑になっている。再利用のため加工したものとみられる。

134は133・135の破片が集中していたところから7～8m程離れた地点から得られたものである。胎土、焼成、縄文の施文の方法が類似することから同一個体の可能性がある。

137は集中区2(M-78-b区)から、同一個体の破片304点が細かく割れた状態で出土した。破片の一部は隣接する焼土(F-138)からも検出された。一個体分が押しつぶされた様な状態であった。接合できたのは約半数で、全体の4分の3が復元できた。底部付近は磨かれ無文になっている。144～147も同一の器形になるとみられる。

138～140は緩やかな波状口縁になるとみられる。141は無文帯と縄文帯の間が段状になっている。142a～cは胴部に平行沈線で区画された中に鋸歯状の文様が描かれている。無文の部分は磨かれている。148～151は底部の破片。

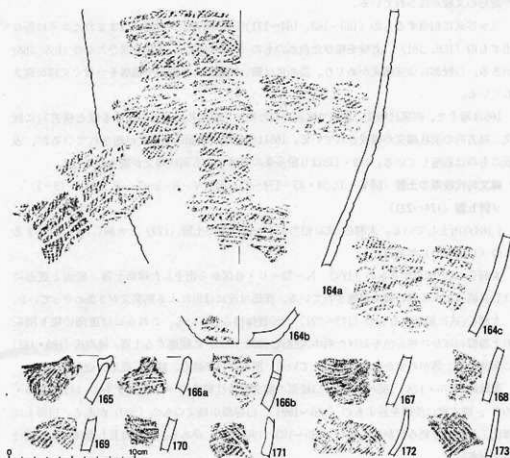
壺形(152a～c) 同一個体の破片。色調は黒褐色で薄手の焼成の良い精製土器である。無文地に半彫刻的な沈線により文様が描かれている。

IV群C類(153～176)

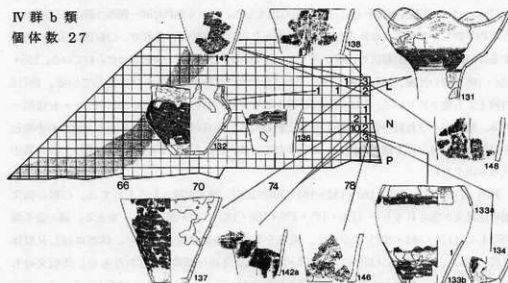
126点出土している。堂林式に相当するもの(153～159、164a～c)と三ツ谷式に相当するもの(160～163、165～171)がある。集中区を中心に20個体程が得られている。

堂林式に相当するもの(153～159、164a～c) 深鉢形、鉢形がある。口唇断面は内側に稜のある角形のもの(153、155)、切り出し形に近いもの(154、156～159)がある。地文はRL原体による斜行縄文(153～156)、LR原体による斜行縄文(164)、羽状縄文(158・159)のものがある。

153a・bは集中区1から出土したもので、15～20m程離れた地点の破片が接合できた。口縁部と胴部を図上で復元した。口縁部に小さな三角形の突起がある。文様は器面全体に比較的太い平行沈線文によって区画された中に鋸歯状の文様が描かれている。154も類似の文様構成とみられる。156、158、159には突瘤文が施されている。164a～cは昨年度報告された資料(北埋調報61・D-181 図V-48-121)と同一個体の可能性がある。集中区2から破片がまとまって出土したが、接合できたものが少なく図上で器形を復元した。口縁部がやや内傾する大形の深鉢形。文様は3・4条一単位の平行沈線を底部まで間隔をあけて施し、その間に波状



IV群b類
個体数 27



上) 図V-30 IV群c類土器(2)

下) 図V-31 IV群b類個体別分布図

や菱形の文様が描かれている。

三ツ谷式に相当するもの(160~163、164~171) 口唇表面角が指でつままれたように張り出すもの(160、161)、丸味を帯びた角形のもの(162・163)、丸味を帯びたもの(165、166)がある。口縁部には突瘤文がめぐり、器面には細い沈線により曲線や弧線をつなぐ文様が施されている。

160は薄手で、胴部は無文。沈線で区画された狭い口縁部にはLRの原体を縦と横方向に施文し縦方向の羽状縄文が構成されている。165は突起部の表面に貼瘤文が施されているが、表面のものは剥落している。172・173は0段多条の原体による羽状縄文が施されている。

縄文時代晩期の土器(図V-32、34・35-174~221、図版V-8-3~7、-9、-18、-19-1)

V群b類(174~221)

1,164点出土している。大洞C₁式に相当する一個体分の土器(174)と大洞C₂式に相当するもの(175~221)がある。

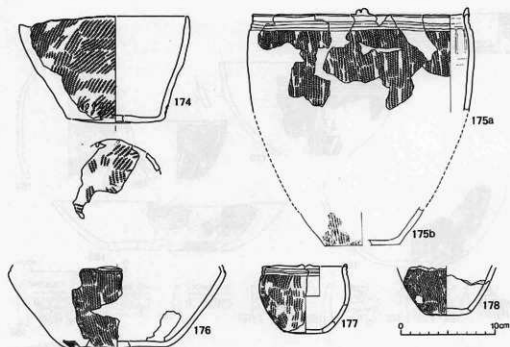
大洞C₁式に相当するもの(174) N-72-c・d区から出土した鉢形土器。器面と底面にはLR原体による斜行縄文が施されている。底部付近には爪による刺突文が2条めぐっている。

大洞C₂式に相当するもの(175~221) 59個体得られている。これらには道南の亀ヶ岡系(202~206)に関連する土器、桃内式(180・181)に関連する土器がわずかながら出土している。器形には深鉢形、鉢形、皿形、壺形がある。

深鉢形(175・178・185~201) 口縁部の無文帯に沈線を2・3条施すもの(175、185・201)、縄文地に沈線を施すもの(186~199)、口縁部が無文のもの(200)がある。口唇上に棒状工具による刻み目があるもの(185~193、199・200)がある。縄文はRL原体による縦行縄文が多い。

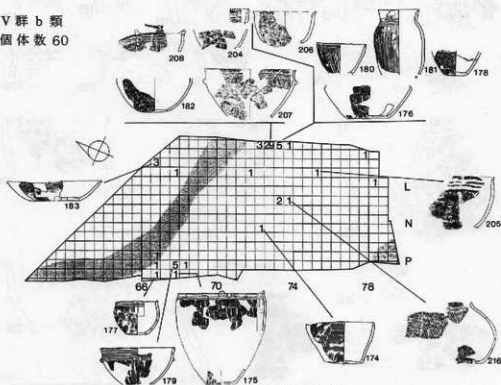
175a・bは調査区西端P-67-c区から出土した。細かく割れた同一個体の破片が179個あったが約半数しか接合できなかった。図上で復元した。口唇断面は角形で、口縁部は僅かに内傾する。口縁部に比較的幅広の沈線が浅く施されている。2個一対の突起がつけられている。185・186・196は細い沈線、187~195、197、198はやや太い沈線を間隔をあけて施している。187は口唇上にも施されている。193・194は口唇上がなでられ角形となっている。201a・bは同一個体。頸部がくびれ肩の張る器形になると思われる。焼成が良く、内、外面とも磨かれ赤褐色を呈する。口唇上にも細い沈線が一条引かれている。178はI-73-b区の晩期の土器の集中区から出土した。

鉢形(176・177・179・180・182・184・202~208) 地文が施されるものでは、口縁の無文部に沈線文が施されるもの(176・177・179・180・182・184・207・208)がある。肩の張る器形のもの(176・184・207)は少なく、丸味を帯びた器形のものが多い。体部にはLR原体(177・184)、RL原体(176・179・207・208)による縦行縄文が施されたもの。条痕文のもの(180)がある。口唇上や肩部に刻み目や刺突文がつけられているものが多くみられる。底部は平底のものと丸底に近いものがある。



図V-32 V群b類土器(1)

V群b類
個体数 60



図V-33 V群b類土器個体別分布図

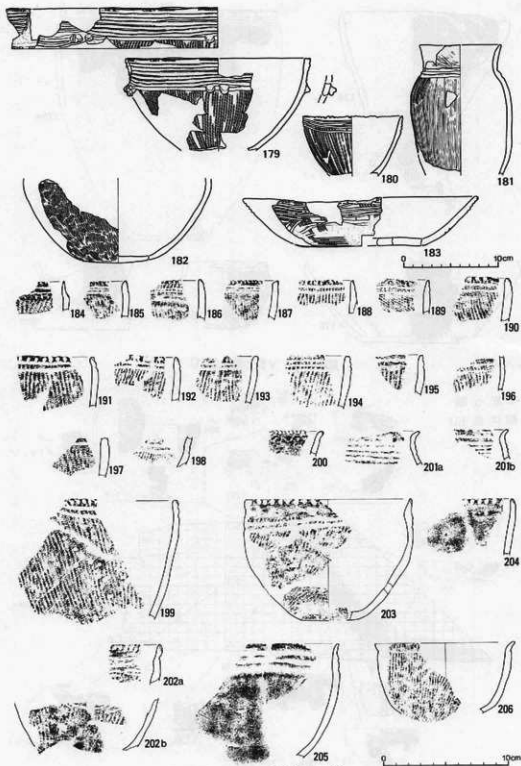
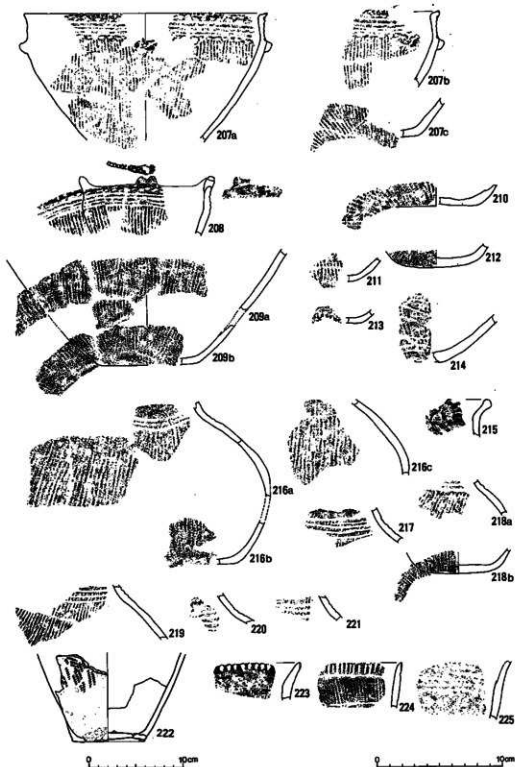


圖 V-34 V群 b 類土器 (2)



圖V-35 V群b類(3), VI群b類(1)土器

176は口縁部は欠損している。全体の6分の1程が残存する。178・181とほぼ同じレベルからまとまって出土した。胴部には刻み目がある。焼成が非常に良く赤褐色を呈する。177は丸味を帯びた小形のもの。175・179などと同じく調査区西端のP-67、O-66区周辺から出土した。口縁部に2個一對の突起がある。179は口縁部が他のものと比べて広く、そこに幅広い沈線を残くやや間隔をあけて施している。口唇断面は角形で口唇上にも浅く沈線がひかれている。口唇角には細かい刻みが部分的にみられる。最下位の沈線間には2個一對の丸形の突起と、一部分は剥落しているが痕跡から判断すると丸形と三角形を組合わせた突起がつけられている。これらの突起上は溝状の沈線で刻まれている。207a～cは同一個体。数条施された沈線の下位に粘土を貼り付け、その半ばに刻みを入れることで2個一對の突起となっている。突起上は三角形に刻まれている。208は最上位の沈線の上位の無文部分に刺突文がある。口縁には2個一對の突起があり、突起上と裏面には三叉文状の深い刻みがある。

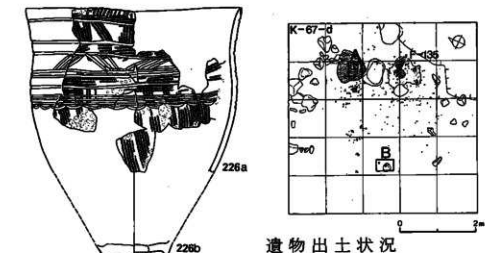
202～206は浜中大曲式に関連すると思われる資料である。いずれも薄手で小形の器形のもの。202～204の口唇は薄手で尖り気味。棒状工具で刻み目がつけられている。202a・bは同一個体。口縁の無文の部分から胴部上半の縄文の施された部分に沈線で曲線の文様が描かれている。203はLR原体による斜行縄文が施されたもので頸部に太い沈線が2条粗く施されている。204は胎土、焼成、色調が前2者と類似する。緩やかな波状口縁をなすとみられる。205は無文地に3条沈線が施されている。口唇内面は磨かれている。206は203と類似の器形のもの。細い沈線が頸部のくびれ部にある。

皿形(183・214) 183は旧河川跡の南側、J-66-c区からまとまって出土した。5分の1程が残存する。薄手で口唇は丸味を帯び、部分的に細かい刻みがある。原体による縦行縄文地の口縁部と底部に平行沈線をそれぞれ5条、3条ずつ施している。胴部は摩滅して明瞭ではないが入組文かとみられる文様がある。214はやや離れた地点から出土した底部付近の破片であるが同一個体の可能性がある。

壺形(181・215～221) 181は条痕文の施されたもの。全体の3分の1が残存する。頸部が緩やかにくびれ胴部はあまり張り出さず直線的である。条痕文は幅が7、8mmのへら状で先端をいくつかに裂いた施文具によってつけられている。215は突起がある。216a～cは同一個体。破片はL-73-c、L-74-b区から100点以上出土したが接合できた部分が少ないため、図上で器形を想定した。胎土は黄褐色。胴部が強く張り出す丸味を帯びた器形になると思われる。口縁部は無文で頸部には幅広い浅い沈線が3条施されている。217～221も同様の器形になるとみられる。

縄文時代の土器(図V-35・36-222～228、図版V-10-3・4、-19-2)

VI群b類(222～227) 306点出土している。恵山式土器である。6個体程得られているがいずれも深鉢形土器である。



遺物出土状況

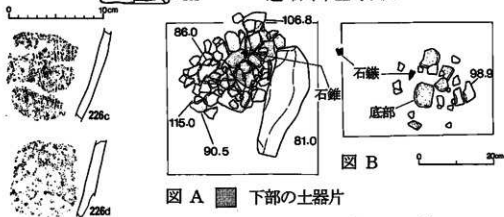


図 A ■ 下部の土器片

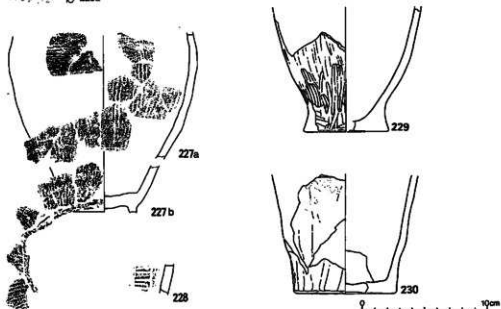


図 V-36 VI群b類(2)・c類, VII群b類土器

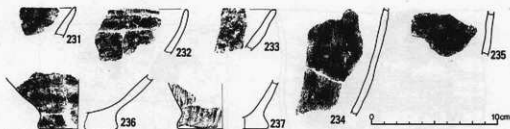


図 V-37 VII群 b 類土器 (2)

VI群 b 類 個体数 6

VII群 b 類 個体数 10 ○印

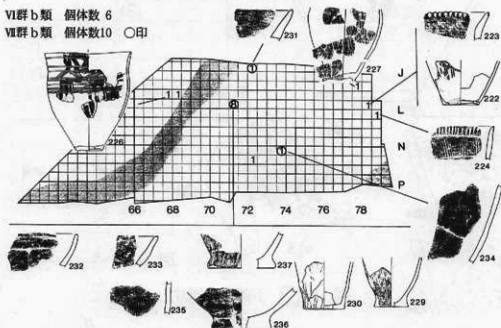


図 V-38 VI群 b 類, VII群 b 類土器個体別分布図

222・223は集中区 1 の南側 K-78-b 区から出土した。あけ底で縦行縄文が施されている。223は口縁が外反し頸部が直立する器形になるとみられる。斜行縄文が施されている。同一個体の可能性がある。224は口縁部に沈線状の刻みと縦行する帯状縄文がつけられている。225は K-68-a 区の河床礫層から一個体のほぼ 4 分の 1 が出土したが摩滅が著しく文様が明瞭ではない。沈線が施されていると思われる。

226 a～d は旧河川の南側、K-67-d 区のアレイク・チップ等、遺物の集中区から出土した。ほぼ同じレベルから焼土 F-135 も検出されている。図 A・B は出土状況図である。図 A の位置からは口縁部から胴部にかけての破片 (226 a) が押しつぶされたような状態で出土した。2 m 程離れた図 B の位置の土器片は胴部の一部 (226 c・d) と底部 (226 b) がまとまりなく散らばった状態であった。底部付近の破片は摩滅が著しくほとんど接合できなかったため図上で器形を復元した。頸部がわずかにくびれ、胴部があまり張りださず直線的にすばまる深鉢形。口唇は尖り気味で、棒状工具により沈線状の刻みがつけられている。胴部上半には縦行

あるいは横走する帯状縄文間を2・3条の平行沈線や、鋸歯状の沈線でうめている。胴下半部は縦行する帯状縄文が施されている。

227a・bはJ-77-c区が破片が93点出土したが部分的にしか接合できなかった。あげ底で器形は226とほぼ同じと思われる。胴上半部には横走する。下半部から底部にかけては縦行する帯状縄文が施されている。

VI群c類(228) 後北式に相当する小片が1点、集中区1から出土している、沈線で区画された中に列点文が施されている。

縄文時代の土器(図V-36・37-229~237、図版V-10-5・6,-19)

VII群b類(229~237)

68点出土している。據文式土器で10個体分得られている。229・230・236・237は深鉢形土器の底部。229・236・237の底部歯大きく張り出す。229・230・237は縦方向のヘラ削りによる調整である。236はナデ調整。231~235は口縁部および、底部の破片。231~233は坏とみられる。

(遠藤香澄)

(3) 石器・石製品

本年度の調査では、総計4131点出土した。石材は、黒曜石3755点、頁岩321点、めのう40点、安山岩2点、玄武岩2点、緑色泥岩4点、片岩1点、その他である。このうち剥片・砕片を除いた石器の合計は98点である。分布をみると(図V-42)、いくつかの大きなまとまりはあるものの、K-67-dの遺物集中区を除けばほとんど単独で出土している。ここでは、加工痕・使用痕のある剥片および欠損による形態の不明なものを除いた52点を図示した。

石鏃(図V-39-1~26)

石鏃は合計37点出土した。石材は黒曜石が32点、頁岩4点、安山岩1点である。

1~4は細身薄手で、柳葉形のものである。1・2は基部が欠損しているが、3・4同様平基鏃と思われる。側縁からの加工は、一側面ごとにほぼ一定方向で漸次加撃点をずらしながら行われており、同様な形態をもつ牛舎川右岸遺跡のものと共通している。

5は五角形鏃である。基部はわずかに内湾している。

6はK-67-d出土の土器片集中Bに伴出した長身凹基鏃で、左面には素材面を残している。右面中央の大きな刻痕は折れた際に生じたものである。

7~14は三角形鏃である。7・8は平基で、8は被熱している。9~14は凹基である。10~14の基部の挟りはいずれも浅く、わずかに湾曲する程度のものである。これらの三角形鏃は、7がK-68-aから出土した他はすべてK-67-dからの出土である。

15~26は有茎鏃である。このうち15~21はかえしの不明瞭な有茎鏃である。15は両面に素材面を残している。16~20は最大幅が中央ないしはやや上にある。21・22は細身で厚みがあり、最大幅が下部にある。23~26はかえしの明瞭な有茎鏃である。23は身の側縁が直線的でかえしの幅が狭い。24は側縁が内湾している。25は身の長さと同幅がほぼ同じで断面が山形を呈している。26はかえしがわずかに内湾している。

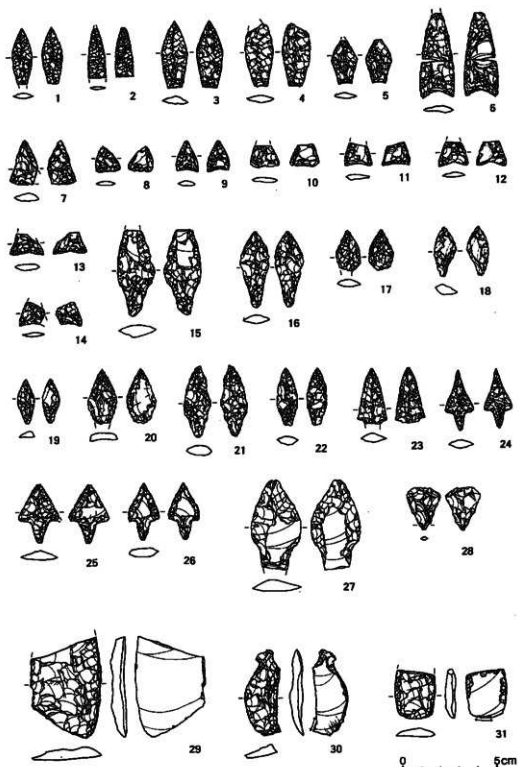
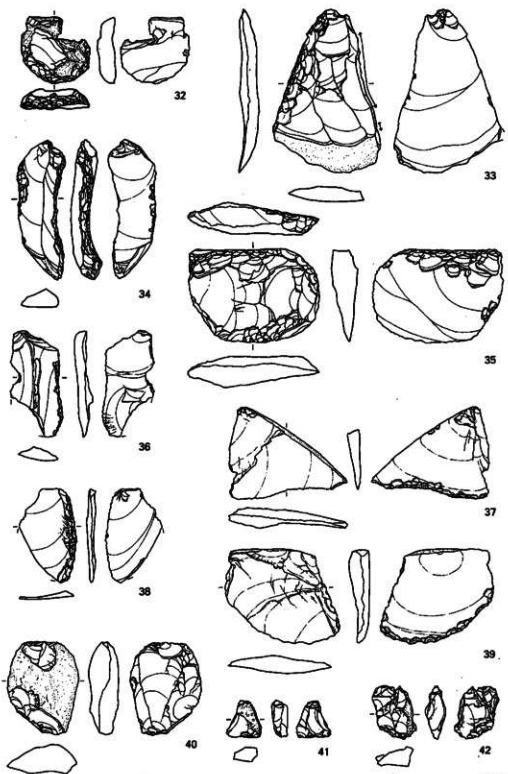
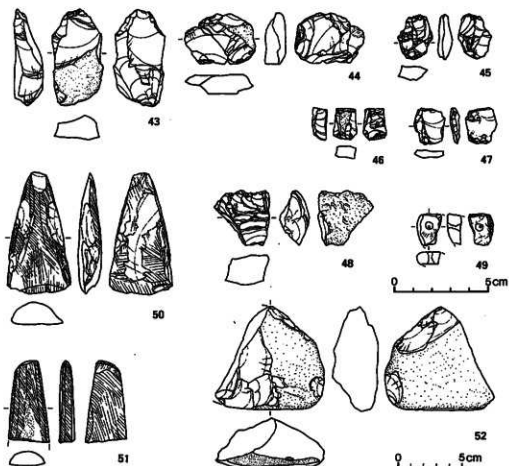


図 V-39 包含層出土の石器(1)



図V-40 包含層出土の石器(2)



図V-41 包含層出土の石器、石製品(3)

石槍 (図V-38-27)

頁岩のものが1点出土している。両面ともに素材面を残すが、左面が主要剥離面である。先端には使用の際に生じたと思われる槌状の剥離痕を残している。

石錐 (図V-38-28)

K-67-dの土器片集中Aの上から出土した。石錐と同じ形態をしているが厚みがあり、先端はつぶれている

つまみ付きナイフ (図V-39-29~31)

29・30はいずれも稜線が右により、裏面には表面より古い剥離群をもっている。表面の剥離の順序は、29が左側面-先端部-右側面、30が左側面-右側面-先端部となっている。いずれも角度の急な右側面が左側面より新しい。31は右側面-左側面-先端部の順序である。裏面にも若干の加工を施している。

スクレイパー (図V-40-32~39)

8点出土している。32は黒曜石製の円形搔器である。33~36・39は頁岩製。33は刃部とは逆

の側縁に微細な剥離痕が認められる。また、主要剥離面には35と同様バルブ除去のために加工が施されている。37・39は玄武岩製の横長剥片の端部に加工を施したもので、同一母岩と思われる。素材は円礫である。

楔形石器 (図V-40-40~図V-40-47)

40は円礫を素材としている。石核とも考えられるが、対応する上下両端に潰れ痕が認められること、大きな剥離面が平坦で剥離方向が一点に集中していることから楔形石器と判断した。裏面の右からの剥離面は分割面と思われる。41・42・44は粗粒のメノウの円礫を素材とし、同一母岩と思われる。42・44は使用の際に生じたと思われる剥片が接合した。他にも削片を含む10点程度の同一母岩の剥片が出土している。45~47は黒曜石のもので上下両端は潰れ、側面には槓状の剥離痕が認められる。

石核 (図V-41-48)

円礫を素材とし、3方向から剥片を剥離している。右側面は剥離する以前の折れ面、左側面は剥片剥離以後の折れ面である。

垂飾品 (図V-41-49)

大部分が欠損しており、形態は不明である。上面、側面には粗い研磨痕を残しており、穿孔は2方向から行われている。石材は滑石である。

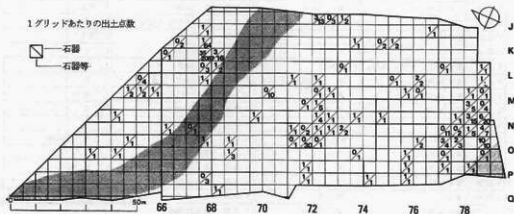
石斧 (図V-41-50・51)

50は厚手の剥片を素材としているものと思われ、左右両面に剥離痕を残す。刃部の研磨は主に裏面から行われており、表面の刃部には使用の際に生じたと思われる擦痕が縦方向に走っている。51はのみ形石斧の基部である。石斧は他に片岩製の胴部片が1点出土している。

すり石 (図V-41-52)

安山岩の河床礫を利用している。形態を整えるための剥離が上部に施されている。

(山原敏朗)



図V-42 石器分布図

表V-6-(1) 掲載土器一覧

神図番号	分類	発掘区	層位	標高(m)	神図番号	分類	発掘区	層位	標高(m)
V-30-1a	I a	M-77-a, M-78-b, O-78-a	Ⅱ上		V-32-43	Ⅱ b	P-71-d	Ⅱ	
V-30-1b	I a	M-77-a, N-77-c, N-78-b	V, Ⅱ上		V-32-43a	Ⅱ b	J-76-d	Ⅱ	
V-30-1c	I a	M-78-b, N-78-b	Ⅱ, Ⅱ上		V-32-43b	Ⅱ b	J-76-c	Ⅱ	
V-30-2a	I b	J-73-b	Ⅱ		V-32-43c	Ⅱ b	J-77-d	Ⅱ	
V-30-2b	I b	J-73-b	Ⅱ		V-32-44	Ⅱ b	L-76-b	Ⅱ	
V-30-3	I b	N-78-d	Ⅱ	103.44	V-32-45	Ⅱ b	K-78-b	Ⅱ	
V-30-4	I b	N-78-d	Ⅱ	103.34	V-32-46	Ⅱ b	M-78-d	Ⅱ	103.32
V-30-5	I b	N-78-d	Ⅱ	103.22	V-32-47	Ⅱ b	N-78-d	Ⅱ	103.40
V-30-6	I b	N-78-c	I		V-32-48	Ⅱ b	J-78-a	Ⅱ	
V-30-7	I b	N-78-a	Ⅱ	103.31	V-32-49	Ⅱ b	K-78-c	Ⅱ	104.09
V-30-8a	Ⅱ a	N-78-d	Ⅱ, Ⅱ上	上103.03, 下103.23	V-32-50	Ⅱ b	M-78-b	Ⅱ	103.97
V-30-8b	Ⅱ a	N-78-a-d	Ⅱ	上103.35, 下103.35	V-32-51	Ⅱ b	M-78-b	Ⅱ	103.83
V-32-9	Ⅱ a	N-78-d	Ⅱ	103.30, 103.30	V-32-52	Ⅱ b	M-78-c	Ⅱ	103.35
V-32-10a	Ⅱ a	M-78-d	Ⅱ	104.05	V-32-53	Ⅱ b	L-71-a	I	
V-32-10b	Ⅱ a	M-78-b	Ⅱ		V-32-54	Ⅱ b	L-77-d	Ⅱ	
V-32-10c	Ⅱ a	M-78-b	Ⅱ	104.05	V-32-55	Ⅱ b	N-73-d	Ⅱ	
V-32-10d	Ⅱ a	M-78-c	Ⅱ, Ⅱ上	103.68	V-32-56	Ⅱ b	N-73-a	Ⅱ	
V-32-11	Ⅱ a	M-78-b	Ⅱ	103.66	V-32-57	Ⅱ b	P-71-d	Ⅱ	
V-32-12	Ⅱ a	M-78-c	Ⅱ	103.98	V-32-58a	Ⅱ b	M-78-b	Ⅱ	
V-32-13	Ⅱ a	N-78-d	Ⅱ	103.35	V-32-58b	Ⅱ b	M-78-b	Ⅱ	103.98, 103.97
V-32-14a	Ⅱ a	L-78-c	Ⅱ	104.44	V-32-59	Ⅱ b	K-77-a	Ⅱ	
V-32-14b	Ⅱ a	L-78-b	Ⅱ		V-32-60	Ⅱ b	M-78-b	Ⅱ	
V-32-15	Ⅱ a	M-78-b	Ⅱ	103.74, 103.70	V-32-61	Ⅱ b	K-77-d	Ⅱ	
V-32-16	Ⅱ a	N-78-d	Ⅱ	103.35, 103.22	V-32-62	Ⅱ b	M-78-b	Ⅱ	
V-32-17	Ⅱ a	N-78-d	Ⅱ	103.68, 103.35	V-32-63	Ⅱ b	J-75-b	Ⅱ	
V-32-18	Ⅱ a	J-74-b	Ⅱ		V-32-64	Ⅱ b	J-78-c	Ⅱ	
V-32-19	Ⅱ a	J-77-c	Ⅱ上		V-32-65	Ⅱ b	P-68-a	Ⅱ	
V-32-20	Ⅱ a	N-78-a	Ⅱ	103.30	V-32-66	Ⅱ b	K-75-c	Ⅱ	
V-32-21	Ⅱ a	L-78-b	Ⅱ		V-32-67	Ⅱ b	J-74-a	Ⅱ	
V-32-22	Ⅱ a	L-78-b	Ⅱ		V-32-68	Ⅱ b	K-74-d	Ⅱ	
V-32-23	Ⅱ a	L-78-a	Ⅱ		V-32-69	Ⅱ b	K-74-b	Ⅱ	
V-32-24	Ⅱ a	K-77-a	Ⅱ		V-32-70	Ⅱ b	L-77-d	Ⅱ	
V-32-25	Ⅱ a	K-78-b	Ⅱ上		V-32-71	Ⅱ b	J-78-c	Ⅱ	
V-32-26	Ⅱ a	M-78-b	Ⅱ	103.76	V-32-72	Ⅱ b	M-78-a	Ⅱ	
V-32-27	Ⅱ a	M-78-b	Ⅱ	103.84	V-32-73	Ⅱ b	K-78-b	Ⅱ上	
V-32-28	Ⅱ a	M-73-b	Ⅱ		V-32-74	Ⅱ b	K-77-b, L-78-a, L-77-a	Ⅱ	
V-32-29	Ⅱ a	J-78-a	Ⅱ		V-32-75	Ⅱ b	L-78-a	Ⅱ上	
V-32-30	Ⅱ a	L-77-a	Ⅱ		V-32-76	Ⅱ b	J-74-c	Ⅱ	
V-32-31	Ⅱ b	L-71-a, L-78-a, N-71-a	I, Ⅱ, Ⅱ上		V-32-77	Ⅱ b	J-73-a	Ⅱ	
V-32-32	Ⅱ b	M-78-b-c	Ⅱ	上103.83, 下103.58	V-32-78	Ⅱ b	K-77-c	I	
V-32-33	Ⅱ b	N-73-b	Ⅱ		V-32-79	Ⅱ b	N-73-d	Ⅱ	
V-32-34	Ⅱ b	L-75-a	Ⅱ		V-32-80	Ⅱ b	M-78-b	Ⅱ	
V-32-35	Ⅱ b	L-73-b	Ⅱ		V-32-81	Ⅱ b	K-77-c	Ⅱ	
V-32-36	Ⅱ b	J-77-a	Ⅱ上		V-32-82	Ⅱ b	N-78-a	Ⅱ	103.36
V-32-37	Ⅱ b	L-77-a	Ⅱ		V-32-83	Ⅱ b	K-74-d	Ⅱ	
V-32-38	Ⅱ b	K-78-b	Ⅱ		V-32-84	Ⅱ b	J-74-c	Ⅱ	
V-32-39	Ⅱ b	J-75-a	Ⅱ		V-32-85	Ⅱ b	J-75-a	Ⅱ	
V-32-40	Ⅱ b	L-75-c	Ⅱ		V-32-86	Ⅱ b	L-73-d	Ⅱ	
V-32-41	Ⅱ b	L-78-d	Ⅱ	104.05	V-32-87	Ⅱ b	L-73-d	Ⅱ	

表V-6(2) 掲載土器一覧

埋蔵番号	分類	発掘区	層位	標高(m)	埋蔵番号	分類	発掘区	層位	標高(m)
V-25-88	Ⅲb	K-74-d	Ⅲ		V-25-132	Ⅳb	L-76-a	Ⅲ, Ⅳ上	上103.63, 下103.62
V-25-89	Ⅲb	K-75-c	Ⅲ		V-25-133	Ⅳb	L-76-d	Ⅲ, Ⅳ上	上103.74, 下103.70
V-25-90	Ⅲb	K-74-d	Ⅲ		V-25-134	Ⅳb	N-78-a	Ⅲ	上103.63, 下103.34
V-25-91	Ⅲb	K-74-d	Ⅲ		V-25-135	Ⅳb	N-78-a	Ⅲ	上103.64, 下103.43
V-25-92	Ⅲb	K-74-d	Ⅲ		V-25-136	Ⅳb	M-78-a	Ⅲ, Ⅳ上	上104.00, 下103.75
V-25-93	Ⅲb	M-78-b	Ⅲ				M-78-b	Ⅲ, Ⅳ上	103.89
V-25-94	Ⅲb	L-77-a	Ⅲ上		V-25-137	Ⅳb	N-78-a	Ⅲ	上103.84, 下103.47
V-25-95	Ⅲb	L-78-a	Ⅲ		V-25-138	Ⅳb	M-78-a	Ⅲ, Ⅳ上	上104.01, 下103.75
V-25-96	Ⅲb	J-75-a	Ⅲ				M-78-b	Ⅲ, Ⅳ上	103.88
V-25-97	Ⅲb	K-75-c	Ⅲ*	104.75	V-25-139	Ⅳb	M-78-a	Ⅲ, Ⅳ上	上103.94, 下103.47
V-25-98	Ⅲb	K-75-c	Ⅲ		V-25-140	Ⅳb	N-78-a	Ⅲ	103.87
V-25-99	Ⅲb	K-74-d	Ⅲ		V-25-141	Ⅳb	K-77-c	Ⅲ	上104.00, 下104.02
V-25-100	Ⅲb	P-85-b	Ⅲ		V-25-142	Ⅳb	N-78-a	Ⅲ, Ⅳ上	上103.84, 下103.47
V-25-101	Ⅲb	J-75-b	Ⅲ				N-78-b	Ⅲ	
V-25-102	Ⅲb	P-85-d	Ⅲ		V-25-143	Ⅳb	N-78-c	Ⅲ	103.85
V-25-103	Ⅲb	M-78-a	Ⅲ	103.84	V-25-144	Ⅳb	N-78-a	Ⅲ	上103.84, 下103.59
V-25-104	Ⅲb	M-78-b	Ⅲ	103.85	V-25-145	Ⅳb	N-78-a	Ⅲ	上103.84, 下103.35
V-25-105	Ⅲb	L-75-c	Ⅲ		V-25-146	Ⅳb	N-78-d	Ⅲ	上103.83, 下103.48
V-25-106	Ⅲb	J-75-d	Ⅲ		V-25-147	Ⅳb	K-75-c	Ⅲ	上104.00, 下104.71
V-25-107	Ⅲb	K-75-d	Ⅲ				L-76-d	Ⅲ	上104.75, 下104.66
V-25-108	Ⅲb	O-85-a	Ⅲ		V-25-148	Ⅳb	K-75-c	Ⅲ	上104.00, 下104.04
V-25-109	Ⅲb	K-75-d	Ⅲ		V-25-149	Ⅳb	N-78-a	Ⅲ	103.53
V-25-110	Ⅲb	L-74-c	Ⅲ		V-25-150	Ⅳb	L-77-a	Ⅲ	
V-25-111	Ⅲb	L-77-a	Ⅲ		V-25-151	Ⅳb	N-78-a	Ⅲ上	
V-25-112	Ⅲb	J-75-d	Ⅲ		V-25-152a	Ⅳb	N-78-c	Ⅲ	
V-25-113	Ⅲb	N-78-a	Ⅲ	103.48	V-25-152b	Ⅳb	N-78-c	Ⅲ	
V-25-114	Ⅲb	L-77-a	I		V-25-152c	Ⅳb	N-78-c	Ⅲ	
V-25-115	Ⅲb	M-78-c	Ⅲ上		V-25-153	Ⅳc	K-78-b	Ⅲ	
V-25-116	Ⅲb	K-75-c	Ⅲ				M-78-a	Ⅲ	104.10
V-25-117	Ⅲb	M-78-b	Ⅲ		V-25-154a	Ⅳc	M-78-c	Ⅲ	103.70
V-25-118	Ⅲb	J-75-d	I		V-25-154b	Ⅳc	M-78-c	Ⅲ	103.63
V-25-119	Ⅲb	O-75-c	Ⅲ		V-25-155	Ⅳc	M-78-c	Ⅲ	103.86
V-25-120	Ⅲb	M-78-a	Ⅲ	104.21	V-25-156	Ⅳc	L-78-d	Ⅲ	104.71
V-25-121a	Ⅲb	L-75-b, d	Ⅲ		V-25-157	Ⅳc	M-78-d	I	
V-25-121b	Ⅲb	L-75-b+c+d	Ⅲ		V-25-158	Ⅳc	M-78-c	Ⅲ上	
V-25-122	Ⅲb	J-75-b, J-75-a, J-75-d	Ⅲ		V-25-159	Ⅳc	M-80-d	Ⅲ	
V-25-123	Ⅲb	J-75-c	Ⅲ		V-25-160	Ⅳc	N-71-c, N-72-b	I, Ⅲ	
V-25-124	Ⅲb	M-78-c	Ⅲ	103.71	V-25-161	Ⅳc	L-78-a	Ⅲ	
V-25-125	Ⅲb	M-78-b	Ⅲ	103.82	V-25-162	Ⅳc	N-78-d	Ⅲ	103.47, 103.16
V-25-126	Ⅲb	J-72-c	Ⅲ		V-25-163	Ⅳc	N-78-a	Ⅲ	上103.44, 下103.80
V-25-127	Ⅲb	L-78-d	Ⅲ						
V-25-128	Ⅲb	K-74-d	Ⅲ						
V-25-129	Ⅲb	O-75-b	Ⅲ						
V-25-130	Ⅲb	L-77-a	Ⅲ						
V-25-131	Ⅳb	K-75-c	Ⅲ	上104.00, 下104.08					
		K-75-d	Ⅲ						
		L-76-d	Ⅲ	上103.75, 下104.03					

表V-6-(3) 掲載土器一覧

群器番号	分類	発掘区	層位	標高(m)	群器番号	分類	発掘区	層位	標高(m)
V-39-164a	IV c	N-78-a	Ⅱ		V-34-228a	V b	I-72-c	Ⅱ	
		N-78-c	Ⅱ		V-34-228b	V b	I-72-c	Ⅱ	
		N-78-d	Ⅱ上	上100.94, 下100.11	V-34-229	V b	I-72-b	I	
V-39-164b	IV c	N-78-d	Ⅱ	上101.47, 下101.26	V-34-230	V b	I-72-c	Ⅱ	
V-39-164c	IV c	N-78-d	Ⅱ, Ⅱ上	上101.25, 下101.14	V-34-230b	V b	K-75-a	Ⅱ	
V-39-165	IV c	N-78-b	Ⅱ上		V-34-230c	V b	I-72-b	Ⅱ	
V-39-166a	IV c	N-78-d	Ⅱ上		V-35-207a	V b	I-72-a, I-72-b-c	Ⅱ	
V-39-166b	IV c	N-78-c	Ⅱ上		V-35-207b	V b	I-72-a, I-72-b	Ⅱ	
V-39-167	IV c	N-78-d	Ⅱ	101.22	V-35-207c	V b	I-72-c	Ⅱ	
V-39-168	IV c	N-78-d	Ⅱ	101.27, 101.27	V-35-208	V b	I-72-c	Ⅱ	
V-39-169	IV c	N-78-c	I		V-35-209	V b	I-72-a, I-72-b	Ⅱ	
V-39-170	IV c	N-78-d	Ⅱ	101.25	V-36-210	V b	P-67-c	Ⅱ	
V-39-171	IV c	K-78-c	Ⅱ	104.75	V-36-211	V b	J-66-c	Ⅱ	
V-39-172	IV c	N-78-c	I		V-36-212	V b	I-72-b	Ⅱ	
V-39-173	IV c	N-78-b	Ⅱ		V-36-213	V b	I-72-b	Ⅱ	
V-39-174	V b	N-72-a-b	I, Ⅱ, Ⅱ上		V-36-214	V b	K-67-d	Ⅱ	
V-39-175a	V b	P-67-d	I, Ⅱ		V-36-215	V b	I-72-c	Ⅱ	
V-39-175b	V b	P-67-d	I		V-36-216a	V b	L-72-c	Ⅱ	
V-39-175c	V b	I-72-c	Ⅱ		V-36-216b	V b	L-74-b	Ⅱ	
V-39-175d	V b	I-72-b	Ⅱ	上101.61, 下101.16	V-36-216c	V b	L-72-c, L-74-b	Ⅱ	
V-39-177	V b	O-66-c	Ⅱ上		V-36-217	V b	I-72-c	Ⅱ	
V-39-178	V b	I-72-b	Ⅱ		V-36-218a	V b	K-74-d	Ⅱ	
V-39-179	V b	P-67-d	I, Ⅱ		V-36-218b	V b	K-74-d	Ⅱ	
V-39-180	V b	I-72-c	Ⅱ		V-36-219	V b	I-72-c	Ⅱ	
V-39-181	V b	I-72-c	Ⅱ	上101.16, 下101.13	V-36-220	V b	I-72-c	Ⅱ	
V-39-182	V b	I-72-b	Ⅱ		V-36-221	V b	I-72-c	Ⅱ	
V-39-183	V b	J-66-c	Ⅱ下		V-36-222	Ⅱb	I-72-c	Ⅱ	上104.55, 下104.56
V-39-184	V b	I-72-c	Ⅱ		V-36-223	Ⅱb	K-75-b	Ⅱ	
V-39-185	V b	I-72-c	Ⅱ		V-36-224	Ⅱb	N-72-b	Ⅱ	
V-39-186	V b	I-72-c	Ⅱ		V-36-225	Ⅱb	K-68-a	Ⅱ	
V-39-187	V b	I-72-b	Ⅱ		V-36-226a	Ⅱb	K-67-d	Ⅱ	上115.00, 下81.00
V-39-188	V b	I-72-c	Ⅱ		V-36-226b	Ⅱb	K-67-d	Ⅱ	Ⅱ
V-39-189	V b	K-71-d	Ⅱ		V-36-226c	Ⅱb	K-67-d	Ⅱ	Ⅱ
V-39-190	V b	I-72-c	Ⅱ		V-36-226d	Ⅱb	K-67-d	Ⅱ	Ⅱ
V-39-191	V b	P-66-a	Ⅱ		V-36-227a	Ⅱb	J-77-c	Ⅱ上	
V-39-192	V b	I-72-c	Ⅱ		V-36-227b	Ⅱb	J-77-c	Ⅱ上	
V-39-193	V b	I-72-b	Ⅱ		V-36-228	Ⅱc	L-75-d	Ⅱ	
V-39-194	V b	I-72-c	Ⅱ		V-36-229	Ⅱb	K-71-b	I	
V-39-195	V b	P-67-d	I		V-36-230	Ⅱb	K-71-b	I	
V-39-196	V b	J-66-c	Ⅱ		V-37-231	Ⅱb	I-72-b	I	
V-39-197	V b	P-66-c	I		V-37-232	Ⅱb	K-71-b	I	
V-39-198	V b	I-72-c	Ⅱ		V-37-233	Ⅱb	K-71-b	I	
V-39-199	V b	P-66-d	Ⅱ		V-37-234	Ⅱb	N-72-d	Ⅱ	
V-39-200	V b	I-72-c	Ⅱ		V-37-235	Ⅱb	L-71-a	I	
V-39-201a	V b	I-72-c	Ⅱ		V-37-236	Ⅱb	K-71-b	I	
V-39-201b	V b	I-72-c	Ⅱ		V-37-237	Ⅱb	K-71-b	I	

表V-7 地蔵石・石製品一覧

() は、現存値

碑記番号	発掘区	遺物番号	器種	長さ×幅×厚さ (mm)	重さ (g)	石材	層位	備考
V-39-1	L-67-d	1	石礎	(3.0) × 1.1 × 0.3	(0.8)	頁岩	河床層	
V-39-2	K-78-c	120	"	(3.6) × 1.3 × 0.2	(3.4)	黒曜石	VI	
V-39-3	O-71-c	2	"	3.6 × 1.4 × 0.4	1.5	"	"	
V-39-4	N-68-c	4	"	(3.4) × 1.5 × 0.4	(1.8)	"	"	
V-39-5	L-75-c	2	"	(3.3) × 1.4 × 0.4	(3.7)	"	"	
V-39-6	K-67-d	293	"	(4.5) × 1.8 × 0.4	(2.8)	"	"	
V-39-7	K-68-a	3	"	2.3 × (1.5) × 0.4	(1.1)	"	河床層	
V-39-8	K-67-d	444	"	1.4 × 1.3 × 0.2	0.4	"	VI	被熱
V-39-9	K-67-d	275	"	1.7 × 1.2 × 0.3	0.4	"	"	
V-39-10	K-67-d	32	"	(1.2) × 1.5 × 0.3	(0.3)	頁岩	"	被熱?
V-39-11	K-67-d	10	"	(1.1) × 1.8 × 0.4	(0.5)	黒曜石	"	
V-39-12	K-67-d	308	"	(1.2) × (1.5) × 0.3	(0.5)	"	"	
V-39-13	K-67-d	443	"	(1.3) × 1.6 × 0.3	(3.2)	"	"	
V-39-14	K-67-d	445	"	(1.8) × (1.2) × 0.3	(0.4)	"	"	
V-39-15	M-69-c	1	"	(4.6) × 2.0 × 0.7	(4.2)	"	I	
V-39-16	K-68-b	2	"	4.0 × 1.5 × 0.5	2.0	"	VI	
V-39-17	M-78-c	52	"	2.7 × 1.3 × 0.6	1.5	安山岩	"	
V-39-18	J-76-d	2	"	(3.2) × 1.3 × 0.4	(0.9)	黒曜石	"	
V-39-19	N-78-a	201	"	2.4 × 0.9 × 0.3	0.5	"	"	
V-39-20	N-78-a	5	"	(3.0) × 1.6 × 0.4	(1.9)	"	"	
V-39-21	L-78-d	75	"	3.8 × 1.4 × 0.6	2.8	"	"	
V-39-22	M-78-a	23	"	(3.1) × 1.1 × 0.4	(1.2)	"	"	
V-39-23	N-78-d	155	"	(3.0) × 1.6 × 0.5	(1.5)	"	"	
V-39-24	L-78-b	1	"	3.2 × 1.5 × 0.5	1.0	"	"	
V-39-25	N-78-a	3	"	3.1 × 2.2 × 0.5	1.9	"	"	
V-39-26	P-71-d	2	"	3.0 × 1.6 × 0.5	1.6	頁岩	"	
V-39-27	N-66-a	1	石枕	(4.8) × 2.6 × 0.6	(7.0)	"	河床層	
V-39-28	K-67-d	3	石礎	2.3 × 1.8 × 0.6	1.8	黒曜石	VI	
V-39-29	L-71-a	3	つまみ付ナイフ	(5.4) × 3.6 × 0.8	(14.5)	頁岩	I	
V-39-30	M-78-c	76	"	3.2 × 2.0 × 0.7	4.2	"	VI	
V-39-31	M-78-d	144	"	(2.6) × 2.1 × 0.6	(3.4)	"	"	
V-40-32	J-75-b	6	ステレィパー	3.6 × 3.7 × 1.0	(11.8)	黒曜石	"	
V-40-33	P-74-a	2	"	9.5 × 7.0 × 1.0	40.6	頁岩	"	
V-40-34	O-68-d	5	"	7.4 × 2.6 × 1.4	21.1	"	I	
V-40-35	N-71-a	4	"	5.0 × 7.0 × 2.5	47.6	"	VI	
V-40-36	J-74-c	10	"	(5.8) × (2.8) × 0.6	(3.3)	"	"	
V-40-37	I-72-b	2	"	4.9 × 6.2 × 1.1	18.3	玄武岩	"	
V-40-38	P-68-b	2	"	5.0 × (3.5) × 0.3	(5.1)	頁岩	"	
V-40-39	L-72-c	1	"	5.0 × 6.0 × 1.1	30.7	玄武岩	"	
V-40-40	N-67-c	1	楔形石蓋	5.0 × 3.5 × 1.6	33.8	めのう	"	
V-40-41	M-78-b	66	"	2.0 × 1.8 × 0.9	2.4	"	"	
V-40-42	M-78-c	8-10	"	2.8 × 2.3 × 1.1	5.9	"	"	
V-41-43	N-78-c	3	"	5.2 × 2.7 × 1.5	18.4	頁岩	I	
V-41-44	M-78-b M-78-c N-78-d	72 59 66	"	2.7 × 3.7 × 1.1	11.4	めのう	VI	3点接合
V-41-45	I-72-b	7	"	2.5 × 1.8 × 0.8	2.8	黒曜石	I	2点接合
V-41-46	L-76-a	5	"	1.5 × 1.3 × 0.5	1.6	"	VI	
V-41-47	L-76-a	5	"	1.9 × 1.7 × 0.5	1.4	"	"	
V-41-48	M-72-a	3	石枕	2.9 × 2.9 × 1.6	10.6	"	"	
V-41-49	M-78-c	34	垂飾品	(1.7 × 1.4 × 0.8)	(2.3)	燧石	"	
V-41-50	I-73-b	9	石片	6.5 × 3.3 × 1.2	63.3	褐色黒岩	"	
V-41-51	N-72-a	4	"	(4.8 × 2.2 × 0.8)	12.0	"	"	
	M-72-c	1	"	(9.5 × 3.5 × 2.3)	(99.5)	片岩	I	写真参照 V.33.2
V-41-52	M-78-d	3	すり石	(8.3 × 8.6 × 3.9)	(277.6)	安山岩	VI	

4 まとめ

(1) 土 器 (図V-43~45)

本年度の調査では5,529点出土している。点数は少ないものの縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期・統縄文時代、埴文時代の遺物がある。既に述べたように遺物は旧河川の南端(集中区1、2)に集中しているが、旧河川と現河川にはさまれた地区のように後世の農耕や土地造成による削平のため攪乱をうけ遺物が本来の位置をとどめないと思われる状態のところもみられる。各時期の土器の分布の傾向といくつかの特色をまとめておくこととする。

縄文時代早期(I群)

少数ながらa類とb類が出土している。a類では昨年度出土した物見台系の土器に接合する破片が得られている。同系統の土器は本遺跡の海岸よりに位置する南稲府5遺跡(大沼ほか1983)からも出土している。繊維条痕文が施された資料(2a・b)は昨年出土した資料(北埋蔵61 P-173、図V-41-5)と胎土・焼成が類似している。

b類は東剣路IV式に相当するものが集中区2から得られている。これらは条の太い原体による自縄自巻あるいは墨糸文とみられるもので、比較的新しい段階のものと思われる。

縄文時代前期(II群)

竹管状工具による押し引き文や、縄文で特徴づけられる尖底の春日町式・トドホッケ式に相当する土器が集中区2の南側から得られている。器形が復元できたものは1個体であるが、ほかにほぼ6個体分の破片が得られている。

春日町式は故児玉作左衛門氏によって命名(児玉・大場 1953)された土器群で、春日町遺跡(児玉・大場 1954)出土の資料のうち二群A類~C類に相当するものである。竹管文が多いものとして特徴づけられたトドホッケ式(吉崎 1965)を含むものである。

分布は函館を中心とした渡島半島に多く、青森県下北方面(青森県教委 1981, 1984)にまでおよんでいる。道南では函館市栗川町遺跡(大場 1955)、松前町高野遺跡(峰山ほか 1974)、同白坂遺跡第1地点(久保 1982)、恵山町日ノ浜砂丘1遺跡(久保 1986)、木古内町鶴岡2遺跡(鈴木 1989)、戸井町姥子川2遺跡(古屋敷 1989)で報告されており、又収蔵品として根法華村出土の尖底土器、尻岸内町(現恵山町)日ノ浜遺跡の資料(林 1982)が知られている。噴火湾沿岸での出土例は極めて少ないが本遺跡に近い上板台地尖底貝塚B地点(名取・峰山 1959)から土器片が2点得られている。道央部では苫小牧市柏原17遺跡(宮部 1985)、千歳市美沢1遺跡(道教委 1978)、同美沢4遺跡(道埋文 1980)に出土例がある。断片的な資料が多い中で最近の報告では白坂第1地点、日の浜砂丘1、柏原17遺跡からまとまった資料が得られており、遺跡毎に文様要素や施文法に微妙な違いが見られる。

本遺跡出土の資料は春日町二群A類、B類、C類に相当するものである。胎土に繊維を含み焼成が良く内面や口唇上をみがくものである。

器形が復元でき文様構成がわかる土器(8)は、緩やかな波状口縁をなす砲弾形で、複筋の原体を方向を替えて施し縦方向の羽状縄文がほぼ全面に施されている。押し引き文による文様は

胴半ばから底部に限られるもので、基本的には二群B類に含まれるものと思われるが、押し引きの文様構成がやや異なる。二群B類は、器面の大部分に乱雑な斜行縄文や羽状縄文を施し、口頸部や底部に限って数条、押し引き文を横環させるものである。本遺跡の土器は地文の縄文は整然と施され、文様構成は複雑である。押し引き文を数条横環させそれに重ねて、あるいは区切る様に同心円状に楕円形の文様を描く手法や、波状あるいは鋸歯状の文様を描くという構成はむしろ日ノ浜遺跡出土の資料や日ノ浜砂丘1遺跡のV群1・2類土器（第37図67・68）に類似のものである。

複節の原体による縦方向の羽状縄文のものは、白坂第1地点、日ノ浜砂丘1、柏原17遺跡に類例があり、白坂第1地点ではまとまって出土している。

縄文のみが施されたものは全体の器形を復元できたものはないが、口縁部、胴部片が出土している。口縁部は内面、口唇上さらに表面まで磨かれ、緩やかな波状を呈しやや外反するものである。本遺跡に近接する上板次第塚の下層から出土した土器片と類似の資料である。また胴部が部分的に磨かれるもの（10d, 16, 17）もある。口唇部が入念に磨かれる例や器面を磨く例は白坂第1地点で指摘されている。この時期に特徴的なものとみられる。

結束羽状縄文のものは春日町二群C類に類例が多い。綾格文の施されるものは白坂第1地点に1例みられる。細い撚糸文の施された資料（24～28）は、内面調整、胎土、焼成が本群の他の資料と類似のもので、集中区2から混在して出土したものである。春日町遺跡の報告で青森県ムシリ出土の春日町二群土器（第63図）に相当する資料として紹介された底部が撚糸文のものかとみられる。また、白坂第1地点で春日町式土器と同じ層位から出土した土器片に撚糸文のものがある。本遺跡出土のものは断片的な資料なので、あるいは異なる時期かやや古いものかもしれない。少ない資料で判断するのは無理があるが、本遺跡の資料は日ノ浜砂丘1遺跡のものに類似するものが多いといえよう。

縄文時代中期の土器（Ⅲ群）

旧河川の南側に広く分布する。調査区南端の集中区で特に多い。一個体分がまとまっていることはなく、相当量の個体の破片が細かく割れている状態である。これらには中期後半の天神山式、柏木川式と後続するノグツブⅡ式に相当するものがある。天神山式に相当する土器は旧河川の南側で1個体分がまとまって出土した。口縁部をやや肥厚させ、貼付帯と胴部に半截竹管状工具で刺突が加えられている。天神山式の中でも新しい段階のものともみられる。周辺の遺跡で天神山相当の類例は少なく、虹田町高砂遺跡（大島・百々編 1987）、伊達市有珠善光寺2遺跡（大場ほか 1989）で破片が得られている。柏木川式に相当するものは小さな破片である。縄線文、刺突文、沈線文、貼付帯による文様のものがある。胎土、焼成、内面調整が、あきらかに違う土器（43～46）は道南系のものとみられる。昨年度の調査で指摘されているように、これらの土器は、道南の大安在B式土器と密接な関係があるものと思われる。

またオオバコ回転文が施された資料が1点得られている。後期前半の土器に施文される例は報告が増加しているが、中期後半の例は少なく、苫小牧市美沢1遺跡（道教委 1978）、千歳

市美々3遺跡(道埋文 1990)、茶津貝塚(北海道文化財研究所 1990)から少量検出されている。これらの土器は大安在B式、ノグップⅡ式、北筒式に属するものである。ノグップⅡ式に相当する資料(64)は内面が磨かれ、胎土が稠密である。J-76-C区から出土している。

縄文時代後期の土器(Ⅳ群)

トリサキ式(a類)、手稲式(b類)、堂林式・三ッ谷式(c類)に相当するもので、いずれも調査区南端の集中区1・2から出土している。手稲式土器は特に多くの個体が得られているが集中区以外では散点的である。

トリサキ式(142)は無文地に2本一組の沈線による文様のもので胴部片が1点出土している。

手稲式は既に遺物の集中区の項でも述べた様に(V-3-2)、一個体分がほぼまとまりをもって出土している。深鉢形土器は器形を復元できたものは大形で、器形が多様である。手稲式土器の円熟した段階といえるであろう。磨消縄文のものは1個体(133)のみである。

縄文はすべてLR原体によるもので、後期中葉の時期に特徴的な単節の原体を横位、縦位に回転させる羽状縄文のもの(133~135)もある。

堂林式、三ッ谷式の資料は少量で分布に違いはみられず混在している。前者には鋸歯状の文様を描くものや、平行線や曲線を沈線を描くものがある。口唇断面は切り出し形や尖り気味のものがみられる。後者の資料は口唇断面が丸形や角形になるもので、貼瘤文がつけられたもの(165)がある。沈線は堂林式のものより繊細である。

縄文時代晩期の土器(Ⅴ群)

晩期の土器は大洞C₁式とC₂式に相当するものがある。旧河川をはさんで南側に5ヵ所(A~E)、北側に1ヵ所(F)にほぼまとまっている(図V-45)

大洞C₁式相当の土器は1個体分がD:N-72-a・b区から得られている。上ノ国式のなごりを残す爪形の刺突文があるものである。

大洞C₂式に相当するものは5ヵ所から出土している。最も多く検出されたのは調査区東端のA:I-72・73区を中心とした地区で、685点、38個体分程が得られている。包含層は、さらに東側の調査区域外へも広がっている。札蒨Ⅱ群(野村 1974)に相当するもののほか、C₂式でもやや古手とみられる沈線による曲線の文様が特徴的な浜中大曲式(吉崎 1965)、新しい段階とみられる条痕文が施された桃内式(名取・松下 1964)に関連する資料など地方色の濃い土器も出土している。札蒨Ⅱ群のものは、鉢形土器では肩が張り出す器形のもので、口唇上や肩部に刻み目がつけられるものがある(176,184,207)。

浜中大曲式に関連する資料(202)は虻田町高砂貝塚から類似の文様のある壺形土器が出土している。

条痕文の施された土器(180,181)は、桃内遺跡では施文具は竹管工具で、半截又はそれ以上にさいたもののある角度で何回も引いて施文したものと報告されているが、本遺跡の資料は180が先の尖った単一の棒状工具、181がヘラ状のものの先をいくつかに割った施文具によるものとみられる。

札蒔Ⅱ群の中でも新しい段階に相当すると思われる土器はE：O-66区から得られている(179)。口縁部が広く、施文具をねせて斜めに引くことにより幅広の沈線を生かすので、肩部が丸味をおびる鉢形土器である。最下位の沈線間に2個一対の突起がある。あるいは聖山Ⅰ式くらいかと思われる。隣接する地区から出土した深鉢(175)、鉢形土器(177)も幅広の沈線を生かす手法で肩の張り出さない器形など共通するところがある。

また旧河川の北側、F：J-66-c区から出土した入組文がみられる文様の皿形土器は聖山Ⅰ式に相当するものかもしれない。

昨年度の調査で現稀府川左岸に晩期中葉の住居跡や焼土が検出され土器が濃密に分布していることが知られており、この時期には本遺跡の広い範囲が利用されていたことがうかがえる。

統縄文時代の土器(Ⅵ群)

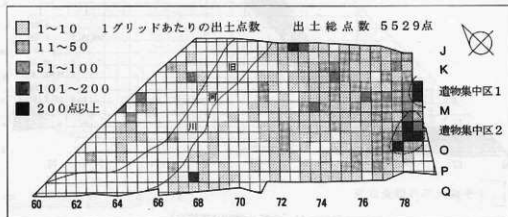
統縄文時代の土器は前期前葉の恵山式(a類)と、後北式(b類)に相当するものが得られている。恵山式土器は旧河川の北側、焼土F-135に隣接するK-68-d区のフレイク・チップを中心とした遺物集中区(226)と、旧河川の河床礫層中(225)及び調査区南側の集中区1(224,227)からそれぞれ一個体分、あるいは数点の破片が出土している。

口縁が外反し、斜行縄文が施されるもの(223)はアヨロ2類(高橋ほか 1980)に対比できるとみられる。

224, 226, 227にみられる口縁が幅広で頸部のくびれない横走・縦行縄文間を平行沈線ด้วยめる文様のものや、横走・縦行する帯状縄文のみのものは新しい段階、アヨロ3a類に対比できよう。後者の時期に併行する沈線と列点文が施された後北式(228)土器が集中区1から出土している。

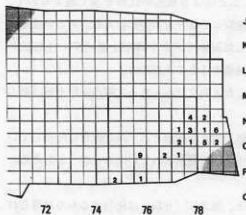
埴文時代の土器(Ⅶ群)

埴文式土器(b類)がK-71-b区から約50点がまとまって出土したほかは散点的である。_
 坏、深鉢の口縁部や底部・胴部の破片である。(遠藤香澄)

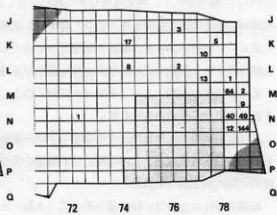


図V-43 土器分布図

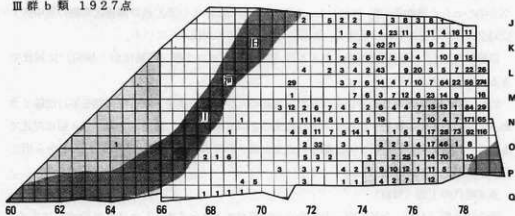
I 群 a 類 4 点 b 類 12 点



II 群 a 類 3 8 0 点

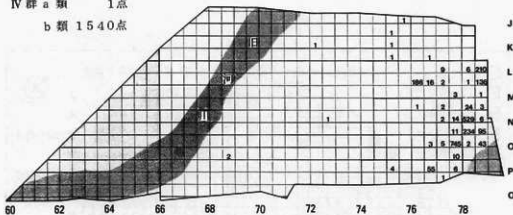


III 群 b 類 1 9 2 7 点



IV 群 a 類 1 点

b 類 1 5 4 0 点

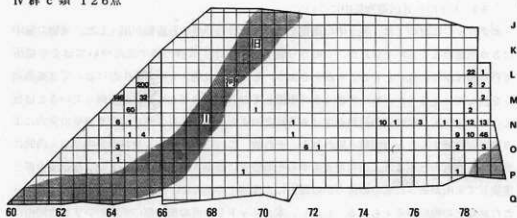


平成元年度調査区域

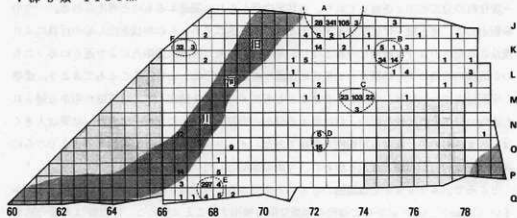
0 50m

図 V-44 土器分類別分布図(1)

IV 群 c 類 126 点

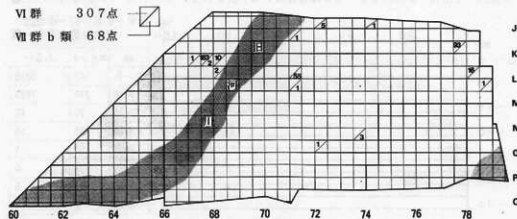


V 群 b 類 1164 点



VI 群 307点

Ⅶ群b類 68点



平成元年度調査区域



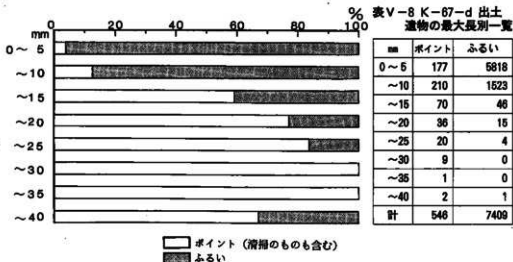
圖 V-45 土器分類別分布(2)

(2) 石 器

a) K-67-d区遺物集中について

本グリッドにおいては、焼土中の遺物も含めて総計7915点の石器類が出土した。遺物の集中は3カ所認めることができたが、このうち焼土(F-135)に伴う集中部についてはその場所で石器製作が行われたとすることができよう。しかし、北西2カ所の集中部においては被熱剥片を含んでいるにもかかわらず焼土とは重複しておらず、必ずしも原位置を保っているとは言えない。2カ所の集中部の被熱剥片はある程度のまとまりがあり、弾け飛びや自然の営力による移動と説明することは困難と思われる。それ故、これらの被熱剥片を含む集中部が人為的に形成されたものとする、遺物が火所からその位置に廃棄されたためか、または本来集中部と重複して火所があったものの何らかの理由による焼土の消失ないしは焼土自体が形成されなかったためなどの説明が考えられる。しかし、本グリッド2カ所の集中部の形成がいずれの理由によるものかはの遡断は難しい。ただ土器片集中Aの西にある集中部については、一部が焼土粒+炭化粒の分布範囲と重複しており、当然集中部もこれに関連するものと考えられる。一つの解釈として、焼土粒+炭化粒は本来焼土として形成されていたものが掻き出し等の行為により攪乱され現状のような散漫な分布となり、集中部も本来は土器片集中Aにより近くにあったものが同様の行為による結果として現在の位置に移動させられたと考えることもできよう。遺物の平面分布については、ポイントを下すとともにメッシュを設定して土壌採取の中から得られた遺物の分布との比較を行い、目に見える分布と実際の分布との比較を試みた。結果は大きくは一致するものの、異なる可能性も指摘できた。メッシュをより小さく設定することでさらに詳細な空間分析が可能となると思われ、今後の課題としたい。

ところで、本グリッドでは遺物のポイントができるだけ記録するとともに土壌を採取し、ふるい(1.4mm×1.4mm)にかけて遺物を可能な限り検出することに努めた。包含層は大部分軟質の黒色土で遺物と間違えるような砂礫等はほとんど含まれていなかった。その結果得られた遺



図V-46 K-67-d区出土石器の最大長別グラフ

物の内訳は、清掃時のものも含め調査中に検出できたものが546点、ふるいにより検出したものが7,369点で、調査中に検出できたものは全体の14.5%にしかない(表V-8)。これは最大長1cm以下の微細な遺物が多いことに大きく起因していると思われる。特に焼土(F-135)の集中部での検出率は5.5%(119/5,856)で、小さく密集している部分ほどサンプリングエラーが大きくなっており、分布の状況によってもエラーの値が異なってくるようである。ちなみに本グリッドから出土した石器は38点あるが、このうちふるいで得られたものは7点あり、18.4%が調査中に見逃されていることになる。

また遺物を最大長別に分類すると(図V-46)、当然小さな遺物ほどエラーが大きくなるものの、漸移的に変化するのではなく、1cm以上と以下とで大きな差が認められる結果となった。1.5cm以上のものになると82.9%が通常の調査で検出できており、このような結果は他の分析とおおよそ同様な傾向となっているものの(桜井1990)、調査の精粗や包含層の状況等、地質的人為的条件の違いから本遺跡ではエラーの割合が大きくなっている。しかし、具体的にその差が何に起因するかは、今後いろいろな条件下でサンプリングエラーの資料を蓄積して考えていく必要があろう。

b) 石器

今年度の調査においては石器の出土数が少なく、明確にその特徴を捉えることが難しい。そのためにいくつかのものについてのみ触れることにする。

K-67-d区からまともって出土した三角形鏃は小形で基部が幅広く、基部の中央がわずかに湾曲するものが多い。本グリッドからはVI群b類(アヨロ3a類相当)の土器のみが出土しており、周辺の包含層からもこの時期以外の土器は出土していないことから、これに共伴するものと考えられる。牛舎川右岸遺跡においても同様の形態のものがアヨロ3a類相当の土器と分布を同じくして出土している。また、遺跡全体では少量であるものの白老町アヨロ遺跡 墓105、瀬棚町南川遺跡 86・148号墓等のアヨロ3a類相当の時期の遺構に比較的にまともって出土しており、このことから当該期のものとしてよいと思われる。

楔形石器は8点出土しているが、このうち頁岩、めのうを石材としているものはいずれも円礫を使用している。図V-40-40や図V-41-43のように円礫を分割した程度のものを利用しているものと図V-40-41・42、図V-41-44のように剥片素材と思われるものがある。ただし後者は、同一母岩と思われる剥片をみると表面の大部分に原礫面を残し、主要剥離面は平坦であり、打点は潰れているかまたは弾け飛んでいることから3点の楔形石器の素材は通常の石核から剥離された剥片を利用したものではない。むしろ3点の楔形石器も図V-40-40や図V-41-43同様、本来は円礫を分割した程度のものが何度かの利用により破砕し小形化したものの、ないしは使用により生じた剥片を再利用したものと思われる。分割した円礫をそのまま楔形石器として利用している例は、石材は異なるが旭川市荻ヶ丘遺跡で出土している。

(山原敏朗)

(3) 稀府川の流路と拠点の変遷

稀府川遺跡は丘陵の斜面から扇状地にかけて立地する遺跡である。稀府川は北と南の丘陵に挟まれた扇状地のやや南寄りを南東から北西に蛇行し、牛舎川と合流して噴火湾に流れている。扇状地を流れる稀府川は過去に幾度も氾濫を繰り返し、流れを変えているのであろう。

2カ年にわたる調査の結果、縄文時代早期から擦文時代に至る遺構・遺物が検出されている。土石流や旧河川を避けるように遺物が出土しているなど、各時期で遺構・遺物の主要な分布域は稀府川の流路の変遷につれて変化したと推定される。便宜上、調査区を南側から順にA地区からD地区まで分けて(図V-47)、流路の変遷などを考えていきたい。

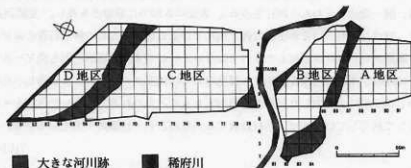
調査区全体で遺構は、竪穴住居跡が6軒と土壇が9基、焼土は142カ所検出された。

竪穴住居跡は昨年度の調査で検出された。縄文時代後期末葉が3軒(H-1・2・5)、縄文時代晩期末葉が3軒(H-3・4・6)である。これらは6軒とも稀府川左岸に位置し、両時期ともA地区に2軒・B地区に1軒と同じパターンである。

P-9を除いた土壇は昨年度の調査で検出されたものである。P-2~8の土壇は縄文時代の所産と考えられるが、時期や構築目的は特定できない。これらは稀府川右岸のB地区南西部に位置する。P-1・9は近代の所産で自家用の小型炭焼きの施設と考えられる。

焼土は128カ所(F-1~128)が昨年度、14カ所(F-129~142)が今年度検出されたものである。焼土のうち時期を特定できるものは僅かである。調査区全体に分布がみられるが、稀府川の両岸付近にやや多い。出土した遺物は大半が土器で石器は少ない。土器は縄文時代後期が多く、次に晩期が多い。石器は剥片石器が大半を占め、石器とフレイク・チップの出土比率は他の遺跡に比べ後者の割合が低い。

ここでは、稀府川の流路と拠点の変遷を時期別にみるため遺物の出土頻度と生活面の地形を考慮して推定してみたい。なお、遺物の出土頻度は隣り合う4つの区域の出土数と平均した値を用いて平滑化し、3段階(1桁・2桁・3桁)の等密度線を引いている。厳密には土石流により押し長されたり、新たな流れが古い時期の遺構・遺物を流失させる場合などが想定され、各時期の活動の場を検討する上で考慮する必要がある。また、図上の流路は流れの規模など不明な点があり正確な流路の位置や幅などを表したものではない。詳細な遺物とその分布については前章および昨年度報告(北埋文1989)を参照していただきたい。

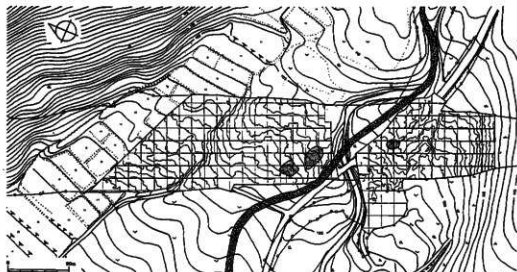


図V-47 河川と地区

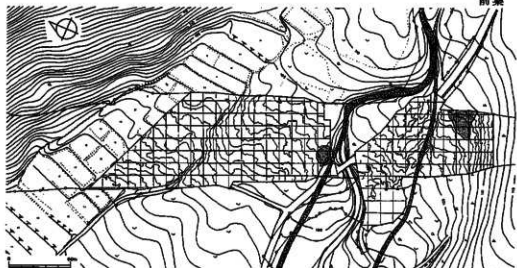
縄文時代早期（図V-48）前葉の稀府川は調査区付近で扇状地の中央を東から西にほぼまっすぐに流れていたと想定される。B地区中央とC地区南西側2ヶ所に土器の分布がみられる。

中葉に至りA地区とB地区の間を流れる流路とC地区の南端を流れる2本の流路が考えられる。A地区東側とC地区南側に土器の分布がみられる。早期は遺物の出土頻度も少なく活動範囲は限られていたと推定される。

縄文時代前期（図V-49）は3本の流路が考えられる。本流はB地区とC地区の間を南東から北西に流れ、細流がB地区とC地区のそれぞれ中央部を東西に貫流していたと想定される。土器の分布はB地区の北側とC地区中央を流れる細流の両岸にみられ、分布の中心域はC地区南側である。活動範囲はC地区を中心であったと推定される。



前葉



中葉

流路

図V-48

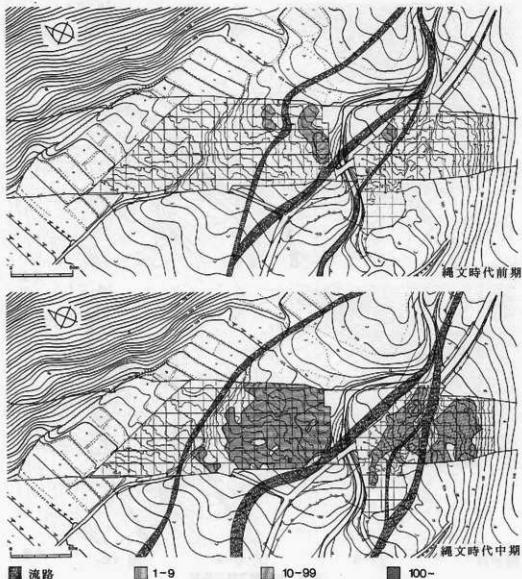
10-99

100-

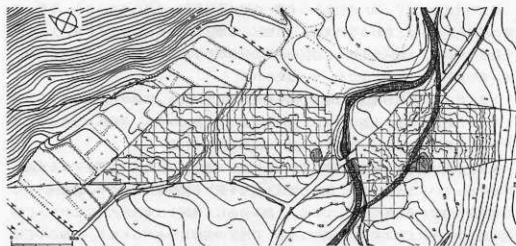
図V-48 縄文時代早期

縄文時代早期から前期にかけては積極的な利用の痕跡が少ない。小人数が幾度か訪れ本遺跡を利用したのではないだろうか。

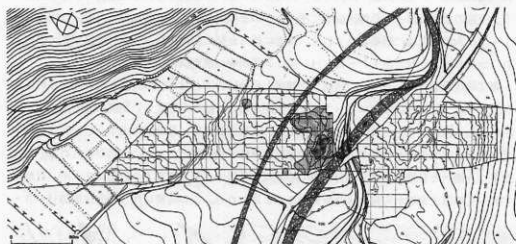
縄文時代中期（図V-49）に至り、本流はA地区とB地区の間を東から西に流れる流路とB地区とC地区の間を南東から北西に流れる2筋が考えられるが時間的なずれがあり、南側の流路が古く考えられる。その他に細流がB地区の南東側と、C地区とD地区の間を流れていたと想定される。土器の分布はA地区・B地区・C地区に散漫に広がる様相を見せる。分布密度の高まりは、A地区西側に2ヵ所、B地区東側に1ヵ所、C地区南側と中央部東側の2ヵ所にあるが、分布の中心域がみあたらない。活動範囲はD地区を除き広範囲に広がっているが、拠点を特定するのは困難である。



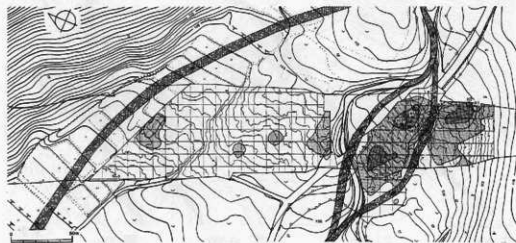
図V-49 縄文時代前期-中期



前葉



中葉



■ 流路

■ 1-9

■ 10-99

■ 100-

末葉

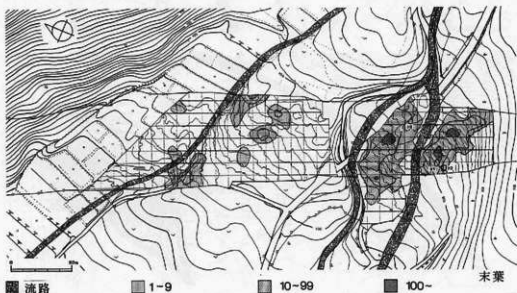
図V-50 縄文時代後期

縄文時代後期(図V-50)は前葉から末葉の時期に活動範囲の差異が認められる。前葉の流路は現稲荷川とさほど変わらない流れと、B地区とC地区の間の流れが想定される。土器の出土頻度は少なく、A地区北西端とC地区南西端に分布がわずかにみられる。活動範囲は川岸の狭い部分に限られ、利用も少なかったと推定される。

中葉になると本流はB地区とC地区の間を南東から北西に流れ、細流がC地区の中央を貫流していたと想定される。土器の分布はC地区南半部と北東側にみられ、南端部に分布の中心域がある。活動範囲はC地区に限定され、拠点は南側と推定される。

末葉の本流はA地区とB地区の間を東から西に流れる流路からB地区の北側を流れる流路に移り変わっていったと推定され、他にD地区の北側を流れる流路が想定される。調査区内ではこの時期の遺物が最も多く出土している。土器の分布はA地区とB地区の大半に広がり、C地区南側と中央部および中央部北西側の3ヵ所、D地区中央部に分布がみられる。分布の中心域はA地区東側とB地区東側・西側の3ヵ所にみられる。活動拠点はA地区東側とB地区西側から、流路の変遷に伴ってB地区東側に移ったものと推定される。前者に伴った竪穴住居跡H-1・2がA地区東端に構築されている。後者に伴った竪穴住居跡H-5がB地区東側に構築され、焼骨の検出された焼土F-41・117の2ヵ所が中央部東側に残されている。

縄文時代晩期(図V-51)の流路はA地区とB地区の間とB地区の北側を流れる2本の流路が想定され、B地区は中洲になっていたと推定される。他にC地区とD地区の間を南東から北西に流れる流路が想定される。土器の分布は、A地区北半部、B地区の大半、C地区北西端・北東端と中央部の東西に並ぶ3ヵ所、D地区北東側と南西側の2ヵ所に分布がみられる。分布密度はA地区とB地区が高い。分布の中心域はA地区中央部北東側と北西側に2ヵ所、B地区中央、C地区北東端から調査区外東側にあると思われる。この時期に伴う竪穴住居跡H-3・

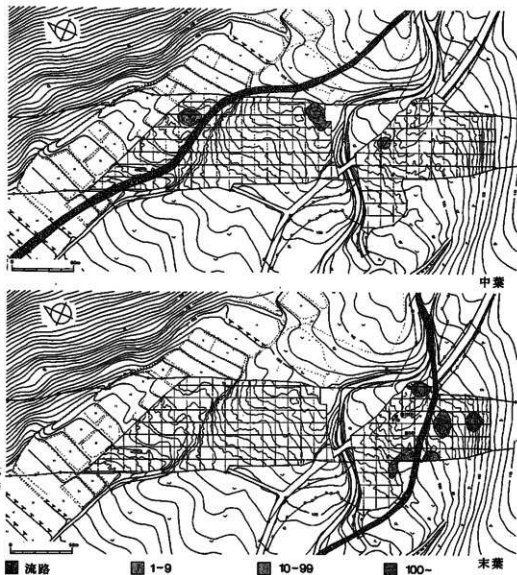


図V-51 縄文時代晩期

4がA地区北西部とH-6がB地区東側に構築され、活動拠点はこの2ヶ所周辺と考えられる。

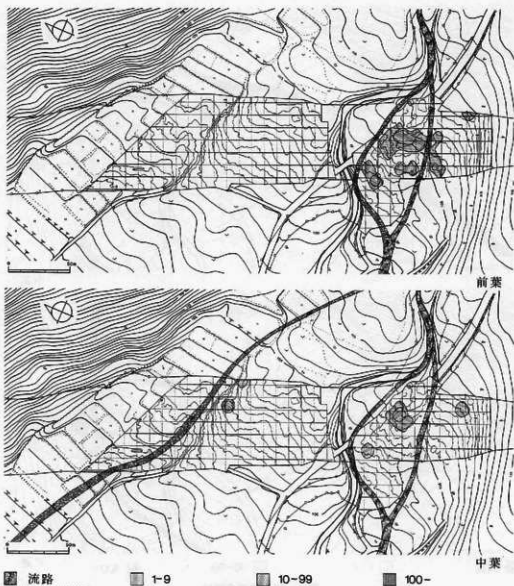
統縄文時代（図V-52）中葉の流路はC地区とD地区の間を南東から北西に流れていたと想定される。土器はC地区南東端とD地区東側の分布密度がやや高く、B地区中央北側に分布がみられる。D地区の分布域には焼骨の検出された焼土F-135が伴っている。

末葉はおおきく流れを変えA地区とB地区の間を流れていたと想定される。土器分布はA地区とB地区に限られ、A地区中央と川を挟んでA地区北側中央・北西端とB地区南西側・東端に分布する。分布の中心域はA地区中央と北側中央の2ヶ所にみらる。B地区の中央部に焼骨の検出された焼土F-47・109・111が残されている。焼土と土器の分布域が離れているが、A地区・B地区の川の両岸が活動範囲とみなすことが出来よう。



図V-52 統縄文時代

鎌文時代（図V-53）前葉の流路はA地区とB地区の間とB地区の北側を流れる2本の流路が想定され、B地区は中洲になっていたと推定される。土器の分布はA地区東側と川に面した西半部、B地区中央部とその西側2ヵ所にみられる。分布の中心域はB地区中央部にみられる。活動拠点はB地区中央を推定される。中葉の流路は前葉と同じ流れの他に、C地区とD地区の間を南東から北西に流れる流路が想定される。土器の分布はA地区中央部西側とB地区中央部・北西部の2ヵ所、C地区北東部に2ヵ所がみられる。いずれも分布密度は低いが、B地区中央部とC地区北側中央にやや多くみられる。活動範囲はA地区・B地区・C地区の限られた狭い範囲と考えられるが拠点を特定するに至らない。



図V-53 鎌文時代

石器(図-54)は剥片石器が9割以上を占め、礫石器は石斧を除き極端に少ない。剥片石器とフレイク・チップの分布はほぼ重なっているが、若干の差異が認められる。A地区とB地区ではフレイク・チップが石器より分布範囲が狭まっている。C地区中央部北西側にフレイク・チップの分布が別にみられる。D地区の石器分布は中央部北側と西側の2ヶ所にみられ、フレイク・チップは西側に密度の高い分布がみられる。

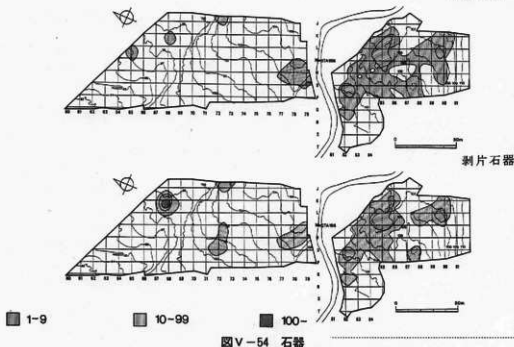
ここまで稀府川の流路と拠点の変遷を時期別にみてきたが、稀府川遺跡の性格を合わせて考えてみたい。

A地区の南半部は丘陵斜面で、そこから北側の調査区は扇状地である。土層は現稀府川を挟んで堆積状況に若干の違いが認められる。右岸ではV層が数cmの厚さの堆積しかみられないのに対し、左岸ではB-Tmを挟んだ上下にV層がみられる。VI層中の椀状黄褐色火山灰が右岸では広く分布し層厚が厚い。縄文時代晩期後半以降の遺物が左岸ではV層中に検出されるのに対し、右岸ではVI層に縄文時代早期から弥文時代の遺物まで混在している。

遺構・遺物は縄文時代中期から晩期・続縄文時代にかけて多く、遺跡の主体を成している。堅穴住居跡は稀府川右岸の土石流や川の氾濫の及ぶ所に構築されていることや、構造上も恒久性を欠くことなどから、昨年度報告では短期間の活動拠点に利用されたものと判断されている。また、土壌は稀府川左岸にのみ位置する。時期的な差異もあるが、地区により利用のされかたが異なると推定される。石器の機種組成は調査区全域で礫石器が極めて少ない。

昨年度報告で、本遺跡の性格は、狩猟や採集など、季節的な活動の拠点として利用された可能性が示された。今年度の調査は昨年度の見解が補強されたものとする。

(谷島由貴)



結 語

北海道縦貫自動車道建設工事に伴う本遺跡の発掘調査は、27年にわたって実施され、調査面積は稀府川両岸にまたがる計16,454㎡に及んだ。発掘された遺構・遺物は縄文時代後期・晩期のものが主体をなすが、ほかに縄文早・前・中期や統縄文・據文時代の遺物も出土しており、本遺跡の立地する扇状地において、数千年にわたり人間活動が続いたことを示している。

しかし、調査の結果によると、本遺跡は内浦湾岸沿いの遺跡に比べ、遺構・遺物の量も非常に少ないことから集落跡としての要素はもっているものの、昨年度の報告でも指摘したように、狩猟や採集活動の拠点としての性格が強いと思われる。簡単な構造とみられる竪穴住居・獣骨片を含む焼土、剥片類が集中して出土したことから推定される石器づくりの跡などは、本遺跡での人間活動の一端をうかがわせる。

このように、本遺跡には定住を目的とした集落があったものとはみなされないが、縄文時代早期から據文時代にかけて人間の足跡があることは、山地を背後にし、前面に緩やかな斜面が続く起伏に富んだ稀府川扇状地の扇頂部が、土石流や流路の変遷にもかかわらず、狩猟採集に経済的基盤をおく人間社会にとって、きわめて高い価値を有していたことと考えられる。

(鬼柳 彰)

写真図版

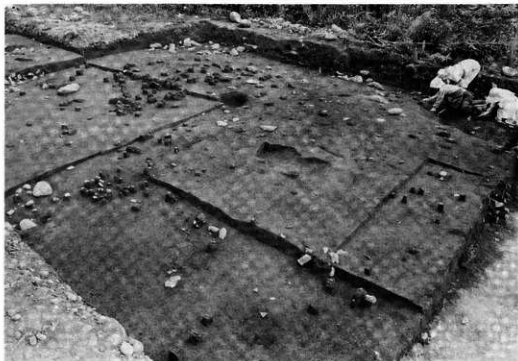
図版V-1	遺跡風景	171
図版V-2	調査風景	172
図版V-3	遺跡風景・土層	173
図版V-4	土墳・焼土	174
図版V-5	焼土出土の遺物	175
図版V-6	包含層出土の土器(1)	176
図版V-7	包含層出土の土器(2)	177
図版V-8	包含層出土の土器(3)	178
図版V-9	包含層出土の土器(4)	179
図版V-10	包含層出土の土器(5)	180
図版V-11	包含層出土の土器片(1)	181
図版V-12	包含層出土の土器片(2)	182
図版V-13	包含層出土の土器片(3)	183
図版V-14	包含層出土の土器片(4)	184
図版V-15	包含層出土の土器片(5)	185
図版V-16	包含層出土の土器片(6)	186
図版V-17	包含層出土の土器片(7)	187
図版V-18	包含層出土の土器片(8)	188
図版V-19	包含層出土の土器片(9)	189
図版V-20	包含層出土の石器(1)	190
図版V-21	包含層出土の石器(2)	191
図版V-22	包含層出土の石器(3)	192



1 遺跡風景（北東から）



2 遺跡風景（東から）



1 N-79区周辺の調査（西から）



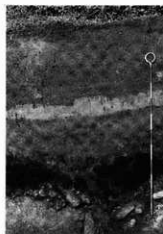
2 J-72区周辺の調査（北東から）



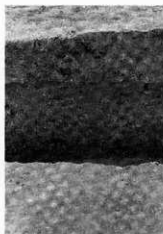
3 N-77区周辺の調査（南から）



1 河川跡周辺の調査（西から）



2 1-72-b区の土層（南から）



3 L-67-a区の土層（南東から）



4 M-67-b区の土層（南西から）



5 K-67-c区の土層（北東から）



6 M-68-c区の土層（南西から）

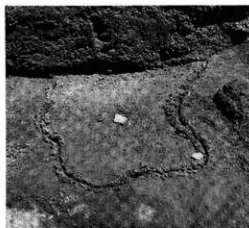
図版V-4



1 P-9 セクション (北西から)



2 P-9 完掘 (北から)



3 F-132 (南西から)



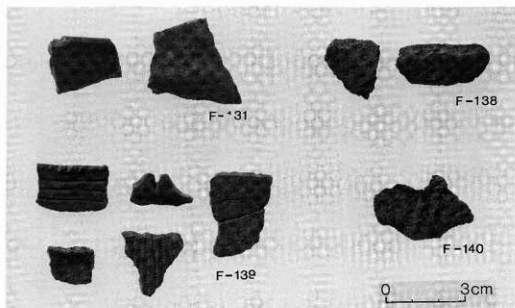
4 F-136 (東から)



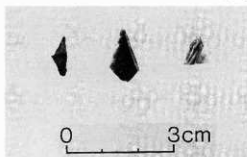
5 F-139 (南から)



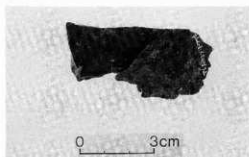
6 F-140 (北から)



1 焼土出土の土器片



2 F-135出土のR・Fと石鉄



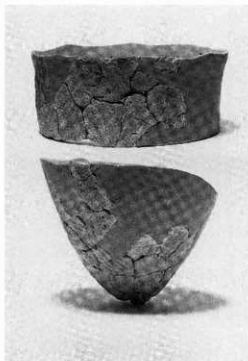
3 F-137出土の石核



4 F-135の遺物出土状況（東から）



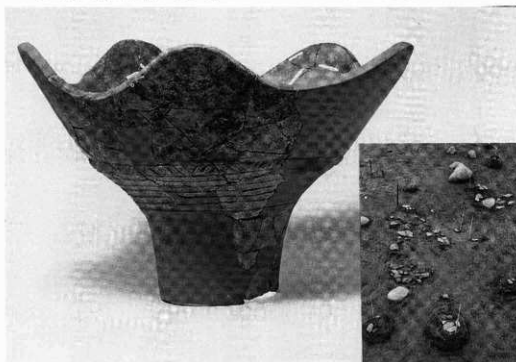
5 F-138出土のすり石



1 II群a類土器 (図V-20-8a)



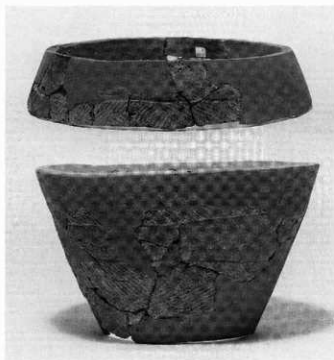
2 III群b類土器 (図V-22-31)



3 IV群b類土器 (図V-26-131) と出土状況 (北東から)



1 IV群b類土器(1) (図V-26-132) と出土状況 (西から)



2 IV群b類土器(2) (図V-27-133a,b)



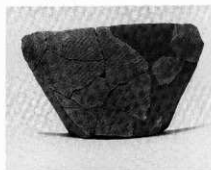
3 IV群b類土器(3) (図V-27-134)



1 IV群b類土器(1) (図V-28-137)



2 IV群b類土器(2) (図V-27-136)



3 V群b類土器(1) (図V-32-174)



4 V群b類土器(2) (図V-32-175a)



5 V群b類土器(3) (図V-32-176)



6 V群b類土器(4) (図V-34-180)



7 V群b類土器(5) (図V-32-177)



1 V群b類土器(1) (図V-34-179)



2 V群b類土器(2) (図V-32-178)



3 V群b類土器の出土状況(南から)



4 V群b類土器(3) (図V-34-181)



5 V群b類土器(4) (図V-34-182)



6 V群b類土器(5) (図V-34-183)



1 K-67-d 区の遺物出土状況 (東から)



2 VI群b類土器の出土状況 (北から)



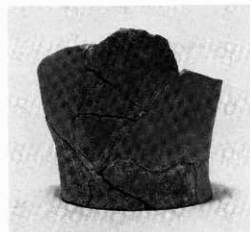
3 VI群b類土器 (図V-36-226a)



4 VI群b類土器 (図V-35-222)



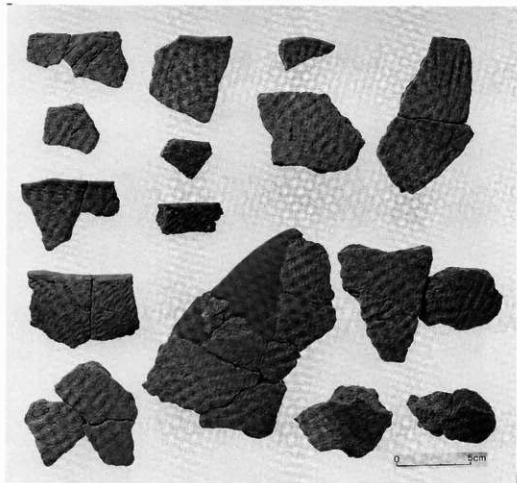
5 VI群b類土器 (図V-36-229)



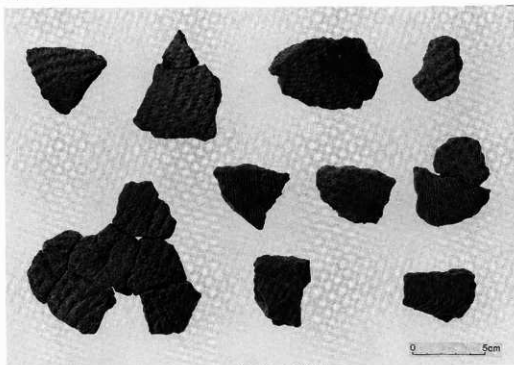
6 VI群b類土器 (図V-36-230)



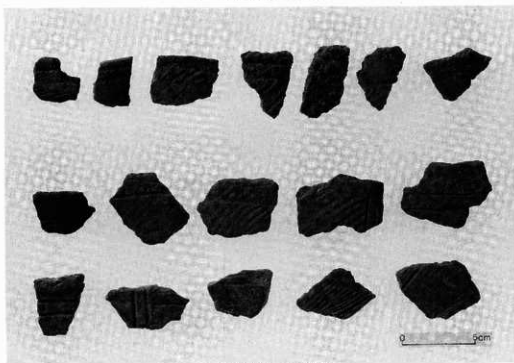
1 I群a類・b類の土器片



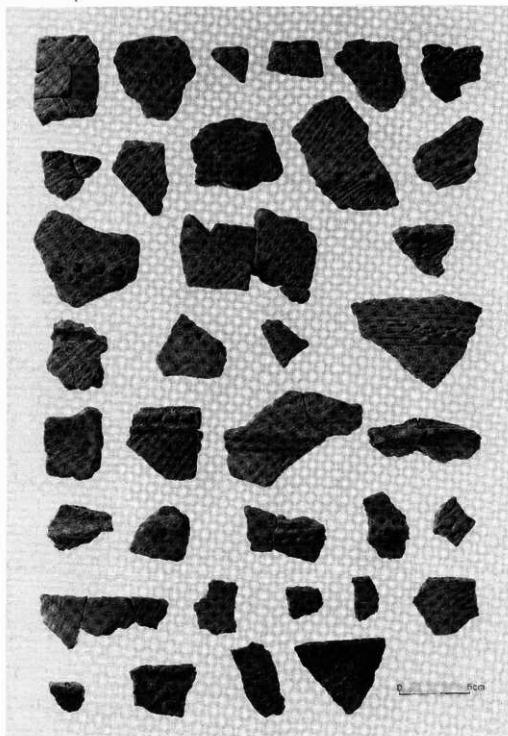
2 II群a類の土器片(1)



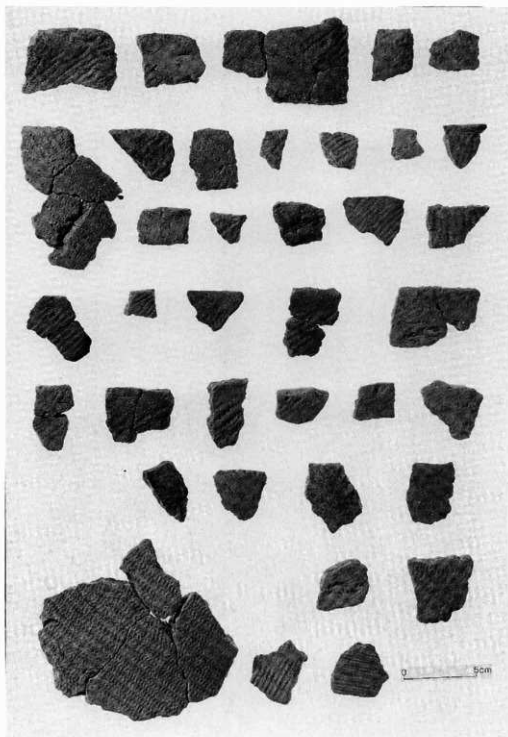
1 II群a類の土器片(2)



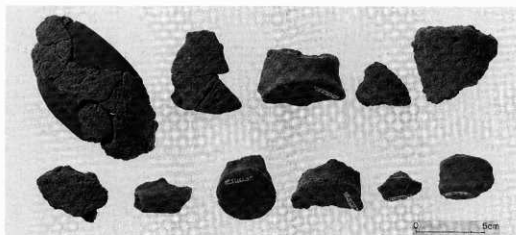
2 III群b類の土器片(1)



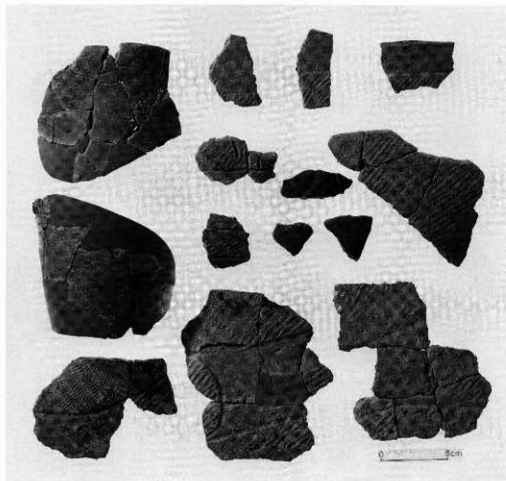
Ⅲ群b類の土器片(2)



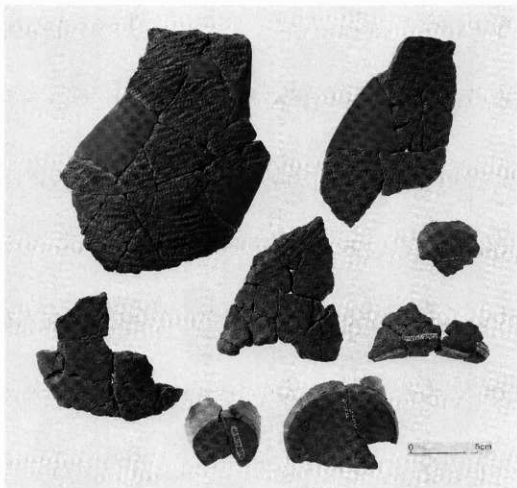
Ⅲ群b類の土器片(3)



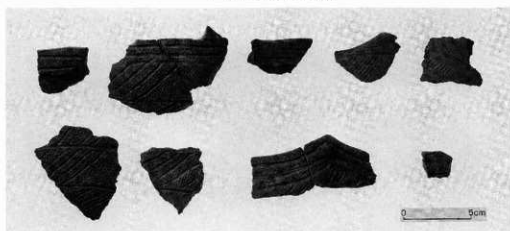
1 III群b類の土器片(4)



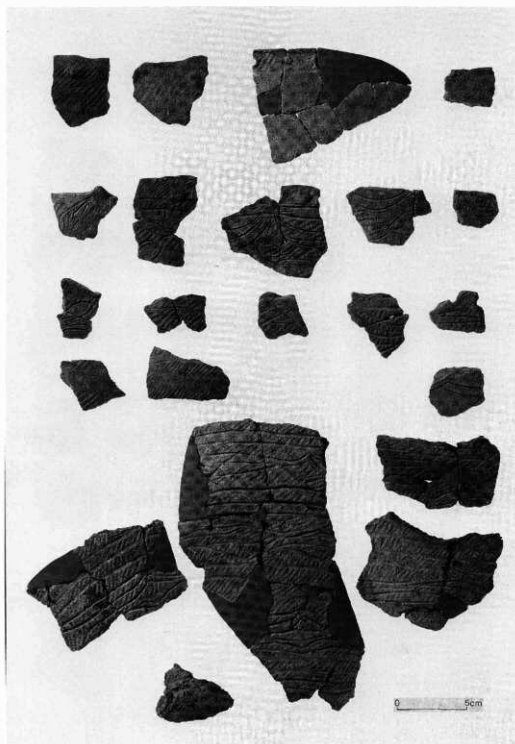
2 IV群b類の土器片(1)



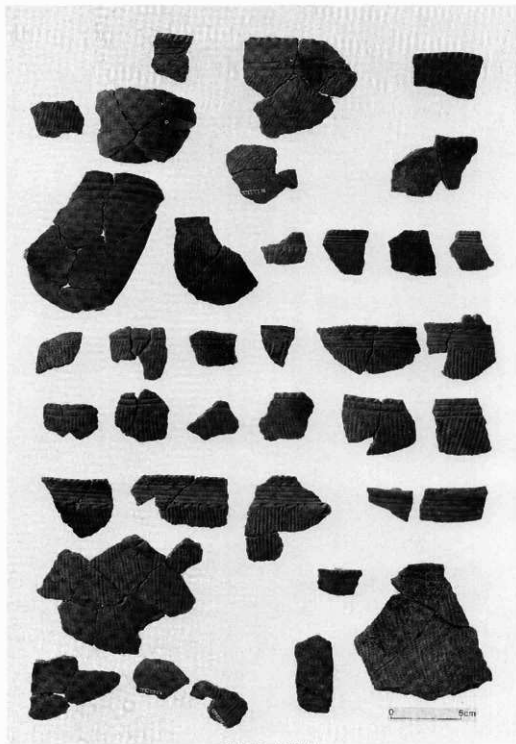
1 IV群 b 類の土器片(2)



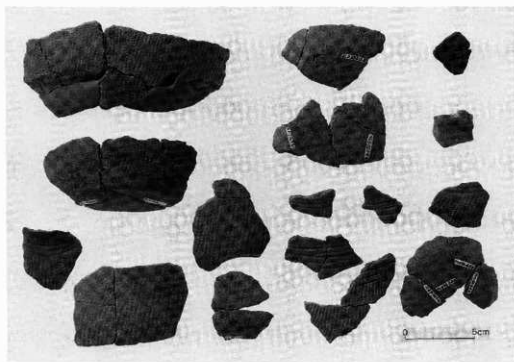
2 IV群 c 類の土器片



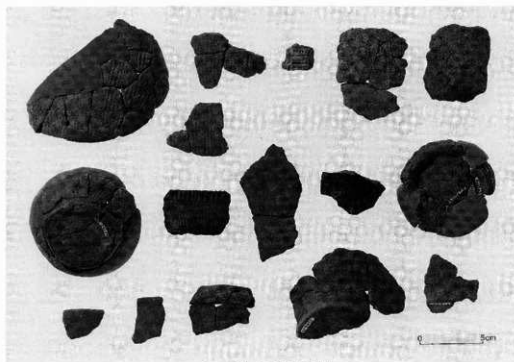
IV群 a 類・c 類の土器片



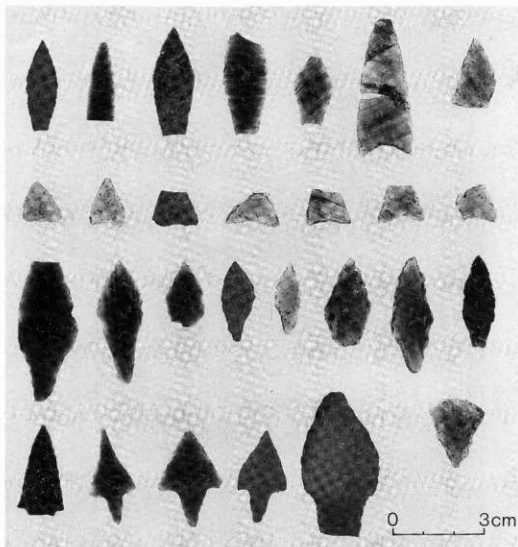
V群b類の土器片(1)



1 V群b類の土器片(2)



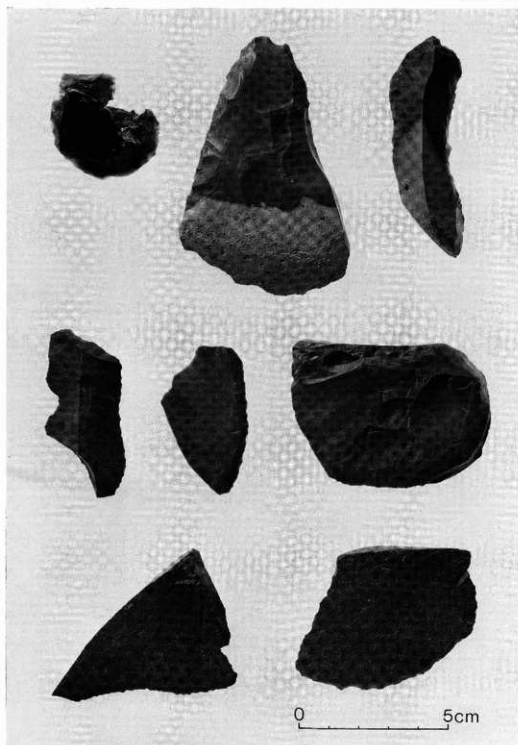
2 VI群・VII群の土器片



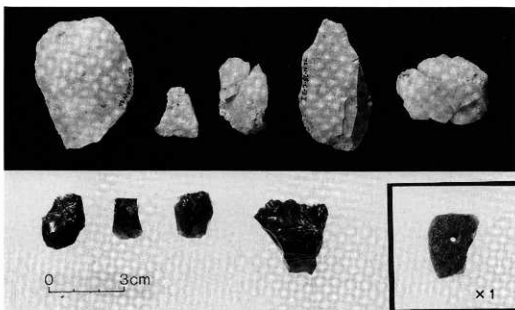
1 石鏃・石槍・石鏃



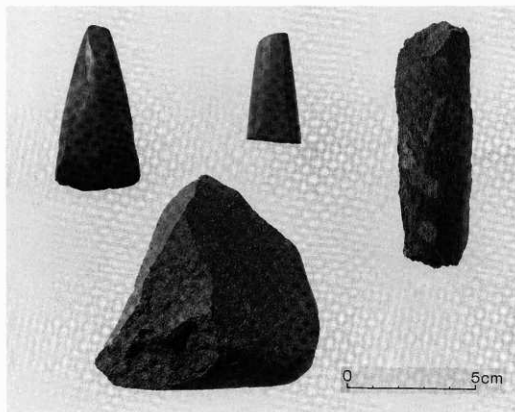
2 つまみ付きナイフ



スクレイパー



1 楔形石器・石核と重飾品



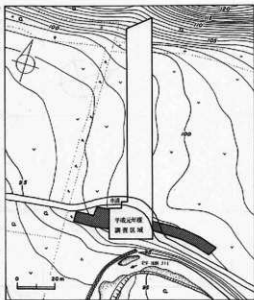
2 石斧・すり石

VI 谷藤川右岸遺跡

1 概要

本遺跡は、伊達市街地の東方約4km、紋別岳と稀府岳の間を西流して内浦湾に注ぐ谷藤川が形成した扇状地の扇頂部分、標高100m前後の地点に位置する(図VI-1)。

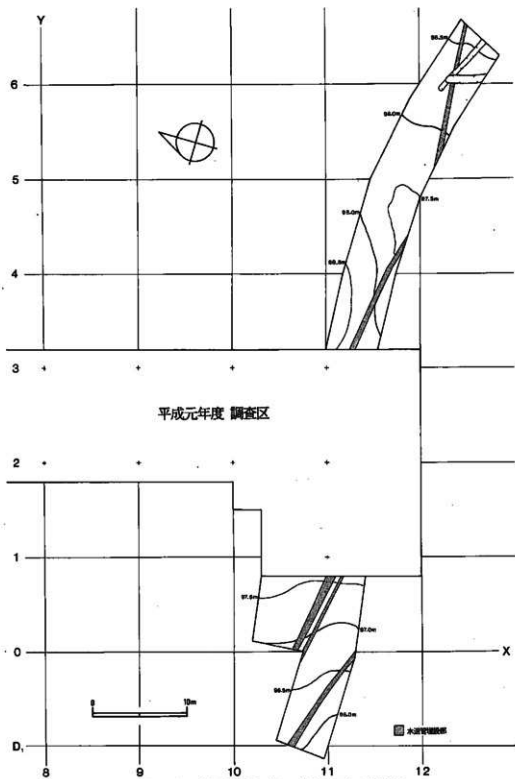
遺跡周辺の現況は、北側が畑地と急斜面の山林(ブナ林)、南側が谷藤川に接しており、市街地から延びてくる市道がこの辺りから川に沿って山あいへと続いている。また、調査の対象となった箇所については、大部分が畑地として使用されていたところであるが、調査時には工事用の資材置場と一部は昨年度の調査の際に切り替えられた道路として使用されていた。昨年度調査を終了した箇所は、既に橋脚建設など高速道路の工事が進行している。



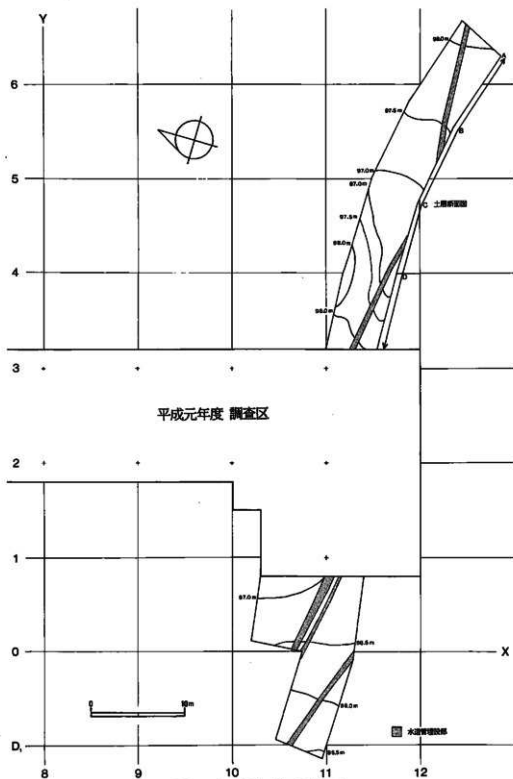
図VI-1 調査地区と周辺の地形

今回の調査対象となった範囲は、この谷藤川沿いの市道切り替え部分350㎡で、昨年度の調査区を挟むように東西に細長く分かれている(図VI-1)。層序は、Ⅲ章2節でも述べたが基本的に牛舎川右岸遺跡、稀府川遺跡のそれと同じである。ただし層名については、各遺跡で若干異なってくるため、ここでは昨年度報告された層序にあわせ東側調査区の南壁面を第Ⅰ層から第Ⅷ層に分層して土層図を作成した(図VI-3・4)。このうち遺物包含層は、第Ⅴ層としたUs-b火山灰(1663年降下)以下の第Ⅵ・Ⅶ層だけである。調査区内の地形は、11-4区内で小さな沢跡が谷藤川にむかってみられ(図VI-2・3)、また、調査区内には数本の簡易水道が東西方向に埋設されており、これが第Ⅶ層中まで達しているため、水道部分だけは残して調査をおこなった。

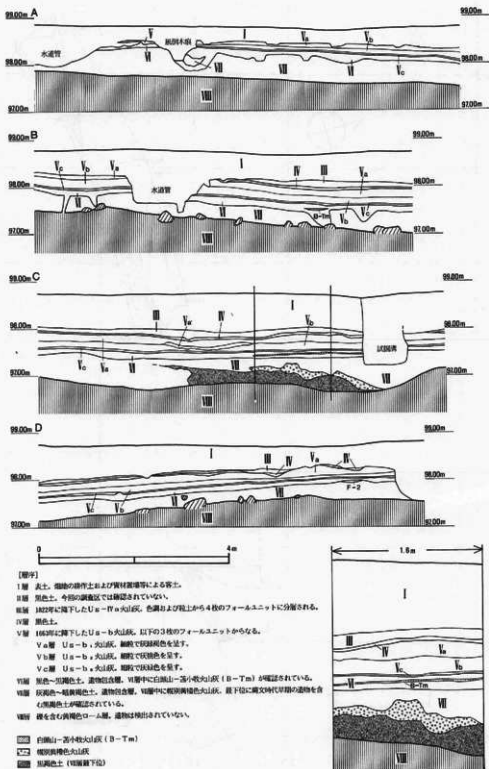
調査の結果、遺構は東側の調査区から焼土が3か所とF・C(剥片・碎片)集中地点が1か所検出されたが、掘り込みのある遺構は確認されなかった。3か所の焼土は、市道の下部にあたる11-3区内にあり、川にむかって緩く傾斜した第Ⅵ層からⅦ層上面にかけて確認されている。西側の地区からの遺構は確認されなかった。出土遺物は、F・C集中地点から出土した剥片・碎片が3,227点のほか、包含層から縄文時代早期と中期の土器片が49点、石器等が15点である。縄文時代早期の土器片は、昨年度報告されている中茶路式のほか、さらに梔別黄橙色火山灰を挟んで型式不明の土器片が出土している。このうち、同火山灰下層の黒褐色土層から出土した土器片には、細い沈線文と円形刺突分が施されている。(森岡健治)



図VI-2 第VI層上面 (Us-b層下面) の地形図



図VI-3 第Ⅶ層上面の地形図



図VI-4 土層断面図

2 遺構

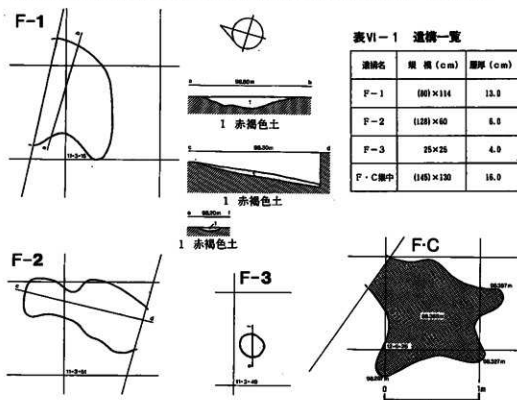
(1) 焼土(図VI-5・6)

今回の調査では、3か所の焼土が東側の調査区、11-3区内で確認された。確認面は、沢跡が谷藤川にむかう緩斜面上の第VI層下面から第VII層上面にかけてである。

F-1は、同区内で最も北側に位置し、一部発掘区境界にかかって確認された。確認状態での規模は $80 \times 114 \text{ cm}$ 、焼土層の厚さは 13 cm を測る。出土遺物は、焼土層上面から縄文時代中期の土器片(遺物番号50)が1点検出されているが、これに伴うものとは断定できなかった。F-2は同区内の南壁境界にかかって確認された。規模は $128 \times 60 \text{ cm}$ 、厚さ 6 cm 、F-3は $25 \times 25 \text{ cm}$ の小円形で、厚さ 4 cm を測る。出土遺物はない。時期は3か所とも不明である。

(2) F・C(剥片・砕片)集中地点(図VI-5・6)

調査区の東側、12-6区内の北壁に一部かかって確認された。確認面はUs-b層直下の第VI層上面で、剥片・砕片が多量に出土した。また、これらの遺物は次第に数量を減じながらも第VII層上面まで検出された。出土した遺物はすべて 1 cm 以下の剥片・砕片で、総数3,227点をかぞえ、重量では 19.6 g を計った。石質はすべて黒曜石である。時期については特に断定できないが、昨年と同様の遺構の報告があり、続縄文時代の所産と推察される。(森岡健治)



3 包含層出土の遺物

Ⅲ章1節(2)でも述べたように、包含層から得られた遺物数点64点については、すべて出土地点、層位、レベルを記録して取り上げた(表VI-2、図VI-6)。その内訳は、土器片が49点、石器等が15点である。49点の土器片は、縄文時代早期(Ⅰ群b類)のものが15点、同中期(Ⅱ群b類)のものが34点である。早期の土器片については、昨年度の調査でコッタロ式と中茶路式の出土資料が報告されているが、今回の調査ではコッタロ式は検出されず、中茶路式(遺物番号1・14~16)と、さらにそれより古いと思われる土器片(遺物番号17・20~25・28~31)が得られている。また15点出土した石器等の器種は、石鏃が2点、剥片・砕片が13点である。出土状態は、土器・石器等とも散発的な出土のしかたをしているが、このうち10-D₁区ではF・C集中地点とまでは判断されなかったものの、同一母岩と思われる黒曜石の剥片が10点まとまって出土しており、さらに北側の発掘区境界外まで広がるようである。また、層位的には第Ⅵ層と第Ⅶ層とで出土遺物の明瞭な時期差を分けることはできなかったが、11-4区の小沢跡では褐色黄褐色火山灰下層に縄文時代早期の遺物を含む黒褐色土層の存在を確認した。この黒褐色土層から検出された遺物に、前述した土器片のうち遺物番号20~24・28・29と頁岩製の剥片1点(遺物番号19)がある。

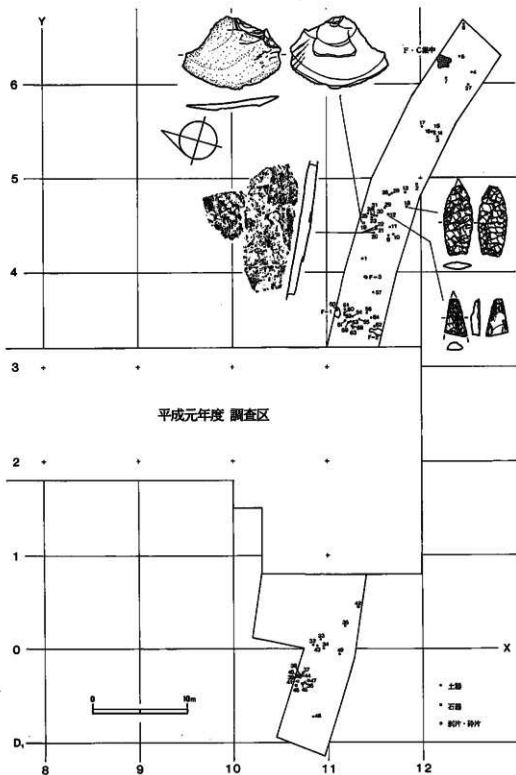
(森岡健治)

表VI-2 出土遺物一覧

遺物番号	名称	発掘区	層位	標高(m)
1	土器	11・4-31	Ⅵ中	96.04
2	フレイク	11・4-99	Ⅵ中	97.565
3	土器	12・5-14	Ⅵ上	97.863
4	"	12・5-51	Ⅵ中	96.187
5	"	12・5-42	Ⅵ中	98.237
6	"	12・5-46	Ⅵ上	96.485
7	"	12・5-20	Ⅵ中	97.596
8	"	12・5-32	Ⅵ中	96.134
9	"	11・4-63	Ⅵ上	97.458
10	"	11・4-74	Ⅵ下	97.437
11	"	11・4-64	Ⅵ上	97.403
12	石器	11・4-86	Ⅵ下	97.371
13	土器	11・4-88	Ⅵ下	97.343
14	"	12・5-14	Ⅵ下	97.842
15	"	12・5-14	Ⅵ下	97.841
16	"	12・5-14	Ⅵ上	97.80
17	"	12・5-05	Ⅵ中	97.722
18	石器	11・4-86	Ⅵ中	97.308
19	フレイク	11・4-35	Ⅵ下	97.15
20	土器	11・4-54	Ⅵ下	97.293
21	"	11・4-54	Ⅵ下	97.25
22	"	11・4-54	Ⅵ下	97.239
23	"	11・4-45	Ⅵ下	97.285
24	"	11・4-46	Ⅵ下	97.223
25	"	11・4-46	Ⅵ下	97.52
26	"	11・4-68	Ⅵ下	97.307
27	"	12・5-49	Ⅵ中	96.074
28	"	11・4-68	Ⅵ下	97.001
29	"	11・4-68	Ⅵ下	96.951
30	"	11・4-55	Ⅵ下	97.014
31	"	11・4-55	Ⅵ下	97.006
32	"	10・0-80	Ⅵ下	96.84

※は、褐色黄褐色火山灰の下層から出土したもの

遺物番号	名称	発掘区	層位	標高(m)
33	土器	10・0-90	Ⅵ下	96.801
34	"	10・0-90	Ⅵ下	96.96
35	"	11・0-12	Ⅵ下	96.684
36	フレイク	10・D ₁ -76	Ⅵ下	96.398
37	"	10・D ₁ -77	Ⅵ下	96.517
38	"	10・D ₁ -67	Ⅵ下	96.493
39	"	10・D ₁ -66	Ⅵ下	96.443
40	"	10・D ₁ -67	Ⅵ下	96.484
41	"	10・D ₁ -68	Ⅵ下	96.834
42	"	11・0-34	Ⅵ下	97.066
43	土器	10・0-80	Ⅵ下	96.967
44	フレイク	10・D ₁ -77	Ⅵ下	96.457
45	"	10・D ₁ -76	Ⅵ下	96.387
46	"	10・D ₁ -66	Ⅵ下	96.25
47	"	10・D ₁ -76	Ⅵ中	96.069
48	土器	10・D ₁ -82	Ⅵ中	96.026
49	"	11・D ₁ -19	Ⅵ中	96.519
50	"	11・3-05	F-I上層	96.697
51	"	11・3-14	Ⅵ上	96.565
52	"	11・3-15	Ⅵ上	96.615
53	"	11・3-24	Ⅵ上	96.485
54	"	11・3-25	Ⅵ中	96.495
55	"	11・3-35	Ⅵ中	96.39
56	"	11・3-45	カクラン	96.235
57	"	11・3-55	Ⅵ中	97.985
58	"	11・3-57	Ⅵ中	96.481
59	"	11・3-24	Ⅵ中	96.517
60	"	11・3-15	Ⅵ中	96.631
61	"	11・3-16	Ⅵ中	96.61
62	"	11・3-54	Ⅵ中	96.02
63	"	11・3-24	Ⅵ中	96.45
64	"	11・3-45	Ⅵ中	96.035



図VI-6 遺構・遺物の位置図

(1) 土器 (図VI-7)

縄文時代早期の土器 (I群)

b類 (1~7)

1~4は型式不明の土器片。1はVI層下位から出土した無文の口縁部片。口唇断面は平坦に整形され、内面も横位の整形痕が見られる。2~4は梔子黄褐色火山灰下層の黒褐色土中から出土したもの。2は右傾する縄文か羽状縄文を地文とし、縦位の鋭い沈線文と円形刺突文が施されている。3・4は羽状縄文の同一個体片。5~7は中茶路式土器。5・6はVI層下位、7はVI層中から出土した。

縄文時代中期の土器 (II群)

b類 (8~13)

8~11は左傾する縄文が施された同一個体片。8は口縁部の破片で、口唇上にも縄文が施され、断面はやや外反する。13は底部に近い破片で、羽状縄文が施されている。

(2) 石器等 (図VI-7)

石鏃 (14・15)

14は先端部を欠失しているが、両面とも入念に加工された黒曜石製のもの。15は先端部、基部とも欠失した黒曜石製のもので、断面は三角形である。

剥片・砕片 (16~28)

16は梔子黄褐色火山灰下層の黒褐色土層内で検出された頁岩製の剥片。19~28は10-D区でまとまって検出された黒曜石製の剥片。

(森岡健治)

表VI-3 掲載土器一覧

図番	器物番号	器種	時期	図版番号
VI-7-1	30	陶鉢	縄文早期	VI-4-1
VI-7-2	20・21・22	陶鉢	縄文早期	VI-4-1
VI-7-3	28	陶鉢	縄文早期	VI-4-1
VI-7-4	29	陶鉢	縄文早期	VI-4-1
VI-7-5	14	陶鉢	縄文早期	VI-4-1
VI-7-6	10・16	陶鉢	縄文早期	VI-4-1
VI-7-7	1	陶鉢	縄文早期	VI-4-1

図番	器物番号	器種	時期	図版番号
VI-7-8	59	陶鉢	縄文中期	VI-4-1
VI-7-9	53	陶鉢	縄文中期	VI-4-1
VI-7-10	55	陶鉢	縄文中期	VI-4-1
VI-7-11	56	陶鉢	縄文中期	VI-4-1
VI-7-12	5	陶鉢	縄文中期	VI-4-1
VI-7-13	11	陶鉢	縄文中期	VI-4-1

表VI-4 掲載石器等一覧

図番	器物番号	器種	長さ×幅×厚さ (cm)	重量 (g)	石材	図版番号	出土地区
VI-7-14	18	石鏃	(3.78)×1.55×0.41	(2.2)	黒曜石	VI-4-2	東側
VI-7-15	12	石鏃	(2.01)×1.20×0.40	(0.8)	黒曜石	VI-4-2	東側
VI-7-16	19	フレイク	3.90×5.21×0.70	9.6	頁岩	VI-4-2	東側
VI-7-17	42	フレイク	0.80×1.31×0.41	0.2	頁岩	VI-4-2	西側
VI-7-18	2	フレイク	0.40×0.58×0.10	—	黒曜石	VI-4-2	東側
VI-7-19	44	フレイク	3.88×1.59×1.20	5.7	黒曜石	VI-4-2	西側
VI-7-20	39	フレイク	1.82×2.60×0.62	2.3	黒曜石	VI-4-2	西側
VI-7-21	36	フレイク	1.20×1.95×0.40	0.7	黒曜石	VI-4-2	西側
VI-7-22	37	フレイク	1.93×2.61×0.56	1.7	黒曜石	VI-4-2	西側
VI-7-23	38	フレイク	1.78×2.41×0.49	1.5	黒曜石	VI-4-2	西側
VI-7-24	40	フレイク	1.58×2.00×0.50	1.4	黒曜石	VI-4-2	西側
VI-7-25	46	フレイク	2.11×1.49×0.20	0.4	黒曜石	VI-4-2	西側
VI-7-26	47	フレイク	2.01×2.31×0.72	3.4	黒曜石	VI-4-2	西側
VI-7-27	45	フレイク	0.91×2.01×0.40	0.5	黒曜石	VI-4-2	西側
VI-7-28	41	フレイク	1.30×1.59×0.53	0.8	黒曜石	VI-4-2	西側



図VI-7 包含層出土の遺物

4 まとめ

本遺跡は、昭和56年4月に北海道教育委員会による所在確認調査により発見、登載された遺跡である。その後、昭和62年10月に範囲確認調査が行なわれ、平成元年8月21日～10月31日および翌2年9月3日～9月21日の2カ年で本調査が実施され、発掘調査を終えた。

調査の結果、掘り込みのある遺構は範囲確認調査の際にいくつかの堅穴および土壌の存在を指摘されていたが、本調査では残念ながら昨年度調査された炭窯以外確認されず、そのほとんどが風倒木による攪乱とわかった。焼土は、範囲確認調査で6か所、昨年度の調査で3か所、今回の調査でも3か所確認している。ただし、時期については出土遺物がなく、不明なものが多い。F・C（剥片・砕片）集中地点は、昨年度に引き続き12-6区で1か所確認された。出土遺物は1cm以下の剥片・砕片ばかりが3,227点出土し、今年度出土した遺物の98%を占める。

包含層から出土した遺物は、範囲確認調査・本調査を含め、土器が1734点、石器等が392点である。土器を時期別に見ると、縄文時代早期が567点（33%）同中期が428点（25%）、同後期が1点、続縄文時代が736点（42%）である。石器の器種組成は、少量ではあるが各器種が出土しており、このうち石鏃の占める割合が高い。このことから本遺跡の性格は、縄文時代から続縄文時代に至るまで断片的に利用されたキャンプサイトの性格を有する遺跡と推察される。なお、範囲確認調査、本調査によって出土した各遺物点数の一覧を表VI-5に掲載する。

（森岡健治）

表VI-5 谷藤川右岸遺跡出土の遺物点数一覧

【F・C 集中】	平成元年	平成2年	合計
剥片・砕片	936	3,227	4,163

【土器】	昭和62年	平成元年	平成2年	合計
縄文早期	13	539	15	567
縄文中期	21	373	34	428
縄文後期	-	1	-	1
続縄文	-	736	-	736
陶器	2	-	-	2
合計	36	1,649	49	1,734

【石器等】	昭和62年	平成元年	平成2年	合計
石 鏃	1	17	2	20
石 槍	-	2	-	2
ナイフ	-	5	-	5
石 槌	-	2	-	2
石 斧	-	4	-	4
すり石	-	5	-	5
たたき石	-	1	-	1
砥 石	-	2	-	2
石 皿	2	1	-	3
台 石	-	4	-	4
R・P	-	3	-	3
U・F	-	1	-	1
剥片・砕片	1	326	13	340
合 計	4	373	15	392

写真図版

図版VI-1	東側地区の調査	205
図版VI-2	市道下の調査	206
図版VI-3	西側地区の調査	207
図版VI-4	包含層出土の遺物*	208

図版VI-1



1 東側調査区全景（西から）



2 基本層序（北から）



3 調査風景（東から）



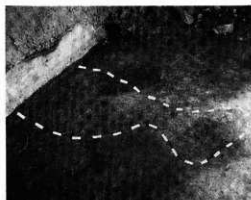
4 完掘風景（西から）



1 調査風景（北西から）



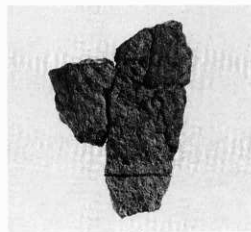
2 F-1（北西から）



3 F-2（北から）



4 桃別黄橙色火山灰下（黒褐色土）の土器片



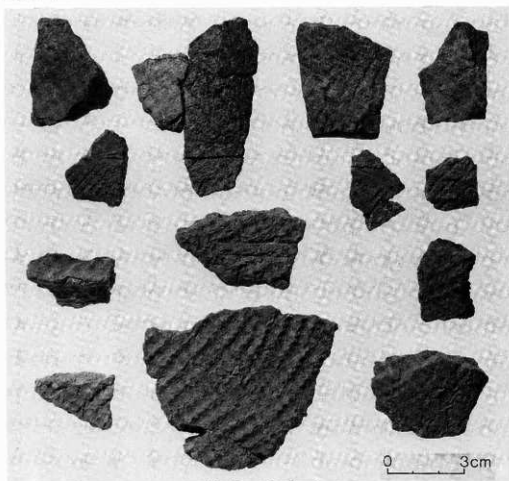
5 同左



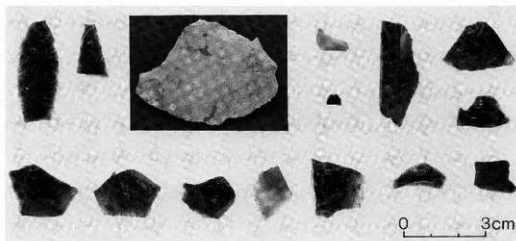
1 西側調査区全景（北東から）



2 調査風景（北東から）



1 I群b類・III群b類の土器片



2 石鏃および剥片・破片

VII 自然科学的分析

1 伊達市稀府川遺跡の出土黒曜石遺物の石材産地分析

薬科 哲男・東村 武信
(京都大学原子炉実験所)

はじめに

石器石材の産地を自然科学的な手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石遺物の石材産地推定を行なっている。^{0,1,2}

黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。

今回分析を行なった試料、伊達市の稀府川遺跡出土の20個の黒曜石製石器の産地分析の結果が得られたので報告する。

黒曜石原石の分析

黒曜石原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を造り、励起用の ^{57}Fe 、 ^{109}Cd の放射性同位元素と $\text{Si}(\text{Li})$ 半導体検出器を組み合わせたエネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。 ^{57}Fe 線源で励起したとき、 K 、 Ca 、 Ti が、 ^{109}Cd 線源で励起したとき、 Mn 、 Fe 、 Rb 、 Sr 、 Y 、 Zr 、 Nb の元素がそれぞれ分析される。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それをもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、 Ca/K 、 Ti/K 、 Fe/Zr 、 Rb/Zr 、 Sr/Zr 、 Y/Zr の比量をそれぞれ用いる。

黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に分布する。調査を終えた原産地を図1(略)に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがつくされている。元素組成の上から、これら原石を分類すると表VII-1に示すように73個の原石群に分かれる。³ 白滝地域の原産地は、北海道紋別郡白滝村に位置し、鹿野北方2kmの採石場の露頭、鹿野東方約2kmの梶加沢地点、また白土沢などより転搬として黒曜石が採取できる。この露頭からの黒曜石原石は白滝第一群にまともり、白土沢の転搬は白滝第二群にまともる。梶加沢よりの転搬の中で、70%は梶加沢群にまともるが、この群は白滝第二群

と一致し、元素組成から両群を区別できない。さらに、倶加沢産原石の30%は白滝第一群に一致する。置戸産原石は、北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取され、この原石の元素組成は置戸群にまとまる。この原産地は、常呂川に通じる流域にあり、この常呂川流域で黒曜石の円礫が採取されるが現在まだ調査していない。十勝三股産原石は、北海道河東郡上士幌町の十勝三股の十三ノ沢の谷筋および沢の中より原石が採取され、この原石の元素組成は十勝三股群にまとまる。この十勝三股産原石は十三ノ沢から音更川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の組成は、十勝三股産の原石の組成と相互に近似している。また、上士幌町のサンケオルベ川より採取される黒曜石円礫の組成も十勝三股産原石の組成と相互に近似している。これら組成の近似した原石の原産地は区別できず、遺物石材の産地分析でたとえ、この遺物の原石産地が十勝三股群に同定されたとしても、これら十勝三股、音更川、十勝川、サンケオルベ川の複数の地点を考えなければならない。しかし、この複数の産地をまとめて、十勝地域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題はないと考えられる。赤井川産原石は、北海道余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。ここの原石には、少球果の列が何層にも重なり石器の原材料として良質とはいえないものが多く、稀に球果の見られない、またあっても非常に少ない握り拳半分大の良質な原石が少数みられた。これら原石の元素組成は赤井川群にまとまる。

註 図1及び表Ⅶ-1のうち北海道以外については紙数の都合で割愛しました。(編集者)

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は風化しているが、黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。産地分析で水和層の影響は、軽い元素の分析ほど大きいと考えられるが、影響はほとんど見られない。 Ca/K 、 Ti/K の両軽元素比量を除いて産地分析を行なった場合、また除かずに産地分析を行なった場合同定される原産地に差はない。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやや不確実さを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

今回分析した遺物の結果を表Ⅶ-2に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするため Rb/Zr の一変量だけを考えると、表2の試料番号22435番の遺物では Rb/Zr の値は1.040で、十勝三股群の[平均値] ± [標準偏差値] は、 1.060 ± 0.019 である。遺物と原石群の標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 1.0σ 離れている。ところで十勝三股原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 1.0\sigma$ のいずれより大きいものが31個ある。すなわち、この遺物が、十勝三股群の原石から作られていたと仮定しても、 1.0σ 以上離れる確率は31%であると言える。だから、十勝三股群の平均値から 1.0σ しか離れていないときには、この遺物が十勝三股群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を置戸群に比較すると、置戸群の平均値からの隔たりは、

約18σである。これを確率の言葉で表現すると、置戸群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から18σ以上離れている確率は、百兆の一万分の一であると言える。このような、百兆の一万分の一に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、置戸群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は十勝三股群に31%、置戸群に百兆の百分分の1%の確率でそれぞれ帰属される」。各遺跡の遺物について、この判断を表1のすべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原産地を消していくと残るのは、十勝三股の原産地だけとなり、十勝産地の石材が使用されていると判定される。実際はRb/Zrといった唯一の量変数だけでなく、前述した5ヶの変数で取り扱うので変数間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物で在れば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変数統計の手法でアマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT²検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する⁴⁰。表VII-3に稀府川遺跡より出土した遺物の産地推定の結果を示す。原産地は確率の高い産地のものだけを選んで記した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のバラツキの範囲を超えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原産地（確率）の欄の確率値に替えて、マハラノビスの距離D²の値を記した。この遺物については、記入されたD²の値が原石群の中で最も小さなD²値で、この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、そこの原産地と考えてほぼ間違いないと判断されたものである。

分析した遺物の中で、赤井川原産地に同定された遺物のほとんどは十勝に、十勝に同定されたものは赤井川原産地にも同定されている。これら両産地に同定された遺物は、より帰属確率の高い産地に遺物の現材産地を特定するが、この際、肉眼観察も参考にした。特定した原石の産地を判定の欄に記入した。

D²の値が大きく統計処理で定量的に判定できなかった遺物の中には相互に似た成分組成の遺物が数多く見られたために、クラスター分析により定性的な判定を試みた。稀府川遺跡出土遺物によるクラスター分析の結果を図VII-1に示す。遺物試料どうしが階段の低いところでクラスターを作る遺物群は相互に似た組成を持っている。階段が急に高く変化する場所は、逆に組成が似ていないことを表している。このクラスター分析では、定量的判定できている遺物と定量的に判定できなかった遺物の両者が同じグループに属する場合、判定できていない遺物の

原石産地を定量的に判定されている遺物と同じ産地であると判定する。このクラスター分析の結果は表Ⅶ-3の原石産地(確率)の欄にクラスター分析と記し、判定欄には、定性的に似ていると判断された産地名を記入した。同定できなかった遺物では、原産地が未発見の原石が使用された遺物および分析精度が悪いために産地が同定できない場合の2種類が考えられる。クラスター分析でMR群にまとまる遺物は前者の場合と考えられる。道央地域の遺跡では、原産地が未発見の原石が使用されている例が、富良野市の東麓郷遺跡のFR群⁹および清水町内の遺跡のSM群¹⁰などにみられ、遠距離に伝播した例は確認されていない。これら未発見の原産地は、遺跡から遠くない地点に小規模に産出し、原石はその地域のみで使用された可能性も考えられるが、今後多数の遺物の分析を行なうことによって、その原産地の性格は明らかになるであろう。

今回、分析した稀府川遺跡出土の20個の遺物の産地分析の結果を時代時期別に表Ⅶ-4にまとめた。赤井川産原石は全時期に使用され、十勝産は縄文時代後期末に、白滝産は後期中、末に使用され、原産地未発見のMR群は中期、後期に使用されている。各原産地の原石の使用頻度を正確に把握するには分析個数が少ないが、数個の中に白滝産が見られるのは、使用頻度が高いことを示していると推測された。

参考文献

- 1) 薬科哲男・東村武信(1975), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅱ)。考古学と自然科学, 8:61-69
- 2) 薬科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977), (1978), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅲ)。(Ⅳ)。考古学と自然科学, 10, 11:53-81:33-47
- 3) 薬科哲男・東村武信(1983), 石器原料の産地分析。考古学と自然科学, 16:59-89
- 4) 東村武信(1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9:77-90
- 5) 東村武信(1990), 考古学と物理化学。学生社
- 6) 薬科哲男・東村武信(1987), 東麓郷1・2遺跡出土の黒曜石遺物の石材産地分析。東麓郷1・2遺跡、富良野市教育委員会: 83-108
- 7) 薬科哲男・東村武信: 清水町内遺跡関係報告書に掲載予定、北海道埋蔵文化財センター

表Ⅶ-1 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原 産 地 原 石 群 名	分析 個 数	Ca/K X±σ	Ti/K X±σ	Fe/Zr X±σ	Rb/Zr X±σ	Sr/Zr X±σ	Y/Zr X±σ	Nb/Zr X±σ	
北海道	名 寄 第一	110	0.400±0.006	0.125±0.003	1.945±0.034	0.804±0.014	0.501±0.015	0.125±0.017	0.015±0.022
	＃ 第二	12	0.221±0.016	0.102±0.004	1.597±0.035	0.945±0.040	0.297±0.013	0.297±0.017	0.015±0.014
	白 滝 第一	120	0.118±0.007	0.063±0.002	2.547±0.081	1.300±0.030	0.291±0.017	0.300±0.016	0.078±0.032
	磯 谷 沢	26	0.002±0.009	0.025±0.002	2.770±0.055	1.689±0.034	0.105±0.010	0.413±0.016	0.000±0.036
	白 滝 第二	30	0.085±0.009	0.024±0.002	2.806±0.078	1.741±0.048	0.104±0.014	0.416±0.017	0.126±0.065
	近文台第一	30	0.770±0.012	0.175±0.004	3.021±0.049	0.639±0.018	0.894±0.025	0.158±0.015	0.000±0.026
	＃ 第二	105	0.435±0.008	0.097±0.002	2.573±0.047	0.814±0.019	0.359±0.022	0.201±0.020	0.024±0.017
	＃ 第三	17	0.435±0.016	0.088±0.004	2.561±0.082	0.815±0.020	0.345±0.026	0.180±0.022	0.120±0.080
	稀 府 川	21	0.154±0.009	0.114±0.003	1.555±0.057	0.984±0.020	0.481±0.019	0.731±0.013	0.034±0.024
	十勝 三野	37	0.187±0.011	0.078±0.003	2.134±0.039	1.060±0.019	0.400±0.014	0.316±0.016	0.050±0.021
	釧路 戸部	30	0.254±0.008	0.133±0.003	1.735±0.035	0.822±0.013	0.480±0.014	0.178±0.010	0.040±0.023
	赤 井 川	49	0.190±0.007	0.073±0.003	2.105±0.056	0.971±0.025	0.454±0.015	0.251±0.014	0.035±0.017

表Ⅶ-2 稀府川遺跡出土の黒曜石製石器、石片分析結果

試料番号	元 素 比						
	Ca/K	Ti/K	Rb/Zr	Sr/Zr	Fe/Zr	Y/Zr	Mn/Zr
22434	.441	.161	.502	.615	1.734	.147	.077
22435	.199	.075	1.040	.417	1.933	.264	.047
22436	.192	.078	1.001	.337	2.066	.184	.127
22437	.452	.169	.456	.603	1.614	.119	.068
22438	.198	.074	1.161	.409	2.366	.214	.118
22439	.431	.161	.495	.577	1.477	.158	.047
22440	.191	.072	.991	.423	2.191	.169	.121
22441	.460	.163	.484	.617	1.745	.119	.084
22442	.436	.167	.464	.610	1.623	.137	.091
22443	.096	.023	1.932	.131	3.123	.353	.230
22444	.200	.078	.933	.415	1.847	.168	.089
22445	.201	.078	1.034	.416	2.231	.202	.086
22446	.196	.073	1.015	.359	2.132	.143	.112
22447	.204	.076	1.003	.456	2.141	.238	.122
22448	.146	.063	.882	.382	1.914	.230	.121
22449	.119	.062	1.347	.330	2.626	.291	.259
22450	.197	.083	.962	.354	1.970	.171	.096
22451	.441	.167	.480	.601	1.616	.107	.068
22452	.195	.076	1.014	.399	2.047	.170	.000
22453	.183	.073	.989	.422	1.992	.145	.073

表Ⅶ-3 稀府川遺跡出土の黒曜石製石器の原産地推定結果

試料番号	名称・位置・層位	時 代 (伴出土層)	原産地 (確率)	判定	遺物品名	検出番号
22434	Ⅷ21 K-84-b	I	縄文時代後期末	クラスタ分析(MR群)	MR群 スクレイパー	110
22435	55 K-85-C V下	"	十勝(27%)・赤井川(3%)	十勝	"	127
22436	49 K-90-b	I	"	赤井川(1%)・十勝(0.4%)	赤井川 石鏃	51
22437	128 L-84-C V下	"	クラスタ分析(MR群)	MR群	スクレイパー	102
22438	224 L-84-d V下	"	十勝(0.8%) " (0.4%)	十勝	石鏃	65
22439	111 L-85-b	I	"	クラスタ分析(MR群)	MR群 スクレイパー	101
22440	40 L-85-b VI	"	赤井川 (53%)	赤井川	石鏃	58
22441	16 L-85-b VI	"	クラスタ分析(MR群)	MR群	"	37
22442	17 M-74-C VI上	縄文時代中期	"	"	石槍orナイフ	83
22443	8 M-77-C VI	縄文時代後期中	白滝第2 (7%)	白滝	石鏃	13
22444	74 M-83-d VI	縄文時代後期末	赤井川(16%)・十勝(1%)	赤井川	石槍orナイフ	75
22445	1 M-92-a	縄文時代後期	" (11%)・十勝(4%)	"	石鏃	19
22446	N-76-C VI	縄文時代中期	" (3%)	"	"	35
22447	3 N-89-a V	縄文時代	" (51%)・十勝(4%)	"	"	74
22448	4 O-78-b VI	縄文時代後期中	クラスタ分析(赤井川)	"	"	52
22449	33 O-82-a V	縄文時代後期末	白滝第1 (86%)	白滝	"	60
22450	1 P-62-C V	縄文時代中期	赤井川(2%)・十勝(1%)	赤井川	石槍orナイフ	81
22451	1 P-64-d VI	"	クラスタ分析(MR群)	MR群	"	76
22452	1 P-74-a VI	縄文時代後期中	赤井川(8%)・十勝(1%)	赤井川	石鏃	34
22453	31 P-84-b VI上	縄文時代後期末	" (4%)・ (0.2%)	"	スクレイパー	106

表Ⅶ-4 伊達市稲府川遺跡出土遺物の原産地別頻度分布
(北海道伊達市)

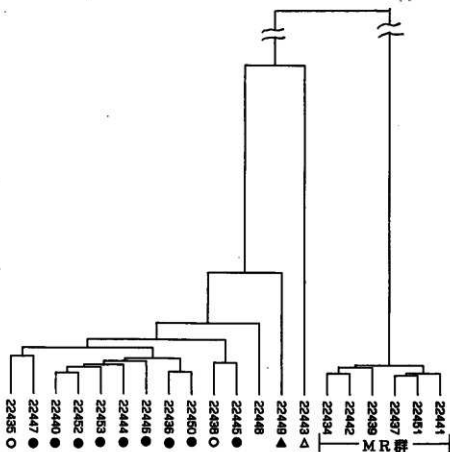
縄文時代時期	赤井川	原 産 地 個 数		
		十 勝	白 滝	MR群
縄文時代中期	2	...	...	2
“ 後期中頃	2	...	1	...
“ “ 末	4	2	1	4
“ 晩期	1	...	...	...
続縄文時代	1	...	...	...

図Ⅶ-1 黒曜石遺物のクラスター分析

Ca/K, Ti/Ca, Rb/Zr, Sr/Zr, Fe/Zr, Y/Zr, の各元素比量を用いた。組成の似た試料は階段の低いところで、組み合ってクラスターを作る。

MR群：原産地不明の遺物で組成の似た遺物で作った群

●；赤井川、○；十勝、▲；白滝第1、△；白滝第2はそれぞれ使用した黒曜石製遺物。



2 牛舎川右岸遺跡周辺の火山灰

昨年度調査を行った牛舎川右岸遺跡、稀府川遺跡、及び谷藤川右岸遺跡の火山灰資料（北海道埋蔵文化財センター、1990 a・b）に、今年度調査資料を加え、火山灰についてまとめる。その結果を表Ⅶ-5に示す。火山灰はすべて降下物で、下位から上位へ以下のものが認められる。梶原黄褐色火山灰（仮称）、白頭山-苦小牧火山灰（B-Tm）、灰白色火山灰、有珠山b₁火山灰（Us-b₁）、有珠山b₂火山灰（Us-b₂）、有珠山b₁火山灰（Us-b₁）、有珠山Va火山灰（Us-Va）、有珠山IVa火山灰（Us-IVa）有珠山Ⅲa火山灰（Us-Ⅲa）。これらのうち、灰白色火山灰とB-TmはUs-b直下の腐植土中に産出する。従来、この層準に産出する斑状の火山灰は、駒ヶ岳起源のK_o-eとされてきた（横山、1973等）。しかし、本遺跡周辺ではこの層準に二種の火山灰が確認された。今後、K_o-eの精査・再検討が必要である。

牛舎川右岸遺跡の高砂川左岸地域では、河流跡が認められ、凹地部にUs-b₁を挟んで水成礫や火山灰の二次堆積物が複雑な層相を呈している（図Ⅶ-2）。（花岡正光）

引用文献

- 北海道埋蔵文化財センター（1983）：川上B遺跡 303pp.
 北海道埋蔵文化財センター（1986a）：木古内町札苅遺跡 128pp.
 北海道埋蔵文化財センター（1986b）：知内町湯の里3遺跡 54pp.
 北海道埋蔵文化財センター（1987a）：木古内町建川2・新道4遺跡 614pp.
 北海道埋蔵文化財センター（1987b）：上磯町矢不來2遺跡 91pp.
 北海道埋蔵文化財センター（1988a）：函館市石川1遺跡 320pp.
 北海道埋蔵文化財センター（1988b）：函館市桔梗2遺跡 252pp.
 北海道埋蔵文化財センター（1990a）：伊達市牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡 282pp.
 北海道埋蔵文化財センター（1990b）：伊達市谷藤川右岸遺跡 63pp.
 町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）：日本海を渡ってきたテフラ。科学、Vol.51,pp.562-569.
 町田 洋・新井房夫・小田幹夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）：テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカatalogー。古文化財編集委員会編「古文化財の自然科学的研究」, 984pp., 同朋舎：pp.865-928.
 横山 泉・勝井義雄・大場与志男・江原幸雄（1973）：有珠山—火山地質・噴火史・活動の現況および防災対策—, 254pp. 北海道防災会議

表VII-5 牛倉川右岸遺跡周辺の火山灰の特徵

火山灰層序	色調	粒 度	層 厚cm	産 状	層構成鉱物等	火山岩 ⁹⁾	年 代	備 考
Us-Ⅲa ¹⁾	暗灰黄 ¹⁾	上部シルト質 下部砂 質	10	レンズ状	斜長石>輝石 斜方輝石		A.D.1853 ¹⁾	
Us-Ⅳa ¹⁾	灰・黄灰	礫質・砂質	20	レンズ状 層 状	斜長石>輝石・ スコリア>斜方輝		A.D.1822 ¹⁾	砂質火山灰と、岩片・輝石との互層・5-6枚の フォーミュニットから成る
Us-Va ¹⁾	暗灰黄 ¹⁾	上部砂 質 下部シルト質	4	レンズ状	斜長石の微結晶が散 在する偏平な火山ガ ラス		A.D.1769 ¹⁾	
Us-b ₁ ¹⁾	灰 緑	シルト質	1-2	レンズ状	斜長石・火山ガラス			
Us-b ₂ ¹⁾	におい 褐灰緑	シルト質	20-40	層 状	斜長石・火山ガラス ・スコリア		A.D.1833 ¹⁾	遺跡周辺で最も良く発達する。砂質火山灰層を 不規則に挟む。
Us-b ₃ ¹⁾	灰 緑	シルト層	1-2	レンズ状	斜長石・斜方輝石> 単斜輝石・スコリア			
灰白色火山灰	灰色・白 に白い褐	シルト質	0.5-1	層 状	火山ガラス・斜長石	1,500- 1,505		噴出層不明、広範囲に分析している可能性在り、 「S+a ¹⁾ 」「Yn-b ¹⁾ 」「Sm-a ¹⁾ 」「Yf- a ¹⁾ 」「上位の更新世火山灰」に同じ。
B-Tm ¹⁾	黄褐・褐	シルト層	2-4	層 状 レンズ状	火山ガラス>アルカ リ長石	1,501- 1,517	11-12世紀 ¹⁾	縄文時代の産物として重要
黒列黄緑 色火山灰	黄褐・黄	シルト質	20>	レンズ状 層 状	火山ガラス斜長石	1,511- 1,512	縄文時代早期 (?)	噴出層不明、広範囲に分布している可能性あり。 本層上から中本路式土器出土。川上B遺跡では 縄文時代早期前住層産物と推定。縄文時代の産物 として重要。

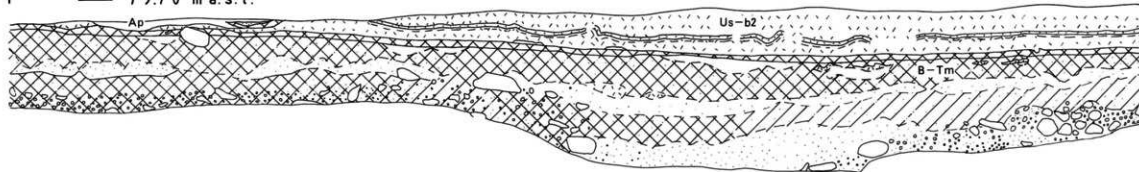
1) 横山ほか(1973) 2)・3)・4)・5)・6)・7) 北海道埋蔵文化財センター(1986a・b, 1987a・b, 1988a・b) 8) 町田ほか(1981)・町田ほか(1984)

9) 北海道埋蔵文化財センター(1983)

Q-25

Q-26

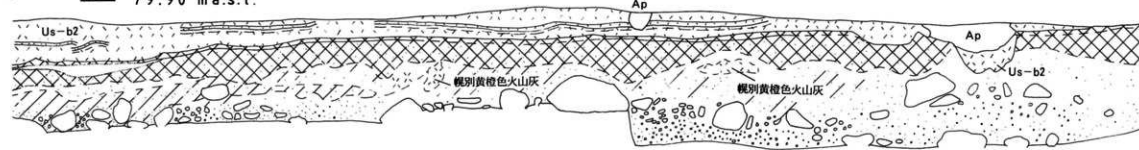
— 79.70 m a.s.l.



Q-26

Q-27

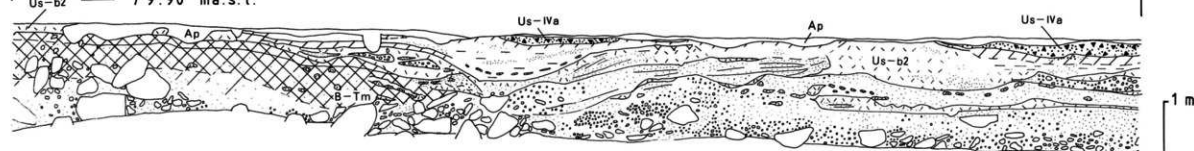
— 79.90 m a.s.l.



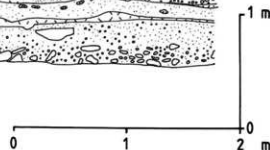
Q-27

Q-28

— 79.90 m a.s.l.



図Ⅶ-2 土層図 牛舎川右岸遺跡・高砂川左岸地域の土層セクション
(凡例は図Ⅳ-2を参照)



引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1981 『鷹巣遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1984 『和野前山遺跡』
- 宇田川洋・豊原照司・本田克代・西 幸隆 1978 『トビニウス川南岸遺跡』 羅臼町教育委員会
- 内山真澄 1985 『朱太川右岸6遺跡』 『寿都町文化財調査報告書Ⅲ』 寿都町教育委員会
- 内山真澄編 1985 『波井遺跡発掘調査報告書』 泊村教育委員会
- 大島直行・瀬川拓郎 1982 『千歳6遺跡』 『札内台地の縄文時代集落址』 登別市教育委員会
- 大島直行・百々幸雄ほか 1986 『入江貝塚』 虹田町教育委員会
- 大島直行・百々幸雄ほか 1986 『北黄金貝塚』 伊達市教育委員会
- 大島直行・百々幸雄編 1987 『高砂貝塚』 札幌医科大学医学解剖学第二講座
- 大沼忠春 1981 『道央部の縄文前期土器群の編年について』 『北海道考古学』 17
- 大沼忠春・千葉英一・田才雅彦 1983 『南樺5遺跡』 北海道文化財保護協会
- 大沼忠春 1984 『道南の縄文前期土器群の編年について』 『北海道考古学』 20
- 大沼忠春 1986 『北海道における縄文晩期から統縄文文化への変遷について』 『縄文晩期から弥生時代への移行期の諸問題』 日本考古学学会八戸大会シンポジウム資料
- 大場利夫ほか 1955 『函館市染川町遺跡』 市立函館博物館
- 大場利夫 1960 『室蘭遺跡』 室蘭市
- 大場利夫・渡辺兼康 1966 『北海道南志郡三ツ谷貝塚』 『考古学雑誌』 51-4
- 大場増友編 1989 『有珠普光寺2遺跡Ⅱ』 伊達市教育委員会
- 小笠原忠久 1986 『川汲B遺跡』 南茅部町教育委員会
- 加藤邦雄・内山真澄ほか 1983 『瀬棚南川』 瀬棚町教育委員会
- 菊池俊彦 1967 『札幌市平岸天神山出土の土器について』 『北海道考古学』 3
- 北沢 実 1990 『帯広・八千代A遺跡』 帯広市教育委員会
- 久保 泰 1975 『松前町小浜遺跡発掘調査報告書』 松前町教育委員会
- 久保 泰ほか 1983 『白坂』 松前町教育委員会
- 久保 泰ほか 1984 『松前町郷土資料館調査報告』 第1集
- 久保 泰ほか 1986 『日ノ浜砂丘1遺跡』 恵山町教育委員会
- クリュー・オルトン（小沢一雅・及川昭文 訳） 1987 『数理考古学入門』 雄山閣
- 児玉作左衛門・大場利夫 1953 『函館市住吉町遺跡の発掘について』 『北方文化研究報告』 8
- 児玉作左衛門・大場利夫 1954 『函館市春日町出土の遺物について』 『北方文化研究報告』 9
- 後藤秀彦・佐藤訓敏 1975 『浦幌町吉野台銅器遺跡出土の遺物』 『浦幌町郷土博物館報告』 6
浦幌町郷土博物館
- 後藤秀彦 1982 『早期の土器—平産土器—』 『縄文文化の研究』 3 雄山閣
- 小浜基次・峰山巖・藤本英夫 1963 『有珠普光寺遺跡』 『北海道の文化』 特集号
- 古原敏弘 1982 『駒場7遺跡における考古学的調査』 静内町教育委員会
- 古原敏弘 1985 『静内町清水丘における考古学的調査』 静内町教育委員会
- 小林 敬ほか 1980 『オクシベツ川遺跡』 斜里町教育委員会
- 佐藤一夫ほか 1979 『苫小牧市静川縄文遺跡発掘調査報告書』 苫小牧市教育委員会
- 桜井準也 1990 『旧石器時代とサンプリングエラー』 『旧石器考古学』 40
- 沢 四郎・西 幸隆ほか 1987 『銅路市桜ヶ丘1・2遺跡調査報告書』 銅路市埋蔵文化財調査センター
- 沢 四郎・松田 猛ほか 1988 『銅路市桜ヶ丘2遺跡調査報告書』 銅路市埋蔵文化財調査センター
- 鈴木正路 1989 『鶴岡2遺跡1』 木古内町教育委員会
- 瀬川拓郎・川内谷 修ほか 1989 『萩ヶ丘遺跡』 旭川市教育委員会
- 岸沢長介編 1979 『峠下聖山遺跡』 七飯町教育委員会
- 高橋和樹・内山真澄・上野秀一・土田亜佐子 1976 『瀬棚南川遺跡』 瀬棚町教育委員会
- 高橋正勝 1967 『北海道七飯町鳴川遺跡の尖底貝殻文土器について』 『石器時代』 8

- 高橋正勝 1980 『アヲロ』白老町教育委員会
- 高橋正勝編 1982 『鉄ヶ岡遺跡』江別市教育委員会
- 竹田輝雄 1967 『北海道虻田郡豊浦町アルトリ遺跡出土の遺跡について』『上代文化』28
- 竹田輝雄・土屋周三・大島秀俊 1973 『港大照寺遺跡調査報告書』函館市教育委員会・小樽市博物館
- 田原良信・前田正豪 1982 『高丘町遺跡発掘調査報告書』函館市教育委員会
- 千代 幸福 1977 『函館空港第4地点・中野遺跡』函館市教育委員会
- 千代 幸・三浦孝一ほか 1981 『尾白内』森町教育委員会
- 名取武光・峰山 康 1959 『伊達市北黄金遺跡発掘調査報告』
- 名取武光・峰山 康 1957 『若生貝塚発掘報告』『北方文化研究報告』12
- 名取武光・峰山 康 1958 『入江貝塚』『北方文化研究報告』13
- 名取武光・峰山 康 1963 『茶香場貝塚』『北方文化研究報告』18
- 名取武光・松下 亘 1964 『松内遺跡』『北方文化研究報告』19
- 西 幸隆・松田 猛ほか 1989 『材木町5遺跡調査報告書』釧路市埋蔵文化調査センター
- 野村 崇 1974 『札道遺跡』木古内町教育委員会
- 長谷川 敬 1986 『有珠普光寺2遺跡』伊達市教育委員会
- 林 謙作 1982 『北海道・東北地方』『縄文土器大成』第1巻 講談社
- 古屋敷剛雄 1989 『鮎子川遺跡』戸井町教育委員会
- 平川善祥編 1989 『高木1遺跡』北海道開拓記念館
- 北海道開発庁 1955 『5萬分の1地質図幅説明書 西紋圏』
- 北海道教育委員会 1978 『美沢川流域の遺跡群Ⅱ』
- 北海道教育委員会 1979 『有珠川2・植苗3遺跡』
- 北海道文化財研究所 1990 『茶津貝塚』北海道文化財研究所調査報告第5集
- 北海道埋蔵文化財センター 1980 『フレベツ遺跡群』
- 北海道埋蔵文化財センター 1981 『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』北埋調報第1集
- 北海道埋蔵文化財センター 1983 『ママチ遺跡』北埋調報第9集
- 北海道埋蔵文化財センター 1983 『虎杖浜3遺跡』北埋調報第11集
- 北海道埋蔵文化財センター 1983 『川上B遺跡』北埋調報第13集
- 北海道埋蔵文化財センター 1985 『湯の里遺跡群』北埋調報第18集
- 北海道埋蔵文化財センター 1987 『ママチ遺跡Ⅲ』北埋調報第36集
- 北海道埋蔵文化財センター 1983 『石川1遺跡』北埋調報第45集
- 北海道埋蔵文化財センター 1988 『木古内町新道4遺跡』北埋調報第52集
- 北海道埋蔵文化財センター 1990 『牛舎川右岸遺跡・霧府川遺跡』北埋調報第61集
- 北海道埋蔵文化財センター 1990 『美々3遺跡』『美沢川流域の遺跡群』XⅡ 北埋調報第62集
- 北海道埋蔵文化財センター 1990 『谷藤川右岸遺跡』北埋調報第64集
- 松田 猛ほか 1990 『材木町5遺跡調査報告書』釧路市埋蔵文化財調査センター
- 松下 亘ほか 1974 『西股』北海道第四紀学会
- 三浦孝一・柴田信一 1990 『八雲3遺跡発掘調査報告書』八雲町教育委員会
- 三橋公平編 1983 『南有珠6遺跡』札幌医科大学解剖学第二講座
- 峰山 康・山口 敏 1972 『第一編 先史時代』『豊浦町史』
- 峰山 康ほか 1974 『松前町高野遺跡発掘報告』松前町教育委員会
- 峰山 康・大島直行 1979 『伊達市の遺跡』伊達市教育委員会
- 峰山 康編 1984 『伊達市南有珠7遺跡発掘調査報告書』伊達市教育委員会
- 宮部靖夫 1985 『苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』苫小牧市教育委員会
- 森田知忠 1969 『函館空港遺跡群第6地点の調査』『函館空港整備事業の内 遺跡発掘調査実績報告書』
- 森田知忠 1981 『北海道』『縄文土器大成3』 講談社
- 山田悟郎編 1976 『札道』北海道開拓記念館
- 吉崎昌一 1965 『北海道』『日本の考古学』Ⅱ 河出書房新社
- 吉崎昌一・直井孝一・松岡達郎 1979 『聖山』七飯町教育委員会

財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第68集

伊達市

牛舎川右岸遺跡

稀 府 川 遺 跡

谷藤川右岸遺跡

—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成3年3月31日 発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

TEL (011) 561-3131

印 刷 中西印刷株式会社

〒065 札幌市東区東腫木3条1丁目34号

TEL (011) 781-7501

この報告書は、日本道路公団札幌建設局のご了解を得て、増刷したものです。